

く。ト無理無體に慶安が懐へ捻込み。慶安が手を執り引張る慶安片足を上げて飛びく。こまめのよふにして引張れ橋懸りへ這入る。是にてチョン／＼道具束の方へ引く。

造り物二重舞臺納戸口襖。門口に宮城阿曾次郎旅宿と書たる表札打つてある。阿曾次郎。正三郎。忠吾。傳内各。自其邊片付たり掃いたり拭いたり思ひく／＼にして居る。都て下川原貸座敷の體。此見得宜しく道具納る。

忠吾サア／＼。是ですつぱりとなりました。傳内モシ障子を貼替たら可ふりませぬ。阿曾是は／＼各。大きに御苦勞千萬てりました。忠吾イヤもうアノ爪長の慶安殿の方では。先生にも嘸御窮屈に有らふと存じました故。傳内甚だ狭ふりませぬ。又廣い所を借ませぬ。忠吾時先生。御一人の積りて爰を借ましたれど。お二人では狭ふりませぬ。又廣い所を借ませぬ。阿曾イヤ／＼。爰で十分でります。必ず御心配下されませぬ。別して是は私の通れぬ者でります。些とも苦しうりませぬ。忠吾左様な事てりませぬ。見ますればお若いお方でります。失禮ながらひよつと色事筋と申すやうな儀ではりませぬ。阿曾イヤ左様な儀ではりませぬ。ハ、ハ、ハ、忠吾ハ、ハ、ハ、ハ。是は失禮ハ、ハ、ハ、ハ。ト花道より奴關助。旅の形にて出て来て花道よき所にて。關助ハア體に若旦那のお宿は此邊と聞いたが。何でも早ふ御目に懸りたいものじやが。ト這樣事云ひく本舞臺へ来て。宮城阿曾次郎旅宿。爰だ／＼。イヤチト頼みませぬ。ト是にて阿曾次郎正三郎を奥へ入る。忠吾門口を明ける。關助阿曾次郎を見て。ヤアこれは／＼若旦那。先は御健勝にお入遊ばされて。お目出たふ存じます。阿曾是は誰かと思へば關助。マア／＼其方も無事で重疊／＼。傳内イヤも我々ハ。お暇申上ませぬ。阿曾是は御苦勞。夕方お出下されい。忠吾左様仕りませぬ。然らば先生。傳内イヤ貴方。是に御緩りとござりませぬ。關助これは／＼。先づ／＼お遊ば遊ばされませぬ。ト忠吾傳内拾遺詞云ひく橋懸りへ這入る。關助門口襖切。關助先づ／＼御機嫌宜しうて。お

目出たふ存じます。阿曾關助。其ちや何故身を尋ねて参つた。關助何故とは。若旦那には未だ御國元の御願を御存じりませぬか。阿曾ナニ國元の騒動とは心元無い。關助さればてります。義繼様には御叛逆の御金。大内之助様鎌倉へお越有つて。お歸り無きを幸ひ。國家を御領せんと。夫故冷泉帶刀様には。義繼様を手に掛け。其上で敢ない御最期。阿曾ム、スリヤ義繼公を手にかけ。帶刀殿も御最期とな○シテ／＼如何じや。關助さればサ。菊池の下郎たりし傳藏と申す者。只今はお家に仕へ段々と歴上り。家老とまで成つて。國家の政道致しては居ますれども。何角もや／＼する人心定かならず。夫故夫等を苦になされ。二ツには御子息正三郎様の事を苦にして。伯父御の駒澤主膳様。終に去月三日御死去てりましたわいのふ。阿曾ム、スリヤ伯父主膳殿には。御病氣にて御死去となホイ。關助夫に付後室様より。駒澤の跡目相續を若旦那にさせよとの御意。夫故夜を日に繼いで當地へ参り。方々を尋ねまして。やう／＼と参りました。イザ此上は。早くお國元へお歸り下されませぬ。阿曾待て／＼關助。伯父駒澤の家には正三郎といふ。歴きとした忰が有るぞよ。關助さればサ。其正三郎様は飛鳥殿と不義密通。其科に依つてお國元を追放。又飛鳥殿が許嫁の右近殿は病死。夫故後室雲井様のお情にて。入江大之進殿を付られ。正三郎様の行衛を尋ねて出られました。阿曾何にもせよ。正三郎といふ忰あれば。それを尋ねて跡目相續。關助イヤ／＼。主膳様臨終の際に。忰も悴正三郎には。相續の程覺東無ければ。何卒甥の阿曾次郎を尋ね來り。相續させよと吳々との御遺言でりました。阿曾ジャと云ふて。見す／＼正三郎あるに。某が跡目相續しては。關助御意に入ませぬかな。阿曾此事ばかりは。關助イヤと仰らるゝと。駒澤の家は絶ますぞへ。家が絶えても相續はお厭でりますか。阿曾イヤ全く爾ふては無けれども。關助をふては無ければ。お歸りなされませぬか。阿曾いかにも立歸つて相續しやう。關助スリヤ御得心下されて。ヤレ／＼嬉しや／＼。左様ならば只今直様御供仕りませぬ。阿曾イヤ／＼。某は跡の片付萬事をして行くであらふ。シテ其方が宿は。關助三條小橋京屋三右衛門方に。阿曾スリヤ三條小橋京屋三右衛門方に。心得

た。躑て行くであらふ。其方は先へ往て相待居れい。間助左様ならば若旦那様。阿曾間助太儀へ。間助ハアヤレヤレ。嬉しやく。ト捨臺詞云ひく。橋懸りへ這入る。跡に阿曾次郎じつと思案して居る。奥より正三郎つかんとと走出て。正三様子は彼れにて残らず聞きました。お禮は未來で。去らばてムりまする。ト刀に手を掛ける。阿曾次郎留めて。阿曾待つた正三郎殿。コリヤ何故死ぬるのじや。正三何故とは。此身の不所存より親人の死目にさへ得合はず。御苦勞懸けし不孝の段々。其上駒澤の家名相續成らねば。生きて効無き此身の上。跡の事は宜しう御頼み申す。阿曾次郎殿去らば。ト又死なふとするを宜しく留めて。阿曾死んで跡目が取れるか。イヤサ死んで孝行が立つか。正三夫じやと云ふて。阿曾ハテ急ぐ事は無い。駒澤の跡目は取す。夫故に先刻より色々。心を碎いて居るわいのふ。マアマア心を鎮めたが可い。ト刀を振取り宥める。此見得宜しく。チョンくにて道具元の岡崎へ戻る。

造り物元の岡崎の體。腰元あやめ。しげ葉。臺所を掃いて居る。若い者伊助。平舞臺に鯛の料理して居る。此見得宜しく。

伊助サア。鯛の料理が出来た。あやめ此方にも掃除が出来た。しげ葉其鯛を臺所へ持つて往て。早ふ拵へて下さんせ。伊助ヲツト合點じや。ト鯛を持つて奥へ這入る。跡に兩人捨臺詞しかくあるべし。向ふより祐仙紫縮緬の着付麻社袴にて元服天窓にて厭らしうして出る。跡より慶安手を組み不詰ぬ顔して出て来る。祐仙花道よき所にて立止り。祐仙ヲ、イ。慶安々々。何故浮きくとせぬぞいのふ。俺りやモウ惚た娘の顔見るのじやと思へば。這樣嬉しい事は無いわい。又初手から知れた事じやのに。今更其顔は何じやいの。ト慶安是に構はず矢張。慶安ア納れば可いが。祐仙コレ其爲の五十兩。ト慶安懐より五十兩出して見。又祐仙が顔を見て。慶安ア、納れば可いが。祐仙何じや。八十位の人。頼持か。扱いた脇差の襟に。納れば可いがとは。慶安コレ。夫が悪い。其口の悪い所が

第一の疵じや。何ても云たら。とんと物敷を少く云ふが可いぞや。祐仙ヲツト合點。存心山の権門。ほぞんかけた此口を。グツト天井裏へ釣上げて置くわ。慶安夫が可い。〇が納れば可いが。ト手を組みく本舞臺へ來り。祐仙紅絹の襟をひつくり返し。兩方の袖より匂ひ袋を出し。二ツぶらりと出す。祐仙どふやらモウ爰じやと思へば恥かしい。ト慶安是を見て無性にあたまを搔く。慶安コレ。爰が爾ふじや。待つて居たり。ト祐仙懐中より鏡袋を出し顔を直して居る。慶安内へ這入悪そうにおづ。這入る。慶安橋慶安参りましてムります。あやめヲ、慶安様待兼ました。ドリヤ其通り申しませふ。弓之イヤ云ふに及ばぬ。聞いたく。ト弓之助羽織に大小にて出る。跡より操。深雪附添出て。弓之これは慶安様。御苦勞でムつた。ト弓之助上手。操。深雪は下座へ直る。深雪始終嬉しいこなし。慶安へエ、延引ながらよふ。只今参りました。操慶安様。いかい御苦勞でムりましたな。弓之シテ阿曾次郎殿はどれに居らる。慶安イヤ御門前に控へて居ます。弓之サ、遠慮に及ばぬ。是へ通して下されい。慶安へエ、畏りました。トじつなそふに門口へ出て手招する。祐仙ヲイ。モウ往ても可いかの。如何やら恥かしいよふなわいの。慶安しつ。ト祐仙が手を執つて内へ連れて這入る。祐仙を二重舞臺弓之助が傍へやり。自身はずつと下座の方へ坐り云悪さうに。慶安即ち夫に控へましたは。宮城阿曾次郎でムります。ト弓之助じつと見て。弓之スリヤ其元が宮城阿曾次郎殿とな。是は始めて御目に懸ります。某は石津兵衛と申す者でムる。祐仙是は始めて御目に懸ります。私事は何にも知らぬ不調法者。角から角までつらりと御鼻眞の程を願上ます。ト慶安シイ。色々じつながる。弓之助をかしい顔して祐仙を眺め。又臺に在る短冊二枚を手を取つて。弓之其元は宮城阿曾次郎殿に相違はムらぬか。祐仙違ひ無い段じやムりませぬ。極正眞混り無し。宮城阿曾次郎みやあそでムります。弓之阿曾次郎に相違無くば。先日より二度まで送られし此短冊。一枚は詩一枚は和歌。此評談が承りたい。祐仙エ、ひやうだん。瓢箪から駒が出るし。戯言から隙が出る。又二の替りの芝居では。評判じやく。ア評判頼むぞ評判じや。ト扇

子を持つて踊る眞似する。弓之助呆れ操。深雪が顔を見る。兩人氣の毒そふな顔して居る。慶安シイ／＼と云ふても聞かぬ顔故。じゆつながら顔や身體の汗を拭く。弓之助むつとして。弓之ナニ慶安殿。彼の人宮城阿曾次郎に違ひムらぬか。慶安左様でムりまする宮城阿曾次郎でムりまする。弓之あれが阿曾次郎に相違無い。イヤ思ひの外の大馬鹿者。宮城といふ苗字を慕はしく樂しみ居たに。イヤモウ論に及ばぬ奴。其方のよふな者は。養子に致す事は罷成らぬ。此方の家の穢れになる。慶安殿連れて歸らしやれ。ヤイうぬも早ふ歸りおらう。ト祐仙悔りしてうぢ／＼する。慶安あたまを掻いて縮んで居る。弓之歸らぬと其儘には差置かぬ。サ、歸れ／＼。ト祐仙が首筋を掴み舞臺へ突出す。操申し／＼慶安様。日頃御念頃にも似合ませぬ。コリヤ定めし何ぞの間違てムりませぬ程に。マア篤と吟味した上で。弓之エ、操黙つて居らう。彼のやうな馬鹿者が何間違。構はずとも奥へ來やれ。操それでも申し。弓之ハテ扱娘も來い○アノこゝな大馬鹿奴が。ト腕付けて奥へ這入る。操。深雪氣の毒そふにして祐仙が顔を見て這入る。祐仙深雪が顔を怨めしそふに眺め跡を見送り／＼。祐仙ワア／＼ワア／＼。ト泣く。慶安やう／＼起きて。慶安是モウあかぬ／＼。サア／＼去んだ／＼。祐仙イヤおりや何ぼうでも去にやせぬ／＼。慶安ハテ扱。ト無理に祐仙が手を執つて泣き／＼意地張つて居るを無理に門口へ引張つて出る。慶安大方是じやあるふと思つて居たに。到頭失策つた。まだマア喫はされぬのが大きに仕合じや。祐仙コレ慶安。此様にあたま／＼で剃こぼち。まだ其上に／＼はされて。つまるものかいなア。ト慶安があたまを喫はし胸倉を取つて振廻し。祐仙コレ貴様はのふ／＼。娘の居る前で能ふあのように恥を搔したナア／＼。おりやモウ娘の手前が恥かしふて／＼成らなんだわ。サア元のやふに聲にして返せ返せ。慶安コレ無理な事云つしやれ。全體此方が悪いのじや。口を利しやるなと云ふのに。何處の國にか評談と云へば願筆／＼。アリヤマア何の事じやぞいのふ。祐仙貴様も又彼様短冊を出して問ふなら問ふと。始から云ふてくれぬが済まぬ／＼。サア元の襟にして返すか。夫が成らにや三十兩の金と今日の五十兩を返せ／＼。慶安又

無理な事云はつしやる。其五十兩は爰にあるが。三十兩の金は無いわいのふ。祐仙ソリヤ何つても無かても何か取にや聞かぬ／＼。ト慶安持餘しじつと思案して。慶安ハ、ア解つた。ト手を打つ。祐仙慶安解つたとは何が解つた。慶安サレバサ。熟々思案を廻らし見るに。あのよふに云ふのは。アリヤ皆お前を試したものじや。祐仙ム、試したとはそりや何を。慶安さればサ其處じやて。這奴は辛抱の有る者か無い者か。よく試した上で。聲にせうとの事じやわいのふ。祐仙ハ、アそんなら見れば這入しなに。娘が俺を睨んだと思ふたのは迷いで有つたか。慶安滅相な。迷ひ／＼。娘が這入しなにお前の顔を。じつと尻目に眺めたのじやわいのふ。祐仙ハ、アしたり／＼。そんなら矢張聲にする氣かいナア。慶安する氣とも／＼。祐仙そんなら是から這入らうか。ト行かふとするを慶安ちやつと留めて。慶安ア、これ／＼待つた／＼。マア私が這入つて篤と云ふてから。マアお前は宿へ去んで待つてムれ。祐仙そんなら去んで待つて居る程に。必ず色よい返事を慶安殿。慶安するとも／＼。がこれ〇是を氣に懸けず必ず共に。祐仙ヤレ扱親切によふ云ふて下さつたのふ。何が扱聲にさへならるゝなら。煩ふ事じや無い程に。何卒首尾して。慶安氣遣ひあるな。慶安が呑込む／＼。祐仙南無延三結びの神様大明神／＼。ヤレ／＼。是で片市が下りたよふな。私の顔は餘程玉七じやと思ふて居るに。多見藏に化されたかと。鵞雀を起したが。京柙や中に此方の世話で手に入ると思へば。ほんに今日は大吉日。若し爾ふなつたら。夫婦の仲藏もよしをにして。海老藏の様に腰の屈むまでも。我童中を手を取つて歩行と思へば。這樣嬉しい事は無い。マア其積りて丸幸で居よふ。慶安主萬事宜しう。トむつかしい顔して花道へ這入る。慶安跡を見送りに。慶安テモ味い奴ナア〇時に恚うなつて來た故。再び爰の家へ這入る事は成らず。家へ去んだら又あの祐仙めが催促に來おらうし。コリヤ京地を駈落と出懸にや成るまい。ト手を組み思案しい／＼橋懸りへ這入る。と奥より郷助四邊を窺ひ／＼刀箱を抱へそろ／＼と出て。手早く箱の中の刀を出し戴き。郷助まんまと首尾よふ我手に入つた朝日丸の名劍。是を持つて鎌倉へ立越え。伯父間瀬久太夫に頼り。出世の手懸り旨い／＼。ト箱を傍に

蹴やる。此時奥よりバタ／＼と人音する故。そつと門へ走出て。近邊を見廻し橋懸りへ這入る。跡へ深雪東障子家體より出て來て。深雪エ、聞えませぬ阿曾次郎様。日外宇治川にて御目に懸り。お恥かしい事ながら。思ひ思ふて居た所へ。幸ひ慶安様の媒妁にて。嬉しや今日といふ今日夫婦にならふと。樂んで居た甲斐も無い。彼様お方を寄越さしやんしたのには。私に恥を與へ。思ひ知そふとの事でムンせうが。餘處の姫御前は。生れ劣つた此身なれば。無理とは更々思はねど。ソリヤ餘りお胸慾でムンすわいなア／＼。ト色々泣く。深雪爾ふじや。思ふ殿御に嫌はれて。何樂みに生きて居よふ。父様母様御堪忍なされて下さりませい。南無阿彌陀佛。ト懷劍を抜いて自害せうとする。此前より操出かけ居て。是を見て恠りし走寄つて絶着き。操娘。コリヤ何をしやるぞいのふ。深雪母様堪忍して下さんせ。わたしや殿御に嫌はれました。ト自害せうとするを宜しく止めて。操尤じや／＼。がマア／＼待ちや。ハテ待ちやと云はマア待ちやいのふ。ト無理に刀を振取り。慶安殿の日頃の親切に似合はぬ今日のしだら。是には何ぞ深い様子の有そふな事じや程に。急かすともマア／＼待ちや。母が往て。事の實否を糺して來るわいのふ。ト行かふとする。此前より弓之助後へ出かけ居て。弓之操血相して何處へ行く。操何處へとは。アノ慶安に逢ふて今日の様子を。弓之ハテアノよふな大馬鹿に何の様子。打遣つて置きやれ。操それじやといふて。弓之ハテ扱役にも立たぬ事を。捨て置きやれ。ト操エ、と下に居る。此時橋懸りより阿部順藏。合羽掛足袋の形にて出來り。順藏イヤ一寸物を尋ね申そふ。此邊りに秋月弓之助殿と申す人はムリませぬか。弓之ハテアノ秋月弓之助と我本名を尋ぬるは。何にもせよお通りなさりませ。操何方様かは存じませぬが。マア／＼是へ。順藏弓之助御宅は是かな。ヤレ嬉しや／＼。然らば御免下されませう。ト草鞋を脱ぎずつと通る。弓之助是を見て。弓之是は阿部順藏様。まづ／＼是へ。ト上手に通して。扱一別以來先々貴殿にも御健勝で。今日は何御用有つてお越なりましたぞ。順藏今日拙者參つたは他の義でムリませぬ。お國元よりの御使者に參つた。弓之ナニ御使者とはなハツコリヤ／＼女房羽織々々。順藏イヤ左様になされませぬ。

すな。弓之イヤ／＼夫は餘り無禮。ト羽織を着て手を支へ。弓之ハツお使者の趣。素直にたう存じます。順藏の儀に非ず。先達てより其元彼の朝日丸の刀尋ね出されしや。姫君大内家へ御興入あるに依つて。右の短刀入用。さるに依つて。貴殿に早々御歸參あれよとの儀でムる。則ち是に御家老山本一學殿の御手紙。ト手紙を渡す。弓之助見て悦び。弓之ハ、ア。ハツ有難き御使者。なる程朝日丸の刀疾より手に入つてムる。順藏スリヤお刀も手に入しな。夫は重疊。弓之ハツコリヤ女房悦べ歸參が叶ふた。ハ、ア嬉しや本望や○何は格別。貴殿には長途のお勞まづ／＼奥にて御休息。順藏イヤ／＼お構いあるな。拙者同道致し立歸れとの儀でムります。弓之委細承知仕りました。併しながら何角の用意もムれば。先づ／＼奥へ。順藏然らば左様に仕らう。御免下されい。ト刀提げて東の障子家體へ這入る。弓之ハ、ア有難し／＼。是と申すも偏に一角殿のお取成。悦べ／＼。操爾うてムんすとも。此様な目出たい嬉しい事はムんせぬわいなア。弓之ヲ、ト狀を披き讀んで居る。此時深雪最前の刀箱を見付け持つて出て。深雪父様。御刀箱が爰へ出てムんすわいなア。弓之ナニお刀箱が下レ。ト引寄せて蓋を明け恠りし。弓之ヤアコリヤ朝日丸の刀紛失ム。ト當惑する。兩人うろ／＼して。操申しこちの人。深雪申し父さん。ト顔見合せて。兩人コリヤ如何致しませぬいなア。ト弓之助思案して氣色を變へ。弓之イヤ／＼。何にも案じる事は無い／＼。兩人それでも。弓之夫でもハテ扱。コリヤ／＼娘何にも案じる事は無いぞよ。父が胸にある／＼。サ、女房。娘。其方等は奥へ往て。順藏殿を饗應申せ／＼。操じやと申しまして。弓之ハテ扱氣遣ふ事は無い行け／＼。ハテ行けと云ふに。兩人ハイ。ト心懸りそふに見返り／＼奥へ這入る。跡に弓之助狀を披き見い／＼思案して居る。此時阿曾次郎花道より旅がけの形。行李を一寸肩に掛けて出て來て。阿曾岡崎の御浪人のお宅は慥に彼れじや。我等國元へ立歸れば。立ながら御挨拶を申そふか。ト這樣事云ひ／＼本舞臺へ來て。スツト内へ這入り弓之助を見て。阿曾ヤ是は御免下さりませぬ。ト弓之助是を知らず。弓之何角差措き此儘に。國元へ一旦立歸り。一角殿とも相談して其上にてム、ト矢

張思案して居る。此時に阿曾次郎。阿曾イヤ拙者は宮城阿曾次郎でムります。先達てより。度々御招き下さります所。何角取込甚だ失禮仕り。然る所此度は本國へ歸參仕り。只今火急に乗船仕ります。夫故御厚情のお禮。又は御名残の御挨拶旁一寸伺候仕りました。ト此臺詞の中より弓之助。弓之いづれとも最前歸りし郷助。婚姻を許さざるを遺恨に思ひ。奪取つたに相違無い。憎い奴なア。ト此臺詞の中阿曾次郎。阿曾何れ近々又上京仕りますれば。其節萬事の御禮。ト此時深雪東の障子家體より阿曾次郎を見て走り出かける。阿曾次郎は弓之助が聞えぬといふことなしあり。此時深雪走出て弓之助が傍へ寄り振袖にて招く。阿曾次郎は是を知らず大きな聲して。阿曾宮城阿曾次郎伺候仕りました。ト是にて弓之助恠りして。弓之エ、又うせたか。ト阿曾次郎を門口へ突出しびつしやりと締める。深雪行くを引廻す。阿曾次郎外にて呆たれこなし。此見得宜しく

幕

造り物向ふ一面の黒幕の内より雨車雷烈しく。奴關助大肌脱ぎて大勢の悪者を討手に働いて居る。此見得宜しく幕開く。

關助うぬらコリヤ誰ぞに頼まれて。我等に抵抗ひするのじやな。悪者ヲ、好い推量じや。さるお方に頼まれ。阿曾次郎又うぬをも殺すのじや。關助何を小癪な。ト是より大立いろくある。トよき所にて仕掛の雷ボンと落つる音する。是にて皆々思はず目を眩す。暫くあつて又皆起上り關助を切にかゝる。關助是にて心付き又立面白く有つて。皆々を追へ橋懸りへ這入る。と是にて黒幕切つて落す。

造り物向ふ一面の浪幕。前にも浪幕少々ある。此上手の方に大海。船一艘一面に竹をかけて。浮けて有る。此下

手に小舟一艘是も同じく竹をふいてある。此時上より月出る。と西の岸にて海潮鳴りなる。海潮鳴りて爰も所は名にし負ふ。明石の浦の都ならで。夜かげにしきる雨の足。夕立の空定めなく。幾行きて。月さへ澄みし浦景色。暮に緊ぎし大船は。名にし深雪が西國に。下る旅舟と知れけり。腰元どもが隣々に。あやめサア雨が上つた空も暗た。笛を取らしやんせんかいなア。淨瑠璃へ聲諸共に引退くる。笛をも見ふ月影に。深雪は顔も重たげに燈火かゞげ繰返す。書さへいとと思ひの種。伊勢や日向の縁さへ。結び兼たる憂涙。ト笛を引のける。深雪見臺にて伊勢物語を讀んで居る。後に付添居たる越張甚五右衛門。山科宗五衛門控へ居る。甚五申し御寮人様。其様に書ばかり讀んでゐつては。猶お氣が鬱結れます。宗五此マア好ふ牙えた月を見て。甚五些と浮きくと。二人遊ばせいなア。淨ろりへ云ふに深雪は顔振上げ。深雪何ほふ其様に云やつても。何の心が勇まふぞいのふ。折角逢ふた阿曾次郎様には。ほいはい別れにて。何處に如何して御座るやら。ア、いつそ死たいわいのふ。淨瑠璃死たいわいのと目に涙。腰元どもも持餘し。只お道理とばかりにて。外に詞も無りける。甚五右衛門は進出て。甚五コレコレ腰元衆。何故お心をお慰め申さぬぞ。此度お旦那奥様にはお國へお下り遊ばし。直に我々お迎ひに上り。お供して下る道中。若もの事が有つては済まぬわいのふ。宗五それそれ甚五殿の云る通り。御病氣など起つては。此宗五右衛門とても相済まぬ。甚五サアイヤ何なりともして。お慰め申したく。あやめそれでも何をしても。お氣に入ませぬわいなア。しげ道ヲ、それそれ。常々お好の朝顔の琴なりと弾じて。お慰め申しませふかいなア。宗五ヲ、夫は可らう。甚五其歌を早ふ始めた。西淨ろりへ鞠むる兩人腰元の。あやめは調撥鳴し。淨此方の船には阿曾次郎。都を出て西國へ下る旅路の船宿り。是も辨間と笛引上げ。ト阿曾次郎笛を引退ける。阿曾ハ、ア定めぬ空の景色じやよな。今まで篠を突くよふな雨のしげ。忽ち引變へ澄む月〇成程ナア。丁度人の身の上と同じ事。昨日の榮えも今日は枯る。人間萬事寒翁が馬じやよなア。東淨瑠璃へ啣つ折柄座頭の笛市。探り廻つて。ト座頭の坊探り出て。笛市お侍様。まだお

寝みなされませぬか。阿曾ヲ、是は御坊。サア／＼ちつと是へお出なされい。笛市左様なれば御免下さりませい。東淨るりへ探る手を執る阿曾次郎。彼方へ据ゑて。ト阿曾次郎危険い／＼と捨臺詞云ひ／＼。笛市が手を取り先へ直りて。次へ直らす。笛市ハイ／＼是はお世話様でムりました。イヤモン縁と申すものは。味なものでムります。私は九州から京都へ官を受に上りました途にて。ごまのはいに付れましたを。貴方様のお蔭で。助かりました其上に。此様に船までお世話になります。其御恩を生涯忘れず。阿曾アイヤ何のお禮に及ぶ事。只今より拙者もテト主人の御用に付いて上京致せば。同道致そふ程に。必ず氣遣ひ召れず。安心してござりませい。笛市夫は猶々有難う存じます。東淨るりへ咄す兩人此方には。西淨るりへはや引いたす琴の手は菊の枝折しほらしき。トあやめ琴を弾いて居る。東淨るりへ阿曾次郎は不審げに耳敏で。ト阿曾次郎ふと是を聞いて阿曾ハテナ今引くアノ琴の音は。さくの技折。都にて聞いたる儘。久々聞かぬアノ曲を。斯る船中にて聞くとハテナア。笛市ハア貴方様はアノさくの枝折を御存じてムりますか。斯様に船中でお世話になる御恩報じに。三味線に弾ませふカイ。阿曾夫は近頃忝い。承りませふ。笛市ドレドレ左様ならば弾ませふ。東淨るりへトこて／＼三味線取出し。ト笛市三味線を出して向ふの琴と合して弾く。阿曾次郎是を聞いて居る。西淨るりへ彼方に洩聞く三味線の音に深雪は耳敏で。ト深雪三味線の音を聞いて。深雪あれ／＼あの船にも琴の調子に合して。三味線を弾いて居るのは。若しや宇治でお出申した。阿曾次郎様では無いか。西淨瑠璃ハ若しや夫かと深雪は舳に走出て。ト深雪短髪を持つて舳へ出て。透し見る事いろ／＼宜しく有つて。深雪アア其處に御座るは。ト云はふとする。此時あやめ皆々走奇る。あやめ申し／＼御寮人様。お危険ふムります。しげも夜も更ました。お寝みなさりませい。西淨瑠璃ハ無理に引立て入る月の。深雪は心残りたる。彼方の船へ投込む扇子。其儘内へ入りにける。ト皆々寄つて此時月上つて了ふ。深雪平氣をふにして扇子を出して向ふの阿曾次郎の舟へ投込む。こなし有つて遣入る。東淨瑠璃ハ此方の舟にはバツタリト。落たる扇子手に取つて。不思議そふに打認め。ト阿曾次郎不思議そふに扇子

を取つて。阿曾ハア是は誰人が落せしぞ。ム、扱はあの船から落せしか。ハテナア。西淨瑠璃ハ御寮人様。是はと聞きし。ト開きて透し見て憮り。阿曾此扇子の繪は。笛市ア、何てムります。ト此時笛市彈了ふ。阿曾イヤ／＼何てもムらぬ。御坊の御奇手中々面白い事でムりました。御苦勞／＼。モウ夜も更ました。お寝みなされませい。笛市左様致しませふ。イヤモウ明けても暮れても目を塞いで居ながら。又改めて寝るといふも。可笑いものでムります。ハ、ハ、ハ。サア貴方にもモウお寝みなされませい。阿曾 某も寝ませふか。マア／＼御先へ。ソレ／＼危険ふムる／＼。笛市ハイ是は毎度お世話様に預ります。ト笛市管の内へ這入る。阿曾次郎此方へ来て扇を開きて。阿曾ハテナア此扇子の繪は。日外都宇治川にて。女中に興へし我自筆。是を所持するからは其女中が。イヤ／＼其時の女中は歴々見えが。よもや船中へこふ筈も無し。ハ、ア扱は餘人に贈りしものか。何にもせよハテナア。東淨瑠璃ハ思案半に。西淨瑠璃ハ人の寝る間を伺出で。走り出たる娘の深雪。ト深雪そつと忍び出で舳へ来て。深雪申し／＼。其處に御座るは。若しや宮城阿曾次郎様ではムりませぬか。阿曾ム、爾ふ仰しやるのは。宇治川でお目に懸つた。女中様ではムりませぬか。深雪そんなら阿曾次郎様でムりますか。エ、逢とふムんしたわいなア／＼。ト船より飛ばふとする。阿曾次郎憮りして。阿曾ヲ、危険い／＼。何かはマア／＼御無事で。お目出たふ存じます。シテマア此船中へ。何御用有つてお出なされましたぞ。深雪さればでムんす。父様にはお國へ御歸參が叶ふて。お歸りなさるゝ其故。私も西國へ下ります船中にて。お目に懸るも盡せぬ御縁。阿曾スリヤ御親父様には。御歸參叶ひしとな。夫は重疊／＼。拙者も先達てより國許へ歸り。此度殿の御用に付て。又上方へ上る船中。深雪そんなら貴方様にも。御歸參が叶ひましたか。夫はマア／＼お嬉しい。貴方にお目に懸つて。何からお咄し申そふやら。マア其處へ參じまして。ト又飛ばふとするを留め。阿曾ヲ、危険い／＼。怪我なされな。ト是にて又能ふ飛ばずに。深雪そふして貴方は。京へお出なさりますか。阿曾イヤ／＼。些と御用の筋に付いて。鎌倉へ立越ます。深雪そんな

らアノ鎌倉へ。申し、一寸其處へ下して下さりませい。阿曾イヤ。じやと申して女中一人を。私ばかりの船へ伴ふては。深雪何のマア誰も邊りに人も無し。大事ムんせぬわいな。阿曾それじやと云ふて。夫ては禮無き爲てムりまする。深雪エ、何のマア。構ふ事はムりませぬ。そんなら私が。ト飛ばふとする故。せう事無しに抱下す。深雪嬉しそふに抱れて下りて。阿曾何はともあれ。マア御無事でお目出たふムりまする。深雪貴方も御無事でお嬉しい。夫はそふと此間。橋慶安といふ人を御存じてムりますかへ。阿曾橋慶安。随分存じて居まする。深雪其慶安さんの事に付いて。貴方は御胸慾なお方てムりまするなア。阿曾是は何事か存じませぬが。お恨を受ける覚えはムりませぬが。深雪イヤ。仰しやりまするな。アノ慶安様と云合して。よふ彼のやうな人を。聲にお越して下さんなア。阿曾何にも慶安と申合した事は無し。勿論人を遣した覚えは曾てムらぬテ。そんなら人が参りましたかな。深雪ム、そんなら愈お知なされぬかへ。阿曾イヤモウ曾て存じませぬ。深雪日外慶安様のお世話で。貴方様を聲に連れて來ふと聞いた時の其嬉しさ。待つた効無ふムんした。其お方は似ても似つかぬ雪と墨。夫て父様のお腹立。阿曾ハア夫て解つた。拙者國元へ引越の砌。自分お暇乞に参りし時。何かそくはぬ御挨拶。ハテ訝かすと。扱は左様な事でムつたか。深雪其時は父様も。急にお國へ御下りなさるゝに付いて。心の忙がしい時故に。私も其場へ出ました故。跡で恚うくと申したれば。扱は爾ふかと仰しやつて。何卒貴方にお逢申したいと。仰しやつてムりました。阿曾扱は左様な事て間違てムりましたか。アノ慶安は。宜しふ無い人物てムりまする。幸ひお二方も御座るならば。参つて一寸お目に懸つて御挨拶を。深雪イヤ。父様も先へ御下りなされまして。只今下りますは。私ばかりてムりまする。阿曾左様ならばお二人共に。はや先達てお下りなされ。只今は貴方ばかり御下りとな。深雪左様てムりまする。したが申し阿曾次郎様。貴方はモウ御新造様がムりまするかへ。阿曾ハ、イヤ未だ。某は獨身てムりまする。深雪それはマア。御難しい。日外宇治川てお目に懸りし其時より。お恥かしい事ながら。阿曾思ひの淵に沈み。何卒

世に住む御前の甲斐には。彼のよふな殿御に添たいと。思ひし如くあつて。御座る事聞いた時の其嬉しく。折角御座んしたお人は違ふて。猶だ其上に御座んすは御座んしながら。ほいな別れ。申し何卒お厭てはムんせうけれど。何卒私を見捨てずに。一生添ふて下さんならば。女子冥理に叶ふた私。厚顔しいとは思召すてもムんせふけれど。何卒叶へて下さんなア。ト阿曾次郎頭掻き。阿曾これは。數ならぬ拙者めを。左様まで厚き思召して下さるゝ段は。忝いが。如何も左様な事を致しては相濟申さず。殊更只今は。御用について東へ参る身なれば。又折もムらふ。サア。舟へお歸りなされませい。深雪イヤ。假令どのよふに仰しやつても。一旦恥かしい女子の口から申した事。お聞入なされて下さりませいなア。阿曾じやと申して。東へ参る道なれば。深雪東へ行かしやんすなら。何卒私も連れて往て下さんなア。阿曾是は又怪しからぬ。御兩親を捨て、往くなぞとは。夫は有れぬ事。深雪そんなら如何でも。聞入れては下さんなかへ。阿曾親の許さぬは。不義淫奔てムるわいのふ。深雪南無阿彌陀佛。ト飛ばふとする故。阿曾次郎悔りして留め。阿曾コリヤ何故に死なつしやるぞ。深雪何故とは聞えませぬ。女子の口から。恥かしい事の有たけを云盡し。聞入れて下さんなとて。其儘に何と是が歸られふぞ。とても叶はぬ戀なれば。思ひ死に死なふよりは。いつそ此海へ身を投げて死ぬるが勝し。必ず留めて下さんなへ。ト又陥らふとするを。阿曾次郎留め。阿曾コレ短氣な事を必ずなされな。深雪夫じやと申して。とても叶はぬ戀ならば。阿曾滅多に死んでは。跡に残りし親達の御歎き。世上の譏。深雪イヤ。假令父様母様に嘆きを懸け。世上の人に笑はれても。何の厭ひませぬぞ。思ふ殿御に嫌はれて。何樂みに生きて居ませうぞ。何卒お慈悲に。殺して下さんなア。阿曾スリヤ眞實夫程までに。深雪思はいて何と致しませぬいなア。阿曾夫程までに思ふて下さる。志。最早是非に及ばぬ。いかにも連れて立退ませぬ。深雪そんなら眞實。連れて立退いて下さんすかへ。阿曾いかにも連れて立退ませぬ。深雪エ、嬉しうムんす。ト抱着く。阿曾假令連れて立退くとも。跡にて御兩親の。何處へ往たぞと御嘆きは如何許り。ハア是

非も無い事じやなア。深雪夫は大事ムんせぬ。一寸舟へ往て。何彼の様子を細々と。書置いて参ります。阿曾夫が可い。サア早ふ。深雪アイ。ト阿曾次郎又抱いて船に乗せる。深雪嬉しそふに管の内へ這入る。阿曾思ひも寄らぬ今宵の仕義主君の御用といひ。殊更望ある身に足手纏ひ。とは云へ彼があれ程までに。思ふ心も不便の至り。ム、それ。京都まで往たらば。葦守忠吾を鎌倉へ連行けば。其留守に頼置かふ。爾ふじや。ト此時小舟二艘に最前の悪者七八人乗りて漕着来て。悪者宮城阿曾次郎うぬを。ト切つて蒐る。阿曾次郎身構へして。是を對手にして立廻り有る所へ。又關助小舟にて乗付け。悪者を追廻す。管市惻りして舟の舳へ駆出て海へ陥らふとする。阿曾次郎片手に刀を持ち片手にて管市が帯を執へ留める。此時深雪走出て乗らふとする。跡よりあやめ。宗五右衛門。甚五右衛門。皆々出て危険いと捨臺詞云ひ。捕へる。と仕掛にて此大船東の方へ走る。此間に關助皆々を追散し西の方へ櫓を押し行く。深雪阿曾次郎様のふあれい。ト振袖にて招く。此儘に東西へ船は別れ這入る。此見得宜しくチヨン。

幕

第五段

造り物一面の茶屋書割。但し東の方に一軒花形屋と書たる所ばかり出入る。其外は皆々書割なり。此前に床几二脚並べあり。此真中に大内之助大盡の形にて腰を掛けて居る。傾城夕しき。薄雲。岩國。高圓。皆々並よく西の方に腰を掛けて居る。圓平。忠内。玄蕃。大之進。清藤腰掛けて居る。此前に大内之助の傍に還手お六付いて居る。此前に關助辨次躍つて居る。此見得宜しく歌にて幕開く。

ふ往て見て来い。辨次ハア。思つて候なり。いで去らば大太夫様をお尋ひ申して来ふ。と云ふ聲に關助は。トガランツ。ト花道の前まで往て向ふを見て。ヤア行くまでも無い。向ふへ太夫様が御座んした。ト躍り。戻つて来る。華やかなる歌になり向ふより瀬川。華やかなる衣裳袴。兩方に禿二人。跡より男傘を差かけ。其跡より仲居附添ひ出る。其跡より岩田郷助。熊谷笠を被て浪人の形にて付いて出て花道よき所にて。郷助最前からも云ふ通り。何卒叶へて下され瀬川殿。仲居ハテひつこい侍様じやわいなア。如何云しやんしても叶はぬ事じや程に。ふつゝりと思ひ切しやんせいなア。郷助ハテ情を立てるお傾城。其様に無情ふは云はぬものじや。コレ此方を頼むわいのふ。仲居ヲ、辛氣。其様に云しやんしても。成らぬ事てムんすわいなア。サア。瀬川様。抛つて置いて。早ふ行しやんせいなア。ト又華やかなる歌になり。此一件皆々本舞臺へ来る。本舞臺の皆々是を見て一同に。女形皆々瀬川様。ひどふ遅かつたぞへ。辨次イヤモ旦那先刻より大御兼の御退屈。立皆々何故に遅かつた。瀬川ヲ、皆様。其様に云しやんすないなア。勤の身は儘ならぬわいなア。大内太夫何じやぞいのふ。何故隙が入つたぞいのふ。ト傍へ寄る。瀬川彼方向いて顔を背けて居る。アレお六見やいの。此間二三日は。どのやふに物云ふても。一向彼の通りに相手にならぬわいのふ。お六夫は如何したものでムりますや。コレ太夫様。全體お前何と思ふて居しやんすぞいなア。ヲ、爰に居るお方は。何方じやぞいなア。仲居サイナア。最前から此方が太夫様に。戀を叶へてくれいと云ふて。郷助いかに瀬川殿に。ぞつこん惚れて。惚抜いた故。付纏ふて頼む某。コレ太夫殿如何じや。戀を叶へて下さらぬわいのふ。瀬川何ほ流れの身でも。肌觸れる殿御は。一人より外にムんせぬわいなア。郷助ム、スリヤどのやうに云ふても。瀬川厭でムんす。モウ云ふて下さんすな。郷助ハテ能く凝つたものじやなア。ト此前より久太夫下座より出かけ居て。久太郷助モウ。最早控へて居よ。ハツ我君様へ申上ます。此者は拙者が甥郷助と申す者てムりまするが。瀬川殿の心底を試さん爲。郷助に申付けて只今の仕儀。何と我君。瀬川太夫の御心底無御満悦てムりませふ。大内ム

ムそんなら何か。其浪人といふは。其方が甥で。最前から彼の様云ふたのは。太夫が心底を試したのか。コレ太夫其方の心底嬉しいぞや。ト寄添ふ。瀬川黙つて顔を背ける。付穂無く又此方へ来て。大内コリヤ久太夫。只今の褒美に。其郷助とやらを取立て、くくれるぞよ。久太ナニスリヤ郷助をお取立下されませふとな。郷助ソレお禮を申上げい。郷助こは有難き君の御意。此上は君へ忠勤の勵みまするよふにムりまする。ナニ各方もお聞の通りなれば。何卒以後は仰合せされ。御心安く頼みまする。忠内ソリヤ我々とても同じ事。皆々申談じませふ。久太其形にてお目見えは餘り憚り。花形屋にて衣服を改めて可らふ。郷助心得ました。然らば伯父じや人。何れも後刻御意得ませふ。ト歌になり。郷助花形屋と書いてある所へ這入る。大内之助こなし有つて。大内コレ太夫。何故浮きくとしやらぬぞいのふ。吾儕が其様にして居る故。大抵心遣ひな事じや無いわいのふ。何ぞ氣に入らぬ事が有るなら。恚う恚ういふ事が氣に入らぬと云ふてたもや。ト瀬川黙つて居る故又此方へ来て。大内コレくお六。アリヤマア全體如何したものでやぞいのふ。お六アイく。尋ねて見ませふわいなア。ほんに如何して彼の様にさしやんすやら。ト云ひ云ひ瀬川が傍へ来て。コレ太夫様。お前は何と思ふて其様にさしやんすのじやいなア。あれ見やしやんせ。殿様は此間から。大抵や大方や心遣ひして居やしやんす程に。かふくいふ譯で氣が済まにや。済まぬと云しやんせいなア。ト瀬川こなし有つて。瀬川花の山分つゝ行けば谷陰の。何れを道と迷ひぬるかな。皆様是にへ。枝折。早苗おじや。枝折。早苗アイく。ト歌になる。瀬川に枝折早苗付添ひて下座へ這入る。大内お六。アリヤマア何の事じやぞいのふ。お六何の事じや。私もさつぱり合點が行ませぬ。久太殿此上は四の五の云さず。早く身請なごるゝが可ふムりませふ。ノウ執れも。關平左様でムる。瀬川太夫殿ツンくしらるゝのをじつと見て居ては。忠内我君様の御威勢の薄い道理。久太此上は一時も早ふ。根引の相談あつて。皆々然るべう存じまする。大内ア、爾ふじや。久太夫早瀬川が身受の相談してくれい。久太其形をやる。其へ就るてムらふ。ト花形屋の内より。華やかなる聲に。此方、久太殿、何なるぞ。久太其形をやる。其へ就るてムらふ。ト花形屋の内より。華やかなる聲に。此方、久太殿、何なるぞ。人かと思へば山名角太郎殿。久太スリヤ角太郎殿が太夫の身受を。角太いかに此角太郎が身受致すに。何も申分はムるまい。大内イヤ假令何方が如何仰られても。太夫が身受は此大内之助が致して見せる。角太ハ、ソリヤ及ばぬ。マア當時管領の御意に叶ひし。此角太郎に張合ふとは及ばぬ。大内及んでも及ばいでも。此方へ身受するぞ。角太強つて身受を致さば。其方が家に保はるぞ。夫ても見事見受をするか。大内ア、して見せふ。角太イヤ猪小才な。ト此時向ふのとやの内より。お杉待つたく待しやんせ。其臺詞をば遺手の杉が。一寸挨拶しやんせふわいなア。ト華やかなる歌になる。遺手のお杉前垂駒下駄にてぶらり提灯を掲げ出て。角太ム、スリヤ此場の挨拶を其方が。女皆々お杉様。ひよんな此場の治りを。皆々見事其方が治めるか。お杉サイなア。行くか行かぬか知らねども。遣付けるが遺手の役。やり杉往き杉は遺手じやと。笑はしやんせふけれど。アノ太夫様の事に付いたら。唐までも出ねばならぬ。其積りて皆様お寛しへ。ト本舞臺へ来て。角太郎と大内之助が眞中へ直る。大内ム、爾ふして太夫は。此方へ身受さすか。角太此方へ身受さねば。命が無いぞ。お杉サア。土せりふを云ないナア。何も角も吞込んで居るわいなア。久太スリヤ我君へ身請さすか。お杉サアよふごんすねいなア。角太大内之助へ受合ふからは。此の方へ身受させぬのか。お杉サア可ふごんす。上げるわいな。忠内何方も付かずの返答は。お杉何方へなりと付けるわいなア。角太シテそりや何時までに。お杉古いけれども。夜半の。二人鐘を相圖か。杉。大鐘は餘り古いによつて。太鼓を限りに。大角スリヤ太鼓を限りに。お杉何方へなりと。大角色よい返事を。お杉するく。するわいなア。皆様ざつとした所が這樣ものじや。其外お客の揉め事なら。どんな事でもお頼みあれとぞ喋りけり。久太サアく。夜半までは餘程あれば。奥へ參つて今様の大踊りを。皆々まづく。ト歌になり。此一件皆々わやく云ふて這入る。跡へ角太郎。久太夫残りて四邊を見廻すと合方になり。久太角太郎様。角太久太夫。シテ其方に頼み置いたる。北辰の鐘は手に入つたか。如

なるぞ。久太其形をやる。其へ就るてムらふ。ト花形屋の内より。華やかなる聲に。此方、久太殿、何なるぞ。人かと思へば山名角太郎殿。久太スリヤ角太郎殿が太夫の身受を。角太いかに此角太郎が身受致すに。何も申分はムるまい。大内イヤ假令何方が如何仰られても。太夫が身受は此大内之助が致して見せる。角太ハ、ソリヤ及ばぬ。マア當時管領の御意に叶ひし。此角太郎に張合ふとは及ばぬ。大内及んでも及ばいでも。此方へ身受するぞ。角太強つて身受を致さば。其方が家に保はるぞ。夫ても見事見受をするか。大内ア、して見せふ。角太イヤ猪小才な。ト此時向ふのとやの内より。お杉待つたく待しやんせ。其臺詞をば遺手の杉が。一寸挨拶しやんせふわいなア。ト華やかなる歌になる。遺手のお杉前垂駒下駄にてぶらり提灯を掲げ出て。角太ム、スリヤ此場の挨拶を其方が。女皆々お杉様。ひよんな此場の治りを。皆々見事其方が治めるか。お杉サイなア。行くか行かぬか知らねども。遣付けるが遺手の役。やり杉往き杉は遺手じやと。笑はしやんせふけれど。アノ太夫様の事に付いたら。唐までも出ねばならぬ。其積りて皆様お寛しへ。ト本舞臺へ来て。角太郎と大内之助が眞中へ直る。大内ム、爾ふして太夫は。此方へ身受さすか。角太此方へ身受さねば。命が無いぞ。お杉サア。土せりふを云ないナア。何も角も吞込んで居るわいなア。久太スリヤ我君へ身請さすか。お杉サアよふごんすねいなア。角太大内之助へ受合ふからは。此の方へ身受させぬのか。お杉サア可ふごんす。上げるわいな。忠内何方も付かずの返答は。お杉何方へなりと付けるわいなア。角太シテそりや何時までに。お杉古いけれども。夜半の。二人鐘を相圖か。杉。大鐘は餘り古いによつて。太鼓を限りに。大角スリヤ太鼓を限りに。お杉何方へなりと。大角色よい返事を。お杉するく。するわいなア。皆様ざつとした所が這樣ものじや。其外お客の揉め事なら。どんな事でもお頼みあれとぞ喋りけり。久太サアく。夜半までは餘程あれば。奥へ參つて今様の大踊りを。皆々まづく。ト歌になり。此一件皆々わやく云ふて這入る。跡へ角太郎。久太夫残りて四邊を見廻すと合方になり。久太角太郎様。角太久太夫。シテ其方に頼み置いたる。北辰の鐘は手に入つたか。如

何じや〜。久太夫に怪呆がムろふか。若殿を馬鹿に仕立て瀬川といふ四を拵へ。此鎌倉を動かさず放埒させて。其間に奪取つたる北辰の鎧。是が無くては家の騒動。イザお受取下されませぬ。ト鎧を渡す。角太郎篤と見て。角太威程擬ふ方無き北辰の鎧。我手に入る上は大望成就懸ての内。エ、忝い。シテ大内之助は。まだ本國へ歸らぬか。久太此頃本國より。駒澤次郎左衛門と申す者下りまして。日々に目見えを願ひ居ます。察する所。殿を定めて歸國させんす心中と存せし故。何角と云傲して。いつかな目見えはさせませぬ。角太それは重疊〜。身は是に在つて何彼の手つがひ。其方は奥へ參つて。猶も若殿めを馬鹿に仕立てい。早く〜。久太然らば角太郎様。角太久太夫。久太後刻御意得ませぬ。ト歌になり久太夫奥へ這入る。お杉出て。お杉ヲ、其處に居やしやんすは。角様じやムんせぬかへ。角太誰かと思へば遣手の杉。最前大内之助との買論。愈身共に大夫が身受を致さすか。どぶじや〜。お杉ソリヤ合懸じやけれど。何を云ふのもナアホ、、、。身は沙汰も○次第じやわいなア。角太成程〜。ト紙入より金五兩取出しそれは常座の纏頭じや。お杉ホ、、、。是はマア〜。ト取つて見て。お杉何じやいな。僅た五兩かいなア。五兩やそこらの金では。息勢はつては合はぬけれど。まゝよ取らぬより勝しじや。貰ひました角様。太夫様を身受したら無嬉しからふなア。角太ソリヤ知れた事。大悦びじやわい。お悦びかへ。お悦びの御祝儀を戴きませぬ。角太又取るのか。ソリヤ。ト又二兩出し遣るを不承〜に取つて。お杉僅た二兩かいな。儘よ取らぬより勝しかい。爾ふしてアノ身受さしやんしたら。ツイ男の子が出来てあるうなア申し。角太男子なと出生したら。満悦じやわい。お杉ヲツト満悦の御祝儀戴ませう。角太又取るかい。ソリヤ。ト又一兩出してやる。お杉をふしてアノ男子が出来た上で。角太コリヤコリヤモウ云ふな。紙入はモウ明敷じや。ト震ふて見せる。お杉鎧を見て。お杉申し〜ソリヤ何でござりますすへ。角太是かコリヤやりじや。お杉ドレ一寸見せさしやんせ。ト取つて伏紗を開いて見て。お杉ホンニよふびか〜光る鎧じやなア。わしや是が〜前掛しいなア。角太夫は遣られぬ。ハテ取つて〜欲がる奴じや。お杉欲がる客じや。かきもち〜

やわいなア。角太ナニかき〜。夫が身請の事を。一時も早く〜。お杉サア夫は合懸じやが。何を云ふても。身請の金は千五百兩じやぞへ。角太サア。其金は爰には無い。身が屋敷へ申遣はして。お杉申遣はして居やしやんす間には。彼方へ身請しられて仕舞ふぞへ。角太じやと云ふて。今といふては。お杉無いかへ。無きや私も仕様が無いわいなア。角太ハテ困つたものじや。お杉待しやんせや。そんなら其金の代りに。此鎧を私に預けて置しやんせ。角太待〜何ぼう身請がしたいとて。其鎧ばかりは渡されぬわい。お杉ハテ可いわいなア。些との間此遣手が遺縁に遣ふ鎧じや。やり〜云はずとやり任して置かしやんせいなア。ト立つて鎧を持つて歩く。歌になる。

歌へ向ふの山にちら〜見ゆるは。月か星かほふたるか。ヤリ〜。歌、月なれば拜みもせふか螢なら。手に取るふかヤリ〜。

ト此歌に合してお杉鎧を持つて踊り〜橋懸りへ這入る。角太待てヤイ〜。コリヤ待てヤイ。ト追へて這入る。跡へ熊谷笠を被り黒羽二重に大小の侍。窺ひ〜出て橋懸りを見込み。うそ〜と見廻し。錦の守袋の落ちてあるを取つて中を開き。書付を一寸見て。懐へ入れ。領き〜橋懸りへ這入る。チョン〜返し。此道具東西へ引分ける。

造り物平舞臺。向ふ一面の長暖簾。都て花形屋座敷の體。正面に高き臺の上に。大内之助手拭九載せ大盡の形にて。此前に立役皆々並よく列ぶ。此前に久太夫片肌脱ぎにて唯して居る。此見得宜しく騒ぎにて幕開く。道具納る。

久太ヤア〜面白いわ〜。サア〜是からは踊れ〜。大内サア久太夫も皆踊れ〜。奥内殿の御意が出ましたから。我々も。立皆々踊りませぬ。久太ヤア千代の踊りの一踊り。松は松坂越えたやつさ。立皆々をどりはありや〜。

女皆々サアやつとさ。ト女形皆々立役皆々踊る。大内之助悦んで嘸して居る。久太夫兩肌脱いて嘸す。女形は先へ東の通ひ道へ踊つて往て花道へ廻る。此時向ふより奴一人走り来て。奴ハア申上ます。先日より参り居ます。駒澤次郎左衛門。殿様へお目見え仕りたき由にて。あれに控へ居ます。通しませふか如何仕りませふ。久太ヤア御遊興の席へ押しての推參。ソレ早く逐歸せ。奴ハア。ト走り這入る。此時女形皆々本舞臺へ踊り来る。立役皆々花道へ懸る。又奴走り出て。奴ハツ申上ます。駒澤次郎左衛門如何様に申しましたも。押して只今は參上仕ります。久太御免も無きに押して来るは失禮千萬。ソレ逐歸せ。奴ハツ。ト走り這入る。立役半分本舞臺へ来る。此時花道より花駕籠に揃ひの衣裳にて踊子つか。本舞臺へ來つて踊る。此跡より次郎左衛門社衾衣裳にて走出る。立役代りへに支へるを。突廻し。花道よき所にて直りハツと平伏する。次郎本國より使者駒澤次郎左衛門。御目見えを願上奉ります。久太ヤア御許しも無きに押しての推參。それ子供等。ト子供残らず一くさり踊る。大内之助是を見て色々嘸し了ひ終に。大内よふ。ひどのいものじや。皆も褒めい。立。女皆々よふ。久太子供に似合はぬ。ハテよく踊つたなア。大内何と皆賢い子供じやないか。ト次郎左衛門を見て。ム、其處に居るは駒澤次郎左衛門か。次郎御意で申ります。大内ナント見たか。賢い子供じやないか。次郎ハツ仰の通り其子供は。残らず本國の家中の粹ども。此度殿の御機嫌御伺ひのお見舞として。召連まして申ります。大内そんなら異見しに來たのでは無ふて。久太殿の御機嫌伺ひの爲とな。次郎仰の通りお見舞で申ります。大内見舞か。聞くと思はるとはひどい違ひじや。皆も見。駒澤めがひどい粹じやサア苦しい無いサ、近ふ。久太イヤ。殿。篤と心中の知れざる者は。迂濶にお通しは可くまるまい。大内彼様事を云をる。何の構ふ事があるぞい。サ、近ふ來い。久太イヤと申して。大内ハテ視察な駒澤に何の遠慮。サ、來い。久太スリヤ如何様に申しても。然らば鎌倉詰の役人。御目見えに控居る諸士の姓名を。次郎イヤ。流るるに及ばぬ。各が御姓名供より存じ居ます。立。スリヤ

我々が姓名を。次郎いかに存じ居ます。立。スリヤ此方が名苗字は。次郎貴殿は山岡支番殿。其次は宇井殿内殿。田村國治殿。田邊國平殿。大之ム、シテ又拙者は。次郎貴殿は澤柳大之進殿。其次なるは道田清藏殿。軍シテ又身共は。次郎八塚軍平殿。皆々スリヤ我々が姓名を。次郎御姓名は申すに及ばず。其外何角の様子まで。逐一承知致し居ます。大内久太夫見たか。次郎左衛門は粹な奴では無いかい。サア。爰へ來い。盃をくれ。大内久太アイヤ左様にお乗なされませぬ。斯様に申して。矢張國元へ連歸らん彼が手段。大内何のいやい。那樣悪氣の有そふな次郎左衛門じやない。苦しい無い近ふ。サ、ずつと來い。次郎然らば御免下されませぬ。何れも御免。トずつと平舞臺へ通り。よき所に直る。久太スリヤ貴殿は。殿を諫の迎ひては。立皆々ムらぬじやな。次郎仰に及ばず國元にて御後室様の私を召れ。コリヤ次郎左衛門。粹大内之助久々鎌倉へ立越居れば。病氣などの程も心元なし。汝急ぎ彼處へ立越え。病氣の出ぬやうに。遊所にも誘へよと仰を受け。かしこまつてまづはお土産には。あの子供を同道仕り。風流なる踊りなども御覽に入れんと。召連來り見れば。殿様には此廓へ御出の様子。先は安心仕りたくと。御目見えを願ひましたれど。如何なる事にや御免無き故。今日は押して推參。其段は偏に御免下されませふ。立皆々スリヤ。御諫言では無ふて。次郎けいも無い事。何の御諫言只お見舞の爲ばかり。此上は各方とも申合せ。愈殿を浮し奉るで申りませぬ。大内それ見いな久太夫。イヤ母が粹なれば。仕へる次郎左衛門までが粹じや。ト無上に悦ぶ。久太夫少しむつとして。久太ム、貴殿は元菊池家の小姓。宮城阿曾次郎といふた者では無いか。次郎いかに宮城阿曾次郎と申す者。仔細有つて傍輩を切殺し。切腹せんと思ひしかど。一旦國延せしに。伯父の駒澤主膳病死に依つて。據所無く養子となり。夫故只今にては。駒澤次郎左衛門と改名仕りました。久太ハテ夫はよふ改名召れたのふ。大内サア駒澤が來たからは。又咄せるぞ。是からは奥へ往て。わつさりと酒にせふ。次郎左衛

門。久太夫。皆来い。ト騒ぎ歌になり此一件皆々奥へ這入る。跡へ瀬川を先へ。高圓。夕しき。薄雲。皆々出で。高圓ホンニ聞いたよりは。好い男でムんすなア。夕しき爾うでムんすわいなア。薄雲瀬川さんは此間から。知つて居やしやんせふなア。瀬川サイナア。先度御座んしてから私を呼出し。若殿様の事を尋ねたり。此様に。ト文を四五通出して。文を寄越したりさしやんすけれど。殿様へ聞えては濟まぬと。一度も開いて見もせぬわいなア。夕しきソリヤ可い事でムんすなア。高圓シタが其文には。どの様な事が書いて有らふなア。薄雲サレバ何よりはアノ次郎左衛門様は。私やいつそ好じやわいなア。高圓ソリヤ誰でも好くわいなア。夕しき當世男で。すつきりして厭味が無ふて。此上も無い男振。誰でも世間の女子に。好れる風じやわいなア。薄雲瀬川様。お前次郎左衛門様を知つてなら。何卒私に世話しておくれんかいなア。高松がんまちな事云ひないナア。コレ。瀬川様。何卒私に世話してくれたら。一生恩は忘れぬ程に。何卒私に世話しておくれ。置むわいなア。夕しきイエ。お前方よりは。何卒私に。高圓イエ。成らぬ。私じや。夕しき何卒世話して。三人下さんせいなア。瀬川サア何ぼう其様に云しやんしても。頼人は三人相手は一人。マア。私に如才はムんせぬ程に。マア。任して置しやんせいなア。夕しきそんなら何卒瀬川さん。ト此時次郎左衛門莫益を提げ出て来る。三人是を見てこなしあつて。三人頼んだぞへ。ト奥へ這入る。瀬川こなし有つて東の方へ寄る。次郎左衛門是を知らずに煙草呑み。次郎國元にて後室様に。お請合申して參るは參りながら。傍邊りより彼是と申立て。お目見えも叶はぬ故。如何と案じて居たに。今日只今始めのお目見え。其上有難きお詞に預り。此上はム。ト手を組みて思案して居る。瀬川は最前より次郎左衛門に見惚居ていろ。こなし有つて。此時つか。傍へ走來て。瀬川申し。次郎左衛門様。申し。ト次郎左衛門瀬川を見て。次郎ホラこれは。何方かと存せしに。殿の御合方瀬川殿。此間は久々御意得ませぬ。誠に殿のお目見え叶ひ。御座り有難い様はムりませぬ。瀬川それはマア御目出たムんす。次郎左衛門で。御座り下されい。瀬川アイ。

悦びます段かいな。大體嬉しい事じやムんせぬわいなア。是からは毎日。お傍に居てお顔を見るならば。私にも御座りしうムんすわいなア。次郎ソリヤモウ云ふ迄も無い事。若殿もまだ。お國へはお歸りなさらねば。夫までは随分毎日毎日お傍を去らず。瀬川アノ居やしやんすかへ。次郎ござるとも。まだ三ヶ月も四ヶ月も。瀬川其間は何卒お傍に居て。成らふ事なら女房に。次郎イヤ心次第で如何様とも。瀬川賤い勤こそして居ますれ。一旦思ひ詰たれば。どのよふになるとも變らぬ心。そふしてモシ女房になつた其時は。次郎ソリヤモウ。月雪花にも替へぬ御寵愛。瀬川エ、嬉しうムんす。ト抱着く。次郎左衛門悔りして突飛し。次郎見苦しい。コリヤ何を爲さる。瀬川何をすると曲も無い。たつた今女房に持つと。云ふて下さんしたじやムんせぬわいなア。次郎是は又怪しからぬ。只今申したは。殿の事を咄し致したのじや。又よく物を思ふても見たが可い。御主人の御寵愛ある此方に。ハテサア馬鹿な事を。ト瀬川こなし有つて。懷中より刀を取出し。自害せふとするを留めて。待つた瀬川殿。コリヤ何を爲るのじや。瀬川何をすると曲も無い。日外廊へ御座んして。私を呼出し。殿様の事を尋ねさしやんした其時より。恥かしい事ながら。テモ好い殿御振。世に住む女子の甲斐には。彼様の様なお方に添ふてこそと。思ひ詰たが身の因果。何時ぞは。と思ひ思ふた甲斐あつて。今日といふ今日。心の有丈け打明し。嬉しい返事と思ひの外。今の御詞。勤する者は移り易いと。蔑視まるも恥かしさに此有様。留めずと殺して下さんせいなア。ト又死なふとするを留め。次郎マア。逸まらまいぞ。ハテ如何に女子じやと云ふて。殿の御寵愛の其方に。何として不義淫奔が成らふぞ。爰の所を聞分けて。思ひ切つて下され瀬川殿。瀬川そんならどの様に云ふても。次郎ハテ扱。駒澤次郎左衛門は武士で。瀬川南無阿彌陀佛。ト死なふとするを留め。次郎左衛門いろ。立廻り宜しく有つて。次郎スリヤどの様に申しても。瀬川殿御に惚れる女子の心。勤する者じやとて。別に異りはムんせふわいなア。次郎假令どの様に言廻しても。心の内は覺束無い。瀬川疑はしやんすも無理ではムんせぬ。ト一寸思案して。小指を板に當て刀にてすつはり切り。紙に包みて次

郎左衛門が前に置き。サア是を取つて下さんせ。次郎スリヤ夫程までにして。瀬川傾城の晝寝ぬ程はまだな事。見初めし日より片時も。忘るゝ隙なき總路の闇。是程にする私心。何卒叶へて下さんせ。コレ申し手を合して拜みます。次郎道ならぬ不義なれど。夫程に思ふて下さる志。忝い。ト指を戴き懐中する。瀬川そんなら叶へて下さんすかへ。次郎ハテ濡れぬ先こそ露をも厭へ。瀬川エ、嬉しうムんす。ト抱着く。此前より大内之助出かけ。此體を見て大に怒り。行かふとするを。久太夫留めて居る。立役皆々。女形皆々此後よりきせいして居る。大内不義者見付た。立皆々其處動くな。ト兩人是にて悔りして飛退き。大内之助皆々走寄る。大内次郎左衛門。瀬川。よふもく其様な事仕出しおつたナア。久太殿御覽なされ。這樣事であらふと思ふから。迂瀾に次郎左衛門を近付なさるゝなと申すに。大事ないくと。到頭大事ある事を仕出しましたぞや。高瀬瀬川様。私等が頼んだ事は外へして。夕しきよふ華やかな事。三人さしやんしたのふ。ト瀬川こなしあつて。瀬川構ふて下さんすな。わたしやモウ殿様が厭になつた。アイモウくとんと愛想が盡ましたに依つて。すつぱりと思ひ切つて。次郎左衛門様に惚たのじやが。何とぞしたかへ。殿様お腹が立たふけれど。堪忍して下さんせへ。わたしや次郎様に惚たに依つて。指まで切つて上たわいなア。ト大内之助色々身悶えして腹立てる。忠内殿。彼の様瀬川が申すが。御腹は立ませぬか。皆々口惜いとは思召さぬか。立皆々何故すつぱりと御切なさらぬぞ。皆々殿のお顔は潰れますぞや。大内次郎左衛門めうぬ。ト抜かけ行かふとするを。瀬川ちやつと次郎左衛門を圍ふ。次郎左衛門見てこなし有つて。瀬川イエ。次郎様を切す事は成らぬわいなア。大事のく男に。指もさへさす事は成らぬ程に。切つて可くば。私を切しやんせ。サア切らしやんせ。大内エ、く。モウ了簡が成らぬわい。ト抜討に切つて懸るを。次郎左衛門圍ふて是を又切らふとする。瀬川又次郎左衛門を圍ふ。此様合幾度も有つて。大内之助瀬川に一刀切付けける。瀬川あつと倒れる。直に次郎左衛門を切かゝる。次郎左衛門兩刀を投出して。次郎暫く。暫くお待下されませぬ。大内次郎左衛門。瀬川が體を

見て惚れたか。次郎全以つて惚れは仕らぬ。瀬川が此有様に付いて。申上ぐる一通り。御奉お聞下され。其上にてお心に叶はずば。御手を下させらるゝまでも無く。次郎左衛門腹切つて相果ます間。暫く。御赦免下し置かれませぬ。大内此場に及び何の言譚。早く云へ。次郎ハツ申上ぐるは餘の儀にあらざ。此度御國元には。菊池の姫君御興入の儀。先達てより度々の催促。然るに殿には。此廊にて御遊興。菊池へは種々申延して。最早餘程の延引。其上斯る體裁。都へ聞えなば。大内の家は斷絶と。御後室様の御心配。某を密かに召れ。恚うくと御意の上。何とぞ其方早く鎌倉へ立越へ。大内之助を如何にもして連歸れよとの御仰せ。人も多き其中より。御見出しに預つたる有難き。早速に下りは下りながら。御目見えは叶はず。如何はせんと思ふより。瀬川殿に咄合ひ。段々の仔細を語り。色々と折入つて頼みしかば。引くに引れず承知して。故と殿には無情き有様。然るに今朝途中にて。思はず拾ひし守袋。開き見れば瀬川が臍の緒。合して見れば。我守袋の片と同じ織物。扱は幼少の時捨られたる妹にて有しよと。天にも上る心地して。直に瀬川が部屋へ行きて。兄弟の名乗合ひ。其上にて。何卒其方が一命を。某にくれよかし。左なくば若殿の御歸國は有るまじ。御歸國無ければ御身の大事と。事を分けて細々と聞かせ。まづ恚せよと兄妹が。畜生同然の舉動も。君を歸國させん爲。あはれ此事を聞しめし分られ。瀬川が犬死とならざるよふ。偏に願ひ奉ります。大内ヤア。そんなら最前からの様子といひ。此間から無情ふしたは。爾ふいふ譯であつたかヤア。ト呆れて刀を取落す。久太ム、左程までと思ふ次郎左衛門が。此艶書は。ト瀬川が懐中より最前の狀を取出し。ソレ何も讀上さつしやれ。立皆々ハツ。ト忠内。團平。清藏。大之進各自に通づつ取上げ封を切り。忠内ナニ此間より段々御頼み申上候。若殿様御歸國の儀は。團平其元様の御心入次第にて。如何様とも相成る事に候へば。清藏何卒思ひ切つて。早々御歸國可有やうの御取計ひの段。偏に頼み奉り候以上。大之瀬川様へ駒澤次郎左衛門判。忠内こりやは何れも異らぬ同じ文體。大内エ、那樣事とは知らず。此間から無情ふすると怨んだは。堪忍して

くれい。ひよんな事を爲たわいやい。ト泣く。瀬川苦しそふに。瀬川勿體ない事仰せ遊ばす。日外より。海山にも替
 られぬ御高恩の數々。賤しい此身の果報ぞと。悦んで居ましたに。初めて逢ふた次郎左衛門様。慍うくしてくれい
 とのお頼み。其上守袋にて名乗合ふた。兄弟の頼みに引れず。大事のく殿様を。最前からの悪口。必ず憎い者じ
 やと思ふて下さんすなへ。何卒此上のお願ひには。私の事は思ひ切り。お國へ去んで下さりませい。申し殿様。拜み
 まするわいなア。大内エ、爾ふいふ事なら。何故に爾ふと。明して云ふてはくれぬぞいやい。何のそれに去なずに居
 よふ。次郎左衛門も聞えぬぞよ。現在の妹と知つて。何で殺さしたぞいやい。次郎次郎左衛門が妹と知つたる故
 猶以て殺さねば成ませぬ。大内ソリヤ又ナ、何故に。次郎されば。駒澤次郎左衛門こそ妹を君に差上げ。其
 權を以て高るなどと。家中の口の端も情なし。又二ツには。彼が付添居る時は。しぜんと菊池の姫君とも御中むつま
 じからず。さする時は如何なる大事出来せんも知れず。夫故に此場の有様。妹出来した。よふ死んでくれたなア。
 其方が死ぬる故。若殿様には御歸國。さすればお家の納り。出来した。〇とは云ふものゝ十八歳。邂逅ふたる妹
 に。優い詞も懸ける事か。死ねよと頼む兄が心。どのよふにあらふぞやい〇ハツ何卒彼が義死に免じ。本國へ御歸り
 遊ばされませふならば。兄弟が悦び。又後室様の御安心家中の大悦。何卒此儀を。願上奉りまする。ト大内之助
 色々悲み。大内瀬川よふ死んでくれたなア。大内之助今より心を改め歸國するぞよ。其代りには。此世の縁こそ薄く
 とも。未來永々我妻なるぞ。若しや閻魔の前に行かば。九州の探題大内之助が妻と答へ。半座を分けて待つて居よ。
 瀬川エ、お嬉しうりまする。其お詞を聞いた上は。最早此世に。思ひ残す事更に無し。幾千代ながら姫君様と。御
 家を御治め遊ばしませい。兄様去らば。もう目が見えぬ殿様。ト大内之助瀬川を擁へ抱付いて大泣きに泣く。瀬川
 色々苦しむ。次郎左衛門は大内之助と瀬川を見て。ワツと泣かふとして咬緊り締泣をする。瀬川はつたりこける大内
 之助取付て大なきジャン／＼と夜中のかねなる。次郎左衛門思ひ直して。次郎アノ鐘は最早玉響。妹が事は嘆いて

歸らず。此上は一時も早く御歸國を。久太イヤ渡多に歸國は成るまい。次郎歸國が成らぬとは何故に。久太瀬川家へ
 結納の北辰の鐘は。疾より紛失致してあらふがな。次郎イヤその其鐘は。此方に所持して居る。角太鐘は疾より紛失し
 たる事。山名角太郎承知致して居るぞ。ト角太郎奥より出て来る。次郎コハ御詞とも覺えず。北辰の鐘は此方に所持致
 し居まする。角太如何様に抗辯ふても。其鐘は無い筈。此趣を武將へ申上げ。大内之助へ祟りが行かふ。爾ふ思ふ
 て觀念しをらふ。久太んと夫ても其方に。所持して居るか。次郎いかに。久太然らば其鐘を見やふか。次郎只今御
 覽に入ませふ。ソレ北辰の鐘を是へ。お杉アイ。トお杉鐘を持つて出る。角太郎久太夫悔りして。角太イヤ
 杉。うぬ其鐘は太夫が身受の事に付いて。お杉一寸貸せいと云ふたては無いか。久太サア。此方へ渡せ。お杉ベカコ
 ウ。ト鐘を次郎左衛門に渡し。次郎様に頼まれて。此鐘を取返そふと。大抵の骨折かいなア。女子の私に味ふ一杯欺
 されて。能い氣味玉蜀黍南蠻黍。ワアイ。次郎サア北辰の鐘は此方にあるからは。申分は入りませぬ。イザ若殿
 様には。一時も早く御歸國の儀を。大内ヲ、イのう。エ、久太夫。儂は悪い奴じやぞよ。次郎北辰のお鐘の盗賊
 は。久太夫御身であらふがや。久太イヤ知らぬ。鐘を盗んだ覺えは無いぞ。忠内其方が盗んだといふ證據は。
 圓。清我々三人。ト前へ出る。久太夫悔りして。久太サア。此方の味方と思ひし三人は。圓平我々は最初より。
 次郎左衛門殿の下知を受けて。態と入込み。清我其方が悪事の段々見顯さふ爲。忠内最早抗辯ふ詞は有るまい。
 久太エ、モウやけじや。ト次郎左衛門に斬つてかゝる。此時岩代瀧太衣裳袴に着替へ。奥よりつか／＼と走出て。
 次郎左衛門を隔て久太夫を突廻し。大内其様は新參の岩代瀧太。瀧太ハツ先刻よりはや。様子は段々彼處にて承知仕
 りましたが。存じ寄らざる久太夫が悪事。伯父なれども捨置れぬ。所詮拙者が身に覺え無き申譯。ト久太夫を斬らう
 とする。次郎左衛門留め。次郎イヤ。爰は廊と申し斯る折柄なれば。其儘にして是より追放。瀧太エ、命冥加
 な。ト突放す。此時ジャンと明六ツの鐘鳴る。次郎アリヤ最早明六ツ何れも若殿の御立。皆々ハア。ト平伏する此見

得宜しくチヨン／＼黒幕落つる。ト橋懸りより久太夫頼冠りにて。玄蕃。良右衛門を連れ出て来て。久太ナント何れも。國元より次郎左衛門めがうせたる故。事露顯して此有様。殿を伴ひ大門口へうせる所を待伏して。ト囁く。兩人領き／＼。玄。良スリヤ先へ廻つて。久太コレ〇ム。ト三人橋懸りへ走り這入る。チヨン／＼黒幕切つて落す。

造り物向ふ一面の奥深く。兩側に掛行燈澤山に掛け是に火を燈してある。都て覗きの様に奇麗なるべし。此前提の模様宜しく。平舞臺東の方に柳の木。都て大門口の體。此見得宜しく道具納る。と臆病口の方より大内之助先へ。次郎左衛門。瀧太。忠内。大之進清藏付添ひ出る。此時堤の上。高圓。夕しき。薄雲。白き衣裳白き袴に

て出る。跡より茶屋の亭主付添出る。大内之助よき所に留り。大内ア是が此世の見納め。せめて掛行燈を。瀧川が冥途の燈火とも。小皆々殿様おさらばへ。次郎ム、白き衣裳にて送るとは。薄雲瀧川さんの野送りに立つた心で。皆々ムんすわいなア。ト次郎左衛門。大内之助顔見合せしめりとなる。此時後より久太夫。玄蕃。良右衛門。伺出る。久玄の良次郎左衛門めうぬ。ト切つて蒐るを立廻りにて。瀧太久太夫を取合ひホンと切る。次郎左衛門は玄蕃。良右衛門をホンと切る。大内之助見返る故。血刀を拭いて鞘に納め辭義する。大内あつぱれ兩人。此上は其方達を取立て。家老となして得させん間。随分忠勤怠るな。瀧太スリヤ某を家老となしてな。ハ、此上は随分とも。忠勤の勵み奉りませふ。次郎させる功無き某を御取立の御高恩。有難ふ存じ奉りまする。ト瀧太ハツと次郎左衛門を切らうとする。次郎左衛門見返る故。ちやつと鞘に納めて目禮する。次郎左衛門是を見て。大内サア来い／＼。次郎まづ／＼御出。ト瀧太又うこつかふとするを引廻し。向ふの方へ突遣つて。あられませふ。と辭義する。瀧太エ、と刀を持たふとして是も辭義する。此見得宜しく。

第六段

造り物四間の間二重舞臺。東の方折廻りにて通り庭暖簾掛あり。此前に駒澤次郎左衛門。岩代瀧太宿と書いた札立て、ある。西手折廻り障子屋根の壁一面の太々講日參講など取々書割りてあり。都て駿河藤屋の體。幕の中よりおじやれにて旅人を引いて居る。東向ふより仕出しの旅人大勢。在郷歌にて幕開く。

女皆々お泊りじやないかへ／＼。旅人ヲ、泊ろ／＼何ぼじや。喜助三百じやけれど。二百五十で泊よふわいなア。又ちと高いけれど泊る程に。馳走さつしやれ。△俺も泊ろふわい。○向ふの宿まで行かふと思ふたけれど。もう爰で泊る程に。随分馳走さつしやれや。女アイ／＼合點でムんす。いサア何方も内へ御這入なさりまして。おみ足お洗ひなさりませ。□ライ／＼サア皆御座れ。旅サア／＼免さしやれ／＼。ト皆々いろ／＼捨臺詞あつて暖簾の内へ這入る。と歌になり向ふより奴關助出る。跡より雲助二三人出てわや／＼云ふて付いて出る。おじやれ皆々向ふへ出て。女皆々ヲ、イ／＼。御泊りじやないかへ／＼。關助イヤ駒澤様のお宿は是か。女皆々左様でムります。サアお這入なさりませ。雲助サア旦那。おいらに酒手下され。□ヲ、爾ふじや。先刻にから口がたるなる程云ふに。△開捨にして行かふとは。□ソリヤ成らぬ。待たんせ／＼。關助ハテ手は見せぬぞ。△何じやい。雲助が那何事恐がつて。東海道が跨にかけて居らるゝものかい。女マア宜しうムんすわいなア。關助イヤ可ふない。了簡ならぬ。トいろ／＼やかましく云ふと。奥より宿屋の亭主出て。亭主何事てムりまするか存じませぬが。わや／＼と聒しく仰しやりまするは。何事てムりまするぞいなア。關助ヲ、亭主。アノ雲助に小あげを買ふて。其代と馬に代けた駄荷の代とて。三百拾貳文遣つた所を。貳拾四文ツ、酒手をくれいと云ふて。夫て此様に聒しいのじや。モウ了簡は成らぬぞ。亭主マ、／＼、お待なされませ。ソリヤ汝等が悪い。外の人とは違ふて。お侍様の御供。那樣事云ふて行く物かい。モウ／＼、黙

つて早ふ去ぬいやい。女旦那様が彼の様に云しやんすもの。お前方も早ふ去しやんせいなア。雲々々々、そんなら仕方が無い。サア皆来い。トわや。と云ふて橋懸りへ這入る。亭主ハ、あい等といふ者は他愛の無い。イヤ申し御侍様。必ずお腹をお立たなされませずと。臺所へ往てお休みなされませ。開助然らば爾ふ致さふ。大きに世話であつた。ト兩人捨臺詞あつて開助は勝手へ這入る。亭主コリヤ女子ども。おりや奥へ行く程に。店へ氣を付けて居いよ。女皆々アイ。畏りました。亭主下リヤ奥へ行かふか。女サア。皆。旦那殿は居ず。些と此際休まふじやあるまいかいのふ。女皆々ソリヤ可らふわいな。い。夫はそふと。アノ朝顔は未だ來ぬかや。いのイヤまだじやわいのふ。たみ何でもあの朝顔はよしあるもの。娘と見たわいのふ。女夫いのふ。モウアノ朝顔に。アノ喜助づらめが惚くさつて。女サイのふ。毎日。附歩いてばつかり。い。ほんに女子さへ見りやびろ。と。悪性男。いの腎張男。ト此前より喜助奥より出かけ聞いて居る。此時出て。喜助そりや誰が。ト皆々氣の付かぬこなしにて。皆々ハテ知れた事喜助づらめが。喜助ソリヤ何吐すのじや。皆々エ、。と皆々恠りしてうち。して居る。喜助うぬら能ふ那樣事吐すな。一體アノ朝顔も男は無し。俺も女子無し。スリヤ互に好い女夫じやがの。俺が惚たら何じやい。うぬ等よふいけず口吐す餓鬼じや。コリヤ今宵はお宿入があるじやないか。ちやつと往て臺所を手傳へ。のアイアイ。そんなら皆様。皆々サア行しやれ。喜助ちやつと行け。ならずめが。ト皆々這入る。帳面控へて居て。喜助サア是からじや。何でも五百兩の金は。傳内様と云合していがめて置いた金。ム、何卒早ふ蛇六めに逢たいものじや。ト手を組み思案して居る。向ふより乞食坊主の蛇六。片肌脱ぎ蛇を遣ひ。出る。蛇六サア。孰れもお旦那御覽下されませい。江戸大坂京都三ヶの津にて御評判に預りました蛇遣ひ。蛇は色々遣ひ分けて御目に懸ます。ト這樣事云ひ。本舞臺へ來て。喜助と顔見合せ。蛇六ヲ、お前は宿引の喜助様。喜助ヲ、好い所へ蛇六。コリヤ爰はモウ内じや。蛇六喜助様。俺に逢たいとは何の用じやへ。喜助サア逢たいといふは。外の事でも無いが。今日此内へ泊

つたは駒澤次郎左衛門。今一人は岩代浦太といふ人じやが。其駒澤といふ奴が。殿様の金を預つて居るじや。そつて毎晩。其金を改め居るじや。蛇六殿様から預つて居る金なら。改めそふなものじや。喜助所て其一人の岩代浦太様の御家來。津輕傳内といふ人が。今日其金の内五百兩出して。四百五十兩は奥のアノ花生へ隠してあるわ。蛇六何じや。五百兩の金を盗んだ。えらい事爲をつたなア。喜助そこで駒澤めが金を改めた處が。五百兩足らぬので亂騒ぎじや。蛇六コイツ大變でありそふなものじや。喜助そこで傳内様が俺を呼んで。恠う。いふ譯じやに依つて。何卒盗賊になる者を工面してくれい。其代り五百兩の金を。俺と貴様と盗賊と。三人分取じやといふ。蛇六コイツもえらい味い堀出しじやな。喜助時に其盗賊になる人が無いじや依つて。貴様を頼んで其盗賊にする積りじや。蛇六何じや俺を盗賊にする。イヤ。そいつは厭じやわい。喜助イヤサ其處じやて。蛇六何處じやな。喜助其金の盗賊は。私で入りますと云ふわ。そこで駒澤めが國元へ引くと吐すわ。蛇六よし。時に云はぬ事は聞えぬが。マア何かなしに。先へ手附を受取らふかい。喜助手附か。テモ透さぬ奴じや。ト懐より金壹兩出して遣る。蛇六何じや僅た壹兩。是が手附か。喜助サア可いわい。首尾よふ往たら跡ではずつしり〇時に其駒澤めが引縛つて。國元へ引くと吐すわ。蛇六よし。喜助そこで段々道中へ連れて行くわ。蛇六面白。喜助二三日目に傳内様に瀧太様は。其金を受取るに。次郎左衛門めを失敗らしたがい一杯じやに依つて。汝をそつと夜の間に逃すわ。蛇六逃げるはこいつ妙々。喜助そこで汝戻つて來るわ。何と狂言如何じや。蛇六夫て待てよ。どうやら良いよふて悪いよふて。ソウ旨旨と行けば可いが。喜助サア其處は瀧太様と傳内様とが承知じや。蛇六何ぼ二人が承知でも。ひよつと其駒澤めか痛癢持て。逃さずにつばりとヲ、イヤ。此首が有つてこそ慾もすれ。首が無くては三ッぼのさいも始まらぬ。好な酒も飲めぬわい。コリヤもう變改じや。夫手付の壹兩戻すぞや。喜助エ、氣の弱い者じやあらふと。蛇六イヤ。イヤ。とんと是ばかりはイヤ變改じや。夫よりは俺が。ム、何ぞ好い思案が有そふなものじや。トいろ。思案して

見て。有るわい。喜助有るか。ドレ如何いふ思案じゃ。蛇六如何いふ思案じゃとは外でも無いが。毎日々
 爰へ来る乞食の朝顔じゃ。彼奴を捕へて盗人にする狂言しや。喜助エ、滅相な。目も見えぬ朝顔に可愛そふに。アリ
 ヤ俺が惚れて居る依つて。大事にかけて居るものを。蛇六サアそんなら其戀が叶ひましたか。喜助エ、サ。鮑の貝の
 片思ひじや。蛇六何の願こう。元アノ朝顔は九州大内家の娘。宮城阿曾次郎といふ奴を尋ねて。あのよふに盲とまで
 成つた奴。とても餘人が口説いても滅多に離かぬ。戀の叶はぬ意趣齋し。彼奴を盗人に。喜助成程是も尤じや。そふ
 して其趣向は。蛇六趣向は是。ト喜助が耳へ篤と囁き。喜助成程這奴は尤じや。そんなら蛇六。蛇六おりや奥へ往
 て待つて居る程に。工合よく遣らんせや。喜助合點じや。蛇六ドリヤ奥へ行かふか。ト歌になる。蛇六奥へ這入る。
 喜助思案して居る。朝顔向ふより繼ぎの着物。背中に琴を背負ひ。盲の體にて杖を突き出る。跡より子供大勢。
 子供朝顔琴を弾いて聞しや。朝顔ハイ。貴方がたは此邊りの。旦那様方の御子達でムりまするか。向ふの藤
 屋様へ參りましたら。引いて聞せませふ。ト云ひ。本舞臺へ来る。喜助是を見て。喜助ヲ、朝顔か。好い所へ好ふ
 來たなア。朝顔是は喜助様でムりまするか。喜助ヲ、喜助。サア一寸來い。ト引張つて来る。子供是
 を見て。子供ハア。喜助殿と朝顔とおきせんじやな。喜助忌々しい小悴めじや。ト追廻す。子供おきせ
 んじや。ト囃して橋懸りへ逃げて這入る。喜助悪い餓鬼等じや。ト朝顔が傍へ來てぐにや。として。時に朝
 顔。アノ子供さへ彼によふに。朝顔と喜助とは。おきせんじや。と云ふが。コリヤ何て聞いてくれぬぞいやい。聞
 えぬものじやぞよ。コリヤ幸ひ邊りに人も無し。爰で一才一ばんせいコリヤモウ堪らぬ。ト抱着くを。アレイ
 と振放し。朝顔悪い事なされませぬなア。喜助何の悪い事。大抵好い事じや無い。ト又抱着き口をすいにかゝるを
 突退けて。朝顔エ、何を爲されますぞいなア。假令どのよう云ふて下さんしても。是はつかりは。喜助殿と云ふ
 のか。朝顔アイ。何卒堪忍して下さんせいなア。喜助可いわ。爾ふ吐しや可愛さ餘つて憎さが百倍。汝が元此宿へ來

た時は。破れた。着物を着て。顛ふて居たが氣の毒さに。其着物を貸して遣つたり。小遣銀をこまましたり。もふ
 積り。六貫六百卅五文貸してあるぞよ。其錢を催促せぬのも。戀が叶へて欲しさに。夫に厭じやと吐しや。
 此方も厭じや。其着物も琴も今寄越せ。脱げ。サア脱ぎさらせやい。朝顔サア段々御尤てムりまするか。
 只今此着物を取られ琴を上ましては。如何も成ませぬわいなア。喜助サア其如何も成らぬ事。合點して引割くのじや。
 朝顔サア爾ふてムんせふけれど。何卒其處をば。喜助厭じや。何でも彼でも今引巻るのじや。朝顔申し何卒堪忍して
 下さんせいなア。喜助エ、忌々しい。厭じやと云ふに。ト朝顔を捕へて帯を取らふとする。朝顔逃廻る。此時奥より
 蛇六つかく。と出て。喜助にかゝり見事に取つて投げる。喜助顔を壓め。起きて。喜助アイタ。這奴
 じや這奴じや。えらい目に逢し居つたぞよ。蛇六逢したら如何じや。アノ爰なべらぼうめが。喜助何じやべらぼうじ
 や。儕譯を知つて取つて投たか。知らず投たか。蛇六知つて居る。づんど知つて居る。喜助知つて居ながら何故投た。
 蛇六投たが如何した。こなさんが最前から云ふて居る事は皆無理じや。喜助妙な事云ふ人じや。此首に着物を貸し。
 まだ其上にソリヤ宿賃。小遣じやと貸した錢。惣メ六貫六百三十五文あるのを。返せと云へども返さぬ故。アノ着さ
 つて居る物返せと云ふ事じや。夫が何て無理じや。蛇六夫が矢張無理じや。よふ物を思ふて見やんせ。高て彼のやう
 な乞食同然の者に貸した錢を。無理に今返せとは。コリヤ行かぬ事じや。爾ふ云はずとマア。待つて遣らんせ。
 喜助厭じや。無理でも道理でも取らにや成らぬのじや。貴様も好い加減に世話して下んせ。蛇六ム、スリヤ如何あつ
 ても。取らにや成らぬのか。喜助ヲ、取らにや聞かぬのじや。蛇六可いわ。爾ふいふ事ならソレ金壹兩遣るぞ。ト渡
 す真似する。喜助受取る眞似をする。喜助スリヤ貴様が此金壹兩出して。蛇六云懸つた俺も男じや。金受取つたら申
 分は有るまい。喜助いかにも。取る物取つたら言分は無い。蛇六申分無きや。きり。と去なんせ。喜助去んで
 こますわ。エ、忌々しい。トばた。として橋懸りへ這入る。蛇六テモ悪い奴なア。朝顔是はマア。何方かは存じ

ませぬが。只今聞ますれば。大まいの金をお取替下さりました。何とお禮を申しまして可らうやら。蛇六何のいの。其様に禮を云ふには及ばぬわいのふ。併し此宿には。彼のやうな悪者が大分有る程に。是から又先の宿へ往て働かんせ。又好い風も吹かふぞいのふ。朝顔段々御親切にお有難ふります。左様ならばモウ参じます。蛇六ア、これこれ待たんせ。又先の宿へ往ても。馴染まぬ内は物もくれまい。幸ひ爰に在合ふた金壹兩。是を持つて行かんせ。ト最前の金を出してやる。朝顔イエ。只今のお金をお取替下されましたさへ。有難いと存じますのに。猶だ其上に此金をお貰ひ申しては。餘り冥加恐ろしふります。此金はマアお預り下されませ。蛇六ハテ何の遠慮に及ぶ事を。私が商賣は錢二百か三百で。十兩や二十兩の金は直に掴まへるが。其代りまんが悪けりや直に失する。一兩や二兩の金は。惜くも何とも無い程に持つて行かんせ。ハテ悪い事は云はぬわいのふ。朝顔是はマア何とお禮を申そふやら。エ、有難ふります。蛇六何の禮には及ばぬ事。そんなら朝顔とやら。又縁有らは重ねて逢ませふ。朝顔左様ならばもふお出なされますか。蛇六随分そろく行かんせや。ア、いとしやく。ト兩人いろ捨臺詞あつて花道まで往て是をかはし。すつと本舞臺へ戻り。そつと後へ廻りて窺ふて居る。朝顔是を知らずに金を戴き懐へ入れる。朝顔ほんにマア世には彼の様な親切な人も在るものか。ほんに是を思へば國の事。以前は由ある武士の娘。今は人様の志を受けて。世を渡らねば成らぬといふは。ト少し憂にて打惚れ。エ、苦は色かへる濱の松風。ト朝顔の歌になり。朝顔そろく横手へ這入る。蛇六舌を出し前へ出て奥を招く。喜助窺ひく出て来て。喜助蛇六首尾は。蛇六上首尾く。誠らしうやつたら。えらふ悦んでけつかる。時にこなさんは此通りを。傳内様へ早ふ云ふて下さんせ。喜助ヲツト合點じや。蛇六又奥で篤りと云合そふわいの。喜助そんなら蛇六。必ずぬかるな。蛇六ソリヤ合點じや。喜助下リヤ行かふかい。ト奥へ走り這入る。蛇六味い。是からは金儲けの朝顔と来てゐる。ドリヤ奥殿にて一獻汲まふか。ト此前より關助出かけ居て。蛇六を見て走り寄り。關助乞食め。うぬ何處へうせる。ト蛇六俯りして跡を見て。蛇六エ、おりや用があつて一寸奥へ。關助、乞食の形でのかくと。奥へうせるは怪しい奴じや。蛇六エ、あた面倒な。何吐すぞい。ト撲りに懸るを立廻り有つて。取つて押へ。關助うぬまだく詮議の有る奴。サアうせい。ト引立てる。此見得宜しくチョンく道具廻る。

造り物二重舞臺正面一面の障子。都て藤屋の體。西の方に次郎左衛門衣裳袴羽織。下手の方には瀧太袴羽織にて居る。此前に宿屋の女三人。盃を取持して居る。此見得宜しく道具納る。

次郎扱々旅中の鬱散を仕つた。ナニ瀧太殿。今一獻召上られぬか。瀧太イヤ。最早先刻より數獻下された。モウ酒は皆持つて立てく。女皆々ハイ。トめいく道具を持つて三人とも奥へ這入る。瀧太時に次郎左衛門殿。御用金の預りは貴殿でゐるが。只今改めさつしやつた所が五百兩の紛失。コリヤ何とせふと思はつしやる。次郎何とせふ。たつた先刻までつた金子五百兩紛失せしが。何を申すも旅中の事。瀧太イヤサ。旅中で金子を失ひましたと。國元へ歸つて申上げては。濟ますまいぞや。次郎ソリヤ勿論の事。只某が存ずるは。外より忍び入つたる盜賊とは見えず。何れ勝手をよく存じ居る者と見えますれば。今宵の内に詮議仕らふと存じます。瀧太アノ五百兩といふ金を。今宵の内に吟味して。次郎いかにも。明朝は早々出立仕りませふ。瀧太ハテナア。ト此時後にて朝顔の歌を弾く。次郎左衛門不圖是を耳に留め不審そふにして居る。此時橋懸りより亭主徳右衛門羽織袴にておつく出て。徳右旦那様方。愈御機嫌よろしく御入遊ばされますか。徳右衛門一寸御見舞申上ます。次郎ホウ誰かと思へば徳右衛門是は叮嚀近ふく。徳右へい。次郎時に徳右衛門。早速一寸尋ねたい。今晚爰に弾いて居るアノ歌は。ありや何者が傳へしぞ。徳右へい。アノ歌でゐりますか。次郎いかにも。徳右あれは日外より。十七八な美しい盲の女子が。琴を始終持歩いて。朝顔といふ歌を弾き歩きます。皆夫を弾習ひまして流行します。其女子の名を申しまし

て。只今は朝顔くんと申します。次郎ハテ夫は珍しい。旅中の徒然其盲の女に弾すも一興。瀧太殿はへ呼ませふか。瀧太如何様ともなされませい。次郎徳右衛門其女を呼出し召れい。瀧太其様な女を見て遣るも。後生てムります。徳右左様ならば。是へ呼んで参りませふ。忠内サ、早ふく。徳右畏りました。ト橋懸りへ急ぎ這入る。次郎ハ、瀧太殿。何角斯様に其盲ても召寄せれば。物好みのやうに思召ませふが。是も旅中の鬱散てムる。瀧太中々好い鬱散てムる。ト始終ツンツンして云ふ。此時徳右衛門朝顔が手を引き出て。徳右ソレ危険い。蹴躓くまいぞ。ヲツト其處に居よ。〇へい朝顔を召連ましてムります。次郎是は太義く。苦しう無いずつと是へ出しやれ。徳右ハイハイ。ト朝顔を前へ出し。それ御家老様の前じや。お辭儀仕りませふ。ト朝顔辭儀する。次郎左衛門朝顔が顔を見て悔りし。瀧太と顔見合せ。ハツと顔を背ける。次郎ハテ見れば見る程。瓜はづれといひ縹致といひ。元からの非人とも見えぬに。其眼病はハテ不便やなア。瀧太ア、かわいそふに。其様に尋ね歩いて。ト次郎左衛門と顔見合せ。ちやつと氣色を變へ。イヤくうかへちまふ盲に。ア、どふてろくな奴てはムるまい。ト朝顔俯向きしく泣いて居る。忠内女如何じや。早ふ琴を始めぬか。朝顔アイく。ト袋より琴を出して調子合しく泣く。瀧太どうだ弾かぬか。エ、何を泣へる。貴人の前に不吉の泣面。徳右衛門連れて行け。徳右イエく。只今弾きますよふにムります。忠内サア早ふく。ト朝顔泣く。朝顔の歌を弾く。此間次郎左衛門思ひく。思入宜しく有るべし。一くさり弾ふ。忠内よふく。瀧太ハテ中々器用な奴じやなア。徳右へい。それお譽のお詞じや。有難ふ思ふたが可いぞや。次郎ハテ扱盲人に似ぬ今の一曲。其方は何處の者で。何故に斯る姿と成下つたぞ。朝顔是はマア思ひも寄らぬ恥かしき事のお尋ね。思ひ出す涙の種。私は西國のさる浪人の娘てムります。父様も都へお引越なされまして。岡崎と申す所にお住居。其時不圖見染たお人を。尋ねく。此有様。瀧太ム、其戀しいと思ふ人は。言名付の夫といふやうな事か。朝顔アイ許嫁の夫もムんしたが。瀧太ア。朝顔それが厭さに。ト瀧太大きにむつとして。瀧太ム、

許嫁の夫を嫌ひ。外の男に目を懸けるは。エ、儼も餘程淫奔者じやなア。朝顔淫奔とも義理知らずとも。思はし思へ其夫は。父様も母様も未々は。許嫁の夫を斷り云ふて。添して遣ると嫌しいお詞の効も無ふ果敢ない別れ。忠内シテ又其馴初は。朝顔アイ都の辰巳川舟に。淨りへ身を焦したる螢火の。朝顔螢を見んと母様諸共川狩の。打しも烈しき大風に。帽子散りしを受留たる小舟のお侍様。マアく此方へと船に乗せ。私が弾いた菊の枝折の歌を。ま一度弾けとのお詞故。書いて貰ひし朝顔の。歌は扇の縁の端。忠内シテ其時は如何して別れたぞ。朝顔あの、もの。其内は。はや夕日影に宇治川の。霧絶えく果敢ない別れ。其後父様母様も。國へ御歸りなさるゝ道で。明石の浦にて不思議の出會。夫婦の固めをする間も無ふ。悪者に驚かされて。遙に隔ち果敢ない別れ。傳内ム、夫からは如何したぞ。朝顔其儘國へ行くは往ても。朝夕忘れる戀しいお人。吾妻へ行くとお詞を便りに。尋ね尋ぬる其内に。明暮戀しい戀しいと。泣く目乾かぬ其内に。積りく。此様に。盲とまで成果ても。エ、忘れぬが女子の因果。今此形を其人に見せたなら。嗚や愛相も盡果てふかと。思へど思ひ切れぬ故。ト其内次郎左衛門色々憂ひ忍び泣く。控居る。せめては忘るゝよすがにもと。其時より手馴たる此妻琴。どふぞま一度御目に懸つたら。其儘死ぬる氣てムんすわいなア。わたしや逢たい。早ふ逢ふて。死たふムんすわいなア。ト大きに泣く。次郎左衛門是を聞いて。扇て顔を隠し色色思入ある。瀧太むつとして。瀧太エ、うぬが身の上の懺悔咄し。其上いたづらの泣面見たくない。サア此上は駒澤殿。金子の行衛を吟味なされぬか。朝助其盜賊の手懸り。捕へましたぞ。次郎瀧太何盜賊の手懸り捕へたとは。朝助ハツ是に。ト朝助蛇六を引立出る。瀧太。傳内是を見て悔りする。次郎ム、此者を盜賊の手懸りとは。朝助先刻より何か怪しい乞食故。引捕へて段々吟味仕りますれども。未だ口をあけませぬ。サア早く金子の行衛を吐せやい。蛇六イヤ知らぬ覺えは無いぞ。朝助覺え無いとはし太い奴の。ト刀を繩目へ入れてこじ上げる。蛇六ア、イヤ、アイタ。ト苦む。朝助サア苦しくば早く云へ。喜助イヤ其盜賊は違ひました。ト橋懸りより出て来る。朝助何盜賊

が違ふたとは。其盗賊は何處に居るぞ。喜助外でも無い爰に居る。朝顔此奴じや。徳右コリヤ〜喜助つか〜と。跡先を見て物を云へ。可愛そふに目かいても見えぬ者が。五百兩といふ大金盗んで。如何せふぞいやい。喜助旦那お前は結構な。何にも御存じ無い依つてじや。今私が取ましたと。頼術をあけさします。サアコリヤ朝顔。五百兩の金は何處へやつた。有體に吐せ。アサ吐せやい。トいろ〜振廻す。朝顔滅相な事仰しやりませ。女子の私が。其様な大金取まして。喜助ヤイ〜吐すなやい〜。其又覺えの無い者が。最前ちらりと見て置いた此金は。ト朝顔の懐へ手を差込み最前の壹兩の小判を引出す。朝顔夫はと寄るを蹴飛ばし。コリヤこれ僅た壹兩なれど。極印はお尋ねの。丸の中に花の字。スリヤうぬが盗んだのに相違有るまいがな。ト朝顔泣く。徳右コリヤ朝顔。泣いて居ては事が分らぬ。如何して其金を持つて居るぞ。言譯が有るなら早ふせい〜。トいろ〜あせる。次郎左衛門こなし有り。朝顔サア此金は。最前喜助様に借つた金を返し。猶だ其上に此壹兩を下さんした。其お方たつた今。其處にお聲が致しましてムんす。徳右ム、聲がしたとは。ト邊り見廻し。ア、蛇六汝か。蛇六滅相な。乞食の私が滅相な。朝顔アレ〜あのお方が。下さんしたのでムんす〜。蛇六ヤイ〜。十方も無い事を云出すがな。乞食の俺が如何して。汝に壹兩といふ大金を遣るもので。エ、好い加減な事吐すなやい。朝顔イエ〜夫でもお前でムんした〜。蛇六イヤ知らぬぞ〜。とんと知らぬぞ。ト朝顔わつと泣入る。徳右衛門あたまを掻いて居て。喜助なんと旦那御覽じたか。皆様面に似合はぬ悪いげん才なア。徳右傳内。あの女に繩を打ちやれ。傳内ハツ。とつか〜と下りて朝顔を捕つたと仰山に繩を懸け引裾をる。徳右衛門きよろ〜として寄らふとする。喜助隔てる。徳太其奴吟味の有る奴。庭前へ引据えい。次郎イヤ爾ふは成ますまい。徳太駒澤殿科人の吟味を成らぬとは。何故成ませぬ。次郎さればサ。元金の紛失は拙者が預り。さすれば吟味は某が致す筈。徳太イヤサ斯様に致すも。朋友の。貴殿が難義救はん爲。次郎夫は千萬。添ふはムるが。まさかの時は某が腹一ツ。貴殿の腹は借申さぬ。徳太ム、スリヤ女の事は悪も角も。アノ乞食の吟味は拙者が仕る。次郎ソリヤ兎も角も。徳太傳内。喜助とやら。其奴殿前へ引裾をる。傳内ハツ並たよ。ト西の方より蛇六を引立て橋懸りへ這入る。此時夜半の鐘鳴る。忠内アリヤ殿前夜半の鐘。御兩人様も。暫くお寝みなされませふ。次郎いかさま左様仕らふ。ナニ徳右衛門。其女を其方へ預け置けぞ。徳右スリヤ朝顔を私めに。次郎いかにも。徳右しつかりと預りました。次郎ム、ト瀧太を見て。イザ瀧太殿。徳太まづ〜。ト歌になり。兩人會釋して瀧太は奥へ忠吾を連れて。次郎左衛門は東障子家體へ這入る。朝顔矢張泣いて居る。徳右サアこいつは詰らぬものになつて来たわい。可愛そふに此小脇を酷たらしふ縛り居つた。ひどふ痛みはせぬかよ。アノ見れば瀧更盗み騙りを仕そふな女子じや無いのに。コリヤ喜助めと蛇六めが仕事じやわい。コリヤ朝顔何も案じる事は無いぞよ。氣を丈夫に持つて居よ。朝顔徳右衛門様。エ、よふ云ふて下さんした。お嬉しうムります〜。國を出ました其日より。幾難難の其中で。酷い人は山々なれど。貴方のやうに御親切に仰しやつて下さりますお方はムりませぬ。此様に難致しますも。戀しい夫に逢たいばかり。假令此儘逢はずに死しても。申し貴方の御恩は。忘れは致しませぬわいなア。わたしや忘れは致しませぬ。ト大に泣く。徳右ヲ、道理じや尤じや。必ずくひ〜思ふなよ。纏て添れる時節があらふぞいやい。朝顔イエ〜兩親に不幸にして。跡の嘆きも顧ず。忍んで出た淫奔者。どうて恚なる因果でムんせふ。夫につきても戀しい夫。嬉しいは貴方のお情。此上にどのよふな。苦い辛い目を見る事は厭はねど。貴方がたまで御難儀を。懸まするが悲しうムんす。わたしやいつそ。死んで了ひとムんすわいなア。徳右エ、種々の事云出して。俺までを泣すわいのふ。ト涙を拂ひ〜。併し必ず短氣を出すまいぞよ。今駒澤様か此徳右衛門に。心ありげに御預けなされたが。まだも樂み。どふぞお頼み申して。其繩を赦して貰ふて遣らふ程に。必ずきなく〜思ふまいぞ。ア、長生すれば。いろ〜の愛目を見る事じやなア。トいろ〜介抱する。是にてチョン〜返し道具廻る。

が違ふたとは。其盗賊は何處に居るぞ。喜助外でも無い爰に居る。朝顔此奴じや。徳右コリヤ〜喜助つか〜と。跡先を見て物を云へ。可愛そふに目かいても見えぬ者が。五百兩といふ大金盗んで。如何せふぞいやい。喜助旦那お前は結構な。何にも御存じ無い依つてじや。今私が取ましたと。頼術をあけさします。サアコリヤ朝顔。五百兩の金は何處へやつた。有體に吐せ。アサ吐せやい。トいろ〜振廻す。朝顔滅相な事仰しやりませ。女子の私が。其様な大金取まして。喜助ヤイ〜吐すなやい〜。其又覺えの無い者が。最前ちらりと見て置いた此金は。ト朝顔の懐へ手を差込み最前の壹兩の小判を引出す。朝顔夫はと寄るを蹴飛ばし。コリヤこれ僅た壹兩なれど。極印はお尋ねの。丸の中に花の字。スリヤうぬが盗んだのに相違有るまいがな。ト朝顔泣く。徳右コリヤ朝顔。泣いて居ては事が分らぬ。如何して其金を持つて居るぞ。言譯が有るなら早ふせい〜。トいろ〜あせる。次郎左衛門こなし有り。朝顔サア此金は。最前喜助様に借つた金を返し。猶だ其上に此壹兩を下さんした。其お方たつた今。其處にお聲が致しましてムんす。徳右ム、聲がしたとは。ト邊り見廻し。ア、蛇六汝か。蛇六滅相な。乞食の私が滅相な。朝顔アレ〜あのお方が。下さんしたのでムんす〜。蛇六ヤイ〜。十方も無い事を云出すがな。乞食の俺が如何して。汝に壹兩といふ大金を遣るもので。エ、好い加減な事吐すなやい。朝顔イエ〜夫でもお前でムんした〜。蛇六イヤ知らぬぞ〜。とんと知らぬぞ。ト朝顔わつと泣入る。徳右衛門あたまを掻いて居て。喜助なんと旦那御覽じたか。皆様面に似合はぬ悪いげん才なア。徳右傳内。あの女に繩を打ちやれ。傳内ハツ。とつか〜と下りて朝顔を捕つたと仰山に繩を懸け引裾をる。徳右衛門きよろ〜として寄らふとする。喜助隔てる。徳太其奴吟味の有る奴。庭前へ引据えい。次郎イヤ爾ふは成ますまい。徳太駒澤殿科人の吟味を成らぬとは。何故成ませぬ。次郎さればサ。元金の紛失は拙者が預り。さすれば吟味は某が致す筈。徳太イヤサ斯様に致すも。朋友の。貴殿が難義救はん爲。次郎夫は千萬。添ふはムるが。まさかの時は某が腹一ツ。貴殿の腹は借申さぬ。徳太ム、スリヤ女の事は悪も角も。アノ乞食の吟味は拙者が仕る。次郎ソリヤ兎も角も。徳太傳内。喜助とやら。其奴殿前へ引裾をる。傳内ハツ並たよ。ト西の方より蛇六を引立て橋懸りへ這入る。此時夜半の鐘鳴る。忠内アリヤ殿前夜半の鐘。御兩人様も。暫くお寝みなされませふ。次郎いかさま左様仕らふ。ナニ徳右衛門。其女を其方へ預け置けぞ。徳右スリヤ朝顔を私めに。次郎いかにも。徳右しつかりと預りました。次郎ム、ト瀧太を見て。イザ瀧太殿。徳太まづ〜。ト歌になり。兩人會釋して瀧太は奥へ忠吾を連れて。次郎左衛門は東障子家體へ這入る。朝顔矢張泣いて居る。徳右サアこいつは詰らぬものになつて来たわい。可愛そふに此小脇を酷たらしふ縛り居つた。ひどふ痛みはせぬかよ。アノ見れば瀧更盗み騙りを仕そふな女子じや無いのに。コリヤ喜助めと蛇六めが仕事じやわい。コリヤ朝顔何も案じる事は無いぞよ。氣を丈夫に持つて居よ。朝顔徳右衛門様。エ、よふ云ふて下さんした。お嬉しうムります〜。國を出ました其日より。幾難難の其中で。酷い人は山々なれど。貴方のやうに御親切に仰しやつて下さりますお方はムりませぬ。此様に難致しますも。戀しい夫に逢たいばかり。假令此儘逢はずに死しても。申し貴方の御恩は。忘れは致しませぬわいなア。わたしや忘れは致しませぬ。ト大に泣く。徳右ヲ、道理じや尤じや。必ずくひ〜思ふなよ。纏て添れる時節があらふぞいやい。朝顔イエ〜兩親に不幸にして。跡の嘆きも顧ず。忍んで出た淫奔者。どうて恚なる因果でムんせふ。夫につきても戀しい夫。嬉しいは貴方のお情。此上にどのよふな。苦い辛い目を見る事は厭はねど。貴方がたまで御難儀を。懸まするが悲しうムんす。わたしやいつそ。死んで了ひとムんすわいなア。徳右エ、種々の事云出して。俺までを泣すわいのふ。ト涙を拂ひ〜。併し必ず短氣を出すまいぞよ。今駒澤様か此徳右衛門に。心ありげに御預けなされたが。まだも樂み。どふぞお頼み申して。其繩を赦して貰ふて遣らふ程に。必ずきなく〜思ふまいぞ。ア、長生すれば。いろ〜の愛目を見る事じやなア。トいろ〜介抱する。是にてチョン〜返し道具廻る。

造り物二間の二重舞臺。東の方黒塗障子家體。西の方折廻り障子家體。正面は壁にて是に掛物掛けてある。此東に釣花生に花生けてある。此傍に次郎左衛門袴羽織にて真盆を控へ煙草を呑んで居る。此見得宜しく道具納る。次郎君が一夜の情に依つて。妾が百年の契りを極むる。今思ひ寄らぬ深雪殿のアノ有様。明石の浦にて不慮に別れしが。我を尋ねて彼の様に。盲の乞食とまで成下るとは。エ、下便千萬。併し最前聞けば。言名付ある身とな。夫とも知らずに夫婦の契約も。ハテ是非も無い。ト此時おいく。おいの。おたみ西の方より出て。いく申し旦那様。お淋しうムりませうなふ。いのチトおみ足ても。次郎ヲ、いや／＼夫には及ばぬ。早く休みやれ。たみ左様ならば御機嫌宜しう。いく又今夜も獨り寝せうか。ト西の障子家體へ這入る。橋懸りより徳右衛門おづく／＼出で。徳右衛門家老様。是にお出なされますか。次郎ホ、ウ誰かと思へば徳右衛門。御自分はまだ休みやらぬか。徳右へイ御意でムります。イヤ申し只今徳右衛門めが上りましたは。貴方様に一ツのお願ひ。次郎ム、改めて願ひとは。徳右外の義でもムりませぬが。アノ朝顔の事でムります。アリヤ中々盗み騙りするやうな。悪い奴じやムりませぬ。ソリヤ私めがよぶ存じて居ます。それに時の災難故に。アノ細目。腕を高手小手。餘り見る目が可愛さに。どふぞ成ませふ事ならば。せめてアノ細目だけといてやりたさ。其代り徳右衛門。屹度傍に番を致します。御願ひと申しますは此事ばかり。何卒お聞届けなされて下さりませふならば。有難ふムります。次郎ホ、ウ何事かと存じたら。朝顔が事か。徳右何卒細目の御免をば。次郎サア夫は此方から許すとは云れねど。其方が心入れてナソレ。如何様とも取計ふて遣はせい。徳右成程。スリヤ私めが取計らひで。次郎イヤモ解きなりとほどきなりと。其方に預けたれば如何様とも。徳右エ、有難ふムります。ト次郎左衛門大に感心して。次郎徳右衛門其方は。斯様な商賣をするに似合はぬ。ハテ頼母しい者じやなア。夫につき某も。其方へチト頼みたい事があるが。何と聞いてはくれまいか。徳右これは／＼改りましたるお話し。如何様な儀かは存じませぬ。身に叶ひました事なれば。次郎サア斯様に申せば何と思ふかは知らねども。某もアノ朝顔は。不便な者じやと思ふ故。頼む只今都合せある眼薬。是は眼の御薬にて。頼む人には手に入り難き御薬。此薬を用ひたならば。彼の眼病の治するまいものでも無い故。どうぞ此目薬を朝顔に遣したいたが。何と遣つてはくれまいか。ト懐中より取出し。徳右是は何事かと存じましたれば。有難いお薬を下されませふとな。ア、朝顔めはいかい仕合者でムります。左様ならば此御薬を。次郎何卒やつて下されい。ト徳右衛門に渡す。徳右衛門是を取つて。徳右エ、有難ふムります。○夜の更まするに。種々の事を申上りました。もふお休みなされませい。次郎ヲ、身も休もふ。徳右衛門其方も休みやれ。徳右左様ならば御家老様。ア、花は櫻木人は武士。次郎イヤ此方より御身が親切。ア、町人には頼母しい。明朝逢ませふ。徳右へイ、／＼。ト歌になり兩人こなし有つて。徳右衛門は橋懸りへ這入る。次郎左衛門は東障子家體へ這入る。跡へ蛇六橋懸りより伺ひ／＼出で。蛇六百五十兩の金は。此座敷の釣花生に。其花生は。ときよ／＼見て居る。次郎左衛門障子を開き是を窺ひ居る。蛇六花生を見つけて。ヲ爰に在します。釣花生に四百五十兩。エ、忝い。ト取に行かふとする。此時喜助橋懸りより走出て。是を見て恟りして。喜助其花生をわりや如何するぞ。ト行かふとするを執まへる。蛇六振切つて行くをやるまいと揉合ふ。此時ジャン／＼と明六ツの鐘鳴る。奥より瀧太。次郎左衛門。忠吾。傳内旅姿にて出て来て。瀧太最早曉六ツ。イザ出立仕るふか。次郎いかにも出立仕るでムりませふ。瀧太シテ五百兩の金子は。相知れましたか。次郎いかにも只今吟味仕ります。瀧太アノ今出立といふ此期に及んで。次郎只今取出します。即ち四百五十兩此花生に。ト花生を叩落す。中より金の包出る。傳内恟りする。蛇六喜助夫と行かふとする。徳右衛門は喜助を突廻し。忠吾は下りて蛇六を突廻す。次郎ソレ忠吾。其金を改めて見やれ。忠吾ハツ。ト金を数んで見て。即ち是に四百五十兩ムります。瀧太シテ残り五十兩。次郎イヤ残りの五十兩は。傳内殿のお働き。傳内ヤア。ト傳内きつくり。次郎段々御苦勞千萬。傳内ム、ト包を抛出す。忠吾取つて數へて見て。忠吾是に則ち五十兩の内壹兩不足。ト此前より關助出かけ居る。此

造り物二間の二重舞臺。東の方黒塗障子家體。西の方折廻り障子家體。正面は壁にて是に掛物掛けてある。此東に釣花生に花生けてある。此傍に次郎左衛門袴羽織にて真盆を控へ煙草を呑んで居る。此見得宜しく道具納る。次郎君が一夜の情に依つて。妾が百年の契りを極むる。今思ひ寄らぬ深雪殿のアノ有様。明石の浦にて不慮に別れしが。我を尋ねて彼の様に。盲の乞食とまで成下るとは。エ、下便千萬。併し最前聞けば。言名付ある身とな。夫とも知らずに夫婦の契約も。ハテ是非も無い。ト此時おいく。おいの。おたみ西の方より出て。いく申し旦那様。お淋しうムりませうなふ。いのチトおみ足ても。次郎ヲ、いや／＼夫には及ばぬ。早く休みやれ。たみ左様ならば御機嫌宜しう。いく又今夜も獨り寝せうか。ト西の障子家體へ這入る。橋懸りより徳右衛門おづく／＼出で。徳右衛門家老様。是にお出なされますか。次郎ホ、ウ誰かと思へば徳右衛門。御自分はまだ休みやらぬか。徳右へイ御意でムります。イヤ申し只今徳右衛門めが上りましたは。貴方様に一ツのお願ひ。次郎ム、改めて願ひとは。徳右外の義でもムりませぬが。アノ朝顔の事でムります。アリヤ中々盗み騙りするやうな。悪い奴じやムりませぬ。ソリヤ私めがよぶ存じて居ます。それに時の災難故に。アノ細目。腕を高手小手。餘り見る目が可愛さに。どふぞ成ませふ事ならば。せめてアノ細目だけといてやりたさ。其代り徳右衛門。屹度傍に番を致します。御願ひと申しますは此事ばかり。何卒お聞届けなされて下さりませふならば。有難ふムります。次郎ホ、ウ何事かと存じたら。朝顔が事か。徳右何卒細目の御免をば。次郎サア夫は此方から許すとは云れねど。其方が心入れてナソレ。如何様とも取計ふて遣はせい。徳右成程。スリヤ私めが取計らひで。次郎イヤモ解きなりとほどきなりと。其方に預けたれば如何様とも。徳右エ、有難ふムります。ト次郎左衛門大に感心して。次郎徳右衛門其方は。斯様な商賣をするに似合はぬ。ハテ頼母しい者じやなア。夫につき某も。其方へチト頼みたい事があるが。何と聞いてはくれまいか。徳右これは／＼改りましたるお話し。如何様な儀かは存じませぬ。身に叶ひました事なれば。次郎サア斯様に申せば何と思ふかは知らねども。某もアノ朝顔は。不便な者じやと思ふ故。頼む只今都合せある眼薬。是は眼の御薬にて。頼む人には手に入り難き御薬。此薬を用ひたならば。彼の眼病の治するまいものでも無い故。どうぞ此目薬を朝顔に遣したいたが。何と遣つてはくれまいか。ト懐中より取出し。徳右是は何事かと存じましたれば。有難いお薬を下されませふとな。ア、朝顔めはいかい仕合者でムります。左様ならば此御薬を。次郎何卒やつて下されい。ト徳右衛門に渡す。徳右衛門是を取つて。徳右エ、有難ふムります。○夜の更まするに。種々の事を申上りました。もふお休みなされませい。次郎ヲ、身も休もふ。徳右衛門其方も休みやれ。徳右左様ならば御家老様。ア、花は櫻木人は武士。次郎イヤ此方より御身が親切。ア、町人には頼母しい。明朝逢ませふ。徳右へイ、／＼。ト歌になり兩人こなし有つて。徳右衛門は橋懸りへ這入る。次郎左衛門は東障子家體へ這入る。跡へ蛇六橋懸りより伺ひ／＼出で。蛇六百五十兩の金は。此座敷の釣花生に。其花生は。ときよ／＼見て居る。次郎左衛門障子を開き是を窺ひ居る。蛇六花生を見つけて。ヲ爰に在します。釣花生に四百五十兩。エ、忝い。ト取に行かふとする。此時喜助橋懸りより走出て。是を見て恟りして。喜助其花生をわりや如何するぞ。ト行かふとするを執まへる。蛇六振切つて行くをやるまいと揉合ふ。此時ジャン／＼と明六ツの鐘鳴る。奥より瀧太。次郎左衛門。忠吾。傳内旅姿にて出て来て。瀧太最早曉六ツ。イザ出立仕るふか。次郎いかにも出立仕るでムりませふ。瀧太シテ五百兩の金子は。相知れましたか。次郎いかにも只今吟味仕ります。瀧太アノ今出立といふ此期に及んで。次郎只今取出します。即ち四百五十兩此花生に。ト花生を叩落す。中より金の包出る。傳内恟りする。蛇六喜助夫と行かふとする。徳右衛門は喜助を突廻し。忠吾は下りて蛇六を突廻す。次郎ソレ忠吾。其金を改めて見やれ。忠吾ハツ。ト金を数んで見て。即ち是に四百五十兩ムります。瀧太シテ残り五十兩。次郎イヤ残りの五十兩は。傳内殿のお働き。傳内ヤア。ト傳内きつくり。次郎段々御苦勞千萬。傳内ム、ト包を抛出す。忠吾取つて數へて見て。忠吾是に則ち五十兩の内壹兩不足。ト此前より關助出かけ居る。此

時つか／＼と走出て。喜助が懐中より壹兩を引出し。關助爰に壹兩。是て都合五百兩。ト揃へて次郎左衛門に渡す。次郎五百兩のいんじゆ揃ふ上は直様出立。扱々夜前より段々の御心配千萬忝い。ト傳内蛇六いろ／＼云はふとする。喜助むしやくしや腹にて。喜助エ、忌々しい。此上は朝顔めが着物を引剥いて。算用してこまそふ。ト行かふとする。を徳右衛門引廻し。徳右其壹兩は返濟するわ。取おろう。ト打付ける。喜助是を不承々々に取り。金を返す上は。朝顔に申分は有るまいがな。喜助エ、これ主と病には勝れぬ。忌々しい此金で。丁半なとくんでこまそふ。トぼやき／＼橋懸りへ這入る。と雨車となる故次郎左衛門空を眺め。次郎ホ、ウ是は俄に雨と見える。ソレ關助。供の用意を申付けい。早く／＼。關助心得ました。ト橋懸りへ走り這入る。瀧太此様子では。大井川など留らば大きな手間取。一時も早く急ぎませふ。ト皆々雨合羽を着る。此時乗物二挺皆々雨具にて昇いて出る。瀧太まんがちに先へ乗り。川留にならぬ先へ參る。御免下さりませふ。家來ども急げ／＼。乗物皆ハツ。ト向ふへ走り這入る。次郎左衛門は優々と乗物に乗り戸を明け。次郎ナニ徳右衛門。夜前より段々世話で有つた。縁あらば又重ねて逢はふ。随分堅固で。徳右是は／＼有難いお詞。貴方様にも。随分御機嫌宜しう。ト次郎左衛門懐中より扇を取出し。次郎徳右衛門邪魔ながら。先刻の朝顔に此扇子。又金子五十兩を遣つてくりやれ。是は琴を弾いたる纏頭。届けてくりやれ。ト渡す。徳右衛門取つて。徳右慥に渡しますでムりまする。次郎さらば乗物急げ。ト乗物花道へ走り這入る。跡より忠告。傳内續いて急ぎ走り行く。跡より關助笠を横に冠つて走出て。關助是は後れたそふな。徳右衛門か達者で居やれ。ト捨臺詞にて向ふへ走り行く。橋懸りより朝顔探り／＼出て。朝顔申し／＼徳右衛門様。目薬を下さりました御家老様は。モウお立なされましたかへ。徳右ヲ、いんまお立なされたわいのふ。夫に御家老様が。此扇と金五十兩は。最前琴を弾いた纏頭に遣つてくれと仰しやつて置いて。お出なさつたぞや。ト朝顔に渡す。不思議そふに探つて。朝顔エ、申し徳右衛門様。見ず知らずの御家老様が。此マアお金を下さりまするやうはムりませぬが。徳右ム、云やれば那様ものじや。ト扇を見て。此扇も大分採なされた扇。ム、仰しや。書いてある。皆は朝顔。裏に何れや○の影の朝顔に。照す日影のつれなさに。あはれ一村雨のばら／＼と降れかし。ト朝顔悔りして。朝顔エ、／＼。徳右待ちやム。宮城阿曾次郎事駒澤次郎左衛門。ト朝顔大きに悔りしてどつさりへたる。朝顔エ、／＼。そんなら阿曾次郎様で有つたか。道理でお聲が似たと思ふた。エ、／＼遅かつた／＼。コレ申し徳右衛門様。阿曾次郎様じや／＼。徳右衛門様。阿曾次郎様じや／＼。エ、阿曾次郎様／＼。ヲ、イ／＼。ト立つたり居たりうろ／＼する。徳右衛門も立つたり居たりして。徳右阿曾次郎じや／＼とは何の事じや。朝顔私が豫て逢たい逢たいと申しますは。此扇に書いてある阿曾次郎様の事でムりますわいなア。徳右ヤア／＼。そんなら其方の戀人じやあつたか。シテ／＼其方は何人じやぞ。朝顔イヤ申し徳右衛門様。豫て私を御深切になされておくれなさりまするが。今は何を隠しませふ。私は菊池家の武士。秋月弓之助の娘でムりますわいなア。徳右ヤアそんなら秋月様の嬢であつたか。朝顔ハイ娘の深雪と申します者でムります。ト始終せき込んで云ふ。咄しの内に帯締たり色々身拵へする。徳右ハア知らぬ事とて段々失禮。私は御家に勤め居ました。三平と申す者でムります。朝顔ヤア何と仰しやります。徳右エ、マア這樣事云ふて居ては埒が明かぬ。サアお先へお出なされませ。朝顔ハイ／＼。ヲ、イ／＼。ト花道へこけつ轉びつ走り這入る。徳右衛門も行かうとするを。橋懸りより喜助出て行かふとする。徳右衛門引退け／＼色々採合ふ。此間徳右衛門色々採合ひ。ト喜助をボンとあて。喜助たち／＼としてベツたりへたる。徳右衛門り、しく向ふへ走り這入る。返し幕半幕にて直に引返し。

造り物向ふ一面奥深く大井川の體。幕の内より關助大勢の川越を相手に色々大立ある。よき所にて此川中を臺越にて。次郎左衛門瀧太通り東の方へ這入る。直に又此一段向ふに子供大勢臺越旅の形にて通りある。此間關助い

ろいろ大立あつて。ト、川へ飛込む。川越も飛込み東の方へ這入る。早太鼓打ち此時朝顔花道より走出て。朝顔ヲ、ひどふ水音が聞える。爰がモウ大井川じやそふな。何卒誰ぞに渡して貰ひたいものじやが。ト這樣事云ひ云ひ本舞臺へ来る。此時内より。内より川が止つた。ト朝顔大に恠り。朝顔ヤア、川が止つた。川が止つて如何せふぞ。コリヤマア如何せふぞいなア。折角追へて来る事は來ても。川が止つたからは。又何時逢るゝ事じややらエ、ト。身悶えて泣く。此時徳右衛門向ふより走來て。徳右深雪様是に御座りまするか。朝顔徳右衛門。川が止つたといなア。モウ恠なる程の不仕合なれば。とても生きて逢るゝ事は有るまい。爾ふじや。ト川へ飛込まふとする。徳右衛門大きに恠りし抱留める。朝顔うんと後へ反ろふとするを。徳右衛門下ツコイと抱留める。此見得宜しく。

幕

大 結

造り物向ふ一面の二重舞臺。眞中くわとう口。東の方折廻り障子家體。西の方へかゝり。都て大内之助が本國の館の體。幕に内より正面の後室雲井の前。其次に田熊大學衣 裳 袴。下座の方に家老玄蕃之助衣 裳 袴。橋懸りの方に津輕傳内。森山玄蕃控へ。山伏雷光院細付にて侍一人腰繩を取つて居る。都て此模様よく序の舞にて幕開く。

傳内。森山サア 有やうに白狀せい。雷光イ、ヤ知らぬ。どのやうに問ふても知らぬわい。森山イ、ヤ知らぬとは云さぬ。武將調伏の入形。願書をうづみしは大内之助。駒澤次郎左衛門。さるに依つて大内之助殿。次郎左衛門。兩人とも押籠置いたれども。願書されて調伏したは。雷光院其方て有らふがな。雷光イ、ヤ知らぬわい。又調伏やらがふぶくや

ら。願書事を爲そふな山伏じやごんせぬ。知らぬ。知らぬわいの。雷光其方が知らぬと云ふても事なまらぬ。其方が強つて知らぬと抗辯へば。差當つて大内之助が身の難義。雷光難義をしやうが筋斗返りしやうが。知らぬ事じや依つて知らぬじや。玄蕃憎い奴の。玄蕃傳内。其奴を責めて白狀させい。早く。ト責にかゝる。此時侍一人走出て。侍ハツ申上ます。只今菊池の家來秋月弓之助と申す者。姫君を伴ひ只今押して御嫁入でまします。玄蕃此方より案内も無きに。押しての興入。大奥其上秋月弓之助といふ奴。以ての外慮外者。其儘に。玄大追跡せ。待ハツ。ト走り這入る。此間山伏を兩人していろ。責める。雷光ア、痛い。何ほふ責めても。痛い。と云ふより外に。云ふ事が無いぞ。ト又侍走り出て。兩人ヤアし太い奴の。侍如何體に留めましても聞入れず。押して只今參上致されます。雲井折の悪い姫の興入。玄蕃可くムります。拙者が可く計らひます。ト又序の舞になる。青柳姫先へ。跡より弓之助衣 裳 袴にて刀箱を携へ。其跡より傳藏が妻。子供の手を引いて付添出て。花道よき所に。弓之姫君様。斯程の道程無お疲れ。最早あれが大内之助殿の館でムります。サ、お越なされませふ。ト此一件本舞臺へ來て二重舞臺へ上り。姫は上手。弓之助は下。傳藏女房子供次へ直る。雲井姫の興入とあつて。弓之助殿には御苦勞千萬。弓之イヤ。役目なればさのみ太儀にも存じませぬ。當家へ此方の姫君を呼迎ゆると云つしやつてより餘程延引。夫故音ないを待かね。ト姫云ふなど仕方する。イヤサ姫君。何も恥かしい事はムらぬ。嫁入する時分に。出來ぬ程待遠なものはムらぬ。そこで今日は是非とも夫婦の交りをさせませふ爲に。御同道申上げた。雲井いかさま是は御尤千萬。興入を召るゝならば。朝日丸の劍御持參召れたてムらふな。弓之いかにも。朝日丸の御劍は是にムる。大奥然らば其朝日丸を一寸拜見。ト寄ろふとするを拂退け。弓之イヤ夫婦の盃の相濟むまでは。迂濶に見せる事罷成らぬ。玄蕃イヤ。大學様。強ひて御覽なさるゝには及びませぬ義でムるハ、ハ、ハ。弓之ハアそちや此方の館に。中間の奉公致して居つた傳藏では無いか。ハテ強い出世を致したなア。玄蕃弓之助殿。良禽は木をえらんで

棲むと。眼の明かざる菊池家を見放し。當家へ参りし所。後室様のお見出しに預り。只今にては大老職。へ、何と出世てムらふがな。弓之イヤ、中々きやうといものじや。當家は御目利がひどふる。ナニ關助。關助ネイ。ト關助膝行出る。弓之え何と見たか。大内家は家來が拂底と見える。あれを見よ。此方の足輕を取立て。大老職ハ、ハ、ハ。臍が捻れるては無いかい。ト支蕃之助むつとして又こなし有つて。支蕃それに居るは。駒澤次郎左衛門が下部關助では無いか。うぬは何故秋月殿の方へ参つた。憎い奴の。弓之イヤ、御大老。左様に呵らつしやるな。此間彼奴が此方へ参つて。此方の屋敷は。足輕を取立て、大老にする程の不目利。良禽は木をえらんで棲むと何卒下郎めは貴方様に御奉公が致したいと。段々の頼み故。召抱へ遣したのでムるてハ、ハ、ハ。雷光サア其方の臺詞は跡へ廻して。此山伏の吟味から先へして下さんせ。支蕃暫く相待居れ。懸て片付けてくれ。雷光ヲ、そんならマア待つてやるわい。トしやうらく組此時橋懸りより手負の仕出しを肩にかけ。若い者を引出て町人大勢付添出る。町大勢ハイ、ハイ。殿様に急のお願ひがムります。町大勢、痛い。死ぬる。町大勢は多葉粉入屋てムります。今日此者若い者を呵ります所。親方に口答へする。剩へ親方に斷庖刀を打付まして。命の程も危ふムります。若者ア、これ。好い加減な事云はつしやれ。おりや何にも別に。町大勢これ云やんないのふ。知つて居るわいのふ。若者イヤ知らぬ。町大勢知つて居るぞ。侍アア罵しい町人め等。今日は御前にお取込の事ある故。願ひは叶はぬぞ。名主へイ夫は詰らぬ。侍などとは何の痴言。下りをらふ。弓之ハ、ハ、ハ、關助見たか。關助ネイ。見ましてムります。弓之扱々氣の毒千萬。某が参つて居るを狼狽へて。取込が有る故今日は願ひが叶はぬと。急の願ひが捌けぬとは。扱々不便な奴では無いかい。ハ、ハ、ハ。支蕃イヤ待て。其願ひ捌いてくれ。町大勢ハイ、ハイ。夫は有難うムります。ソレ御家老様がお捌き下さる程に。氣を確かに持たんせ。支蕃其親方に疵を付たる若者。是へ出ませ。若者ハイ、ハイ。私てムります。支蕃わりや幾歳の時から頼公して。今年

何歳になるぞ。若者ハイ、九ツの歳から参りました。今年廿三になり。支蕃其間仕職も罷りたか。若者へイ、イ。既々と覺えまして。只今では一人前の事は随分致します。支蕃不届な奴の。幼少より世話になりし親方の。恩を忘れ手向ひする。剩へ疵を負せる人非人。若者へイ。夫でも餘り親方がい。無理を吐す依つてツイ切りました。支蕃また、不届な奴。コリヤ、町人ども。此若い者は成敗に行ふから。其手負を随分いたはり。今日は下れ。ハ、ハ、ハ。有難ふムります。又御家老様は格別なものじや。懸て敵は取つて下さる程に。氣を丈夫に持たつしやれ。コリヤ、扱々悪い奴じやぞ。追付其首が飛ぶぞ。ヤレ好い氣味。ト這樣事わや、云ふて。又手負を肩に懸けて橋懸りへ這入る。支蕃傳内。其奴繩を打てやい。傳内ハッ御上意。ト若い者を取つて押へ繩かける。支蕃見さつしやつたか。某が裁判恚のり通りでムる。弓之ハ、ハ、ハ、イヤけふといものじや。足輕殿中々味をやる。シタが其科人を。如何體の成敗に行ふぞ。支蕃相手が死ねば。天下の大法逆磔刑。弓之イヤ天下の大法でも。此屋敷では其政道は成るまい。支蕃政道が成らぬとは。ナ、何故に。弓之されば。主殺しを逆磔刑に行はる。菊池家の主殺しは。當家の大老。スリヤ彼も取立て。用人か奉行にでもさせたが可い。大老爾うては無いか。支蕃ム、ト吐息繼ぎ弓之助が方をきつと見る。此時傳藏女房支蕃之助を見て悔りし。女房ヤア最前から形は異れど。後付が似たと思ふたが。似たこそ道理お前は。弓之ア、これ。何を女の小差出だ。女房イ、エ夫でも。弓之ハテ扱其方が身が妾て。ハテ妾ならば妾らしう。身に引付いて居たが可い。支蕃ム、スリヤ其女は。其元の妾とな。弓之いかにも恥しながら此妾が。拙者何方へ参つても付添ます。女と申す者は。さて、倍氣深い者でムる。夫を見做ひ悴まで同じように。倍氣の腰おし付纏ふて。是には殆ど困り果まするハ、ハ、ハ。支蕃スリヤ妾に其元の小兒とな。ハテ淫奔な女。又其淫奔者を連れて歩く奴は。馬鹿でムるてなハ、ハ、ハ。雷光ヤレ、ほつと退屈したが。コリヤ如何するのじや。支蕃ハテ罵しい。ソレ雷光院も若い者も。共に暫く白洲へ引据置けい。傳。森心得ました。立とふ。ト傳

と申すか。次郎是はしたり。ト膝を叩く。瀧太身共もしたり。ト膝を叩く。弓之サア瀧太。元の名は郷助。先達て岡崎にて。朝日丸の太刀を奪ひ立退きし。みそふろうであらふ。只今此弓之助へ相渡せ。此箱へ納めて結納を取結ぶ。瀧太黙れ弓之助。朝日丸の太刀奪取つた覚えは無い。弓之イヤ覺え無いとは云さぬ。瀧太コレサ。次郎左衛門殿。只今てゐる御助力。次郎心得ました。ナニ弓之助殿。據所無く是なる瀧太殿に頼まれ。只今其元を討果す。覺悟さつしやれ。ト刀を抜いて切つてかゝる。瀧太後に力んで居る。此前より深雪探り。橋懸りより出て来て。此時無理に門口を明けて走り這入り。深雪申し。マア。待つて下さりませいなア。弓之ヤアそちや娘でないか。ム、見れば警者となりながら。爰へは如何して。深雪貴方に使はれました三平と申す者の情にて。マア。何よりは。父様に御怪儀があつては難儀。マア。待つて下さるいなア。瀧太エ、忌しい。深雪め諸共打殺すぞ。サア。早ふ助力。弓之うぬは憎い奴の。嫁許したれば。舅に抵抗する人非人。瀧太ヤア舅呼はりしやらくさい。コレサコレサ。早く助太刀。ト次郎左衛門頭掉りて刀を鞘に納め。次郎イヤ此助太刀は相成ませぬ。瀧太ム、一旦武士に詞を番ひながら成らぬとは。弓之助が怖いか恐ろしいか。但し命が惜くなつたか。次郎イヤ命も惜まず恐ろしくもムらぬが。此助太刀は成らぬ。瀧太ソリヤ又何故に。次郎されば深雪殿と許嫁なれば。弓之助殿は舅でムれば。舅に双向ふ法はムらぬ。其又非義なる助太刀は得致すまい。瀧太成程是は御尤。然らば如何仕らふぞ。次郎されば其仕様は。許嫁の縁を切ればあかの他人。さすれば助力も成る道理。併し此方から彼是とは申さぬ。夫は貴殿の胸中にあるそふな事てムらぬか。瀧太成程是も尤。拙者の胸次第で尤。ト邊りより硯箱を取つて来てさら。と去状を書いて弓之助が傍へ持行き。瀧太サア深雪が去状。是を渡すからは他人じやぞ。弓之いかに去状を受取つたれば他人でムる。瀧太他人じや。ト。ちらの方へ来て。御覽なされ。只今あの女にさつぱりと去状を遣はして。他人に相成つた。他人になるからは。助太刀なされ下さるかな。次郎いかにも縁を切つて他人になつしやつたからは。助太刀仕らふ。ト

刀の下緒にて帯をかける。瀧太後へまいりいろ。ついでせうする。次郎サア秋月殿只今御澤が計長十郎殿。さつしや。ト瀧太後より扇ぎ立てる。弓之イヤ待たつしやれ次郎左衛門殿。郷助と娘が縁の切れる上は。契約の如く。何卒。あれ程までに思ひ詰たる娘を。女房に持つて下されい。深雪エ、父様。そんなら次郎左衛門様と女夫にして下さるすかへ。エ、嬉しや。ト無性に悦ぶ。瀧太むつとする。次郎いかに瀧太殿と離縁の上は。未長く添遂ませふ。弓之コリヤ娘。女房にすると。悦べ。深雪目頃の思ひ出。何と御禮申しませふやら。エ、嬉しうムんすわいなア。ト次郎左衛門に縋着いて泣く。瀧太ヤア。こりや如何じや。今まで味方じやと思ふた貴殿が。どうか風が變つたよふな。サア助太刀は如何して下さる。助太刀。トむしやうに急いで云ふ。次郎助太刀致す所存の所。見らるる通り。あれなる深雪殿と縁を結びますれば。弓之助殿は舅。舅に向ふ双はムらぬ。瀧太それでも此方。武士と武士とが申した詞反古になるぞや。夫でも武士か侍か。次郎只今も申す通りの仕儀なれば。假令如何程に仰せられても。親同然の舅には。如何も手向は出来ませぬ。此儀は最早變替致そふ。瀧太エ、忌しい欺騙れたか。もふやけじや。ト刀を抜いて切つてかゝる。ト仕懸にて上より鴉十羽ほど飛散りカア。と泣く。是にて次郎左衛門。弓之助立廻りしい。きつとなりて。弓之ハテ怪しや。傳。聞く朝日丸の劍を抜放せば夜陰にても數多の鴉舞遊ぶと聞く。次郎今ア。刀を抜放せばあれ。あの如く飛下りたり群鴉。弓之扱は擬方無き朝日丸の名劍。瀧太何を。ト又切かかるを次郎左衛門立廻りあつてきつと留める。此時深雪四邊を眺め。深雪申し。父様。わたしや目が見えまするわいなア。弓之ナニ目が見えるとは。ト深雪を見て悔りし。ヤア。ほんにコリヤ娘が目が明いた。扱は劍の威徳にて治したるか。深雪エ、嬉しや。一生夫の顔は得見ぬかと。いくせの思ひを致しましたに。劍の威徳にて治りし眼病。次郎サア斯る奇徳のある上は。愈以て朝日丸。其劍を此方へ渡せ。瀧太何を。トかゝる。是より色々立廻りあつて。ト瀧太を取つて押へ。刀を取つて弓之助へ渡す。弓之助刀を戴き箱へ納め。弓之エ、忝い。此劍二度び。我

手に入る上は。姫君の御祝言も今宵の内。瀧太エ、忌々しい。次郎まつた此瀧太には。いろ／＼吟味の筋も有れば。此儘に引据ゑん。弓之其上にて首と胴との生別れ。次郎うせふ。ト引立てる。此見得宜しく。チョン／＼道具元へ戻る。ト奥の方より飛鳥あれい／＼と逃げて出る。跡より茶道順才可笑き風にて追へ出て捕へて。順オコレあすか殿。も應でも茶道の順才も男じゃ。立て、下され飛鳥殿。飛鳥エ、厭じゃと云ふのに。順オイヤ爾ふは云さぬ。トはだかに成りふんどしをばら／＼ひきずりて追へ廻る。此時關助。正三郎橋懸りより出来り。此體を見てそつと燭臺の火を吹消し暗がりにする。關助は合羽を被り。正三郎は羽織を被りて探合ふ。順才是を知らずに飛鳥を追へ廻る。關助順才がふんどしを執へ後へ引く。順才顔を顰め。順オハテ怪しや。今燈火が消ゆると等しく。我ふんどしを後より引張るは。狐狸の爲なるか何にもせよ。ト行かふとするを。強く引張る故。目をくる／＼として。アイタ／＼。ア、痛い。アイタ／＼。トいろ／＼腕く。關助猶きつと引張る故。順才色々可笑う腕きばつたり轉けると。奴の關助探り見て片傍へ蹴やり正三郎に探寄り。關助正三郎様。先日より段々と。後室様へ御旦那様のお願ひで。飛鳥様と夫婦となし。駒澤の跡目相續。又御旦那は御別宅との思召。癒ての内に首尾成まする間。必ず／＼短氣を御出しなされまするなや。正三何から何まで。次郎左衛門殿と其方の世話。飛鳥正三郎様と女夫にならるゝとは。エ、嬉しう存じまする。關助何彼咄しは又跡で。御兩人共に御座れ。ト二人を連れて橋懸りへ走り這入る。跡へ大學手燭を持ち支番之助と奥より出て。大學スリヤ、愈今宵の内に。大學の企。支番成就なすは今此時。此方は是より味方を集め。大内之助を始め。次郎左衛門めをば討取らつしやれい。大學心得た。ト此時臆病口より弓之助刀箱を携へ走出て。弓之助兩人が反逆の一々。鎌倉殿へ注進する待つて居ろふ。ト橋懸りへ走り這入る。兩人憚りする。此時臆病口よりズドンと鐵砲の音して。山伏鐵砲を掲げ走出て。雷光支番之助殿。支番雷光院出來した。今の筒音は俺に手答へ。

彼が持つたる朝日丸の刀を奪ひ。懸りて味方の強味。雷光然らばアノ刀箱を。支番いかにも。雷光ハッ。ト橋懸りへ走り這入る。支番ム、是も可し。イザ此上は大學殿。大學然らば支番。某は味方の催促。ト奥へ走り這入る。跡へ山伏刀箱を持ち走出て。雷光まんまと首尾よふ朝日丸の劍。イザ御受取下されませふ。ト支番之助受取つて戴き。支番年來望む朝日丸。エ、忝い。雷光拙者は是より一時も早く。ト行かふとする。支番待て。其方が心底篤と見届けたる故。預け置くべき一品有り。ト懷中より出し。是こそ當家に傳はる繼目の綸旨。疾より奪ひは置いたれど。今某が所持しては何角心懸り。是を其方に預ける間。緊りと携へ居られい。雷光スリヤ是を某が預り奉つて。支番いかにも。是より其方は味方を集めて。濱手の方より此館を押し取巻けい。雷光スリヤ是より濱手の方へ。支番いかにも。早く。雷光心得ました。ト走行く。支番跡を見送りて。支番ハテ心地好い。ト刀を杖に突き四邊を見廻す。此見得宜しくチョン／＼道具廻る。

造り物二間の間二重舞臺。折廻り障子家體。正面に大内之助。雲井の前。左右に次郎左衛門。弓之助。忠吾各りりしき形。此下手に支番之助衣裳社杯にて直り居る。此見得宜しく道具止る。

支番スリヤ弓之助。うぬは討れたとは偽りて有つたか。弓之いかにも。汝が逆意を見出さん爲。支番ム、それに又雷光院が。汝を討留めしと持來りし。此朝日丸の名劍は。次郎ホ、ウ夫も贋物。其方が所持致す繼目の綸旨を。無事に取返さん爲の計略。弓之ヤア／＼橋慶藏。繼目の綸旨を早く。慶藏ハ、ア。ト三寶に綸旨を載せて持つて出る。支番さてはうぬも廻者であつたよなア。エ、無念や口惜やナア、、、ア、、、併しながら唐土渡海の勘合の印は。某が所持致し居れば。何角と云はゞ忽ち破却。次郎湯淺勘兵衛。勘合の印を持參召れ。勘兵ハア、、、ト是も三寶に載せ持つて出る。支番憚りし。支番ヤア、、、。其勘合の印は何故手に入りしぞ。勘兵ホ、ウ先刻田熊大

學と其方が。密事の段々窺かに立聞き。築山へ馳行き。不思議に手に入る勘合の印。雲井家に仇ある支蕃之助とは偽り。大内誠は大伴が殘黨。利正軍が一子であらふがな。最早通れぬ汝が運命。次郎尋常に。皆々覺悟く。ト此間支蕃色々無念のこなしあつて。支蕃いかにも其方どもが推量の通り。利正軍が一子利當軍。父の恨を齎さん爲。假に當家へ入込み二品の寶を奪ひ。手も濡さず我獲物になさんと思ひしも。愆顯はれたる上からは。味方を集め勝負の一戦。うぬ等一々首を洗つて待つて居らふ。次郎彼等如きに詞戰ひは無益の至りソレ慶藏。勘兵衛の兩人は。組子に命じて討取せよ。早くく。兩人ハツ。ト橋懸りへ走り這入る。弓之イザ大内之助様には。何角の御用意あれ。大内孰れも來れよ。皆々まづく。ト音樂になり正面さらく。と簾下りる。此時臆病口より傳藏の女房。子供を連れ走出て。女房こちの人。傳藏殿。逢たふムんしたわいなア。支蕃ヤア夫をしながら人の妾となる淫奔女。詞を交す覺えは無いぞ。女房イエ。不義淫奔せぬ事は。此子がよう知つて居る。弓之助様が私をば引付けてのお世話。どふぞ夫に逢ふたらば。善心に立歸るよふに致せよと。連れてムんした此館。今聞けば謀叛の企との事。聞く悲しきは身を切る思ひ。何卒思ひ止つて下さんせなア。ト支蕃之助是を構はず空を眺め。支蕃ム、今宵の分星は南に方つて。實星幾々と明かに東の大星を照すは。扱は我大望の時至れり。エ、忝い。ト此時ドンチヤン遠攻になる。是を聞いてきつとなり。ハテ怪しや。あの貝鉦太鼓の音に。自然と味方を克する殺伐の聲あるは。女房お前の味方に見えたる家中の諸士は。残らず裏返り。あの遠攻は。お前一人を取巻く人数でムんすわいなア。支蕃ヤ、、、扱は我味方と思ひし者は。裏返りしかム。ト吐息つき。女房サア怒うなる上は。とても叶はぬ運命ぞと思ひ切つて。何卒本心になつて下さんせいなア。支蕃ム、アレ。今まで客星の光り明かなりしも。今又東の方大白星の光りに壓るといふはハテナア。女房申し最前。是程までに云まするに。お前は聞えませぬか。此子は可愛はムんせぬかいなア。支蕃ヤア。最前に不吉の流涙。一賦世に世に世に世に。假令味方が裏返るとも。聽る心は無い。無能なるな。女房ぞん

ならどの様に申しましたも。支蕃くどい。女房エ、是非も無い。生荷べて愛目を見んより。實達の光輝阿彌陀佛。ト子供引寄せ陶先へ差通し自分も自害する。支蕃じろりと見又空を眺め。支蕃アレ。飛星東の方より來つて。客星の前後なる官星を扱むは。エ、、、無念や口惜や。我年來の大望事成らずして。半途に敗るゝ凶事なるか。エ、殘念やなア。ト花道の方へ至り本舞臺へ戻つたり色々有つて。エ、口惜やなア。ト空を睨み詰める。女房子供を引寄せ。女房悪人の子とは生れたれど。未來は迷はず成佛したもや。親子は一世の別れと云へば。是が此世の縁の斷目か。エ、可愛や。夫一人の心から。其方まで殺さずにや成らぬかエ、。ト抱緊ながら色々苦しみはつたり轉ける。此時組子大勢四方より取巻き。組子逆賊。皆々やらぬぞ。支蕃猪小才な蛆虫め等。寄らば一々人磔うぬ。ト是より色々大立あつて。ト皆々を追驅け橋懸りへ這入る。貝鉦太鼓急しく打ちチヨンくにて黒幕落つる。ト大學着込にて槍を取り。勘兵衛と面白き大立色々有つて。ト大學を追立て橋懸りへ追へ這入る。チヨンく黒幕切落す。

造り物一面奥庭の體宜しく。真中に支蕃之助大童になり。大勢を討手に働いて居る。左に大内之助。次郎左衛門。慶藏。關助。忠吾。各りしき形にて付添出る。右に弓之助社村にて三寶に二品の寶を載せ祈請して居る。大立宜しき時分湯淺勘兵衛首を捉げ走出て。勘兵ハツ田態大學を始め。傳内大之進其外一味の奴原。悉く討取ましてムりまする。弓之ヲ、手柄く。いかに逆賊。アノ如く其方が一味の者ども討るゝ上は。次郎最早叶はぬ。尋常に。皆々覺悟く。支蕃運命盡くれば是非に及ばぬチエ、。ト刀を腹へ突立てる。次郎ホ、ウ道の勇士天晴く。此上は菊池の姫君と。殿の御祝言を整へて。お家の治り。弓之某が娘深雪と次郎左衛門殿と婚禮させ。老の樂み。大内正三郎。飛鳥を配妻し。駒澤が家名相續。

次郎當家菊池兩家の治り。大内家中一同の悦び。弓之悪は亡び善は榮ゆる天の御加護。太平の御代は萬々歳。次郎目出たい。此場はお立。ト目出たく皆々此見得宜しく打出し。

幕

傾城筑紫歌終

敵討浦朝霧

敵討浦朝霧

嫡信齋時霧

編中人名

- 一 網千右兵衛之助
- 一 眞野周作
- 一 傾城満月
- 一 傳内女房おふさ
- 一 奥方お須磨の方
- 一 清水奎之進
- 一 蟲賣露八
- 一 一子常松
- 一 腰元磯浪
- 一 同妻關屋
- 一 印南主膳
- 一 笹屋半兵衛
- 一 網千土岐之助
- 一 同娘おきよ
- 一 悪者熊鷹眼兵衛
- 一 謎坊主春雪
- 一 唐橋彈正大弼
- 一 若黨丈助
- 一 奴岩平
- 一 有田瀬平
- 一 近藤軍八
- 一 管領の使者
- 一 門番松兵衛
- 一 赤松四郎則村
- 一 川邊軍次
- 一 同娘繼橋
- 一 勅使松藤中將
- 一 其の他
- 一 永井金兵衛
- 一 管領の姫里姫
- 一 小割傳内
- 一 同母勝野
- 一 網千奴浪平
- 一 實は網千土岐之助

狂言作者 奈河晴助

口 明 人丸社の場 明石の浦の場 網干館の場

造り物。平舞臺。淺黄幕。上手。鳥居。玉垣。石段。正面より東手にあり。見付け花見幕。すべて明石人丸の社の模様。傾城待宵。桂女。歌木。十六夜。秋空。いづれも錢帯を持ち。お百度参りの體。神樂の鳴り物にて幕開く。

ト橋がかりより軍次。金兵衛。伴藏。團作。皆々衣裳羽織。侍ひの形にて出で

軍次こりやア室の津の傾城達。打揃うての百度参りとはけうといく。金兵衛の御舎弟。土岐之助さまは。傾城の満月に登り詰めてござれば。我れくもお相伴に。君達を靡かさうか。伴藏こりや面白い。ト皆々傾城に抱きつくを。振り放し。待宵アレく。向うから土岐さんが。桂女浪平どのを引き連れて。十六この人丸様の社へ。秋空御参詣な

されますわいな。軍次若殿様は粹なれども。あの奴の浪平めは。石部金吉ちや。金兵衛イカサマ。我れくが逢うては悪い。伴藏幸ひの幕の内。團作暫らくいづれかへ隠れませう。ト侍ひ四人。幕の内へ入る。トまた神樂になる。向うより土岐之助。衣裳羽織。若殿の拵らへ。浪平供して出る。よき所にて。土岐コリヤ。浪平。父上御死去の後。網干の家督は兄。右兵衛之助どのに定まり。この社へ納めある。柿本人丸の烏帽子。國次の刀。傳授の歌書に添へて。御

上使様へ差上ぐるが舊例。それゆゑ人丸の烏帽子を。神主方より受取り歸らん爲の。今日の参詣。浪平殊に今日は禁廷より。人丸の名歌。ほのくの五文字の註解とやらを致せよとの。お勅使の御入來。土岐サア。その註解を一家中に誰れあつて知る者なく幸ひ兄右兵衛之助どの。奥方。お須磨の方は。歌人の聞えあるによつて。大方勅答いたさるゝてあらうわい。浪平何は兎もあれ。若殿様には神主方へ。土岐浪平。參れ。浪平ハツ。ト本舞臺へ來ると。四人の傾城。立ち寄り。皆々土岐さん。侍ちかねたわいなア。土岐思ひがけなき傾城達。浪平大切なる参詣の道。妨げしやるな。

ト此うち。軍八。衣裳羽織にて窺ひ出で。軍八ソリヤ。ト腰かける。捕り手。バラ／＼と出で。土岐之助。浪平を取巻き。皆々やらぬぞ。浪平こりや。若殿をなんとするのぢや。軍八黙れ。浪平。お家の御家督定めに付いて。近々御上使お越しといひ。殊に今日は禁廷より。御勅使のお入りに付き。神慮をすゞしめる社に於て。不淨の女を捕へ給ふゆゑ。若殿とても容赦はならぬが。役目の表。繩打つて館へ引け。ト捕り手。兩人にかゝる。浪平。ちよつと立廻りあつて。橋がかりへ追ひ込む。ト軍八。あたりを見廻し。軍八サア。土岐之助さま。邪魔は拂ひました。トこの時。幕の内より最前の四人の侍ひ出で。皆々軍八どの。まんまと首尾よう。土岐何の事ぢややら。女皆とんと。解らぬわいなア。軍八ハテ。この近藤軍八は粹でござる。あの奴浪平め。下郎に似合はぬ堅い奴。彼奴が側に付き添ひ居ると。我れくまで樂しめぬゆゑ。神慮をすゞしめるこの社にて。不淨の女を捕へてなごは。浪平めを。遠ざける手段。ト此

うち浪平。立歸り。窺ひみて。浪平さう巧々とはゆきますまい。神慮をすゞしめるこの社にて。女を捕へ。若殿と一緒遊び狂はうとするいづれも。御大身様でも容赦はならぬ。繩打つて館へ引く。皆々ヤア。ト皆々悔り。浪平サア。斯う云うたも今の返報がへし。下郎めは粹でござります。軍八そんなら浪平。其方も。侍四我れくと同腹中か。女皆それで心が落ち付いたわいなア。ト橋がかりより神主大江。狩衣にて。下部は人丸の烏帽子の入りたる白木の箱を持たせ出で。大江。ハツ若殿土岐之助さま。これにお渡りなされますか。土岐當社の神主玉串大江。して。預け置

かる。人丸の烏帽子。持参いたされしか。大江お家の古例とあつて。御家督定めの御上使お入りの節。差上げ給ふこの烏帽子。イザ。お受取り下さりませう。ト白木の箱を渡す。待宵コレ。土岐さん。満月さんは。須磨の汐屋のほとりに待つてゐやしやんす。早う行てあげさんせいな。土岐サア。その汐屋の方へは。兄右兵衛之助どの。奥方。お須磨の方が月見の催はし。ひよつと逢うてはならぬわいなう。軍八そりやアお氣遣ひなされますな。傾城どもを殘らず海女の姿に仕立て。御勅使を饗應の爲と偽はり。土岐之助さまの御遊興はどうでござります。皆々こりや。出來まし

た。金兵差詰め若殿を。古への中納言行平といふ役割は當り前。伴藏幸ひ。爰に烏帽子もあり。ト白木の臺の烏帽子を出す。大江留めて。大江エ、滅相な。人丸の烏帽子でござるぞ。團作ハテサテ。網干家より預け置かるゝこの品を。若殿さまがお召しなされるゝに。誰れが黠の打ち手があらうぞ。ト無理に土岐之助にかむせる。土岐烏帽子を着ても。どうもこの形では。行平と見えぬわいの。伴藏差詰め神主の衣裳を。軍八此方へ暫し狩衣ぢや。ト四人して。大江の狩衣を脱がす。大江イヤモウ。この節は物騒なと承はれど。お國の若殿様が。追剝ぎをなさるゝとは思ひがけない。ト云ひ。下部を連れて逃げて入る。土岐之助に狩衣を着せる。軍八武家の姿に引替へて。殿上人の御粧ひ。女皆ほんに。お公卿さまと見えるわいなア。トこの時。橋がかりより。主膳。大勢の家來を連れて出て。主膳ソリヤ。ト土岐之助を取巻く。皆々恟りして。皆々こりや。若殿を何ゆゑの狼藉。主膳ヤア。狼藉などとは緩急至極。某は職家の雜掌。印南主膳と申す者。禁廷の御用について。筑前の國まで下向の道すがら。當國をも檢分いたすところ。武家の身としてその姿は。いづくよりの許しなるぞ。見捨て置かれぬお職家の役名。土岐イヤ。某は。お勅使様を饗應の爲のこの風俗。主膳エ、胡亂なるその云ひ譯。繩打つて連れ歸る筈なれども。當國の若殿とあるからは容赦いたす。印南主膳とある宿札のある所へ參れ。マア。それまではこの烏帽子を預かり歸る。ト土岐之助の烏帽子を取つて。主膳家來。參れ。ト家來を引連れて。走り入る。土岐大切のアノ烏帽子を。軍八ハテ。苦しうござりませぬ。高の知れた宮侍ひ。垂水の宿所へ金子を贈られなば。いつても取返さるゝ事。この儀にはお氣遣ひなく。女どもを召連れられ。若殿様には。濱邊へお越しあらせませう。土岐そんなら。烏帽子の事は。其方に頼んだぞや。併し。今日は。嫂のお須磨の方が月見の催はしなれば。どうぞ逢はぬやうにせねばならぬ。女皆そりや。合點でござんす。ト唄になり。皆々捨ぜりふにて土岐之助。女形皆々橋がかりへ入る。あと合ひ方。軍八。その外の侍ひ四人よろしくあつて。皆々近藤軍八どの。軍八いづれも近う。かねて謀し合せし通り。大尉どのゝ一味に加はり。網干家を押領し

て。酒計を極めん金。先年大敵瀧死の後。家督は兄右兵衛之助と定まれども。未だ鎌倉へ下向もなく。近々御上使のお入りの節。當家の重寶傳授の一卷。國次の刀。人丸の烏帽子を内見に供へ。國次の刀を盗ませ。その越度を兄右兵衛之助に負はせんと。下郎の岩平より。熊鷹の眼兵衛と申す者に云ひつけ。また弟土岐之助は。あの如く馬鹿者に仕立てたれば。色と酒とに魂ひを奪はれ。家督相續思ひもよらず。何は兎もあれ。眼兵衛とやらが。もう參りさうなものぢや。トこの前より眼兵衛。厚袍着て窺ひ出て。眼兵イヤ。その眼兵衛とは。おれが事でごんす。岩平から受取つたこの書き物。當社に納めある國次の刀。盗んでくれいとこの文體。キツと呑み込みました。あなたの密書はお返し申します。ト密書を軍八に渡す。軍八小氣味の好い男ではあるぞ。トこの時。皆々向うを見て。皆々アレアレ。向うから来る同勢は。軍八大方。奥方お須磨の方。附添ひあるは清水李之進め。逢はぬうちに。所を變へて何かの密談。侍四然らば。われも御一緒に。眼兵軍八さま。軍八眼兵衛。來やれ。ト神樂になり。皆々。上手へ入る。この前に軍八。密書を落す事あり。向うより李之進。上下。主水。奥方の乗り物を陸尺立派に昇き出る。腰元小汐。濱風。入江。磯浪。附添ひ出る。跡より松兵衛。附いて出る。その外。挟み箱。長刀。辨當持ちの同勢。皆々本舞臺へ来て。李之今日は御勅使御到着に付き。汐屋の風景を御覽に入れ奉らん爲。濱邊の假屋へ御案内の役目は金澤主水どの。貴公。よろしく頼み存ずる。主水委細畏まりました。併し其許には。御上使のお入り近々なれば。何かと御繁多。奥方のお乗り物に付き添ふも。女中ばかりの中なれば。若侍ひの遠慮もござれば。李之その儀はお氣遣ひ下されますな。即ち。あれに居るは。お館の裏門番。松兵衛と申す者。老年といひ。篤實なる者と聞き及ぶ。女中のお供に屈竟。コリヤ。松兵衛。近う參れ。松兵ハア。ト松兵衛。少しにじり寄る。李之これなる奥方。今宵の月を御覽あつて。禁廷よりの勅諭の。ほのゝの名歌。五文字の註解を遊ばされん爲。浦の假屋へお越しのお供。女中方を其方に預ける間。何か心を付けよ。松兵畏まりましたござります。ト元の座へ直る。此うち李之進。最前。軍八が

落せし密書を拾ひ見て。李之眼兵衛へ近藤軍八。ト讀み。少し思案の心意氣あつて。主水と顔見合せ李之イザ。参りませう。ト神樂になり。皆々橋がかりへ入る。向うより里姫。振り袖。姫の形。乳人繼橋。附いて出て。花道のよき所にて。繼橋申し。お姫様。向うが即ち明石の人丸様。あなたが日頃戀しう思召します土岐之助さま。今この社へお越しと聞きましたゆゑ。どうぞしてお逢はせ申しませうと存じ。これまでお供いたしました。里姫ほんに。其方がいかい太儀。自らと云ひ號けの名はありながら。輿入れも遅なはり。待ち焦るゝ殿様。お顔は知らねど。お懐かしうござるわいなう。繼橋そりやモウ。お道理でござりまする。マア。あれへお越し遊ばされませ。ト本舞臺へ来る。此うち。奴岩平。橋がかりより窺ひ出る。繼橋あなた様の御婚禮は。忝なくも將軍家よりの御媒妁。管領家の姫君と御縁組みは。土岐之助さまの御大慶。それに今まで御沙汰のないは。室の津の傾城。満月とやらに馴染みを重ね。深い仲ゆゑと。わたしの父上。弓削主計聞くと等しく。あなた様を伴ひ。當國へお越しあつて。御家老の清水李之進さまと應對ある筈なれども。わたしは早うお逢はせ申したさ。フト思ひつきましたは。土岐之助さま。御勅使を饗應の爲。傾城を海女の姿に仕立て。汐屋の假家へお越しとの事。どうぞあなた様を。その海女の姿に出で立たせ。若殿にお逢はせ申しませうわいな。里姫それでも。自らは其やうな事を。繼橋ハテ。わたし任せになされませ。傾城衆に頼んで。首尾よう致しまする程に。マア。斯うお出て遊ばされませ。ト里姫の手を引き。橋がかりへ入る。岩平。この前にもちよつと隠れ。この時出て。あたりを見廻し。岩平すりや。あれが管領家のお娘とな。乳人の計らひにて。傾城に打交り。海女の姿となり。若殿に逢はさうとの魂膽。そこでおれが若殿と姿を變へ。姫を抱いて寝るワ。こいつは上分別ぢや。巧いワ。ト領づき。ツイと橋がかりへ入る。ト主膳。雜掌の衣裳を刀に括り付け。あたりを見廻し出る。臆病口より眼兵衛は國次の刀を盗み出で。主膳に行き當り。眼兵衛六ちやないか。主膳眼兵衛か。眼兵衛われに頼んだ人丸の烏帽子。主膳オツと皆まで云ふた。お職家の雜掌となつて。まんまと首尾よう騙り負ふせ。眼兵衛そりや

ア。忝ない。そんなら受取らうか。主膳イヤ。波多には渡されん。雜掌になつた身の廻り。家老の頼り。管領の元入り。褒美の金と引替へにせうかい。眼兵衛成程。それも尤もぢやが。今と云うては金は無いけれど。幸ひ。爰に軍八さまから頼まれは國次の刀。これを暫らく預け置く。褒美の金の受取り次第。引替へにせう。主膳そんなら人丸の烏帽子。眼兵衛國次の刀。ト袋入りの刀と烏帽子と取替へて。主膳人の見ぬ間に。眼兵衛合點ぢや。ト兩人別れ入る。ト道具廻る。

造り物。見付け二重舞臺。金棟にて。欄間の所。明石桐の紋附き晒し幕。東西落間。浪幕。下手に汐屋あり。但し。入り口の戸。開閉て出入りあり。二重舞臺の上に。勅使中將兼帶卿。合引にかゝり居る。土岐之助。上下にて二重舞臺に軍八。軍次。團作。伴藏。金兵衛。いづれも上下にて並よく居る。この見得。序の舞にて道具とまる。

土岐御勅使様には。遠路の御光輝。皆々御苦勞に存じ奉ります。兼豐網干家の領地は播州にて。人丸の神社勸請あり。その上に奥方お須磨の方とやら。歌道の譽れ御聞に達せしゆゑ。古へより實正定かならざる人丸の名歌。ほのぼの五文字。註解せよとの勅諭。金兵衛の儀に付き。お須磨の方には。この濱に今宵の月を眺め。ほのぼのの註解いたさるゝその間。團作この浦の風景を御覽遊ばされ。金兵衛名所の譽れ。當家の面目。皆々如何ばかり大慶至極に存じ奉ります。兼豐聞き及んだる浦の風景。都の土産に眺めうぞ。土岐御勅使様を饗應の爲。申し付けた催ふしを。早う早う。ト汐汲みの唄。華やかなる鳴り物にて。向うより。満月。十六夜。桂女。秋空。待宵。腰元。濱風。入江。小汐。磯浪。皆々浴衣。腰篋。海女の形。汐汲み桶を荷ひ出る。花道よき程に並ぶ。満月わくらはに問ふ人あらば須磨の浦。漢鹽たれつゝわぶと答へよと。詠じ給ひしはこの浦の。程遠からぬ昔語り。十六その行平の中納言。三年のうちは須

へ行かしやんせいなア。土岐サア。皆来い。ト唄になり。土岐之助。満月。軍入その外。皆々上手へ入る。あと合ひ方。岩平。いろくあつて。若殿といふこなし。岩平マア。斯うしてゐれば。管領の姫が。若殿と思ひ。殿様。お懐かしうござりますわいなアと抱きついたならおれがその姫を抱いて寝るとは。けうといく。ト獨り言云うてゐる。此うち。乳人繼橋。海女の形にて窺ひ出て。様子を立ち聞きする。臆病口バタ／＼と音する。繼橋。ちやつと汐屋の内へ隠る。ト岩平は姫と思ひ。いろく身繕ろひする。臆病口より眼兵衛出て来て。眼兵衛岩平に逢はうと思つて来たが。どうぞして逢ひたいものぢや。ト云ひく。岩平と顔見合はし。形を見て。眼兵衛。岩平。わりやマア。その形は何ぢやぞい。それはさうと。ちと急に話したい事が。ト引立てようとする。岩平おりや。爰に用がある。眼兵衛も急な事がある。ト無理に引立て。臆病口へ連れて入る。繼橋。汐屋の内より出て。あたりを見廻し。天を拜し。繼橋すんての事に姫君様を。下郎に肌を穢されんとせし所。これも天道様のお恵み。エ。忝ない。そんなら奴姿になつてござるが。若殿様に違ひはない。この通りをお姫様にさうぢや。ト橋がかりへ入る。ト浪平。暮明き奴の形にて出て。浪平若殿様に。お目にかゝらねばならぬ。ト彼方此方と尋ねるこなし。此うち。繼橋。里姫を海女の姿に仕立て。連れて出て。浪平を若殿と思ひ。無理に突きやる。里姫。恥かしきこなし。いろくあつて。トマ姫を突きやるはずみに。浪平に行き當り。顔隠して。里姫申し。殿様。浪平なんだ。おらを捕へて殿様とは。馬鹿らしい。里姫お懐かしうござりますわいな。浪平なんだ。とんと解らねえ。ト不思議さうに云ふ。繼橋。こなしあつて。繼橋申し。殿様。なんぼうお隠しなされても。紅は園生に植ても隠れない。若殿様。これにござるは云ひ號けの姫君。ト云はうとして。氣を變へ。繼橋イ、エ。この浦の海女の乙女でござります。あなたを見初めて。強い焦れやう。どうぞ。願ひを叶へて下さりませ。モシ。御得心がござりませねば。いつそ。ト姫に死なうとせいと。いろく敵へるこなし。里姫やうく合點して。里姫南無阿彌陀佛。ト浪平の刀に手を懸ける。浪平ア、コレ。滅相

なト留める。里姫そんなら。御得心でござりますか。浪平サア。それは。里姫サア。二人サア。里姫御得心がござりませずば。トまた死なうとする。浪平ア、コレ。なんぢや知らぬが。マア。御得心でござります。繼橋そんなら。善は急げぢや。幸ひのあの汐屋の内。ト浪平。迷惑なるこなしあつて。浪平ドリヤ。七十五日生き延びようか。ト唄になり。浪平。里姫を連れ。汐屋の内へ入る。繼橋。跡にて胸撫て下ろし。心落ちついたこなし。繼橋とは云へ初心なお姫様。ト内を窺ひ。いろくあり。ソツと橋がかりへ入る。臆病口より。岩平。眼兵衛を連れて出て。眼兵衛そんなら。人丸の烏帽子が入用なら。褒美の金にせうかい。岩平サア。その金は。爰に無い。眼兵衛それでは。滅多に渡されぬこの烏帽子。岩平幸ひ爰に持つてゐる。この一品と。替へ事せうか。ト懐より袱紗包みを出す。眼兵衛全體。それは何ぢやぞい。岩平されば。この傳授の一卷は。綱干家の重寶にて。唐橋大弼さまに頼まれ。盗み置きたる大金になる代物。眼兵衛イカサマ。隠して置くには嵩が低うてよい。そんなら替へ事せう。サア。おこせ。岩平われから出せ。眼兵衛。氣の悪い。そんなら一緒に取替へう。ト兩人。烏帽子と傳授書を手に懸けて。兩人一イニウ三ツ。ト云うて。取替へて懐中する。眼兵衛ドリヤ。行かうか。ト越後獅子の鳴り物になり。くるかくの唄にて。眼兵衛。橋がかりへ入る。ト岩平。いろく身繕ろひして。岩平もう姫が来さうなものぢや。ア。待たるも待つ身になるなどは。好う云うた事ぢや。ト云ひく。橋がかりの方へ入る。汐屋の内より浪平。里姫を連れて出て。浪平縁あらば。重ねて逢ひませう。ト行かうとする。里姫留めるを。無理に振り放し。浪平こりやア御用が遅くなつた。ト上手へ入る。里姫。浪平の跡を見送りゐる。ト橋がかりより。岩平出て。姫を見て。こなしあつて後より抱きつく。里姫。悔りしてあせる事。いろくある。此うち繼橋。走り出て。岩平を突き飛ばし。ちよつと立廻りあつて。繼橋。里姫を後に圍ひ。キツとなる。この見得よろしく道具廻る。

造り物。二重舞臺。金襴。上手。折廻し障子屋體。橋がかり網代の塀。主計。衣裳。上下。關屋。衣裳。襦袢に
て出てゐる。序の舞にて。道具とまる。

關屋管領家よりのお使者。遠路の所。御苦勞に存じ奉ります。妾は關屋と申す者にて。夫清水左之進が。御對談申
し上ぐべき筈なれども。今日はお勅使のお入りと云ひ。近々鎌倉の御上使もお入りの由。當家家督の定めに付き。何
かと多用。それゆゑ。女ながらも夫の名代。お使者の趣き。私に仰せ聞けられ下さりませうならば。有り難う存じ
奉ります。主計成程。當家と某の主人とは。將軍家より御妹姪にて。縁組みあらば。一門も同然。一家中の繁
多の中にてお心遣ひは無用。何かは差措き。この度當家へ参りし使者の趣き。別儀にあらず。綱干の次男土岐之助と
の。此方の里姫と縁邊は。私しならぬ公けの嚴命。然るに。土岐之助どの。傾城遊女にその身を忘れ。それゆゑ。
姫君のお興入れも沙汰なきと世上の風聞。これ即ち。管領家の恥辱にして。將軍家を蔑ろにする恐れ少なからず。
急ぎ實否を糺せよとの儀にて。姫の乳人。某が娘繼橋と申す者。姫を伴ひ。到着の上は。直さま興入れをなし下さる
やう。御返答を承りたう存する。關屋世上の風説は知らねども。土岐之助さまのお身持ち。放埒なる儀は一切これな
く。お興入れの遅なはりしは。大殿の御死去の後。右兵衛之助と御家督は定まれども。今に鎌倉へ参勤これなきゆ
ゑ。弟君の御婚禮も。自づと延引いたしたのでござります。ト内より。軍八イ、ヤ。放埒の正體。お目にかけう。ト
土岐之助を引立て。金兵衛。軍次。伴藏。團作。傾城残らずを引立て出る。軍八管領家の御使者。これ御覽なされ。
室の津の傾城を館へ引入れ。晝夜分たぬ酒宴の遊び。金兵衛將軍家の命を用ひず。軍次管領の姫を嫌ひ。伴藏傾城の満
月を寵愛いたさるゝ段。團作なんと。不行跡では。皆々ござりませぬか。土岐ア、コリヤ。この趣向は皆。其
方達が計らひぢやないかい。軍八ハテ。今さら自分の科を。我れに塗り付けやうとは。如何に主従なればとて。
皆々こりや迷惑でござります。關屋これは又。何れも。穢やかならぬ詞争ひ。今日。室の津の傾城どもを招き寄せし

は。御勅使様へ變態の波瀾。海女の借してはなにかい。ナア。傾城毒。女を左様でござんす。トこの時。橋がか
りより岩平。浪平を引立て出て。岩平大それた不義の科人。岩平めが引立て参りました。軍八ナニ。下郎の浪平を。
大それた不義者とは。岩平イヤモウ。不義も不義。大それた不義者。どこの世界に下郎の身として。管領家の姫君と
不義密通。主計ナニ。此方の姫と密通せしとは。聞き捨てならぬ一大事。浪平イヤ。如何やうに云うても。姫君と不
義した覚えはござりませぬ。岩平エ、生々しい偽はり。不義を見届けた。體かな證據は。この岩平。浪平例へ證人
はあつても。姫と不義した覚えはない。主計下郎同士の論は無益。此方の姫は。身が娘附添ひ居れば。不義のあるべ
きやうはない。ヤア。繼橋。姫君を伴ひ。これへ参れ。繼橋ハア、ト里姫の手を引き。繼橋出る。里姫は浪平
を見て。里姫ヤア。殿様。ト浪平。悔りして。浪平こなたは。最前の海女ではないか。それを管領の姫君とは。岩平な
んと。膽が潰れたか。浪平ホイ。ト當惑のこなし。繼橋。いろくこなしあつて。繼橋父上。お免されて下さりま
せ。姫君様にも。奴どのにも。さらく不義の科はない。この科人は皆私し。この繼橋でござります。マア。お聞
きなされて下さりませ。將軍様のお指圖にて。これなる姫君と。當家の若殿。土岐之助さまと。御縁組みありしその
日より。興入れの日を待ち焦るゝは。姫御前の習ひ。お姫様の心のうち察せしゆゑ。父様と諸とも。當國へ参ぜしが。
若殿には外心あるとの噂。どうぞ首尾して。お逢はせ申さうと存じ。様子を窺ひしところ。下郎の姿にお身をやつし。
奴どのが若殿となり。御婚禮をせんと聞くなり。南無三寶。姫君とお逢はせ申しては。女の道立たずと思ひ。假初め
の語りひでも道ならばと。あの奴どのを。土岐之助さまと心得。戀の取持ち致せしは。この繼橋でござります。里姫そ
れも。矢ッ張り自らが淫らゆゑ。主計。堪忍したも。その云ひ譯は。ト自害せうとする。繼橋。止めて。繼橋マア
マア。お待ち下さりませ。軍八不義の相手は。浪平め。皆々縛り首はお定まり。岩平下郎め。覺悟。ト浪平を切らう
とする。花道戸屋の内より。李之方々。待つた。ト聲かけ。李之進。幕明きの形にて走り出て来る。いづれも。

急かれな。この場の落着。當家を預かる清水李之進が胸にござる。軍八でも。兩人の口から。慥かに白状せし不義の罪人。李之されば。そこでござる。あれなる乳人繼橋どの、只今の云ひ譯。土岐之助さまには。下郎と姿を變へ。下郎は若殿の衣裳を着し。姫君と婚禮を致さんとする方便を聞き。乳人が計らひにて。浪平を若殿と思ひ。また浪平は海女の姿の女をば。管領の姫君と知らぬも道理。さあれば。不義に似て。不義にあらず。兩人に科はござらぬ。この儀達て詮議を遂げらるゝと。自然。若殿や姫君の御名の出る事。軍八イ、ヤ。例へ御名は出るとも。不義はお家の御法度。李之サア。不義の相手を詮議すると。誠の不義は。あれなる岩平。岩平ナニ。この岩平を不義者とは。李之如何にも。ト岩平ムツとして。李之進の側へ行き。岩平。御家老様。この下郎め。何ゆゑ不義者でござりますな。李之ハテ。知れた事。うぬ。下郎の身として。若殿の衣服を着し。姫君を欺むかんとせしからは。不義者ではあるまいか。岩平エ、それや得手勝手この場の計らひ。ト李之進に詰めかけようとするはずみに。懷中より。烏帽子を落さうとして。岩平南無三。ト云ひつゝ逃げて入る。ト主計。李之進に向ひ。主計ア、流石は大國の家老職ほどあつて。双方無難に納まる計らひ。李之進どの。わざと御禮は申さぬ。娘が危忽。姫君の云ひ譯は。まッこの通り。ト肌を脱ぐと。切腹して腹帯締めてゐる。繼橋。悔りして取りつき。繼橋ヤア。父様には。切腹なされてござりますか。主計我れ。姫君の御供して。當國へ來り。若殿の風聞を聞きしより。所詮この婚禮。調ひ難しと見極め。主君への申し譯。疾より切腹いたせしが。いま李之進どの、情の計らひに安堵なし。心置きなく成佛いたす。娘よ。其方はいつまでも。姫君に付き添ひ奉れ。猶この上ながら。萬事頼むは李之進どの。李之その儀は少しもお氣遣ひなさるゝな。先刻より對談の五音。切腹召され居らるゝ事。それと推察いたせしゆゑ。調ひ難き婚禮を。取結ぶは武士の寸志。主計エ、嬉しや。忝なや。いづれも。おさらば。ト腹帯を解くと。パツタリこける。繼橋。里姫。ハア、と大泣き。李之近藤軍八どの。ちよつと御意得たい。軍八手前にかた。トサつと立つて。舞臺の眞中へ出て。こなしあつて。軍八なんて

ござる。ま之イヤ。別腹してもござらぬ。ト最前の影を出し。ま之この影が。影えがござるか。ト見せる。軍八。悔りして懷中を探し。いろ／＼あつて狀を取らうとする。その手を拂ひ。李之若殿に傾城遊女を勧め込み。色と酒とに御心を亂させ。剩さへ。主君の婚禮を妨げ。兄君右兵衛之助さま御家督定めに。上使に奉る。お家の重寶を盗まんなどと。事を好む大悪人。同じ穴の狐侍ひ。荷擔する俵人ばら。一々詮議する筈なれども。今より心改むるものならば。何事もこの場限り。以後はキツと憤み召され。トきつと云ふ。軍八。氣を替へ。軍八ハア。悪事は千里。天道の罰は目の前。斯く露顯に及ぶからは。何事もお免されて下さる上は。とても事に。その密書を某にお戻しなされて下さらば。重々の厚恩。李之イ、ヤ。そりやならぬ。身が存する仔細もあれば。狀は矢張り此方に留め置かう。軍八ササ。そこが武士の情と云ふもの。何卒。お返し下さい。李之イ、ヤ。なりませぬ。軍八所をどうぞ。御料簡あつて。李之ハテサテ。なりませぬ。軍八左様でござらうけれど。李之くどい事。罷りならぬ。トきつと云ふ。軍八。ムツとして。軍八エ、おきやアがれ。其方を其方と思へばこそ。一家中。満座の中にて。武士が手を突いて頼むに。聞入れなくば。もう頼まぬ。オ、あやまりませぬ。コリヤ。こなたはナ。表は仁心らしく見せて。爰が悪い。オ、心が汚ない。今更云ふに及ばねども。こなたが若年の頃。先殿の御前を仕損ひ。すんでにお手討にもなるべき所。某が父近藤三太夫。幸ひとその場に居合して。殿へ。段々と理解を説き。お詫び申したばつかりに。今日まで命を長らへるは。これ皆。我が父三太夫が執成したゆゑではないか。さあれば其方。誠の武士の魂ひあつて。恩義を忘れぬならば。その狀を此方に渡すべきに。思ふ仔細ありなどと。我まゝなるこの場の行跡。その賢人ぶつた汝を。斯う。ト切りかゝるを。扇にてあしらひ。また切りかゝるを見事に振り取り。軍八を取つて押へ。李之エ、云はうやうなき人面獸心。一家中へ見せしめに。ト軍八が眉間を割る。侍ひ四人。寄らうとする。李之進。キツとなる。ト皆々。後へ寄る。軍八。また切つてかゝる。ちよつと立廻りあつてポンと當てる。李之主計どの、自殺によつて。この場の事は

何事も沙汰なし。さりながら。土岐之助さまには暫らく御遠慮。傾城どもは。残らず廓へお返しあれ。奴の浪平は。心置きなく出勤してよからう。浪平有り難うござります。關屋土岐之助さま。土岐いづれも。皆々マア。お入りなされませう。ト序の舞になり。土岐之助。里姫。繼橋。關屋。女形皆々。李之進もこなしあつて奥へ入る。浪平。橋がかりへ入る。跡に侍ひ四人残りて。金兵衛。軍八に活を入れる。軍八心付き。眉間の血を見て。悔りして。軍八おのれ。李之進め。武士の面を打ち割り。遺恨に遺恨を重ねる上は。奥へ踏ん込み。たゞ一打ち。皆々我れも御一緒に。ト身繕ひして行かうとする。この前より。大弼。黒装束に野袴。兜頭巾にて。黒装束の家來二人連れ。橋がかりより窺ひ出て。大弼コリヤ。待て。皆々マア。あなたは唐橋大弼さま。大弼シイ。ト押へる。ト下がり葉打ちかける。大弼。あたりを見廻し。大弼疾より館へ忍び入り。始終の様子は残らず聞いた。其方の無念は理りなれども。今日は勅使の入來。饗應の場へ踏ん込んで。多勢に無勢。本望達する事。思ひも寄らず。彼れを討取るは。今宵勅使の歸館を見送りて。歸る所を待ち合せ。騙すに手なし。たつた一打ち。軍八成程。尤も騙すに手なし。誰かに歸りは垂水の松原。侍遊女塚を弓馬手。トぢやん／＼と暮れ六ツの鐘鳴る。大弼最早。暮れ六ツ。宵闇のうち。軍八思ひ知らさん李之進。大弼いづれも加勢。皆々心得ました。大弼急げ／＼。皆々ハツ／＼。ト皆々。凜々しく向うへ走り入る。大弼。向うをキツと見る。この見得にて道具廻る。

造り物。一面の黒幕。見附けに辻堂。橋がかりに遊女塚といふ石碑あり。バタ／＼にて臆病口より眼兵衛。走り出で。

眼兵衛ヤレ／＼。ひやいな所で。岩平から受取つた傳授の一卷を見付けられうとした。ト云ひ／＼。襖紗包みを戴く。この時。繼橋窺ひ出て。眼兵衛それを。ト取らうとする。ちよつと並進ありあつて。繼橋をポンと當て。眼兵衛。向うへ走り

入る。繼橋。心付き。眼兵衛者を取逃がした。誰かにこの道。さうぢや。ト向うへ入る。誰かすかに鼓の音。向うより軍八。侍ひ四人出て。花道にて向うを見て。軍八向うに見ゆる提灯の。灯影は誰かに李之進。いづれも。油断さつしやるな。皆々心得ました。ト此うち。臆病口より箱提灯持たせ。李之進出て來る。侍ひ四人。抜打ちに提灯を切り落す。ト軍八。李之進に切つてかゝる。此うち。供廻り逃げて入る。跡入り亂れ。廻りあり。ト軍八を。李之進切り倒し。止めを刺す。此うち。向うより大弼。以前の形にて。前後に黒装束の家來附添ひ出て。花道のよき所にて。エイと手裏劍打つ。李之進。ウンと反る。此うちに本舞臺へ來て。李之進を切り倒す。皆々息は止まりましたかな。大弼軍八が最期は悔んで詮なき事ながら。當の敵を立ち所に討ち取り。我が大望の手始めよし。ト李之進の懐中の密書を取出し。大弼斯様の密書は。後日の妨げ。ト籠燈の火にて焼き捨てる。橋がかりより足音する。大弼ソレ。いづれも早く。ト皆々臆病口へ逃げ入る。ト橋がかりより蟲賣り露入。蟲籠を荷ひ出て。血汐に泣り。露八こりや。なんぢや。ト探るうち。上手へ月出る。ト李之進の死骸を見て。露八マア。爰に人が殺されてある。トよく／＼見て。露八ホ、こりやコレ。晝見た網干の家中。エ、むごたらしう切り居つた。ト云ひ／＼。軍八の死骸を見て。露八これも矢ツ張り網干の家中。トまた李之進の死骸を見て。露八斯うムザ／＼と。殺さるゝやうな。侍ひとは見えなんだに。ト胸に立つたる手裏劍を見て。露八さては荷擔人があつたと見ゆるわい。ト月影に透かし見て。露八こりやコレ。亂れ獅子に牡丹唐草の割り笄。トちよつとこなしある。此うち橋がかりより。バタ／＼と足音する。ト露八。ちよつと塚の後へ隠るゝ。ト關屋。奥方の姿にて。若黨丈助。股立ち取り。箱提灯持ち出て。死骸に爪づき。よく／＼見て。丈助マア。こりやお旦那。關屋李之進どのかいなア。ト悔りする。丈助エ、何者の仕業。今一足早くば。斯くやみ／＼と討たせまいもの。關屋最前からの胸騒ぎも。斯ういふ事であつたかいなう。ト此うち丈助。軍八の死骸を見て。丈助この死骸は近藤軍八。ト關屋も見て。關屋さては最前の遺恨にて。夫の歸りを待伏せして。丈助兩人とも

に。御最期であつたか。トこの前より。露八。窺ひ出で。露八イヤ。その殺し手は外にごんす。開屋ナニ。外に殺し手が。丈助あるとは。露八證據といふは。この一品。ト割り筭を出す。開屋。見て。開屋亂れ獅子に牡丹唐草の割り筭。丈助それを敵の手がかりとは。開屋何にもせよ。怪しき曲者。ト兩人露八に切り付けるを。ちよつと立廻りあつて。露八ア、コレ。マア。早まらずと。ト立廻りにて開屋丈助をよろしく止めて。とつくりと譚を聞かせ。ト小腰をかゞめる。兩人もキツとなる。この見得にて道具廻る。

造り物。一面の浪幕。見附け。浦の苦屋あり。左右に所々臺松。廻りに松の吊り枝。上手。月出で。すべて明石の浦の模様。假家の内にお須磨の方。褥の上にて脇息に凭れ。月を眺めてゐる。平舞臺。左右に幕明き。腰元皆々並よく並び。下の方に女乗り物。陸尺。同勢。橋がかり。切り幕の際には。松兵衛。女草履を腰に挟み。蹲りある。この見得。静かな琴明にて道具とまる。

須磨二千里の外までも。隈なき今宵の月の眺め。その名所の多き中に。更科。田毎。姨捨山にも。猶勝りたる風景は。須磨や明石の浦づたひ。古しへの紫式部。石山寺に參籠して。源氏の物語りを浮み出づるも。先づ湖にうつる月影に。おのれと心も澄み渡る。須磨明石の巻より書き初めしと聞きしが。この度禁廷の勅詔を受け人丸の神詠。ほのぼの五文字の註釋。心澄まさんその爲に。わざ／＼今宵の月見の催はし。少しは心に。それかと思ひ寄つたる事もあれど。和歌の御祖の言の葉なれば。代々の先達の教へなければ。迂濶にそれと。勅答もなし難し。ハテ。どうしたものであらう。浪浪ホソニ。辛氣な事でござりますな。須磨はの／＼と明石の浦の朝霧に。島かくれゆく舟なども。西に傾むく今宵の月影も。はや東雲。明け方近し。妾は歸館しませうわいな。浪浪奥様のお歸り。皆々松兵衛どの。お草履。ト松兵衛。女草履を脱出し。殿屋のよき所に直す。この時。お須磨の方の顔にテツと見る事ある。陸尺。女乗り物を。下手のよき所に直す。トお須磨の方。始末月を眺める。こなしにて。乗り物へ登り。左右の戸。閉ぢてあるなり。皆々お立ち。ト静かなる所地入りになる。乗り物。花道へ行く。女形皆々附添ふ。お須磨の方。乗り物の内より。月を眺め静々と向うへ入る。松兵衛は始終。お須磨の方に見惚れてゐて。ソロ／＼と後より歩く。茶辨當持ち。松兵衛の後より面倒なるこなしあつて。茶辨サア。行かんかい。トこれにて松兵衛。心の附くこなしあつて。よろしく。

幕

兩人幕の外にて。ソロ／＼と向うへ入る。

二 二 目
門番松兵衛部屋の間
網干家館の場

造り物。平舞臺。見附け二間の間。二重舞臺。裏門番の松兵衛部屋。鴨居に折れたる重簾の弓を掛けあり。屋敷の門。但し。裏手を見せ。上手奥へ寄せて堀。これも裏を見せ。すべて網干家裏門口の體。松兵衛。病人の拵らへにて。蒲團きて寝轉びある。傍らに枕屏風。藥など。よき所に唐辛子の鉢植ゑあり。岩平。浪平。庭の掃除してゐる。この見得。白囃子にて幕ひらく。

岩平コリヤ。浪平。しまつたら一服せうかい。浪平オ。さうしよう／＼。ト云ひ。松兵衛の側へ寄り。岩平と。うだ。松兵衛。今日は心持ちはよいか。浪平薬でも煎じてやらうか。ト松兵衛。枕を上げ。起きあがりて。松兵オ。岩平。浪平。よう見舞うてくれた。この間から。おれが此やうに寝てゐるゆゑ。それでも忙しい上に今日御上使のお入りとやらにて。お庭の掃除も忙しかる。岩平イヤモウ。そりや互ひぢや。浪平随分養生して本服せいで。松平オ。忝ない。岩平ドリヤ。おらも部屋へ行て。二人休まうわい。ト二人。臆病口へ入る。ト松兵衛。こなしあつて。

松兵衛、いつぞやよりの物思ひは。誰れにも明けて云はれぬ事。どうぞ思ひが叶へばよいが。ト獨り言。此うち。豊奴の鳴り物になり。臆病口より腰元磯浪出て。磯浪松兵衛どの。起きて居やんすか。ほんに。こなたはこの間。奥さまのお供してから。ツイ馴染みになり。御門の出入りに顔見合はすゆゑ。心安う思ひ。アレ。向うにこなたが手入れしやつた唐辛子。わしは大好物ゆゑ。一つ二つたもらんかと云うたも。厚かましい者ぢやと思つて下さんすなや。松兵衛の其やうな事思ひませうぞ。イヤ又。唐辛子といふ物は。食物に味を出し。第一は根氣の薬でござりますれば。お前様のやうな。奥勤めをなさるゝお方は。ちと上がるがようござります。磯浪さう云うてたもると。遠慮なう貰ひます。松兵衛サア。なんぼなりと持つて歸らつしやれ。磯浪そんなら貰ひます。ト唐辛子をむしりながら。磯浪イヤ。コレ。松兵衛どの。あすこに掛けてある弓の折れは。ありや何になる爲ぢやぞいなう。ト鴨居の方を指さして云ふ。松兵衛こなしあつて。松兵衛イヤモウ。なんぼう重藤の弓でも。折れては用に立たねど。まんざら捨てられもせずして。ツイ向うに掛けて置いたのでござります。磯浪ムウ。さうかいの。わしや又。なんぞの咒ひかと思つた。わしとした事が。よう根問ひする者ぢやと思やらうが。其方の病はマア。なんぢやぞいな。ト松兵衛。恥かしきこなしあつて。松兵衛イヤモウ。この爺の病は。とんと。人様に話しのならぬ事てござります。磯浪エ、あの人わいな。病になんの話されぬと云ふ事があらうぞ。其やうに隠さずと。様子を話して聞かしたも。松兵衛それでも。云うたらお前様。お笑ひなされませぬ。磯浪イヤ。どのやうな事でも。笑ひはせぬ程に。マア。話して聞かした。松兵衛そんなら。必らずお笑ひなされて下さりますな。磯浪とんと笑ふ事ぢやない。早う話しや。松兵衛この親仁が病氣といふのは。ト云ひかねる事。いろ／＼ある。磯浪こなたの病氣は。松兵衛親仁の病氣は。磯浪マア。なんぢやぞいな。松兵衛ハイ。戀煩らひてござります。ト恥かしさうに云ふ。磯浪。胸りして。磯浪ハ、ハ、ハ、あのやうな形して。戀煩らひとは。をかしいわいな。松兵衛サア。それぢやによつて。云ひませぬと申しました。磯浪イヤ。もう笑ひはしませぬ。イカサマ。巖

つ何十になつても。捨てられぬは色。誰。そして。こなたの體た女中は。明か。お屋敷かいな。松兵衛イヤモウ。その事は。どうも申されませぬ。磯浪ムウ。そんなら。わしが指して見せう。大方。わしが。推量では。この間からこの屋敷へ室の津のお傾城が。大勢來てゐやんす。定めしあのうち。こなたさんが惚れたと云ふは。トちよつと思案し。磯浪大方。待宵どのであらう。松兵衛イヤ。待宵どのでなくば。カウソ。秋空どのか。松兵衛イヤ。磯浪そんなら。桂女。十六夜。松兵衛イヤ傾城家ではござりませぬ。磯浪フム。お傾城家でなくば。腰元衆のうち。差詰め。小汐どのか。松兵衛イヤ。磯浪それだなくば。吹風どのか。松兵衛イヤ。磯浪それだなくば。ト我が顔を指さし。磯浪わしでもあるまいし。カウソ。その外に姫御前と云うたら關屋さま。奥様でもあるまいし。松兵衛イヤ。その奥様でござります。磯浪エ、ト胸りする。松兵衛ぞこん奥様に惚れました。磯浪親仁だたら。奥様に惚れたとは。こりやをかしい。ト笑ふ。松兵衛サア。それぢやによつて。笑うて下さんなと云うたのぢや。磯浪ぢやと云うて。これが笑はずに居られうか。ト大笑ひして。氣を替へ。磯浪よい年をして親仁だたら。とは云ふものゝ。それ程までに思つてゐやるもの。松兵衛せめて奥様に。夢なりとも。この事をお知らせ申したら。この親仁めが本望。磯浪百貫の鷹も放さねば知れぬと。いつそてんぼの皮。云ひかけて見たら。また叶ふまいものでもない。わしがこの戀の取持ちませう程に。思ひの丈を。ザツと一筆書いたがよいわいの。松兵衛ナニ。この取持ちをしてやらうと仰しやりますか。磯浪おいなう。松兵衛そりや。誠でござりますか。磯浪人の見ぬ間に。早う一筆書かよい。ト松兵衛。立ち上がり。臥床の下より。錢二百出し。塵紙に包み。ソツと磯浪の前に出し。松兵衛これは近頃。あなづりがましい事なれど。あなたに何ぞ買うて上げませうと存じますれど。何を申してもこの病。これは少しばかりでござりますれど。鬢附なりと買うて下さりませ。磯浪エ、こんな心遣ひはせぬがよい。こなたも。病氣の事ぢや。どうて小遣ひもいらうほどに。其方へ納めて下され。貰うたも同然ぢや。ト云ひ。欲しさうな心意氣にて。磯浪併し。年寄りの心遣ひを無足にする

も氣の毒ぢや。そんなら貰うて置ませう。ト戴き。帯の間に入れる。松兵又この病氣が本腹いたしましたら。なんなりと貰うて上げませう。磯浪イヤモウ。必らず心遣ひはよしにして。サア。一筆書かしやれないなう。松兵成る程。状もこれに書いてござります。ト出す。磯浪取つて。磯浪ツイ今の間に。よい返事をばせう程に。待つてみやしやれ。松兵どうぞお頼み申します。ト髭奴の鳴り物にて。磯浪は臆病口へ入る。松兵衛。嬉しきこなしあつて。天を拜む事ある。此うち軍次。金兵衛。下手の口より出る。軍次裏門番の松兵衛は。これに居るか。金兵衛唐橋大弼さまのお召し。軍次お尋ねなされる。仔細あれば。二人早々參れ。ト兩人。松兵衛の手を取るを。振り放し。松兵私しは裏門番を勤めますゆゑ。暫らくでも御門を明けて置く事ななりません。軍次でも。大弼さまのお召しぢやわい。松兵なんぼお家の叔父君でも。御門を明けては參られませぬ。金兵衛へ參らぬと云うても。軍次我れ／＼が引立て行く。兩人サア。うせう。ト兩人。無理に引立てるはずみに。松兵衛。ヒヨロ／＼として。松兵死にまするわいなう。ト頭を押へて見得。よろしく廻り道具。

造り物。二重舞臺。金襴。上手。折廻して障子屋體。橋がかりの間。落ち間。柴垣あり。二重舞臺に。土岐之助。

満月。着附けの上に。浴衣。襷がけにて。待宵。秋空。桂女。十六夜。いづれも傾城の形の上に同じく浴衣。襷にて餅を取りある。平舞臺に岩平。蟲賣り露八。餅を搗きある。この見得。碓の鳴り物にて道具とまる。

土岐サア／＼。餅が搗けたら。皆食うたがよい。露八我れらは。矢張り酒の方がようござります。若平おらも酒がよいぞ。土岐成る程。そりや酒でなければ始まらねど。この間のモヤ／＼から。暫らく遠慮せいと事。元の起りは酒の業ぢやによつて。酒を止められた。そこで餅搗きと出かけたのぢや。また氣が替つてよいではないか。女官アイ。さうござんすわいなア。露八どうぞや。今の機勢は。番土衛へは華宗が參つたやうなものぢや。昔々とは。又どうして。

て。露八ハテ。えらい宗旨違ひぢや。昔々ハ、ト笑ふ。ト此うち。向うより大弼出る。金兵衛。軍次。團作。障子。いづれも衣裳上下にて附き添ひ出る。金兵衛。見さつしやれ。いづれも。性懲りもなき若殿の身持ち放埒。軍次遠慮のうち。酒を禁じられたとて。餅搗きのほたへ。團作イヤモウ。取り所もなき儀でござる。大弼ハテサテ。よくござる。何事も某が胸中に。サアいづれも。同道仕らう。ト本舞臺へ来て。並よく並び。大弼土岐之助さまには御遠慮のうち。御氣鬱と存せしに。思ひの外の御機嫌にて。大悦に存じます。土岐ア、また唐橋が。けうとい顔で。折角面白いに興が覺めた。大弼イカサマ。我れ／＼に心置きなく。また座敷を替へて御遊興遊ばされ。随分ともにお疲れの出ませぬやう。土岐そんなら奥へ行て。酒でなうて餅にせう。皆々サア。ござりませ。ト唄になり。土岐之助。満月。女形皆々入る。露八。岩平も附いて入る。あと合ひ方。四人大弼さま。軍次その意を得ざるこの場の仕儀。矢張り。土岐之助どのに放埒を勧める。御所存でござりますか。大弼イヤ。全くさにあらず。表向き遠慮の土岐之助に酒を禁じたれど。さのみ放埒とも申し難し。まこと放埒。馬鹿者に仕立て上げるは。兄右兵衛之助。この頃傾城の明石を寵愛のあまり。館へ呼び入れ。晝夜を分たぬ遊興。右兵衛が癖として。大酒を好みて心亂れ。近習。小姓を手討ちにする無道の行跡。今日。上使お入りのその座に於て。上使へ献す杯にて。右兵衛に大酒させ。悪しき身持ちを上使へ見せなば。忽ち自滅は目前。軍次すりや。大殿を自滅させ。金兵家督は土岐之助と定め。團作これも同じく。放埒を云ひ立て。件當家の叔父君たる貴殿なれば。網干家は。ズル／＼ベツタリ。大弼ヤレ。音高し。いづれも。密かに。ト皆々こなし。大弼荷擔の各々始め。近藤軍八にさへ。今まで隠せし親子の身の上。先年當家に亡ぼされし赤松の無念を受け継ぎ。何卒。網干家を押領せんと窺ふ其うち。先殿の奥方に男子出生。産後の惱みに産家の騒ぎ。その頃。某が妾にも一人の男子を儲けしが。その紛れに幼な子を取替へ置き。先殿の落胤は人知れず害せん爲。阿波の金十郎と云ふ者を語らひ。彼れに渡し。當家の弟土岐之助どの。某が實の胤でござるわい。軍次すりや。

まりました。ト關屋。こなしあつて。關屋流石は。お殿様の御簾中。唐橋さまのお娘御ほどあつて。格氣妬みも遊ばされず。それ程までに。お殿様を大切に思し召す御貞節。明石どのとやらいふ傾城も。仇に思ひはさつしやるまい。それにつけ。わたしが存じ寄りまするは。廊の女郎は。多くの人の肌を觸れ。萬の情を知るものなれば。あなたが勅答のほのくの註解。膝とも談合とやら申す世の例もござりますれば。只今。この所へ呼び寄せ。問答を遊ばされましたらば。自然。勅答の便りとも。なる事があらうかと存じまする。磯浪成る程。關屋さま。そりや好いお思し召し。お傾城と奥様の問答で。閉口さすが。せめての腹癒せ。兩人こりや。よからうかいな。須磨ハテ。騒がしい女ども。自らへ勅説ありし五文字の註解。餘人に談合したとあつては。關屋何も濟まぬ事はござりませぬ。マア。わたしにお任せなされて下さりませ。ト見付けの襖の内より。満月お傾城の明石さん。連れまして行きやんせうわいな。ト花やかなる合ひ方になり。満月。衣裳襦袢。傾城の形。傾城明石。振り袖衣裳。襦袢。桂女。十六夜。待宵。秋空。皆皆傾城の姿にて。明石に付き添ひ出る。トお須磨の方。此うち眞中の二重舞臺へ下りる。關屋付き添ふ。明石。満月よろしく並ぶ。平舞臺。上手に磯浪。滑風。入江並ぶ。各々よろしく座定まりて。お須磨の方こなしあつて。須磨さては其方が。殿様に思はれし。お傾城の明石どのか。自らは右兵衛が妻。須磨の方といふもの。この後は互ひに心置きなう。陸まじく頼みまする。明石これはマア。御勿體ない奥様のお詞。賤しいこの身で殿様の。お側を穢し参らす段。さぞかし。お憎しみもあらうかと。冥加恐ろしう存じまする。關屋ハテ。殿様の御酒宴のお相手ならば。例へ幾百人の傾城達を招かるゝとも。妬み給ふ奥様ならず。その事はちつとも遠慮せぬがよいぞや。満月流石は御家老様に連れ添はされし御身。よしなのお執成しは嬉しうござんす。そしてマア。明石さんを。呼ばしやんしたは。なんの御用でござんすえ。ト關屋。よろしくあつて。關屋イヤ。その儀は別でもござらぬ。定めて屋敷の噂にも聞いてあやう。お傾城。懇話よりお勅説御下解遊ばされ。當國に召居ます人丸の神託。ほのくんと。明石の浦の御歌。是れかくれ

ゆく舟おしぞ思ふと云ふ。この歌の初めの五文字。ほのくんと云へるは眼が。人丸の神託にして。御家にも。ふたに讀み出づる事を禁じ給ひ。世々の先達も。ほのくの説。まち／＼にして。未だ治定なさざるところ。當今様。歌道の極意を探り給ふにつき。ほのくの神祕を。この網干家より註解して。觀覽に供へよとの勅定。然れども。一家中に誰れあつて。勅答申す人もあらざるゆゑ。これなる奥様。是非勅答申し奉るに極まれども。未だそれとの治定もなし。さるによつて。其方家は萬の事に物馴れし身の上なれば。もしや思ひ當りし事あらば。心の隔てなく。上の五文字の註解がしてもらひたさに。招いだのぢやわいな。トこの時。磯浪。ツカ／＼と出て。磯浪ア、これしきの事に。大勢の傾城達を呼び寄せ。それまでもない。ほのくの註とあるからは。ほのくは夜明け。註は鼠の事でないかいな。腰臂また磯浪どの。嗜なましやんせいな。磯浪わしや又。さうかと思ふ。ト笑ふ。此うち満月。こなしあつて。満月イヤ。申し。關屋さまとやら。お歴々の奥様はじめあなたは即ち。御家老の御内室。そのお歴々が打寄つてさへ。判斷のならぬ五文字の註を。元より賤しい君傾城に。相談なされう筈はない。この満月が存じまするは。こりや大方。お前様方が打寄つて。爰に居さんす明石さんへ。難題を云ひかけて。もしや。その五文字の註解が首尾よく出来たらば。その旨を勅説して。奥様のお手柄とし。また明石さんに。和歌の心得が無い時は。大勢寄つて物笑ひとし。恥をかゝせて殿様の御前を遠ざけんといふ。お前方の企み事でござんせうがな。關屋ア、コレ。満月どのとやら。そりや。こなさんの氣の廻り。ほんに遊女といふものは。多くの人に肌觸れて。形に似合はぬ。心のさもしいものぢやなア。満月ホ、。こりやをかしい事を聞くわいな。傾城遊女が形は作れど。心はさもしいと仰しやれど。丁度いま論ずる歌も同じ事。形を作つても。肝心の心が實でない時は。名歌とは云ひませぬ。關屋そんなら。其方衆のかざる姿も。満月お前の仰しやる心も。關屋實と。満月實を。二人比べて見せう。ト兩人。キツと云ふ。明石は始終。氣の毒なるこなしにて。満月が立つて行かうとする襦袢の裾を留めるを。ちよつと振り切る。此うち。お須

註解。殿様より自らへ仰せ付けられしところ。家の傳書紛失ゆゑ。今に心を苦しめ居ります。この事も果さず。此方から暇を取らば。歌の道に暗きゆゑ。五文字の註解が出来ぬゆゑ。是非なく暇を取りしと殿様の思召し。傾城達の物笑ひも恥かしく。註解を仕負ふせたら。その時こそは暇を願ひ。ト大弼。心に領づき。あたりを見廻し。懐中より。袱紗包みの祕書を取出し。お須磨の方に渡し。大弼早く勅諭の註解いたせ。トお須磨の方。不思議さうに見て。須磨これは。大弼定家の傳書。餘材抄。須磨エ、ト悔りして。須磨をんなら。これが餘材抄とな。トこなしあつて。須磨これがどうして。あなたの手に。ト大弼。こなしあつて。大弼斯様な事もあらんかと。かねて岩平に申し付け。盗ませ置きしが計らずも。我が娘の役に立つて。先づは安堵。片時も早く勅答して。親の詞に任せ。右兵衛と離縁いたせ。須磨畏まりました。大弼そんなら娘。須磨父様。大弼首尾よく致せ。ト唄になり。大弼よろしく心意氣あつて。奥へ入る。あと合ひ方。お須磨の方。いろ／＼こなしあつて。須磨エ、恨めしい殿様。自らは露聊かも恨む心なく。お心に叶ひしものなら。いつまでも御寵愛あれかしと思ふに。何科あつて自らを。殺さんとは思召す。エ、聞えませぬ。つれないお心でござりますなア。ト泣く。この時。最前磯浪が落し置いた状を見て。不思議さうな顔して。ソロ／＼と歩み。右の状を取上げて見て。須磨お須磨の方さまへ。浦の松より。ト読み。合點のゆかぬこなしにて。膝を叩き。須磨浦の松とは。あの裏門の松兵衛とやらいふ老人。この程月見の折から供に連れし者なるが。その外に差當つて覚えもなし。又あの老人が。何用あつて自らへ。文を送りし事なるぞ。合點のゆかぬ。何にもせよ。ト心得ぬこなしにて。封じを解き。文を開き見て。悔り。須磨ヤア。こりやコレ自らへ。戀を仕掛ける艶書の文體。ト腹の立つやうにて段々読み。須磨エ、門番づれ。下郎の身で。艶書を送るも。これも矢張り殿様がつかないゆゑ。下郎までに侮らるゝか。エ、腹の立つ下郎め。恨めしいは殿様。トきつとなつて。泣き落し。また不思議さうに。狀の末の方を讀み。合點の行かね心意氣にて。向うをキツと見る。この模様よろしく。道具廻る。

造り物。以前の二重舞臺。金襴にて。大弼。軍次。金兵衛。伴藏。團作。並よく並びある。平舞臺。よき所に浪平。露八を責めてある。以前の返しの模様にて道具とまる。

大弼すりや。先刻より未だ。白狀を致さぬとな。浪平イヤモウ。斯様に手ひどく責めますれど。何も存せぬ／＼とばかり。ハテサテ。死太い奴でござります。露八サア。どのやうに仰しやりましたも。知らぬが定でござります。どうぞお歸しなされて下さりませ。侍四やがて御上使のお入りとござります。大弼ナニ。御上使は。最早當地へお着きとな。いづれも。魚相なきやう。心を付けられよ。四人畏まりました。浪平サア町人め。白狀ひろげ。ト手厳しく責める。此うち。バタ／＼にて向うより上下の侍ひ。走り出て。花道よき所にて。侍ひハツ。申し上げます。最早御上使の御入りとござります。ト云ひ捨て入る。浪平サア。白狀ひろげ。トまた向うより。バタ／＼。上下の侍ひ出て。同じくよき所にて。侍ひ最早御上使。御門前まで。お入りでござります。大弼ナニ。御上使には。最早門前へお出でとな。侍四早くお出迎ひ。侍ひハア。ト走り入る。本舞臺の人数皆々よろしくあつて。又バタ／＼にて。向うより上下の侍ひ走り出て。侍ひ御上使の御供。大勢御門前に控へゐられ。最早御上使には。お館へ御入りあつたとの儀でござります。ト皆々悔りして。皆々何がなんと。大弼エ、狼狽へ者。何を云ふ。とくと門前の様子を見て參れ。侍ひハツ。ト走り入る。此うち本舞臺の人数よろしくある。又バタ／＼にて。上下の侍ひ三人。一時に走り出て。侍ひ上使の御家來に段々尋ねましたところ。矢張り疾より御入りなれば。館の内を末々まで。吟味せよとの儀でござります。大弼ナニ館の内を末々まで吟味せよとは。ハテ。合點のゆかぬ。浪平疾より上使には。御入りとあれば。侍皆もしや。この蟲賣りが。大弼御上使さまではあるまいか。ト皆々。審かしきこなし。よき時分に。露八。こなしあつて。繩を引ツ切り。キツとなつて。露八家中の者。さぞ合點がゆくまい。鎌倉よりの上使。松倉内記。疾より當地に着いたした。

皆々ヤア。ト胸りする。内記家來。大小。侍ひハア。ト上下の侍ひ。大小を差出す。露八。こなしあつて。二重舞臺へ直る。此うち皆々。敗亡して。平舞臺へ下り。平伏する。土岐之助も出て。いづれも座定まる。土岐鎌倉よりの御上使とあつて。遠路の御光駕。大弼殊に我れ／＼が。先刻よりの無禮の段々。土岐たゞ幾重にも。御宥免の程を。皆々偏へに願ひ奉る。ト皆々平伏する。露八の内記。こなしあつて。内記當網干家の家風よろしからざる趣き。鎌倉管領に相聞えしゆゑ。この度。家督定めの上使を承はる。この松倉内記。先日より密かに當國に参り。一家中の善悪は云ふに及ばず。兄右兵衛之助。弟土岐之助兩人が身持ちまで。詳しく存じ罷りあれば。いま改めて云ふに及ばず。イザ。家督定めの舊例に任せ。人丸の烏帽子。歌道傳授の祕書。國次の刀。早々内見いたさう。トきつと云ふ。土岐之助。大弼こなしあつて。大弼成る程。網干家の重寶三品の寶。家督定めの節。御上使の御内見に入れ。鎌倉へ持參あるが古例なれども。御覽の如く。兄右兵衛。所勞と偽はり引籠り。傾城明石を寵愛のあまり。晝夜を分たぬ酒宴遊興に連綿たる網干の家風を失ひ。剩さへ。上使内見に入れ奉るべき寶は。悉く紛失。軍次その詮議いたさうとせせず。金兵衛城のみに心を移し。伴藏イヤモウ。かゝつた事ではござりませぬ。内記すりや。某が見聞せし如く。家の寶も其まゝに。大弼打捨て置いたる右兵衛之助が行跡。皆々誠に他愛はござりませぬ。ト花道の戸屋の内より。右兵衛詮議の申し譯。右兵衛之助。それへ參つて御上使に對面せん。ト序の舞になり。向うより右兵衛之助。長上下。近習小姓引連れ出て。花道よき所にて一禮。よろしくあつて二重舞臺。下座の方にゐる。各々よろしくある。右兵衛先刻より次の間に差控へ。様子は残らず承知仕る。御上使には。先月より當國へ御下向あつて。網干の家風。家中の善悪。残らず御覽の上は。今さら申し上ぐるに及ばず。まつた某。先頃より奥殿に引籠り。傾城を呼び寄せ。酒宴に長ずる體に見せたるは。深き仔細のある事。この場に於て。具には申し上げ難し。何はともあれ。家督定めの砌り。内見に供へる人丸の烏帽子。傳授の祕書。國次の刀。紛失などとは跡方もなき事。奥殿に於て御覽に入れ奉りませう。軍次すりや。

三品の寶。別なく。大弼酒宴と見せしめ偽はりとな。右兵衛ハテ。叔父御どの。御心懸てござつたア。ト諍るやうに云ふ。皆々合點のゆかぬこなし。大弼三品の寶。紛失と思ひの外。別條なきは先づ安堵。然らば。常家の古例の如く御上使のお杯。早く用意いたせ。ト内より小姓の聲。小姓ハア。ト三方に大杯。長柄の銚子持ち出て。内記と右兵衛之助の間に直す。大弼こなしあつて。大弼他門にては。家督定めのお杯。御上使より戴くが法なれども。この網干家に限りて。家督主より御上使へ奉る古例なれば。右兵衛之助どの。杯を取上げ召され。右兵衛成る程。家風はさる事なれども。第一。御上使への無禮と云ひ。殊に某。一つの癖あつて。酒氣に乗じ。心變るゆゑ。堅く嗜み罷りあれば。先づ御上使。一獻召上がり下されませう。大弼ア。イヤ／＼。それでは古例が違ひますぞや。内記イカサマ酒に悪しき癖ある事。聖人もこれを誡しめ給ふとは云ひながら。家風もだし難し。大弼家の古例が相違しては。下の政道立たず。軍次いつは兎もあれ。今日は。伴藏是非々々お取上げ。敵皆遊ばされませう。大弼ソレ。伴藏。お酌いたされよ。伴藏畏まりました。ト二重舞臺へ上がり。三方の杯を右兵衛之助の前に直す。右兵衛之助こなしあつて。右兵衛然らば。家風の如く杯を試みます。御上使失禮の段。御免下さりませう。ト杯を戴く。伴藏。銚子を取つて酌する。大弼。氣を焦ちて。大弼いつは兎もあれ。見事に召上がられませう。ト皆々勧める。右兵衛之助。大杯にて見事に飲み干し。こなしあつて。伴藏を見事にポンと切つて。その身も正氣を失ふ模様にて。ウンとこける。皆々よろしくある。内記もこなしあつて。内記ハテ。聞きしにまさる癖ある酒。その身をこれを憤みても。家風とあれば力なし。酒氣散じなば亂心も納まらん。暫時の容赦は致しくれう。土岐すりや。御上使のお情にて。浪平御容赦下さりまするとな。大弼御上使様には。暫しの間。奥殿へ御入りあつて。土岐ゆる／＼御休息下さりませう。内記いづれも案内。皆々まつ。お入りあられませう。ト太鼓譟ひにて。内記。土岐之助。大弼。軍次。團作。金兵衛。皆々奥へ入る。後に浪平残り。いろ／＼こなしあつて。銚子に紙を當て。右兵衛に枕をさせ。あたり心に配る模様あつて。

浪平下リヤ。部屋へ行かうか。ト橋がかりへ入る。ト團作。軍次。奥より窺ひ出て。兩人ちよつと囁き。右兵衛之助の側へさし足して兩人。一時に切らうとする。ト右兵衛之助。勿ねかへし。ポン／＼と見事に兩人を切る。ト橋がかりより浪平。走り出て。手水鉢の水にて右兵衛之助の血刀へ水を流し。手拭にて見事に拭く。この間。兩人とも始終無言にてよろしくあるべし。此うち岩平窺ひ出て。右兵衛之助に切りかゝるを。ちよつと立廻り。見事に平舞臺へ投げると。岩平また。切らうとするを。浪平。立廻りにて。岩平を見事に取つて押へる。右兵衛之助。殺害いたすな。浪平ハッ。ト早細かける。この見得よろしく道具廻る。

造り物。幕明きの裏門の體。松兵衛。以前のまゝ倒れ居るを。磯浪呼び活け。介抱してゐる。この模様にて道具とまる。

ト磯浪いろ／＼あつて。磯浪コレ。松兵衛どのいなう／＼。ト呼び生けると。松兵衛。氣の付いたこなしあつて。松兵衛。お腰元様か。そして。お返事がござりましたかな。ト磯浪。氣の毒さうに。磯浪イヤ。まだお返事はないわいな。松兵衛どうで此やうな下郎めが文。お取上げはなさりはせまい。ア、そんな事なら。最前から呼び生けずに。殺さつしやつて下さりましたがようござります。磯浪エ、この人は。滅相な事云ふわいなう。あのまゝ置いて死にやるであらうと思つて。それでわしが。呼び生けたのぢや。禮は云やらいで。却つてねだると云ふ事があるものかいなア。ト少しねだるやうに云ふ。松兵衛成程。こりやお前様が御尤もござります。ほんに。深切になされて下さりましたお前様。この親仁も。この體では。どうで本腹も致しますまい。アノ向うにある唐辛子も。お前様の御好物ゆゑ。わたしが形見に上げませう。持つてお歸り下さりませ。ト哀れさうに云ふ。磯浪。こなしあつて。磯浪ア、其やうな事はよしにして下さんせ。そしてマア。氣の弱い。なんのこれ程の事に。死ぬるものかいなア。藥を飲んで。早う。ようなつたがよいわいなう。松兵衛イヤ。もう折が折つたとて。生き甲斐もないこの體は。磯浪また其やうな事を

云やる。コレ／＼。今の間に。好い返事がある筈ぢやわいなア。松兵衛エ、なんと仰しやる。お返事をやらうと仰しやつてござりますか。磯浪オ、後方。お返事があるわいの。松兵衛アノ。お返事を下さりますか。ア、嬉しや。どうか。ト胸を押へ。松兵衛がよくなりました。ト喜ぶ。此うち臆病口を見て。磯浪。悔りして。磯浪南無三。見附けられたら悪い。トいろ／＼うろたへる事ある。松兵衛も共にウロ／＼する。磯浪。二枚折りの枕屏風を取つて。橋がかりの方へ持ち行き。姿を隠し。蹲まる。トよき時分。臆病口より關屋出て。關屋裏門番の松兵衛といふは。其方の事か。松兵衛ハイ／＼。門番の松兵衛は。この親仁めてござります。關屋奥様のお返事。ト松兵衛悔りして。松兵衛ニ。奥様のお返事がござりましたか。ト喜ぶこなし。關屋。狀を出し。關屋この文は。其方の手跡であらうかな。ト松兵衛に見せる。悔りして。松兵衛ハイ。ト手をモヂ／＼する。關屋其方こと。殿様より切り米頂戴して。御門の番を承り。大恩ある主人の奥方へ。艶書を送る段。身の程を知らざると云ひ。殊に年にも似合はぬ不届き者。定めてこの文。取次ぎせし者あらん。なれども表立つて詮議をなさば。世上の聞え。網干の家風よろしからずと。思はれんもうたてしく。此まゝ穩便に差許す間。以後はキツと慎んでよからう。トきつと云ふ。松兵衛。悔り。磯浪も氣味悪さうにする。關屋。艶書を松兵衛に渡し。ツイと入る。磯浪。ソロ／＼出て。胸を撫で。磯浪大方。こんな事であらうと思つた。全體マア。よい年をして。あらう事か。奥様へ附け文するといふは。みなお前の誤まり。また取次ぎしたわたしも龜相ぢや。すんでの事に。お暇が出やうも知れぬ。ヤレ／＼。恐ろしや／＼。ト云ひ／＼。松兵衛の知らぬやうに。鉢植ゑの唐辛子を取つて懐中へ入れる。松兵衛。狀を取上げ。恨めしさうにする事。いろ／＼あつて。また不思議さうに見て。松兵衛奥様より戻されしこの狀。おれが紙とは違つてある。封じ目も斯うてはなかつた。ト審かしき心意氣。いろ／＼あつて。ソツと封じを解き。狀を見て。松兵衛ヤア。こりや中には女の手跡。ト開き。松兵衛奥様のお返事。ト悔りして喜ぶ。磯浪。悔りして。磯浪ナニ。お返事があつたかや。ト松兵衛。口の内にて狀を讀む事。

いろ／＼あるうち。嬉しき心意氣あつて。松兵衛なら今宵。奥庭まで。忍んで来いとある。このお文。ト磯浪。状の端を見て。磯浪ほんに。奥様の御返事ぢや。ト松兵衛。嬉しき顔つきにて。手を合せ。向うを拜む。磯浪も思はず拜む。此はずみに唐辛子。バラ／＼溢れるを。磯浪。悔りして拾ふ。松兵衛。この途端よろしく道具廻る。

造り舞臺。一面高二重。白木造りの御殿。西折廻りし屋體一面の金襴。欄間通り一面の簾。但し東西は下がりあり。庭に一面の萩の花見事に咲きあり。すべて。網干家奥庭の模様。高二重の正面に。お須磨の方。衣裳襦袢にて。腰元二人附添ふ。琴一面直しあり。この見得。静かなる琴唄にて道具とまる。

須磨自らは琴の調べに。秋の夜すがら。憂きを慰めん。其方衆は。次へ立つて休息しや。腰元畏まりました。ト正面の簾下りる。ト直ぐに静かなる琴唄になる。かすかに蟲の音。物淋しき模様よろしくある。ト向うより松兵衛。頬かむりして一本差し。弓の折れを腰に差し。そろ／＼と出て。あたりを窺ひ見廻す事。いろ／＼あつて。蹴爪つき。ドツコイととまり。顫ふ模様。松兵衛。今夜に限つて。この胴慄ひ。ツイに來た事のない奥のお庭。トあたりを見る事。いろ／＼あつて。松兵衛。あそこが奥様のお座敷さうな。あの琴の音。トそろ／＼踏み段の側へ探り寄り。上からうとする。ト内より。右兵衛。誰れぢや／＼。ト聲かけるうち。正面の簾上がると。右兵衛之助。着附袴にて手燭を袖に隠てゐる。松兵衛。悔りして。逃げようとする。此うち腰元二人。臆病口より走り出て。腰元捕つた。ト松兵衛に細かけ。下座の方へ控へる。右兵衛。出かした。腰元侍ひ衆に申し付けませうかな。右兵衛。それには及ばぬ。身共が手討ちに致す。必らず。家中へ沙汰いたすな。腰元畏まりました。右兵衛。手燭にて松兵衛の顔を見て。いろ／＼臆病口へ入る。右兵衛之助よろしくあつて。駈下駄を履き。平舞臺へ下り。手燭にて松兵衛の顔を見て。いろ／＼こなし。右兵衛。門番の松兵衛よな。松兵衛。ト慄うてゐる。右兵衛の身の料は云ふに及ばず。覺悟よくば。手

討ちに致す。それへ直れ。松兵衛。ト慄へ／＼。平舞臺。正面より所へ直る。右兵衛之助。こなしあつて。手燭を前に置き。刀をスラリと抜き。細目を切る。これまで始終。松兵衛。右兵衛之助の顔を見て。松兵衛。ト不思議さうに云ふ。右兵衛之助。重藤の弓の折れを差出す。右兵衛。この品。心覺えがあるか。ト松兵衛。取つて悔りして。松兵衛。どうして。これをあなたが御所持。右兵衛。松兵衛。松兵衛。なんと。右兵衛。懐かしう存じます。ト篠入りの合ひ方になり。兩人よろしくあつて。右兵衛。多し事ながら。この親こそは。其方様のお身の上。知る筈なれども。其許さまは。どうして證據のこの弓を。ト不思議さうに云ふ。右兵衛之助よろしくあつて。右兵衛。成る程。御不審は尤も。先日。他行の折から。裏門より歸館せしに。番小屋の内に重藤の弓を掛け置きしを。合點ゆかずと。よく／＼見れば。三つに折れたるその片々。さては我が所持なす弓の折れに。變らぬ重藤を掛け置く。主が年配まで。符節を合はす實の父と。推量はしながらも。いま當國の主と呼べる。この右兵衛之助。迂闊に親子の名乗りもならず如何はせんと思ふ折。幸ひ奥への艶書の筆。我が臍の緒と年月は隔つれども。紛ふ方なき同筆なるゆゑ。さては我が推量に違はじと。年月焦る。實父のお顔。拜みたくは思へども。それさへ明らさまには申し出し難く。奥に云ひつけ。返事を書かせ。今宵この奥庭へお忍びを待ちうけ。飛び立つばかりの心を鎮め。腰元どもに繩を掛けさせ。そのみならず某が。殺害なす體に見せかけしは。計略とは云ひながら。現在の實父へ。刃を振り上げし不幸の段々。幾重にも御容赦下され。親仁さま。お懐かしうござります。ト取りつき泣く。松兵衛も大泣きにて。腰より重藤の弓の折れを出し。松兵衛。流石は網干家のお殿様。素性こそ賤しけれども。氏より育ちと明智の程を感じました。思ひ廻せば廿餘年の昔語り。一通り聞いてたべ。某が本名は。淺羽久之進といふ武士なるが。若年の頃。武藝を勵み。その頃。射術の達人と呼ばる。弓削の某といへる人の門人となりしが。フト師弓削どの。息女勝野と云へるに契りをこめ。一夜が二夜と度重なり。遂に師匠の耳に入るより。物堅き弓削どの。兩人が不義を憤りたまひ。有り合ふ重藤

の弓を以て。某と勝野どのを散々に打ち給ひしが。さしにも強き重藤も。三つにホツキと折れたるを。親の形見。師匠の賜物と。所持して本國を立出て。紀の國那智山の麓。清水村といふに。ちとの由縁あれば。勘當の身の夫婦が住み。月日を送るうちに。勝野が平産なせしは。淺ましや双子の男子。世間の人の手前も恥かしくと。兄松太郎は夫婦の仲に養育なし。弟の曾根太郎といふは。コレ。あなた様の幼名。人知れず捨て置きしを。幸ひなるかな。御當家の先殿願望あつて。熊野權現へ參詣しましたし。幼な子の泣き聲を聞きつけ給ひ。これこそ權現より授け給ふ。我が國郡の主なりと。大いに喜びたまひ。連れ歸り給ふ。始終の様子をとくと見届け立歸り。勝野にも右の様子を話しければ。彼れも安堵なし。その後。仕官の望みあつて鎌倉へ志し。親子三人清水村を立出て。東海道へ赴むく旅宿。その夜俄かに大地震に。所の騒ぎ大方ならず。案内は知らねども逃げ出し。親子は散りく。夜明けて勝野。松太郎を尋ね探せど。かいくれに行くへ知れず。生死の程も心ならず。尋ね侘びたる廿餘年の其うちには。この如く。次第に積る老の悲しさ。世に便りなう思ふにつけ。行くへの知れぬ妻子の事は是非もなし。せめては在所の知れてある曾根太郎。今生の思ひ出に。一目逢うて死にたいと。このお國へ下りしかど。我が子ながらも。今では網干の惣領と侍くあなた様。迂濶に親子の名乗りもならねば。縁を求めて。裏門番の奉公に入込み居れば。お目に止まることもあらうかと。長押に掛け置く重藤の弓の折れは。あなたにも所持ある筈と。思ふに違はず今宵の對面。よう顔見せて下さりました。ト取りつき泣く。此うち。高二重の簾。一面に巻き上がる。正面にお須磨の方。上手の屋臺には大弼。下手の屋體には内記。但し。衣裳上下にて兩人の様子を窺ひ。立ち聞きしてゐる模様。よき所にて。簾一面に下りる。右兵衛之助。憂ひの模様。いろ／＼あつて。右兵成る程。我が身は當國へ拾はれ。養ひ子となり。殊に大恩ある養父先殿。臨終の御遺言にて。詳しく聞く。その時賜はりし重藤の弓の折れ。實父が自筆のこの牌の緒。心ありげに弓の折れを添へあるからは。賤しき者の胤にもあるまじ。心を付けて實父に巡り逢ふべしと。瘰癧るがなき今際のお誦。思ひ

當りしあなた様は。紛ふがなき我が實父。松兵衛はぬあなた。我が子の曾根太郎。右兵衛の體裁の弓の折れ。松兵衛しつくり合つた。ト弓を合はして見て。松兵本はづ。右兵末はづ。松兵親子の縁は重藤の。右兵弓は折れても再びに。松兵巡り逢うたるこの嬉しさ。右兵親人様。松兵お悴様。右兵ようマア無事で。二人ござりましたなア。ト兩人手を取り。右兵衛之助は松兵衛を上座へ直し。その身をへり下る。この模様。いろ／＼拍子よろしくあつて。ト兩人泣き落しになる。松兵ア、嬉しや。我が身の望み達したれば。この世に心残らぬ老人。サア。スツパリと。お手討になされて下さりませ。右兵ア、勿體ない。親子の名乗りせし上にて。なんと双が當てられう。松兵イヤ。後の親を親とせよと。聖人の教へ。あなたは一國一城の主。不義の科ある門番の松兵衛め。お手討になされて下さらねば。政道が立ちますまい。右兵うたてき武門に交はり身を立てんとて。現在の親を殺されうか。例へ如何なる賤しき暮らし。賤しき世渡りするとも。親子一緒に居るこそ樂しみ。武士を捨てれば。不義を咎むる政道もいらじ。松兵イヤ／＼。長うも生まぬ老の身を捨てゝも。我が子に出世をさせるが本望。右兵この身の榮耀は望みにござらぬ。松兵イヤ。わしを殺して下され。右兵どう仰しやつても。この儀ばかりは。松兵ならずば。いつそ。ト松兵衛。一本差しにて死なうとするを。右兵衛之助留めて。右兵ア、申し。早まつた事なされますな。松兵そんなら。得心して下さるか。右兵サア。その儀は。松兵サア。右兵サア。二人サア／＼。ト附け廻しになる。この前より。臆病口に大弼。窺ひ出て。この時。大弼様子は残らず聞いた。さては。右兵衛之助は拾ひ子にて。實父といふは。松兵衛よな。下賤の者の胤。網干の家名は繼がされまい。トきつと云ふ。奥より内記出て。内記委細は聞いたが。して。家督繼ぐべき者は。ト大弼よろしくある。右兵衛之助。松兵衛。平舞臺によるしくあるべし。大弼外ではござらぬ。舎弟土岐之助へ。網干家相續の儀。仰せ下さらば。有り難うござります。サア／＼。土岐之助さま。用意よくば。家督定めめ式。改めて御上使へお目見得なされませう。ト内より。土岐ハア、ト土岐之助。

鳥帽子。狩衣にて出て。平舞臺の上座へ直り。土岐當家の重寶。人丸の烏帽子に。即ちこれに。内記して又。残りの寶は。ト内より。須磨いま一品。差上げませう。トお須磨の方。衣裳襦袢にて。三方に袂紗包みの歌書を持ち出て。平舞臺の下座に控へる。土岐改めて御上使へ。一つのお願ひ。某が身持ち放埒ゆゑ。國次の刀。歌道の傳書。紛失いたせし申し譯は。ト手早く肌を脱ぎ。腹を切る。大弼。恠りして。大弼こりや。何ゆゑの御切腹。寶の申し譯なら。兄の右兵衛之助こそ。腹を切る筈。内記でも其方。只今。土岐之助へ家督相續と申したてはないか。大弼如何にも。内記さあらば。寶の紛失の科は。その身にかゝるゆゑ。速かに切腹せし段。出かしたく。土岐ハア。有り難きお詞。人丸の烏帽子。イザ。お受取り下さりませう。トお須磨の方。土岐之助。烏帽子。歌書を一緒に三方に載せ。上使の前に直し。よろしく下座に控へて。須磨人丸の烏帽子。歌道の傳書。紛失の代り。家に傳はる餘材抄。お受取り下さりませう。ト此うち。浪平。橋がかりより出て。浪平寶の盜賊。岩平が首。イザ御實檢。ト右兵衛之助の前に置く。右兵衛出かした浪平。ト云ひ。首桶の蓋を明け。岩平の生首を出す。此奴が所爲にて。國次の刀。傳書の紛失。内記それなる土岐之助は。大弼。其方の恠であらうな。ト大弼恠りする。内記先刻。何もかも聞き取りし上は。先殿の胤。實の土岐之助を尋ね出せよ。先づそれまでは。網干の家名は。右兵衛之助と定め。二品の寶。詮議のうち。百日の日延べ申し付ける間。寶揃は。改めて鎌倉へ參勤いたせ。右兵衛長り奉りました。トお須磨の方。よろしくあつて。須磨我が身の悪名。申し譯は。ト自害せうとする。松兵衛。止めて。松兵衛その科人は。この親仁。ト腹切る。右兵衛之助。恠り愁ひのこなし。此うち橋がかりより關屋。臆病口より。娘おきよ。振り袖の形にて出て。お家の家督定まる上は。傾城の明石と見せし私しは。清水李之進が娘おきよ。關屋殿様より。内意の御用勤めし上は。何卒。夫の敵討。出立のお願ひ。右兵衛成程。殊におきよには。云ひ掛けもある筈。巡り逢うて。助太刀を頼めよ。二人エ。有り難い。トおきよ。關屋兩人。拜む。大弼たとへ助太刀あるとしても。この敵は知れまい。何を置

據に敵の實名。ト内記。よろしくあつて。内記先達て渡し置いたる割り。弁は。體かに敵の手がかりぢやぞ。關屋御上使さまの御賜物。きよ亂獅子に牡丹唐草の割り。二人尋ね出して。お目にかかせませう。トこれにて大弼。ギツクリする。土岐之助。懷中より扇子を出し。土岐コリヤ。浪平。其方はこれより。實の土岐之助どのを尋ね出せよ。又。この一品は。相州箱根の邊にて。小割傳内と云ふ者を尋ね。我が最後の様子を語り。形見の扇子を渡ししてくれよ。ト浪平。ツカ〜と行き。扇子を受取り。下座へ控へる。浪平長りました。須磨我が身も。これより諸國をば。修業の旅の出立して。寶の在所。二つには。實の弟土岐之助が。菩提を弔らふが。せめて姉の役。土岐エ。嬉しうござります。いづれも。さらば。ト引き廻し。バツタリとこける。お須磨の方。愁ひのこなし。大弼。心意氣ある。松兵衛我れも追ツつけ。死出の道連れ。ト同じく引き廻す。此うち。金兵衛。窺ひ出て。金兵うぬ。ト右兵衛之助に切りかけるを。見事にポンと切る。皆々よろしくある。右兵一味荷擔の輩は。根ざらへ。大弼なにを。ト行かうとするを。皆々キツとなる。右兵御上使のお立ち。ト目禮よろしく。

三 つ 目 箱根山の場

造り物。平舞臺。一面の山幕。雪降りの體。上手に雪持ちの臺松。橋かゝりに相州領と書いた榜杭立てゝある。幕の内より傳内。狩人の形。切り株の焚火にあたり居る。幕の内より江戸下りの駄荷。また印し櫃などかつき。雲助。外へ出で。唄うたうて。花道へ入る。ト幕開く。傳内この箱根の山中も。斯う雪が降つては。とんと獵がきかん。まそつと火にあたつてみたら。獲物でもあらう。ト何なりとも。此やうな事を云うてゐる。ト臆病口より槍持ち與五助。袖合羽着て。鎗をかたげ。寒さうな風にて出て。

幕

傳内を見て。恠りし。與五ヤア。何者ぢや。うぬ。近う寄つたら。手は見せぬぞ。ト慄へ〜身構へして。槍持ち。槍を使はずと云ふは。下世話の譬へ。この槍持ちの與五助は。槍の一手も。心覚えがあるぞ。寄りやアがつたら。命がないぞ。ト傳内。これを見て。傳内ア、コレ〜。わりや何するのぢや。わしはそんな者ではない。與五ナニナ者ぢやない。與五でも。この夜中に出てゐるからは。旅人を惱ます山賊に違ひない。傳内成る程。さう思はんすも尤もぢやが。これを見やんせ。ト火繩の鐵砲に。獲物の兎の付いたるを與五助に見せる。與五フン。そんなら。貴様は狩人か。おりや又。山賊に出逢つたと思つて。罌丸までが縮み上がった。ヤレ〜。嬉しや〜。エ、心が落ち付いたら。俄に寒くなつた。齒の根が合はぬ程。胸慄ひがする。トがた〜慄ふ。傳内イカサマ。人の世渡り程。辛いものはない。おれが商賣の奥山稼ぎも。お前方の下り上りも。ほんに。仇な事ぢやごんせんの。與五イヤモウ。八ツ立ちで。雪道を歩くも辛いものだ。近頃無心ながら。おれも焚火にあたらしてくれぬか。傳内サア〜。爰へ来てあたらんせ。與五そりや。忝ない。ト槍を上手の臺松にもたせ置いて。捨ぜりふにて。火にあたる。ト臆病口より。笠持ち雁平。同じく。袖合羽にて。寒さうにして花道の附け際まで。トボ〜行くを。與五助見て。與五コリヤ〜。わりや。おらが仲間の雁平ではないか。ト雁平。與五助の顔見て。雁平オ、與五助か。與五オイヤイ。おれは寒うてならないから。この男に無心を云つて。あたらしてもらうてゐる。てまへも爰へ来て。一あたりあたれ。連れ立つて行かう。雁平そりや有り難い。そんならお若い。暫らく御馳走にあづかりませう。傳内サア〜。遠慮なしに。あたらんせ〜。ト兩人。捨ぜりふにて。火にあたる。傳内お前方は。マア。いづくの殿様に附いて。鎌倉へ下らんすのぢや。與五おらが御主人は播州だ。傳内フン。播州はどこでござんす。雁平網干でござります。傳内そんなら。この間から噂のあつた。網干の参勤でござりますか。先殿の御死去の後。今の殿様。右兵衛之助さまとやらは。慈悲深

い。結納な殿様ぢやと。海邊筋での取り沙汰。その結納な殿様に奉公せらるゝお前方は。同じ中間奉公でも。其の影しみがあつて。仕合せぢや。随分大切にさんせ。與五なにサ〜。人の噂とは大きな相違。今の殿様。右兵衛之助といふは。おらと一緒に。色と酒とが大好物。その上。酒が過ぎると。段々気が荒くなつて。近習小姓を手討ちにする。無道者ぢやわいなウ。雁平今度の参勤も。泊りが遅うて。お立ちは早く。草鞋穿きかへて飯食ふ間もない程。急ぎの道中。おらが仲間は丸無茶だわい。傳内ハテナア。見ると聞くとは大きな違ひ。その又。右兵衛之助どの、御舎弟に。土岐之助さまといふのがあるとの事ぢや。その弟御も。この度一緒ににお下りでござんすか。與五サア。その弟御は。兄とは違うて。仁心深い殿様であつた。傳内サア。憐れみのあるお方ぢやと聞いてゐる。雁平その憐れみのある弟御は。ツイ死んでしまはしやつた。與五ならう事なら。兄御と代ればよい事ぢや。傳内ナニ。土岐之助さまには。お果てなされましたか。して。御病氣でもあつてか。與五サア。おらは中間の事だから。詳しい譯は知らねえが。ト腹切る眞似して。與五れきを。やられたのぢや。ト傳内。恠りして。傳内そりや。何ゆゑの御切腹であつた。與五ハテナテ。こちとらは譯は知らねど。これも矢ツ張り。兄の右兵衛どの、爲ぢやとな。傳内すりや。兄御の御無道ゆゑ。お痛はしや土岐之助さま。ト愁ひのこなし。雁平お前は。いかい愁歎の體。與五土岐之助さまとは。近付きかいの。トこれにて傳内。心付き。傳内ハテ。益體もない。網干家の弟御を。狩人風情か。なんの近づきであらうぞ。常々。慈悲深いお方ぢやと聞いたの。お果てなれたとあるゆゑ。二人それでかな。傳内ア、吹かんと燻ぼる。切り株ぢや。トこれにて紛らしてゐる。與五ヤレ〜。貴様のお庇で。寒さを凌ぎました。ト此うち。雁平。東を見て。雁平南無三。東が白んだ。二人こりや。忝なうござりました。ト兩人。禮云ひ〜向うへ入る。後に傳内。愁ひのこなし。傳内下郎が話しは。正直にも聞かれねども。兄御の無道。土岐之助さまの御最期。合點のゆかぬ。トいろ〜思案するうち。瀧六。狩人の形にて臆病口より出て。瀧六オ、傳内。爰にゐるか。今夜の雪では。獲物はない。もう仕舞うて

去なんか。傳内オ、瀧六か。おりや。もつと働らいてから。去なう。瀧六ハテ。もうよいわい。この雪では。自由に働らかれぬ。傳内この噂を。母者人に話したら。定めて案じさつしやらう。ト獨り言を云ふ。瀧六オ、イノ。母者人も案じてゐる。早う去んで休んだがよい。傳内明日は海道へ出て。實否を糺して見よう。瀧六そりや。去んでから。勝手にせい。ト始終こんなすかたんなせりふあつて。兩人。橋がかりへ入る。向ふより傳内女房おふさ。世話女房の形。雨笠を提げて。子役の常松の手を引き出て。ふきコレ。常松。雪道で滑りやんな。もう追ッ付けぢやほどに。静かに歩きや。トこんな事云ひ。本舞臺へ来る。ト臆病口より。雲生寺和尚。鼠の衣裳。檜笠。草鞋にて鉦を持ち。片手に鐵鉢を提げ出て。おふさと顔見合せ。雲生オ、これは傳内のお内儀かいの。ふきこれは。雲生寺のお住持さま。朝修行でござりまするか。雲生オイナウ。愚僧は寒中の朝修行ぢやが。お内儀はマア。ちつさを連れて。朝寒から。どこへ行くのぢや。ふきさればでござります。播磨の網干の殿様が。夜前三島泊りて。今朝この箱根を。お通りなさる。今度の參勤は。美々しい事ぢやとの噂を。坊が聞きまして。その殿様の行列が見たいと。夜前からせがむによつて。それで只今。連れて參りましたのでござります。雲生成る程。聞き及んだ今度の參勤。併し。この雪の山路を。子供を連れて行かうより。どうで爰へござるものぢや。爰らに待ち合はしてゐるがよいわいなウ。ふき成る程。左様いたしましたせう。コレ。坊。追ッ付け殿様が。爰を通らしやる程に。ちつとの間。待つてゐや。ト此うち。差し金の鳩。飛び来るを。常松。目早く見付け。常松アレ。あそこへ鳩が来た。母様。取つて下されいなう。ふきまた其やうなわやく云はんものぢや。お寺のお住持様が。お叱りなさる。ぞ。雲生コリヤ。あの鳩は。羽がひといふものがあるによつて。ヒヨイ。と。どこまでも飛んで行くゆゑ。自由に取らるゝものぢやない。常松イヤ。それでも。わしは欲しい。ふきコレ常松。よう聞きや。父様の殺生は。商賣なら是非がない。無益の殺生はせぬものぢやぞや。ト此うち雲生寺。鐵鉢の米を背き。鳩に拾はす。常松。鳩を取らうとする。鳩はあちこちとる。此うち殿

病口より。ハイ。と仰山なる聲をかけ。行列の先手使士。若黨。乗り物。だん。に出る。鳩。此うちへ逃げ込むを。常松。捕へんと追ひ歩き。行列の横切りする。先手。常松を捕へて。先手憎くき小兒。無禮の横切り。同切捨ては。お家の格式。ト兩人。切らうとするを。おふさ。雲生寺。惻りして。常松を圍ひ。ふきマア。お待ちなされて下さりませ。雲生頭是なき小兒の無禮。二人どうぞ。御料簡下さりませ。ト兩人。常松をかばひ。下に蹲まる。先手兩人。また切らうとする。ト乗り物の内より。大弼ヤレ。待て。ト聲かけると。皆々下座する。上下の侍ひ。乗り物の戸を明ける。ト大弼。ぶツ裂き羽織。野袴にて出る。家來。笠をさしかけ。挟み箱に腰かける。おふさ。雲生寺。下座して平伏する。大弼こなし。よろしくあつて。大弼委細残らず乗り物の内にて聞いた。イヤ。それなる兩人の者も。定めて噂に聞き及ばん。鎌倉管領家へ願ひを立て。參勤の道筋を妨げる者あらば。切捨てに致すならひ。取分け。この度の參勤は。右兵衛之助どの。家督定めの下向の供先。如何に頭是なき小兒なればとて。妨げを致せし者を。其まゝにし置かば。管領どのを蔑ろにするのみならず。網干の家風。衰へたりと。世間の人口もせき難し。不便には思へども。我が家風には更へ難し。トきつと云ふ。雲生寺よろしくあつて。雲生憚りながら。申し上げます。愚僧は。當所雲生寺と申す者。これなる小兒は。拙僧が檀家の者。先程からも申す通り。まだ頭是なき者と云ひ。昔より出家が命乞ひに出る時は。如何なる重き罪極まりし者にも。三衣に免じて。命を助くる古例もござれば。何卒。小兒の命。お助けなされて下さりませ。大弼成る程。頭是なき小兒とあれば。其まゝに差許す筋にもなるまいものでもない。ハテ。どう致したものであらう。トちよつと思案の心意氣。ふきもしも。この子に怪我過ちがござりましては。預かつた夫や母様へ。どうもわたしが。云ひ譯がござりませぬ。この子の代りに。わたしを。如何やうともなされて。この子の命。お助けなされて下さりませ。大弼イカサマ。女心に左やう思ふも尤も。計らふべき好き思案がある。雲生よろしくお願ひ申します。大弼手箱をこれへ。侍ハツ。ト乗り物の内なる手箱を。大弼の

側へ差出す。大弼。襦紗包みの小判と菓子。いろ／＼を。手箱の上に並べ。こなしあつて。大弼コリヤ。二人の者。よく聞けよ。いま目前に並べし二品。菓子を取れば。頭是なき小兒に定まれば。其まゝに差許す。また一品の金子に手を掛けなば。怨氣を知るゆゑ。頭是なしとは云ひ難し。さあれば立ち所に首を刎ねて。綱干の家風を立てん間。その旨。とくと心得よ。ト雲生寺。おふさ。顔見合せ。こなしある。先手コリヤ。坊主め。雲生ハイ。ト向うへ出る。先手エ、うぬではないわい。ト叱る。雲生寺コソ／＼と控へる。大弼コリヤ。小兒。怖い事はない程に。爰へ參つて。どちらなりとも。欲しい物を取れよ。ふさ必らず。お金に手をさへずと。雲生お菓子の方を貰うて来い。大弼ヤイ。坊主め。教へる事はないわい。雲生ハイ。トこそ／＼と控へる。ふさサア。常松。温なしうして。殿様のお側へ行て。ト菓子の方を指さして。ふさ早う行たら貰へる程に。行ておちやいなう。ト教へる。常松そんなら。どちらを取つても大事ないかや。大弼オ、才人な奴ぢや。爰へ来い。ト常松。ツカ／＼と行つて。常松わしや。これが欲しい。ト小判に手をかける。二人。悔りする。大弼。常松を切らうとする。雲生寺。ツカ／＼と大弼を留めて。雲生マア。マア／＼。お待ち下さりませ。大弼今となつて。何を妨げる。雲生イヤ。お詞が違ひます。トきつと云ふ。大弼ナニ。詞が違ふとは。雲生さればでござります。只今。あなた様が仰せらるゝには。頭是なき小兒に極まりたらば。命は助けてやらうと仰せられたでござりませぬか。大弼如何にも。雲生これなる小兒。うぞ。お慈悲にお助けなされて下さりませ。ト二人。いろ／＼詫び。常松を引きのけうとする。大弼馬鹿な事を。ト二人を突きつけ。また行かうとする。家來。支へる。此うち大弼。常松の首筋を握り。首をポンと切る。おふさ。悔りしてウンともの。雲生寺。恐れて下手に蹲まる。大弼。刀を納める。ト臆病口より。使ひ番源吉。走り出て。大弼に前ひ。雲生お先手に斬ありと思えまするゆゑ。臆病口を告げ知らせよと。臆病口より御説。大弼成る程。道筋を妨げし

無禮の者。家風に任せ。切捨てに致したる伊藤。兵衛。お使ひ番と間違ひたし。右兵衛之助どのへ言ひ申せ。使ひ番。御苦勞。雲生いづれも。おさらば。ト源吉。兵衛打連れ。臆病口へ入る。大弼。よろしくあつて。大弼よしなき事に。餘程の隙入り。ト云ひ／＼乗り物へ移り。大弼乗り物。やれ。家督ハア、。ト所知入りになり。行列の人衆。静々と向うへ入る。此うち。常松。吹替への死骸。切り首よき所に並べ置く。雲生寺。あと見送りて。おふさ正氣を失ひあるを見て。捨てりふ。いろ／＼あつて。雪を手にくひ。おふさの口に含ませ。介抱すること。いろあつて。雲生コレ。お内儀。氣を慥かに持たつしやれ。お内儀どのいなう。ト呼び生ける。おふさ。やうやう心付き。ふさオ、お住持様。常松は死んだかいなう。雲生イヤ。もう死んだどころか。なんの苦もなう。首をポンと切りをつたわい。ト泣く。おふさキツとなつて。ふさ我が子の敵。遠くは行くまい。追ひついてさうぢや。ト勢ひ込んで行かうとするを。雲生寺。慌てながら止めて。雲生待た／＼。マア。待たつしやれ。女の身で我が子を目前に殺され。無念。口惜しいと。思ひ詰めたは尤もぢや。けれどマア。よう合點しても見やつしやれ。相手は大勢。殊に大身。その中へ。女子たゞ一人。駈け込んだとて。なんて本望が遂げらるゝものか。コレ。お内儀。怒り事はない。敵は知れた綱干の殿様。いつ何時でも討たるゝ事ぢや。マア／＼待たんせ。ふさでも。トまた行かうとするを。無理に止め。雲生コレ。お内儀。いま勢ひ込んで行た跡で。不便や。ちつべいの死骸を。鳶や鳥の餌食。突きさすが。だんないか。ふさエ、。雲生マア。急ぐ事はない。差當つて。この死骸葬むるは。頼み寺の住持。わしが受取つた。ト死骸をおふさに抱かせ。切り首を載せて見る。トばつたりと落ちる事。いろ／＼あつて。そこらを尋ね。木枕を拾ひ。首を繼ぎ合はす。ふさア、コレ。お住持さま。其やうにしても。痛みはしませぬか。雲生エ、。なんの痛まうぞいなう。ふさ申し。これでは。頭がありやこりやでござります。ト雲生寺。首を向きかへる。をかしい風。始終おふさ。愁ひのこなし。雲生寺も。愁ひの模様にて。最前。同勢が忘れ置いたる菅笠。二蓋を取上げ。銅鑼の心持ちに

て。両手に持ち。雲生なまいだア。チリン。グワラリン。ドン。トこの模様。始終葬禮のこなし。引き念佛の模様。おふさ。後より。そろ／＼向うへ入る。ト浅黄幕になる。すぐに所知入りにて。臆病口より美々しき行列の先手。挟み箱。飾り弓。鐵砲。釣り筒。臺傘。立て笠。大鳥毛。對の長柄など。すべて本式にて。立派なる乗り物。近習。小姓。その他。後より曳き馬。合羽駕籠。後押への人数まで。見事に段々下手に出かける。バタ／＼にて。向うより源吾。兵藏。走り出で。花道よき所にて。扇を開き。知らせをする。ト本舞臺の人数。橋がかりより一面に並よく並ぶ。兩人。本舞臺の下手に下座して。源吾お供先の様子を言上の爲。唐橋大弼どの、家來を同道仕り。立歸りましてござります。ト近習。乗り物の戸を明けると。中より。右兵衛之助。衣裳。黒羽二重の羽織にて。よろしくあつて。右兵大弼どの、家來。近う／＼。兵藏ハツ。ト大小を下手に置き。静々として。乗り物近く平伏して。兵藏今朝。三島の宿より。箱根山へ差かゝりますところ。向ふより。年頃四五歳ばかりの小兒。道を遮り。妨げ仕りましたゆゑ。主人大弼。此まゝに差置かば。網干家の家風の衰へ。第一。管領家へ立てし願ひも。無足に相成り候ふ事とて。彼の小兒を切捨てに致されましてござります。ト右兵衛之助。心意氣あつて。右兵我が家の家風とは云ひながら。十歳未満の小兒の妨げ。手討ちに致せしとは。不便の至り。今に始めぬ大弼どの、荒氣。殊に某が初めての參勤の道筋にて。血をあやせしとは心よからぬ。管領家の思召しも如何なれば。大弼どのには。暫らく遠慮いたさるゝやう。申し達してよからう。兵藏畏まり奉ります。源吾お使者。大儀。兵藏お取次。御苦勞。ト云ひつゝ。大小差して向うへ走り入る。右兵衛之助よろしくあつて。乗り物の戸をしめさせ。右兵乗り物。やれ。大勢ハア。ト所知入りになり。行列美々しく。皆々向うへ入る。ト浅黄幕。切り落す。

藩門かけにて。門内いつもの賑。作庭にて。雪降りたる。雪。すべて遊園の山中。傳内傳内家の。新。老女。の拵らへ。木綿やつし。織ぎ／＼のでん申羽織着て。圍爐裏の火を焚き。側に茶瓶茶呑など取散らしある。

源吾、茲に小割傳内と云ふ者あり。父の昔は扶持取りの。果ては何ともしらす弓。母の老女も一生に。氣の張り弓も腰にのみ。梓の弓の春近き。年も積みたる雪の庭。

トこの淨瑠璃のうち。勝野。よろしくあつて。勝野このマア大雪に。我が子の傳内が。夜山の穉きも大抵ではないが。もう。戻りさうなものぢや。嫁女は今朝。早くから孫の常松を連れて。網干の殿の行列を見せに行きやつたが。アア。孫がさぞ寒からうに。早う戻ればよいに。茶など熱うして置ませう。

孫の最期も白髪の老女。圍爐裏に柴を折りくべる。折からヌツと百姓徳作。

ト徳作。旅の形にて。蘘菔を提げ。入る。徳作オ、傳内の婆さん。今日は取分け寒うござるの。勝野誰れぢやと思ふたら。徳作どの。どつちへか行かれたと聞きました。マア。無事でめでたい。徳作サア。わたしも。京へ用があつて。寒中もいとはず上つて來ました。勝野それは大儀な事でござつたのう。と此うち徳作。内を見廻し。徳作見れば。傳内どの夫婦。坊も見えぬが。どこぞへ連れ立って行たかいなう。勝野傳内は夜山から。まだ戻らぬが。嫁女は孫を連れて。網干の殿の行列を見せうと。今朝から行きました。徳作イカサマナア。三島泊りて。今朝七つのお立ち。今度の參觀は。美々しい事ぢやと聞きました。そんなら追ッ付け戻るであらう。これは。おれが土産にやらうと思つて。買つて來た伏見人形。坊に遣つて下され。ト蘘菔より。大臣姿の土人形を出して。勝野これは。マア。結構なるお土産。大臣姿の好い細工わいなう。孫めがいんま戻つたら。大抵喜ぶ事ぢやござりませぬ。エエ。お前は。我が子のやうに思つて。可愛がつて下さります。ト人形を戴く。徳作そんなら。婆さま。おりや。もう去にます。勝野こりや忝なうござります。お前もお草疲れてあらう。早う去んで。休ましやれ。徳作傳内どのにも。

よろしう。

「云ひ／＼笠をふりかたげ。もと來し道へ立歸る。」

トこれにて。徳作。入る。勝野。よろしくあつて。勝野めの徳作どのは。いつも氣の變らぬ。深切な人ではあるぞ。このマア。傳内は何してゐるぞ。いつもよりは。戻りの遅い事ではあるわいの。

「オ、待遠やと母親の。案じる胸は親と子の。同じ思ひに傳内が。主人の生死如何ぞと。わけ白雪の降りつもる道を辿りて立ちかへる。」

トこの淨瑠璃のうち。向うより傳内。暮明きの形。思案しながら出る。跡より奴浪平。旅姿にて。三度笠を持ち出で。傳内を呼びかけ。浪平ア、コレ／＼。ちよつと物が尋ねたい。この邊に小割傳内と云ふ人あらば。教へて下され。ト傳内。浪平を見て。傳内そのお尋ねなさるゝ傳内は。即ち私し。見れば旅の人さうなが。なんの用でござります。浪平すりや。其許が傳内とな。これは丁度よい所でお目にかゝりました。ちと内々。お話し申し上げたい儀がござつて。わざ／＼尋ねて參つたが。爰は途中。傳内何事かは存せねど。私しの宅は。ツイあれでござりますれば。マア。内へお越しなされて下さい。浪平然らば。御案内。傳内斯うお出でなされませ。

「我が家へ伴なひ。門の口。」

ト兩人。本舞臺へ來て。捨てりふにて。傳内。内へ入る。浪平。此うち。簀と笠を脱ぎ捨て。草鞋などを解くべし。勝野。よろしくあつて。勝野オ、傳内。いつにない戻りの遅さに。たんと案じて居りました。そして。連れがあるさうな。あなたは。マア。どなた様ぢや。傳内。只今歸るさ。途中にてお出逢ひ申した旅人。何かこの傳内に。お話し儀がござるとあつて。浪平イヤ。その儀は拙者が申ませう。某は。播州網干の家來にて。ちと内々お頼みの儀がござりました。傳内そんなら。あなたは網干の御家來。左衛門も存じませ。先刻よりの失禮。二人眞平。御免下さいませ。

ませ。トマア／＼と。兩人捨てりふにて。二重舞臺に上がり。塵定まる。傳内何かは強請さ。早速お尋ね申し上げたきは。お家の弟。土岐之助さまには。ます／＼御堅固におわたりなされませるか。拙者事は。先年ついた事。お目にかゝりました事もござりました。勝野その上。親子の者も。だん／＼とお情にあづかりしゆ。薩ながら。土岐之助さまの御武運を祈つて居ります。浪平サア。その武運を祈られし土岐之助さまには。ト愁ひのこなし。兩人驚ろき。傳内ナニ。若殿には。なんとばしなされましたか。浪平さればその儀につき。わざ／＼其許を尋ねに參つた。傳内すりや。若殿の儀にて。おこしとある貴殿は。浪平即ち。網干の家來。浪平と申す者なるが。仔細あつて浪人の身の上。それゆゑ。この度。兄右兵衛之助さま。參勤の御供。仕らず。密かに貴殿を尋ねるは。明白には申し難けれど。右兵衛之助さまといふは。誠の先殿の胤ならず。また。弟土岐之助さまとも。先殿の胤にあらず。お家の叔父たる唐橋大弼どの、胤にて。お痛はしや。兄弟互ひに義理を重んじ。若殿は實父大弼どの、悪事をひるがへさせん爲ばつかり。お腹召されて。敢へない御最期。ト兩人。悔りして。傳内矢張り噂に違ひなう。御切腹なされましたか。浪平若殿。臨終の際に。某を召され。相州箱根山のとりに。小割傳内といふ者を尋ね。この一品を渡せよとある。先殿の御送り物。ト懐中より扇子を出し。傳内に渡す。傳内ナニ。土岐之助さまよりの御送り物とな。ハツ／＼。ト平伏して。右の扇子を開き見て。傳内江南の橋は。江北の枳ならず。ト思案して。傳内この心は。ト浪平。よろしくあつて。浪平土岐之助さまの實父大弼どの。先殿の落胤と取替へ置きし。誠の若殿のお行くへ知れざるゆゑ。尋ね出だせよとあるその扇。傳内成る程。御遺言の趣き。キツと承知仕る。この傳内は。數ならぬ身なれども。左様に思し召されて。賜はりし。この扇の判じ物。地紙の五體は破るゝとも。實の若殿を尋ね。扇と某が。心の要しつかりと。畏まり奉る。浪平ハア。流石は傳内どの。若殿今際に御遺言遊ばされた程あつて。頼もしう存じます。某は。これより奥州邊を尋ね申さん。最早お暇。勝野そんなら。もうお出でなされませるか。傳内御縁もあらば。また

重ねて。浪平傳内さまにも。随分堅固で。傳内貴殿も道中。お怪我なきやう。浪平御老母さらば。兩人よう。お出でなされました。

二禮のべて浪平は。奥州さして急ぎ行く。

ト浪平。草鞋はき。笠笠にて。襦がかりへ入る。トあと兩人。愁ひのこなしあつて。勝野いつぞや江の島に於て。狼藉者に出合ひ。相手は大勢。此方は一人。殊に年老いたるこの母を伴ひしゆ。難儀の折から。網干の若殿。土岐之助さま。折よく御参詣あつて。この體を御覽遊ばされ。御家來に仰せ付けられ。狼藉者を鎮めたまはりしゆ。親子が命を助かりし有り難さ。御恩報じと。鎌倉のお屋敷へ御奉公に出たれども。間もなう。あのおふさを伴ひ。又この山家へ住び住居。傳内御恩を受けし若殿様は。今はこの世に亡き跡の。篋に賜はるこの扇。すりや。最前。下部が噂に違はず。兄右兵衛どの、我まゝ無道。勝野なんと云やる。兄右兵衛が無道人とな。傳内サア。今朝。海道でもその噂いま浪平が詞のはしほし。さながら主人の事ゆゑ。明白には云はねども。勝野兄御の悪心ゆゑ。果敢ない御最期。今日は幸ひ月並みの逮夜。傳内心ばかりの御追善。勝野お篋の扇を。佛前へ直し。傳内御回向申しあげん。勝野老少不定と云ひながら。傳内有爲轉變の。二人世の中ぢやなア。

これ涙も泣くく打ちしほれ。納戸の内へ。

ト送りになる。兩人。愁ひのこなしにて。上手障子屋體へ入る。

憂き事は重なる山のそば傳内。おふさは我が子の亡き骸を。抱きて歸る雪の袖。

トこの淨瑠璃のうち。おふさ。向うより幕明きの姿にて。常松の死骸を抱き。泣くく出る。後より雲生寺。附添ひ出で。花道にて。よろしくあつて。雲生ア。コレ。お内儀どの。憂きは道理なれども。遺々も云ふ通り。とても感しおほせる事はならぬ事ぢや。けれども。暫くても。傳内や波瀾に隠すやう。泣き顔せぬがよいぞや。ふさそり

や。よう得心して居ますけれど。これが泣かずに居られうか。雲生ア。そこをチツと幸甚して居られ。おれは。いつもの通り。今日の月並みの逮夜に参つたやうにして。餘所ながら。荒ごなしをして置かうほどに。わしがよい時分に合ひ圖をしたら。奥へ入らつしやれ。ト行かうとして。立ちどまり。雲生イヤ。これも悪い。こりや。斯うせう。其ちつべいは。愚僧が所に預けて。戻つたと云うたがよい。マア。こなたは先へ行かしやれ。さうするがよいてや。ト死骸を取つて抱き。おふさに。先へ行くと云ふ仕方する。おふさ。泣くく。よろしく本舞臺へ来る。雲生寺。内の様子を覗き見て。雲生幸ひ。婆様も傳内も。納戸へ入つて居ると見える。この間に。おれはあの屏風の蔭に隠れて居る程に。お内儀は。なに心なう。内へ戻つた體にさつしやれ。ト云ひ含める。いろくあつて。雲生寺は二重舞臺の二枚折りの枕屏風の蔭に隠れる。おふさ。泣くく内へ入る。ト障子屋體より。傳内。思案の體にて出で。思はず。兩人。行き當り。悔りして。互ひに泣き落し。顔を隠す模様。よろしくあつて。傳内オ。女房ども。ふさこちの人。傳内いつの間に戻つたぞい。ふさアイ。わたしや。最前から。ト云はうとして。イ、エ。たつた今。傳内さうして。常松は。どに居るぞ。ふさハイ。そこに。ト云はうとして。ふさア。イ、エ。ほんに。さうぢやわいなア。戻りがけに雲生寺さまへ。月並の逮夜の事を頼みに寄つたら。聞かしやんせ。お住持様と一緒に去なうと。わやく云ふゆゑ。お住持が後方参る時に。連れて行かうと仰しやつてござりますに依つて。後へ置いて來ました。傳内エ。この冷えるのは。雲生寺さまも。大抵世話ではない。連れて戻ればよいに。ドレ。おれが一走り迎ひに行つて來う。ト行かうとするを。おふさ止めて。ふさア、コレ。行くには及ばぬ。傳内でも。今頃は。わやく云うて居をらう。ふさイ、エ。もう戻りますわいなア。傳内そんなら。圍爐裏の火でもようして。ト傳内。圍爐裏の中へ。柴折りくべる。此うちおふさ。愁ひの顔を隠すこなし。折りく。雲生寺。屏風の蔭より顔をちよつと出し。様子を窺ふ模様。よろしくある。傳内。これを知らず。傳内イヤナニ。女房ども。ちよつと爰へおちや。ちと其方に問ふ事が

ある。ふきアノ。わたしにかえ。わたしも。お前に尋ねたい事がござんす。傳内其方も。おれに尋ねたい事がある。ハテナア。トよろしくあつて。ふきお前の問ひたい事とは。そりやマア。なんてござんす。傳内イヤ。別の事でもないが。女房の身では。男ほど大切なものはないゆゑ。何事でも。夫の詞に背きやるまいの。ふきハテ。そりや知れた事いな。傳内ムウ。それ問うたら。もうよい。して。其方の尋ねたい事と云ふは。ふきわたしの尋ねる事は。外ではござんせぬ。眞實の子と。血を分けぬ子は。どちらが可愛うござんすえ。傳内こりや味な事を尋ねるものぢや。肉身の子でも。義理ある忤でも。お父様々々廻すもの。なんのその差別があらう。いづれ子の可愛いは同じ事ぢや。ふきそれ聞いたら。落ちつきました。ト此うち勝野。屋體より出て。勝野ア、先づ夫婦が睦まじい話し。さうして。聞けば常松を雲生寺さまへ預けて戻つたとの事。大抵お住持様のお世話ぢやあるまい。ドレ。わたしが迎ひに行つてやりませう。ふきア、よしにして下さりませ。傳内イヤ。わたしが行って参りませう。老人の雪道は。危なうござります。勝野イヤ。大事ござらぬ。わしが行きます。ト無理に行かうとする。兩人。止める。此はずみに。枕屏風。バツタリこける。雲生寺。ヌツと出る。皆々悔りして。傳内お住持様ぢやござりませぬか。雲生オ、住持とも住持とも。正眞。交りなしの雲生寺ぢやわい。傳内ても。お住持さまの悪洒落な。最前から戻つて居て。わしに悔りさせようとか。勝野をして。坊を。大きにお世話にあづかりました。サア。これへお遣はし下さりませ。雲生ア、可哀さうに。ちつぺいは。わしの懐中に。よう寝てゐる。勝野最前。あちら村の徳作どのが。京人形ぢやとて下さつたこの伏見人形。ちやつと。これを見やいなう。雲生それでも。よう寝て居るわいなう。勝野それでも。寒うござります。此方へおこして下さりませ。雲生エ、懐に斯う寝ぬくもつて居るわいなう。ト勝野。無理に取つて。懐中に入れる。傳内このマア。手足の冷えて。冷たい事わいなう。ト懐中にて。ゆすぶる。ト切り首。バツタリ落ちる。皆々。大驚。傳内。おふさを叩き付け。勝野は雲生寺に詰め寄る。傳内これはどうぢや。この體は。勝野定めて。これに

は様子であらう。傳内譯を云へ。女房ども。勝野様子はどうぞござります。ト兩人せり込み云ふ。おふさ。大愁ひのこなしあるべし。雲生オ、道理ぢや。尤もござる。サア。その嘆きをさせまい爲め。隠せるだけ隠さんと。お内儀にも云ひ含めたが。もう斯うなつたら是非がない。今日の仕儀ちつぺいが最前からの様子。わしが代つて。話して聞かさう。傳内サ、早う。様子を聞かして下さい。雲生されば。今朝早うから拙僧は朝修行に出て。箱根山の往還にさしかゝる時。向うからこの家のお内儀が。ちつさを連れて来るのに出逢ひ。オ、お内儀。どこへ行かんすと尋ねたら。云ふには。網干の殿様。お通りの行列を見せにと云はるゝに依つて。このマア雪の降る道を。行くより爰に待ち合さつしやれ。今日。三島からお立ちゆゑ。程なうお通りであらうと。相模領の棒杭のあたりに。愚僧も一緒に待つて居る所へ。鳩めが一羽。ヒョイ／＼と飛んで来たれば。ちつさが取らうとする。そんな事はせぬものぢやと留めても。聞き入れず。逃げ行く鳩を追ひかけ廻る其うちに。ホイ／＼と網干の殿のお通り。此方は子供の事なれば。その行列の中を押し分け。鳩を取らうとして横切るに。先手の者が見咎めて。無禮を咎める。頑是なき小兒の事ゆゑ。眞平御免下されいとお内儀諸とも。拙僧が段々の詫び言。其うち乗り物から出たのは。大方。網干の殿。管領へ願ひを立てし家風の通りに行ふとて。ちつさの首をコロリと。其やうな目にははし居つたわい。ト段々語る。皆々。大愁ひ。おふさ。やう／＼顔を上げ。ふき母様にも。こなさんにも。どう云ひ譯があるものぞ我が子の敵と。心は矢竹にはやれども。悲しい事は女子の身。雲生あの大勢の中へ。こなた一人駐り込んだとて。所詮本望遂げる事はならぬ程に。無念を堪へ内へ去んで。傳内にも話した上。敵は知れた網干の殿。何時でも討たるゝと。愚僧が無理に連れ戻り。道々も云ひ聞かせ。ちつとの間なりとも。この嘆きをさすまい爲。包み隠したは。愚僧が計らひてござるわいなう。ふき母様。傳内さま。堪へて下され。堪忍して下さんせ。むごたらしい切り首を側て見た。わたしの心の内を。推量なされて下さりませ。ト大泣き。傳内。無念のこなしあつてキツとなる。

何思ひけん傳内は。すつくと立つて女房の。手を取り無理に上座に直し。はるか下がつて兩手を突き。

ト傳内。おふさを上座へやり。常松の死骸切り首をよき所に直す。勝野も。下座の方へ控へる。この間。雲生寺。始終不思議がつてゐる。傳内今さら改めて云ふに及ばねども。この年月。女房ども。我が夫と云ふを構はぬは。人目をいとふゆゑの事。義理ある我が子の常松の。誠の父君は。當の敵。綱干の殿右兵衛之助どのの御舎弟。土岐之助さま。これなるおふさどの事は。奥勤めを致されし頃。土岐之助さまのお胤を宿したまふ。まつた某は。先年よりこの山中に住みしが。或る日。江の島の辨財天へ。母諸とも。參詣の節。狼藉者に出會ひ。難儀に及ぶ時。折よくも土岐之助さま御參詣あつて。彼の狼藉者を。追ひ散らし給はり。母が無難も。これ偏へに若殿のお庇と。冥加恐ろしく。何卒御恩を報ぜん。それより鎌倉へ立ち越え。お屋敷へ仕官せしが。未だ部屋住みの若殿。おふさどのの、妊娠を物憂く思し召し。某を密かに招かせ給ひ。よきに計らひくれよと段々のお頼み。大恩ある若殿の事ゆゑ。畏まり奉ると。おふさどのを伴ひ。母諸とも屋敷を忍び出て。又もやこの山中に立戻り。母が介抱にて。安々と平産ありし常松どのも。土岐之助さまのお胤なる事は。隠し包む事なるゆゑ。おふさどのを女房。常松さまを我が子とし。表ばかりの夫婦の語らひ。何卒。若殿の御運の開く時あれと。祈つて暮らすこの年月。今日はいかなる悪日なるか。土岐之助さまの非業の御最期の。様子を聞くのみならず。常松さまのこの有様。草葉の蔭の若殿様に。なんと云ひ譯あるものぞ。御運の末とは云ひながら。御親子ともに。双の露となつて。果敢なくなり給ふか。エ、恨めしき世の中ぢやよなア。ト泣く。おふさ。この時。キツとなつて。ふまニ。若殿様には。非業の最期遊ばせしとは。そりやマア誠か。何ゆゑお果てなされましてござります。傳内サア。土岐之助さまの御最期も。綱干の兄御の所爲にて。御切腹なされたといなう。ふまエ、ト大胸にて。ウンと返るこなし。皆々胸りする。介抱よろしくあつて。雲生サア。目がまうたかいなう。雲生サア。ト傳内。敵戸より。敵の體を納戸へ取つて来る。此うち。雲生サア。雲生サア。白湯を汲んで。雲生サア。白湯ぢや。ト傳内に渡す。勝野。おふさを抱きかへ。傳内。氣付けを合めようとして。ちやつと心付き勝野に渡す。勝野。おふさの口へ含まして。皆々。介抱する事いろ／＼あつて。おふさ。正氣になるこなし。よろしくあつて。ふま殿様。土岐之助さまの御最期といひ。常松の敵は。兄御右兵衛さまとな。傳内義理ある常松どのの敵といひ。若殿様の仇なれば。例へこの身は。ズク／＼に碎きてなりとも。討ち取らんとは思へども。當の敵は若殿の兄君。討つに討たれぬ義理あるとは。よくも拙なき御運ぢやなア。雲生ア、その歎きは道理ぢやが。もう斯うなつたら。百萬だら泣いたとて。それが死んだ人の爲にもなるまい。せめて未來を助かるやう。一遍の回向でもしたがい。勝野それ／＼。孫の死體を納戸へ連れて。早う行きや。ふまアイ。トおふさ。泣く／＼。我が子の死骸を抱へて。雲生寺もよろしくあつて。雲生ア、いやな念佛申さうの。

泣く／＼打連れ入りにけり。あと見送つて母親は。袱紗包みを取出し。

ト此うち。おふさ。雲生寺。障子屋體へ入る。勝野。傳内。愁ひの模様。よろしくあつて。勝野。袱紗包みの弓の折れと。香包みを取出し。いろ／＼こなしあつて。勝野コレ。傳内。ちと密かに。話したい事がある。マア爰へおぢや。傳内お話しがござるとな。ト合ひ方になる。兩人。よろしくあつて。勝野今までは隠せし其方の身の上。思ひ出だせば廿餘年の昔語り。妾が父上は。世に聞えたる射術の達人。弓削の何某と云ふ人なるが。我が身。若氣のいたづらにて。御門弟のうちに。淺羽久之進と不義せし事。いつか父上のお耳に入り。元より物堅き武士なれば。お怒り強く側にあり合ふ重藤の弓を以て。淺羽どのと我が身を散々に打ち給ふ。お怒りのあまり。さしにも強き重藤もコレこの如く。ト袱紗包みより。重藤の三ツに折れたる弓の一つを取出し。傳内に見せる。勝野三ツにボツキリと折れ。既にお手討にもあふべき所を。母の詫びにて。その場を遁がれ。二人打連れ。紀伊の國那智山の麓。清水村に。淺羽どのの、知るべありしより。それを頼りに世を忍ぶうち。情の胤を身に宿し。産み落したは。恥かしや双子の男子。人の

識りもうたてて。其方は兄とて。松太郎と名付け。弟の曾根太郎には。この片しの重藤の弓の折れに。父御が直筆の年月を記せし躰の緒を添へて。捨て置きしを。幸ひなるかな。播州網干の先殿。熊野へ參詣の歸るさ。權現より家の世継ぎを賜ふなりと拾ひ取り。重藤の弓を添へたるは。仔細あらん何にもせよ。賤しき者の胤にもあらずと。本國へ連れ歸り給ひしと。立歸つて。夫の物語り。少し心は落ちついて。暫らく清水村に住居せしが。元より夫も武家の奉公を望み。立身して。師匠の勘氣を赦されんものと思ひ立ち。鎌倉へ心ざし。親子三人。打連れ行くうち。東海道の泊りにて。俄かの大地震。夫婦親子も散りくりに。夜明けて地震も鎮まり。夫の行くへを尋ねても知れざるゆゑ。是非なく其方を連れて。さまざまの憂き艱難。年を送り。程なく其方も成人して。縁でがな。この山中に暮らすうち。ほのかに聞けば。先年捨てし曾根太郎。今では網干の家の惣領となり。また妾の夫は。網干に奉公して居らるゝとの噂さ。どうぞ再び巡り逢はうと思ふ。折を幸ひ。先達て。江の島にて狼藉者に出會ひし時。御恩にあづかりし土岐之助さまは。我が子の義理ある弟と悟り。これに奉公するには如かじと。鎌倉のお屋敷へ引越し居るうち。御家老清水左之進さまが。其方を懇望あつて。娘おきよと夫婦にせんと。玉かつらの名香を贈られしかど。おふさどのを伴ひて。この山中へ戻りし跡は。如何なりしか知らねども。それは格別。先づ差當る土岐之助さまの御切腹も。最前浪平どのが詞のはしはし。これ皆。右兵衛之助が非道ゆゑ。常松さまの當の敵も。先殿の惣領ならば。土岐之助さまとは。御兄弟とも云ふべきなれども。若殿は大弼さまの胤といひ。殊に兄の右兵衛といふは。我が子の曾根太郎。其方とは肉身分けし双子の兄弟。その弟が悪心ゆゑ。大恩ある土岐之助さまの切腹。常松さまの御最期。恨みに恨みを重ねぬる仇。不便とは思へど。助けて置いては。過ぎ去り給ひし人々へ義理立たず。第一はお家の爲にもよろしからず。早々右兵衛之助を討ち取つて。草葉の蔭の御親子が。修羅の苦思をお助け申し。謀の土岐之助さまを尋ね出し。お世間ごととなし華づるが。上分限でござるぞや。トきつと云ふ。傳内成る程。初めて聞いた我が身の生立ち。双子の弟は大恩無量の右兵衛とな。さあれば。土岐之助さま御親子の仇敵。

生立ち。双子の弟は大恩無量の右兵衛とな。さあれば。土岐之助さま御親子の仇敵。

胸に一物。覺えの鐵砲。
如何に。母人。ト乗り地になる。傳内傳へ聞く。唐土晋の豫讓は。主の智伯が仇を討たんと。面には漆を塗り。姿を變へしと聞き及ぶ。我れは今。目前に控へし仇。心覺えの飛び道具。いかで仕損ずる事やある。殊に我れとは。血を分けし兄弟仲は恥多し。右兵衛を討取つて。直ぐに腹をも切るべきなれども。最前浪平に請け合ひし。主君の落胤。實の土岐之助さまを尋ね出し。網干のお家相續させ奉らん。勝野オ、それまでは。大事の身の上。兎に角に命を全うせよ。傳内母の教訓。心魂に徹す。ト云ひく鐵砲を提げ。花道へ行かうとする。勝野呼び止め。勝野コリヤ。傳内。必らず早まり仕損ずな。傳内ハア。ト胸と腕を教へ。心得たりと云ふこなしにて。

飛ぶが如くに走り行く。

トこの淨瑠璃のうち。息せき向うへ走り入る。ト勝野あと見送りて。こなしあるうち。おふさ出で。ふさま母様。始終の様子は聞きました。この身の納まり。夫の敵。我が子の仇。傳内どのの加勢の爲。さうぢや。ト花道へ行かうとするを。留めて。勝野ヤレ。待ち給へ。勇ましき敵討の門出の懸け。この婆がせん。ト名作の一腰出し。勝野心覺えのこの一腰。トおふさに渡す。ふさま。有り難い。ト戴く。勝野心残りのないやうに。ト懐劍にて自害する。ふさまア。早まつた御生害。ト二重舞臺へ駈けあがり。泣き落す。この途端。淺黄幕になる。

この淺黄幕。紋板と一時に。そろりと下がり。よき所にて。細折りになる。ト大黒柱でとまる。一面の松原。うしろ二重淺黄幕。直ぐに所知入りにて。最前の行列。本式にてよろしく段々下手へ入る。乗り物。曳き馬の時分を見合し。おふさ。窺ひ出て切つてかゝる。バタ／＼にて。家來大勢とタテになり。上手へ皆々追つて入る。

ト東棧敷の手摺りへ。遠見の行列。臺傘。立て笠。大鳥毛。對の長柄など上の方にみせる仕掛けにて。この間に本舞臺。道具そろ／＼と元の通りに上がり。紋板の下。一面雪降り幕となる。バタ／＼にて。おふさ。臆病口より。大童になり。家來とタテしながら出て。これより。大タテいろ／＼ありて。網干の家來。皆々追ひこみ。ふさエ、口惜しい。この深手では。所詮。敵の首取ること思ひもよらず。エ、残り多やなア。トいろ／＼ある。此うち。捕手やらぬぞ。トかゝるを。片手にポンと切り。その身もバツタリとこける。切り穴へ落とすと。この途端に雪降り幕。切り落す。

造り物。舞臺一面。奥深う。險阻なる奥山の書割り真中に竹藪しげり。踏み破る仕掛けあり。藪の際より。花道戸屋まで。一面に松原の並木をセリ出し。但し。花道板を引いて。行列の人数。本式の通りにて。並ぶと留まる。この仕掛け。花道の下。奈落にての行列。ト此うち。本舞臺。遠見に傳内の子役。鐵砲にて窺ふ模様よろしくあるべし。

振れや振れ／＼お先は對の狭み箱。花橋の金紋や。臺笠。立て笠。大鳥毛。

ト淨瑠璃のうち行列。だん／＼来る事よろしく。よき所にて。傳内の子役。鐵砲構へる。鐵砲の音。火蓋を切る。ト奈落一面バタ／＼にて。大騒動の體。この紛れに。子役の傳内隠る。

根笹竹藪。押し分けて。現はれ出てたる小割傳内。

トこの淨瑠璃のうち。舞臺正面。藪の内より。誠の傳内。鐵砲持つてヌツと出て。キツと見得になる。ト物凄き合ひ方。傳内。はるかに見やる心意氣あつて。傳内隨かに手ごたへ。悪人ながらも。流石は恩愛。母の歎きも思ひやる。はし折り鏡。双子の兄弟。ト敵ひのこなしあつて。他人の始まりぢやなア。ト泣き落すこなし。よろしく。

四 つ 目

紀州八咫山峠の場
熊野宿笹屋の場

造り物。平舞臺。一面の淺黄幕。上手。鳥居玉垣。橋がかりに葭簀。よき所に茶店床几。所々に御神燈の提灯立てあり。すべて。在所祭りの模様にて。ちよんがれ巖山。網干の殿の事よろしく云うてある。仕出しの百姓大勢。これを聞いてゐる。この模様。神樂にて幕開く。

巖山サア／＼。お前方。いかきが廻ります。今日は取分け神事のお祝ひ。氣を張つて下さりませ。ト巖山。いかきを廻はして錢を貰ふ。仕出し。ワヤ／＼云うてゐる。ト此うち橋がかりより庄屋太郎作。木綿やつし。裕羽織にて走り出て。太郎ア、コリヤ／＼。追ッ付け爰へお代官様が。何ちや知らぬが。お觸れ流しの事があるとして。お出でなさるゝ程に。随分無禮のないやうにさつしやれ。ト云ふをも聞かずに。巖山。ちよんがれ云うてゐる。仕出しの百姓。ワヤ／＼云うて。聞いてゐる。太郎作腹を立て。太郎エ、最前からおれが云ふ事を聞かずに。あのちよんがればかりを聞いて。ワヤ／＼笑うてゐる。そして聞けば。網干の殿様が狩人に。鐵砲で殺されさつしやつた事を。ちよんがれに云うて堪るものか。そんな事。云はぬがよいぞや。トきつと云ふ。巖山あなた様は。お庄屋様でござりますか。わたしのやうな乞食坊主。他愛もない。ちよんがれを云ふが商賣でござりますれば。鷹揚に聞いて下さりませ。トこれを構はず。ちよんがれ云ふ。太郎コリヤ／＼。坊主め。コリヤ。乞食坊主め。この庄屋が云ふなと云ふ事を。しやべり居る。うぬらが今。吐かす事。網干の殿様の事を。爰で云ふ事はならぬぞ。巖山そりや又。なぜでござります。太郎ハテ。知れた事。爰は即ち。その殿様の御領分ぢやわい。ト巖山。悔りして。巖山エ、そんなら爰は。網干の御領分でござりますか。さうとは知らず。しやべりました。眞平御免下さりませ。ト太郎作の前へ手を仕へ。捨ぜりふにて。いろ／＼詫言するうち。太郎作の腰提げを。ちよいと取つて。巖山もう爰には居りませぬ程に。御免なさ

れて下さりませ。ト云ひ。向うへ走り入る。仕出しもワヤ／＼云うて臆病口へ走り入る。太郎作。これを知らず。あたり見廻すうち。葎の内より。水茶屋の娘おます出る。太郎作。おますに見惚れ。こなしあつて。太郎ア、いつでも爰なお娘は。美しいものぢや。時に今日は。お代官様が。何ぢややら。お觸れ流しの事があるとして。追ッ付け。お通りぢや程に。道端に出しやばつた物があらば。片付けて置くがよい。ト云ひ／＼。葎を見つて。太郎コレ。此やうなものが悪い。おれがよいやうにしてやらう。ト葎直してやる。ますそんなら。お庄屋様。爰に居やしやんすか。どうぞちよつとの間。店番して下さりませ。わしや。水を汲んで参ります。跡をお頼み申します。ト手桶を提げて。橋がかりへ入る。太郎作。こなしあつて。太郎オ、おれが店番してゐてやらう。時に。お代官様のお出では。まだ間があらう。ドレ。一服いたさうか。と腰提げを探す事。いろ／＼あつて。太郎ハテ。面妖な。内から慥かに持つて来た筈ぢや。道で落さうやうもなし。トちよつと思案して。太郎ハテ。そんなら。今のちよんがれめが。ちよつとちよるまかし居つたと見えるわい。大方。まだそこらに。うぬ。待つて居れ／＼。ト云ひ／＼橋がかりへ入る。ト向うよりおちよぼ。その外。娘二人。いづれも在所娘の形にて。連れ立ち出る。娘コレ。おちよぼさん。まそつと静かに歩かんせいなア。ちよエ、お前さんはきつい事ぢや。もうツイそこが。氏神様ぢやないかいな。娘イ、エ。お前は。氏神様が。急ぐのぢやあるまい。娘さうとも／＼。笹屋半兵衛さんとの宿引き。長九郎さんに。逢はうと思つて。あらうがな。ちよ其やうに知つての事なら。是非がない。成る程。その長九郎さんと。今日爰で出合ふ約束ぢや。それで気が急ぐのぢやわいなア。娘あの長九郎さんは。この在所一番の近眼ぢや。此方からう氣を付けぬと。あの人の眼には。かゝらぬぞえ。娘マア。こゝな床几で。待つてゐやしやんせいな。ト三人。茶屋の床几に腰かけ。捨ぜりふいろ／＼あるうち。在郷唄になる。向うより。宿引き長九郎。木綿やつし。尻からげして。眼鏡かけ。そこらウロウロ尋ねる。鏡にて出て。とくと三人を見付け。長九オ、おちよぼ。皆も揃つて爰に。今日は氏神祭りぢやによつ

て。参らんすてあらうと思つて。一退尋ねたわいの。ちよほんにお前は。わたしのやうな者を。其やうにまつて思つて。下さんすか。嬉しうござんすわいな。娘戀なればこそ長九郎さんが。近眼の癖に。見付けさんした。おちよぼさん。嬉しうかえ。長九エ、なに嬉であげるぞい。併しながら。こなさんの云ふ通りぢや。おりや。この眼鏡をかけた。トんと盲目も同然ぢや。ちよサア。長九郎さん。一緒に参らう。長九おりや。ちつと待ち合はす人があるによつて。マア参らんせ。娘そんなら。長九郎さん。ちよ後にえ。ト神樂になり。三人。臆病口へ入る。長九ア、ものこの邊で。笹屋半兵衛の手代長九郎と云ふと。人に知られた男ゆゑ。所の娘どもがあやうに。付きまとひ居る。シタガ。こちの内儀のお鐵さまも。今日氏神に参る程に。その時。なんぢややら話す事があるとの事。ア、コレ。もう見えさうなものぢや。ト云ひ／＼。床几に腰かけ。煙草のみ居る。向うより庄屋太郎作。先に先ち。代官冠平。捕り手引連れ。本舞臺へ来る。太郎ソレ。片寄らしやれ／＼。お代官様のお通りぢや。ト長九郎。これを知らず。煙草のみ居る。太郎コレ退かしやれ。お代官様のお通りぢや。ト大きな聲して云ふ。長九郎。悔りして。長九ハイ／＼。ハイ。御免なされて下さりませ。ト云ひ／＼皆の顔を眺め。長九ハア。お代官様や。庄屋どのかいなア。この長九郎は。生れついでの大の近眼ゆゑ。先程よりの失禮。眞平御免下さりませ。冠平コリヤ／＼。長九郎。太郎作。よう聞けよ。この度管領家より繪姿を以て。御詮議のお尋ね者は。即ち。管領家の姫君と。乳人の繼橋と云ふ女。里姫と云ふは。年頃十六七。繼橋と云ふは廿二三にて。色白く。脊高く。この繪姿に似たる女あらは。代官所へ連れ来れ。キツと褒美を遣はすであらう。長九そりやア耳よりな事ござります。わたしは宿引きが商賣ゆゑ。往來の旅人に心を付けて。見付け次第に連れて参りませう程に。マアその人相書を私しに。お預けなされて下さりませ。冠平成る程。旅人に心を付け。ト人相書を渡す。太郎この庄屋も。その繪姿を一枚欲しい。長九こなたは。何にさんすのぢや。太郎おりや。内の屏風に貼つて置かうと思つて。長九エ、何を云はつしやる。阿房らしい。太郎イヤモ。庄屋と云ふ

ものは。芝居でも阿房なものぢや。ハ、ハ、ハ、ハ。冠平某は。次の村へ觸れ聞かさん。太郎作。案内しやれ。太郎斯うお出でなされませ。ト神樂になり。冠平。太郎作。捕り手を連れて入る。跡に長九郎。こなしあつて。眼鏡をかけ。繪姿を透かし見て。長八なんぢや。里姫と云ふは十六七。乳人繼橋と云ふは二十三。色白く脊高く。こりや好い恰好な女子ぢやなア。ドリヤ。一遍と探して來うか。ト神樂になり。ツイと臆病口へ入る。ト向うより。里姫。乳人繼橋。菅笠。對にて旅姿。繼橋は。風呂敷包み背負ひ出て。花道よき所にて。繼橋申し。お姫様。マア。お静かにおひろひなされませ。行く先定めぬ長の旅路。ほんにお痛はしう存じますわいなア。里姫アノ。繼橋の云やる事わいな。其方こそ。疲れるであらう。自らは殿様と思ひ。假に契りし浪平どの。今では戀しう思ふゆゑ。誠の若殿様を尋ねに出やつた跡を慕ひ。爰までは來たれども。今に尋ね逢はぬゆゑ。早う逢ひたい。顔見たい。其方ばかりが力ぢやほどに。早う逢はしてたもいなう。繼橋向うに幸ひの床几がござります。あれへ參つて。暫らくお休み遊ばされませう。里姫さうしませうわいなア。ト本舞臺へ來て。床几に腰かけ。こなしあつて。繼橋この頃人の噂を聞けば。父御の怒り強く。諸國へ配符を廻はし。人相書を以て。姫君と妾を尋ね給ふこの噂。もしやそれが定なら。御身の大事。必らず御油斷遊ばすなえ。里姫例へ父上のお怒りあるとて。姫御前の身て。一旦肌觸れし浪平どの。是非に逢はしてたも。コレ。繼橋。頼んだぞや。繼橋サア。その間違ひも。わたしが業。御料簡なされて下さりませ。里姫なんのいなう。それも矢ツ張り自らを。大事に思つてたもるからの事。繼橋ア、コレ申し。斯様な人立ちの所で。お身の上をお話しは。御無用に遊ばされませ。兎角斯様な時には。神佛の御利生が頼み。この宮へもちよつと。御參詣遊ばさるがようござります。里姫そんなら繼橋。繼橋姫君様。先づお出で遊ばされませ。ト神樂になり。臆病口へ兩人入る。ト向うより。笹屋おてつ。世話女房の拵らへ。前帯にて出て。下女おとみ。付きそひ出る。とみ申し。お家さん。あなたが進はねばならぬと仰しやるお方は。マア。誰れでござりますぞいなア。こつアノ。わしが進はうと尋ねる人

は。ト云ひかねるこなし。エ、モウ。幸氣な人ではあるわいなう。とみそれども。合點がゆきませぬ。こつわしが尋ねる人は。ト云ひかねるこなしあつて。こつエ、供しや。ト神樂になり。臆病口へ入る。ト橋がかりより。關屋。着流し。武家の女房の拵らへ。旅姿にて出る。後より太郎作。百姓大勢連れ。窺ひ出て。太郎ソリヤ。ト器かける。百姓皆々。關屋を取巻き。百姓やらぬぞ。關屋旅人に向ひ。慮外しやると免さぬぞ。ト太郎作。荒繩持ち。前へ出て。太郎サア。あらがふまい。其方は管領家の娘の乳人。名は何とやら忘れた。關屋管領家の乳人をば。何ゆゑの狼藉。太郎サア。此方の注文にあつたお尋ね者。此奴を捕へたら。姫の在所も知れるであらう。皆々サア。繩かゝれ。關屋イヤ。此方は。其やうなものではない。太郎でも。繪姿のお尋ね者。皆々尋常に繩かゝれ。トこれより。百姓大勢を相手に。ちよつと立廻りあつて。臆病口へ追ひ込む。ト向うより娘おきよ。順禮姿振り袖にて杖突き出る。後よりちよんがれ巖山出て。おきよの後や先になり。捨せりふにて。見惚るゝ事。いろ／＼あつて。巖山エ、美しい娘。一人旅と見えて連れもなし。さうしてマア。順禮さうな。大方。一番の札を納めに參らんすのであらう。きよアイ。わたしや。順禮の者でござんす。連れ衆はたんと向うに待つてみやりませう。ト氣味悪さうに云ひ／＼。本舞臺へ來て床几に腰をかけ。きよ幸ひのこの床几。暫らく休んで行きませう。ト巖山も同じく腰かけ。巖山コレお娘。こなさん。連れがあると云ふけれど。一人旅ぢや。さうか／＼。一人旅といふものは。とんと何かに不自由なものぢや。おれが。連れになつて。やりやんしよ。おれが連れになると。その勝手のよい事は。道中で馬。駕籠の下りきまり。宿へ着くと。草鞋脱がしてやらうし。風呂へ入つたら。脊中も流してやらうし。また寢所へ入つたら。足も揉んでやらう。うんと云や。そして又。西國三十三ヶ所は云ふに及ばず。伊勢は七度。熊野へ三度。愛宕様へは月參り。名所古跡も見物させ。鬼界ヶ島の果までも。手に手を取つて。連れ立つて行かう程に。おれが連れにならんせ。ト此やうな事。何なりとも出鱈目に云うてゐるうち。おきよ。氣味の悪いこなしにて。よき時分に。ソツとさし足して。橋が

かりへ入る。巖山これを知らずに。しやべつてゐて。この時。おきよの方を見て。みぬゆゑ。悔りして。巖山ヤアヤア〜。いつの間にやらお娘は。どこへやら行き居つたわい。ト捨てりふ。いろ〜あつて。そこら探し見て。草履を抛つて見て。巖山をんならこの道。さうぢや。ト向うへ走り入る。臆病口より。おてつ出て。長九郎を尋ねる模様あつて。床几に腰かける。ト此うち長九郎も。臆病口より窺ひ出て。おてつの後姿を見て。お尋ね者と心得るこなしあつて。おてつの腰かけ居るを眼鏡で見る事。いろ〜あつて。長九脊高く。色白く。エ、むつちりとしてよい肉あひ。女中さんこちら向かんせ。トおてつ。腹の立つを。ヂツと堪へるこなしにて。扇にて。顔を隠す。長九郎。捨てりふにて。戀しかけること。いろ〜あつて。ト。おてつ。長九郎が胸ぐらをキツと捕へ。てつエ、。茲な悪性者めが。ト腹立てる。長九郎。悔りして。いろ〜詫び言する。此うち臆病口より。おちよぼ走り出て。これも腹の立つこなし。いろ〜あつて。長九郎を捕へて。ちよエ、。氣の多い性。悪男。アノマア。親にも持ちさうな人と。色事するとは。あんまりぢや。てつ女子さへ見れば。虫の強い。あんな者を抓むとは。ちつと恥も知つたがよい。長九サア〜。尤もぢや。道理ぢや。ト始終。色事師の心意氣。おてつは長九郎の手を取り下手へ捨てりふにて連れ行く。おちよぼは。長九郎が手を取り。上手へ。捨てりふにて連れ行く。双方より引ツ張る。此うち長九郎。かけてゐる眼鏡を落す事ある。これより双方。間違ひにて。長九郎はおてつを。おちよぼと思ひ。出鱈目に。おてつの悪口を云ひ。又おちよぼを。おてつと思ひ。同じく出鱈目に。おちよぼを悪く云ふ。兩人腹立て。ト。長九郎を差上げ。臆病口へ。連れて入る。始終神樂。關屋はタテしなから出て。暫らくタテあつて。また上手へ追ひ込む。トおてつ。長九郎を探し出て來ると。繼橋。後より出て。繼橋コレ。女中さん。お前の探してのやしやんす男さんは。あそこぢや。此方へござんせ。ト臆病口へ。おてつを連れて入る。トおちよぼも。長九郎を探し〜出る。繼橋また出で。繼橋コレ。お娘さん。お前の尋ねてのやしやんす男さんは。あそこに行てぢやほどに。逢はして上げやんしよ。

トおちよぼを連れて。臆病口へ入る。長九郎出て。長九ハテ。面妖な。ど〜と落したしらん。ト眼鏡。探し〜出る。繼橋。おちよぼ。おてつに猿轡はめ。繩をかけて出て。繼橋コレ。お尋ね者の二人。お前に手渡ししやんしよ。ト長九郎。近目のこなしにて。長九ヤア。お尋ね者とは。とうろ〜として見るうち。里姫。繼橋。關屋。そろそろとさし足して。橋がかりへ入る。長九郎。兩人を引立て。長九代官所へ連れて行て。褒美の金にせう。ト細付きを引ツ張る。返し。右の道具引いて。淺黄幕切り落す。

造り物。一間の二重舞臺。籠り堂の體。鐵燈籠。所々に吊りある。兩方よき所にて。守護所の立札あり。一面に紅葉の吊り枝。上手の方。紅葉の幹あり。すべて。那智山の麓。籠り堂の體。蟲の音。静かなる鳴り物にて道具とまる。

ト向うより。おきよ。前の順禮の形にて。ソロ〜出て。

きよエ、。嬉しや。最初の悪者も。後からついて來ぬさうな。行く先とも知れぬ旅路。所の人に尋ねたら。向うが那智山の麓。籠り堂ぢやとの事。今宵はあそこに夜を明かし。明日は觀音様へ一番の札を納めうわいなア。トそろ〜本舞臺へ來て。二重舞臺へ腰かけ。草鞋を脱ぎ。こなしあつて。幸ひ。今宵は父上の御命日。せめては心ばかりのとひ弔ひ。トあたりを見廻はし。箱を引寄せ。火入れの火を探し懐中より。香包みを取だし。香を炷く事。よろしくあつて。きよ敵は誰れとも知らねども。御最期ありし所に。残し置いたる割り筈。敵の手がかり。母様と。いろ〜尋ねても。今に在所も知れざれば。さぞかし草葉の蔭から父様の。お叱りなされてござるであらう。お免しなされて下さりませ。兎角に頼むは佛の御利生。南無大悲觀世音菩薩。

へふだらくや。岸打つ波は三熊野の

ト此うち。おきよ手を合す。きよ何卒。修羅の妄執を晴らさせてたび給へ。那智山の觀世音様の二番に同じく。紀三井寺。

故郷を。はるく爰に紀三井寺。

肌はだの守まもは親おやの筐かたみ。日頃ひごろ信心しん怠おこらず。祈いのり參まゐらす觀音くわんおん様さま。又またこの香かう包づつみは。玉たまかづらと號なづけて。父とと様の御ご秘ひ藏ざう。い
つぞや鎌倉かまくらに於おいて。妾わらわに云いひ號なづけてたまはりし。小割こわり傳内でんないさまとやら。今はいづくにましますやら。在所ありか知しれねば
逢あひ參まゐらせ。力ちからとなつてもらふ事ことも出來きず。夫婦ふうふのしるしに送り賜たまはる。玉たまかづら。片々かたぐも。佛ほとけに供くずるばかりに
て。ほんに任せぬ浮世うきよぢやなア。ト愁うれひのこなし。隨分ずいぶん。靜しづかにあるべし。此うち。向むかうより。小割こわり傳内でんない。六十六部
の形かたちにて鉦かねをならし。花道はなみちのよき所ところにて。本舞臺ほんぶたいの方ほうを見みやり。傳内でんない我われ。相模さかの國くにに於おいて。思おもはず肉身にくしんの弟あとうを討う
たねばならぬ義理ぎりに迫せまり。又またその上うへ。母ははが自害じがい。おふさどの、最期さいご。若殿わかとはじめ常松つねまつさままで。敢あへなき有ありさま。變かはり
果はてたる浮世うきよとは。アレ。目のあたりなる木々きぎの紅葉もみぢ飛ひ花落はら葉はの世よの中なかぢやなア。ト少し愁うれひのこなしあつて。
此うち。香かうのかをりきくこなしあつて。傳内でんないアレ。向むかうに見みゆるは。この山の麓ふもとの籠かごり堂どうと覺おぼしく。人跡じんせき絶たえし秋あき
末すえ。通夜つうやする人もあると見みえて。佛ほとけへ供くずる一本いっぽんのかをり。ハテ。心得こころえぬ。ト云いふうち。少し合點あてんのゆかぬこなしあ
つて。傳内でんないこの香かうは。慥たしかに玉たまかづらと號なづけし名香めいかう。某それが鎌倉かまくらに於おいて。網干家あじけへ仕官しぐわんの砌せきり。同じ家中おなじかうちう。清水しみづ空くう之の進しん
どの、御息女ごそくめ。おきよどのと縁談えんだんの節せう。彼かの方かたより贈たまわれしその玉たまかづらに變かはらぬ香氣かうき。ハテ。審みかしい。トいろく
思案しあんしながら。本舞臺ほんぶたいへ來きる。此うち。おきよ。二重舞臺にじゆうぶたいの上座かみざによるしくあるべし。傳内でんない。こなしあつて。二重舞
臺にじゆうぶたいへ下くだろし。腰こしかける。トおきよ悔くりして。きよ誰たれれぢや。ト答こためる。傳内でんないよろしくあつて。傳内でんないオ、さ
う仰おほしやるは女中にようぢゆうさうな。定さだめて旅人りょじんでござらう。某それがは廻國くわいこくの修行しゆぎやう者もの。今宵こんしやうはこの籠かごり堂どうにて。夜よを明あかさうと存ぞん
じて參まゐつた。許ゆるさつしやれ。ト云いひ。二重舞臺にじゆうぶたいへ上あがる。おきよこなしあつて。きよわたしは。西國さいこく三十三ヶ所さんじさんへ
杖つゑを納なめる者ものでござりますが。飛とに今宵こんしやうは。おきよ傳内でんないの命いのち吐つゆる。夜よと共に回まわりいたさうと存ぞんじて。通夜つうやして居ゐりま

す。傳内でんないオ、それは御ご奇特ごきてつな願ねがひのお女中にようぢゆう。某それがも。佛ほとけへ仕つかへる修行しゆぎやうの身みでござれば。とも。御ご面めん前ぜんを申ましませ
う。きよそれは。近頃ちかごろ御ご苦勞くろうさま。ト此うち傳内でんない。心意こころ氣きあつて。傳内でんない卒すつ爾にながら。お尋たずね申ましたいは。其その許ゆるさま
が。いま佛ほとけへ供くじさつしやりましたその香かうは。親御おやごからのお譲たまりか。又は他家たがからお求めなされましたか。トおきよ
も心意こころ氣きあつて。きよこれはマア。變かはつた事ことのお尋たずね。成なる程ほど。これは父とと様の御ご秘ひ藏ざうありし名香めいかうゆゑ。斯か様に肌身はだみ離はな
さず。その上うへ今宵こんしやうの追善つぜんも。心こゝろばかりの香かうの一ひと炷たきき。傳内でんない成なる程ほど。常つねならぬ香氣かうき。もしや。其その許ゆるの御ご生國せいこくは。播州はつしゆうで
はござりませぬか。トおきよ。悔くりして。きよあなた様さまは。何なにゆゑ御ご存ぞんじてござります。傳内でんないすりや。播州はつしゆうとな。
きよアイ。傳内でんない然しからば。網干あじの御ご身内みない。清水しみづ空くう之の進しんどの、由縁ゆゑんの人ひとてはござらぬか。きよほんに。詳こましう御ご存ぞんじの
上うへは。何なにをか包つみませう。如何いかにも。その本もと之の進しんが娘むすめでござります。傳内でんないナニ。空くう之の進しんどの、娘御むすめごとあるからは。お
きよどのではござらぬか。きよあなたは。どうしてわたしに名なまで。傳内でんない存ぞんじ居ゐるその仔細しじゆ。これおきよ下くだされ。ト
傳内でんない。懐中くわいぢゆうより。香かう包づつみを取とり出し。香かうを炷たき。おきよへ渡わたす。おきよ。これをきく事ことあつて。悔くりして。きよこれも
變かはらぬ一木ひとの名香めいかう。傳内でんない銘めいは即すなち。きよ玉たまかづらではござりませぬかえ。傳内でんない如何いかにも。きよそんなら。あなたは父
様さまが。鎌倉かまくらに於おいて云いひ號なづけありし。傳内でんないさまではござりませぬか。傳内でんない如何いかにも小割こわり傳内でんないとは。拙せつ者が事こと。きよエ、
トおきよ。悔くりするうち。嬉うれしき心意こころ氣きある。傳内でんない。不思議ふしぎなる顔かほして。傳内でんないその空くう之の進しんどの、お息女おそくめ。おきよど
の。見みれば供くも連つれざる一人旅ひとりたび。これには何なにぞ様さまがござらう。様さまが早はやう承うけたまはりたい。トおきよ愁うれひのこなしにて。
きよほんに悲かなしいわたしの身みの上うへ。聞きいて不便ふびんと思おもうたべ。父とと様さまは。去年こぞの秋あき。お國くにの城下じやうかの片かたほとり。垂水たるみづの松
原はらにて。ト泣なく。傳内でんないナ、なんと致いたされた。ト不思議ふしぎさうに云いふ。おきよ。よろしくあつて。きよ人手ひとてにかゝつ
て。お果はてなされましたわいな。ト大泣おほなき。傳内でんない。悔くりして。傳内でんないナニ。人手ひとてにかゝつて御ご最期さいごとな。して。又また。敵
はよもや。町人ちやうじん百姓ひやくしやうにてはあるまじ。敵かたきの實名じつみやう。國所くにところは。いづくの誰たれ。早はやう。様さま子を云いはつしやれ。ト急せき込んで

云ふ。きよサア。その敵は。何人とも知れず。開討ちにおあひなされましたわいな。傳内ヤ。すりや敵は誰れとも。相分からず。然らば。何を目當に。何を便りに。敵を尋ぬる心當りでもござるか。トおきよ。割り筈を懐中より出して見せる。傳内。取つて見て。傳内すりや。この割り筈を敵の手がかりとな。きよアイ。それが父様の死骸の側に落ちてあつたが慥かな證據。母様と。わたしとは。別れに在所を尋ねても。今以て知れませぬ。世に頼りなきわたくしが身の上。どうぞ力となつて。助太刀して下さりませ。傳内我れとても。其許と云ひ號せし上からは。舅の敵舅御は。實父も同然。やはか尋ね出さず置か。きよエ、嬉しうござります。ト拜み。嬉しき心意氣。いろくあつて懐中より首に掛けたる守り袋を取り出し。きよこれと云ふも。日頃信心する。この觀世音の守り本尊様のお庇。エ、有り難う存じます。ト傳内も守り袋を出し。傳内この所に於て。不思議に逢うたも。即ち。この守り本尊さまのお引合せ。きよそんなら。夫婦變らぬ。固めにどうぞ。守を取替へて下さりませ。ト兩人。守り袋を取替へる。傳内よろしくあつて。傳内今宵は。夜と共に。亡き人の菩提を弔ふこの籠り堂。きよ枯れたる木にも花咲かす。傳内觀世音の誓ひもあれば。きよ何卒早く修羅の苦患を。傳内お助け申すがせめての孝養。きよエ、嬉しうござります。ト傳内。手を洗ひ。經机に向ひ。一心不亂に。傳内南無幽靈出離頓生菩提。ト此うち。おきよ。いろくもどかしき心意氣にて。ソロく傳内の側に寄り。きよ互ひに親々が云ひ號けはしてあれど。鎌倉綱干と國を隔て。お顔を見たは今宵が始め。嬉しい事は嬉しいが。ほんに情ない男の心。其やうに回向ばかりしてあらずと。ちつと此方を向いて下さんせ。ト摺りよると。傳内。ちやつと飛び退き。傳内ア、コレ。みだらな事を致された。夫婦の名はありながら。互ひに大切なる身の上。敵を尋ね。本望達し。某も心に誓ひし願望成就するまでは。不犯にて修業の旅。必らず側に寄るまいぞ。トきつと云ふ。おきよ。いろく辛氣なる心意氣あつて。きよ親々のお許しありし夫婦の仲。傳内も見通してござります。其やうに云はずとも。トまた密らうとする。傳内。籠機を比方が持つて来て。

おきよに籠はす回向する。おきよ。籠を取つて。コレイナア。ト密り添ふ。傳内ハテ。隠しやれた。トこの籠機に。兩人ヒツタリと抱き付く。ト籠り堂の屋臺一杯に山幕下り。後へ引き込む。東西の紅葉の幹残りあるべし。

造り物。平舞臺。向う一面の山に松あり。二重屋體籠り堂閉ぢ明けあり。上手。平舞臺に紙帳吊りある。よき所に臺松あり。すべて八鬼山峠の模様。雨車の音。靜かなる體。

ト向うより。巖山。雲助二人連れ。いづれも破れ笠などかぶり。捨ぜりふにて出で。

巖山エ、又。搦て加へて。この雨は。何の事ぢやぞい。わいらも。力一杯尋ねてくれい。その美しい順禮一人。峠を通つたとの事ぢや。よもや。この夜中に峠は越えはせまい。もそつとぢや。尋ねてくれい。雲助その代り。キツと酒手があるであらうなア。巖山さうともく。探し出しさへすれば。キツと酒手は遣る。トこんな事云ひく。本舞臺へ来て。巖山。紙帳を見つ。兩人に囁き。嬉しさうな心意氣あつて。巖山めめたぞく。あそこに紙帳吊つて寝てゐるが。晝のお娘に極まつた。草臥れてよう寝てゐる所へ。ヌツと入つてせしめるつもりぢやほどに。わいらも。大きな聲せずと。あたりへ氣を付けてくれ。雲助合點ぢや。巖山その代り。おれが跡では。わいらにも。うまい事させやうわい。雲助そりや。忝ない。ト巖山。をかしき身振りにて。いろくあつて紙帳の内へ入る。トばたくにて巖山をボンと投げ。傳内。六十六部の形にて。ヌツと出て。傳内何者なれば。狼藉ひろく。ト此うち。巖山。起き上がった。傳内を見て悔りして。巖山ヤア。順禮の娘と思ひの外。雲助廻國の修行め。巖山えらい目に會はし居つた。ト三人。一緒にかゝるを。ちよつと立廻りにて。見事に皆々を當て。傳内さては。この奴等は。この邊の山賊よな。旅人を妨ぐ憎い奴。それはさうと。今まざく見たる夢のうち。所は籠の籠り堂にて。清水本之進どの。娘おきよに巡り合ひ。互ひに守り袋を取替へしと思ひしに。ト云ひく。懐中より。守り袋を取出だし。とくと見てこり

や。今まで掛けたる守とは。袋の裂れも違ひ……さては。正夢であつたか。ト此うち。雲助二人。起き上がつて。窺ひより。雲助うぬ。トかゝるを。ちよつと立廻りのうち。傳内すりや。舅どの。最期の様子も。トまた立廻りにて。傳内敵討に出てたる娘。雲助なにを。ト立ちかゝるを。トん／＼と烈しき立廻りにて。ト、雲助二人を追ひ込み。傳内ハテ。心ならざる夢の様子。何にもせよ。麓へ下つて。實否を糺さん。ト笈をかたげ。鉦打ち鳴らし。静かに向うへ入る。ト橋がかり二重屋體。籠り堂の内より。おきよ。順禮の形にて出て。あたりを見廻し。いろ／＼こなしあつて。きよ今のは夢であつたかいなア。日頃戀しい／＼と。思うてゐる傳内さまに。玉かづらの香を證據に巡り合ひ。父様の御最期の様子も語り。守り袋を取交したと思つたが。ト云ひ／＼懐中より。守り袋を取出し見て。忸り。きよこりや。わしが常に肌身に添へてゐた守り袋の裂れとは違つてある。そんなら。矢ツ張り傳内さまに。逢うたと見しは。正夢とやら云ふものであつたのかいなア。本意ない別れであつたなあ。ト辛氣なるこなし。此うち。巖山。起き上がつて。おきよを見付け。巖山ヤア。こりや晝の順禮のお娘。其方に逢はうと。一遍と探してゐて。六部めにえらい目に會はされた。これ程までに。焦れてゐる男。幸ひあたりにもなし。この間にツイ／＼と寄り添ふを。振り放し。きよエ、うるさい。この人わいの。側へ寄つたら。きかぬぞや。巖山なんぢや。側へ寄つたらきかぬ。晝から探したお娘。此まゝ置かうかい。ト又しなだれかゝるを。おきよ。アレい／＼とあちこち逃げ歩く事。いろ／＼ある。此うち。向うより笹屋半兵衛。引廻し着て。三度笠。飛脚提灯。笹半と記したるを下げ出で。花道にて。ちよつと捨ぜりふあつて。本舞臺へ来て。巖山を見事に投げ。おきよを見て。半兵衛。見れば。若い女中さうな。大膽な。夜中には男も通らぬこの峠。狼藉者に出合つて。どこの怪我はなかつたかいの。トおきよ。嬉しき心意氣あつて。きよこれはよい所へよう来て下さりました。ト此うち巖山。起き上がり。巖山アイタ／＼。エ。娘に似合はぬ。どえらいがぢや。ト云ひ／＼半兵衛を見て忸り。ヤア。すてつんころりと投げたは。われぢや

な。半兵衛夜中に。女子を捕へ。狼藉ひろくゆゑ。投げたが何ぢや。巖山ヤイ。納めな／＼。見れば。敵人の影をし。この入鬼山峠を夜通るは。わりや。山賊ぢやな。なんぼ。われが納めた顔しても。ビクともせうかい。そんな事を。怖がるおれぢやない。トこんな事云ひ／＼。よき時分に橋がかりへ逃げて入る。おきよ。あたりを探すこなしあるを半兵衛見て。半兵衛コレ。女中。こなた。何ぞ尋ねさんすか。トおきよ。ちよつと心意氣あつて。きよアイ。ちつと尋ねる物がござります。半兵衛何ぞ。落さんしたか。きよアイ。今の先まで。あつた物が。半兵衛大方。今の下サクサに落したのであらう。そしてマア。落した物は。何ぢやぞいの。ト尋ねる。おきよ。隠すこなしにて。きよイ、エ。ちと大事の物でござんす。半兵衛ムウ。大事の物か。ト半兵衛。提灯の火にて探し。割り筈をキツと見て。さてはト云ふこなしにて。半兵衛コレ。こなたさんは。播磨の人であらうがな。トおきよ。忸りして。きよイ、エ。アノわたしや。出羽の庄内の者でござります。半兵衛何を云はんすぞいの。おれは商賣が。宿屋ぢやによつて。國々の訛りはよく知つてゐる。こなたさんは。播磨ぢやわいの。きよエ、。半兵衛しかも網干の家中。こなたの名は。おきよと云はうがの。トおきよ。忸りして。きよそれ知られたら。ト懐劍にて切つてかゝるを。半兵衛よろしく止めて。半兵衛、女子の手にあふやうなおれぢやない。コレ。女中。さる人に頼まれて。この割り筈を取り戻してくれいとあるゆゑ。往來に氣を付けてゐるのぢや程に。こりや。おれに下んせ。きよイヤ。それ遣つては。トまた切りかゝるを。止め。半兵衛、命ばかりは助けてやらうと思つたに。こりや。酷い目。見ずばなるまい。きよそんなら。其方は。敵の餘類。トまた切りかゝるを。立廻りにて。半兵衛。おきよを一かせ切る。おきよ。口惜しがる事。いろ／＼あつて。きよエ、。死にともない／＼。敵の本名も聞かず。やみ／＼殺さるゝか。エ、。口惜しい。どうぞ。夢の中に逢うた傳内さまの。お顔を一目見て。敵の事が頼んで死にたいわいの。ト大泣き。半兵衛。あたりへ氣を付ける事。いろ／＼あつて。半兵衛、こま言云はずと。くたばつてしまへ。トぐつと止め刺し。割り筈を懐中して。おきよ

の死骸を上手の切り穴へ抛り込んで。半兵谷底へ蹴込んでしまへば。これでよいワ。得てこんな所に。證據を落して置くものぢや。トこんな事を云ひく。そこら提灯の灯影にて見廻し上手へ行く。よき時分に見付け洞穴より。お須磨の方。黒装束。着流し。頭巾着て。龍燈提灯を袖にて隠し。窺ひ出て。舞臺の正面にて。須磨曲者。ト半兵衛に龍燈を差出す。半兵衛イ。ト最前の割り笄を。手裏劍に打つ。お須磨の方。よろしく止める。この途端に。半兵衛。西の通ひ路へ。提灯の灯を吹き消し。走つて入る。よろしく。

幕

造り物。平舞臺。一面の黒幕。石塔並びある。鹽病口。折り廻し障子屋體。但し反古貼り。橋がかり石塔に枕飯供へある。すべて墓原の體。一つ鉦にて。幕開く。

ト向うより巖山。丸裸にて手を組み。寒さうにして出て。

巖山ヤレ。寒や。春寒いと秋ひだるいと。堪へられぬと云ふけれど。このマア秋の夜に。寒さとひだるさとか。一時になつて来ては。堪るものぢやない。エ、いまくしい。とぼやく。本舞臺へ来て。石塔の枕飯を見て。巖山ア。爰に枕飯が供へてある。これは忝ない。さらば御馳走にあづかりませうか。ト枕飯を取つて。喜ぶこなしあつて。食はうとすると。内より犬の聲しきりに聞える。巖山エ、いまくしい。ト石塔の前の石を拾ひ。犬に投げる模様あつて。また飯を食ふ。トまた犬の聲するゆゑ。犬を追ふ模様。始終。捨ぜりふあるべし。此うち。鹽病口より墓守鈍願出て。鈍願ドリヤ。もう枕飯。下げてよよからう。楽しんでゐて。犬めに食はれては詰まらん。トいろく石塔の前を見て。鈍願ハテ。面妖な。いま供へた枕飯が。トそこらを見廻し。巖山が喰つてゐるを見付け。鈍願ア。わりや。枕飯を食つてゐるか。ト巖山。悔りして。巖山イヤ。モウ。斯うひだるうては。枕飯どころか。犬の五

器でも大事ない。鈍願エ、何吐かすぞい。それはおれが食はうと楽しんでゐるのに。いまくしい。此がへおこせ。ト無理に引つたりかゝる。巖山。止めて。巖山命の親のこの枕飯。遺る事はならぬわい。ト鈍願。腹立て。鈍願エ。遺る事ならぬなども厚かましい。この枕飯は。墓守りの餘得ぢや。此方へおこせ。巖山イヤ。ならぬ。ト兩人枕飯を引き合ふ。巖山。持つて逃げるを。鈍願。追ひ歩く。石塔の間に下り。あちらこちらへ。いろくある。ト此うち。向うより。葬禮の人數。丸提灯。影燈籠。油樽を差荷ひにして来る。鈍願と巖山は。この葬禮の中で。飯取り合ふ。皆々。入れ亂れに。ゴツチャになりて。鈍願。巖山は。油樽を差上げ。兩人。與勘平彌勘平。二人奴の模様にて。キツと見得になり。ソツと平舞臺へ下ろす。此うち。葬禮の人數。呆れゐる事。よろしくあるべし。兩人は油樽を中において。顔見合して。鈍願おれが。われか。巖山われが。おれか。鈍願頭の皿の禿げたまで。巖山微塵變らぬ。臺なし坊主。鈍願てつかり据多た三里の灸。巖山摺り割けたまで。違はぬく。鈍願つくね坊主の同作ぢやと。互ひに呆れしばかりなり。ト淨瑠璃のやうに云ふ。葬禮の人數。口々に。皆々此方の大事の佛を。なんて弄り物にするのぢや。鈍願これも。この乞食坊主め。其方へ片寄つてゐい。巖山ハイ。ト巖山。片脇へ寄る。鈍願。油樽を見て。鈍願申し。申し。この佛は。何て此やうに。油樽へ入れてござりますのぢや。百姓されば聞かしやれ。昨日。在所の者が。八鬼山峠を通つたら。おまんぢやないが。谷底見たれば。不便や。年の頃十六七の娘。しかも器量は飛切り上々物。順禮と見えて。笈摺を掛けてゐたが。むごたらしう切棄て、あつた。その百姓が戻つて。村中へ話したら。此方の村の庄屋どのは。女子にかゝると。情深い大の腎張りで。女の死骸と聞いて。大方熊野へ參詣したのであう。鳥に突かすも不便ぢやとて。おらに云ひつけ。有合せの油樽を持たせて。その死骸を持つて戻らせ。そこで今夜。この墓所へ葬むらしやれとの事ぢや。コレ。わしらも。手傳うて埋める程に。指圖して下され。サア。お布施は。先へ渡すぞよ。ト紙に包みし錢を渡す。鈍願。戴き。鈍願これは。御丁寧に。トこの前より。巖山。始終を聞いて。悔りして

みる。皆々。鋤や鍬にて土を掘り。捨てりふにて。油樽を埋めうとする。巖山。この時。皆を突きつけ。巖山そんなら。この中の佛は。八鬼山峠にて殺されてゐた順禮の娘か。エ、さういふ事とは露知らず。どこを尋ねたら逢はれうと。ひだるい腹を抱へて。ウロ／＼尋ねてゐるわいやい。ト泣き／＼云ふ。百姓エ、この坊主めは。何を吐かすのぢや。氣でも違ひはせぬかいの。同こんな奴に構はずと。葬むつてしまひませう。ト皆々。掘つた穴へ油樽を埋む。巖山とめて。巖山どうぞ。一目見せて下され。皆々エ、面倒な。ト鋤鍬にて叩き伏せ。皆々捨てりふにて。橋がかりへ入る。鈍願も。よろしくあつて。鈍願もう追ツつけ。お客人のお立ちの時分ぢや。ドリヤ。茶でも沸かして進ませせうか。ト合ひ方になり。障子屋體へ入る。巖山。ソロ／＼這ひ出て。あたりを見廻し。いろ／＼あつて。巖山あつたらお娘を。酷い目に逢はし居つた。大方。おれを投げた旅の奴であらう。可哀い事ぢやなア。ト泣き／＼あたりを見廻して。巖山うまいワ／＼。この間に掘り出して顔を見よう。ト鋤を持ち。捨てりふあつて。穴を掘りおこす思ひ入れあつて。油樽の蓋を取り。おきよの顔をいろ／＼眺め。思案し。イヤ／＼得てこんな時には。ヒウドロヒウドロとくはされては。却つて恐ろしいと云ふこなしあつて。巖山エ、美しい事この上なし。ト手を取り。引上げ見て。巖山コレ。順禮のお娘。おれが此やうに。思つてゐる心が通じたら。可愛いわいなと。たつた一言云うて下され。ト始終。清玄の思ひ入れ。或ひは鳴神。菴室の入れ事。いろ／＼あるうち。寢鳥にて。おきよ。ソロ／＼顔を上げ。きよエ、死にともない／＼。死にともないわいなア。ト微かなる聲にて云ふ。巖山。悔りして。身を慄はし。逃げようとするを。おきよ。巖山を。しかと捕まへて放さぬを。無理に逃げようとするはずみに。急所をぬらる。思ひ入れ。ウンとこける。おきよも。其まゝ。バツタリと又こける。始終寢鳥にて。よろしくある。また巖山。氣が付き。直ぐに起き上がり。おきよを見て。こなしいろ／＼あつて。ヤレ／＼離しや。また死んださうなと。おきよを指き起し。いろ／＼こなし。向うバツ／＼と音する。巖山これにて悔りし。飛び退き隠れる。ト傳内。聲を聞いて。

杖突き。墓守りの鬮子屋體より出て。傳内もう／＼。それにお出でなせりませ。今宵は巖山のお世話。番なう。少しります。御縁もあらば。重ねてお目にかゝりませう。ト云ひ／＼花道の付け際まで。ソロ／＼行く。トおきよ。少し顔を上げ。微かなる聲にて。きよ申し。申し。ト呼びかける。傳内。心意氣あつて。立ちどまり。傳内ハア。誰れぢや。おれを呼ぶさうな。ト思案し。あたりを見廻し。心得ぬこなしあつて。傳内誰れも人影見えず。さては松吹く風か。谷の笹を人聲かと思ひ。トこなしあつて。傳内ドリヤ。ソロ／＼行かうか。ト花道へ静かに行く。又おきよ。微かなる聲して。きよ申し申し。ト傳内。心得ぬこなしにて立ちどまる。きよ修行者様。お待ちなされて下さりませ。トこれにて傳内。キツとなり。傳内修行者待てと。呼びかけしからは。正しく人聲。ト本舞臺。墓原の間を窺ふ事。いろ／＼あつて。静かに立ちどまり。傳内我れを呼びかけしは。何人なるぞ。ト云ひ／＼おきよを見附ける。おきよも。ヂツと傳内の顔を見て。きよヤア。あなたは。ト悔りする。傳内も心意氣あつて。傳内ムウ。こなたも。どうやら見たやうなお人。トちよつと思案のこなし。きよ一昨日の夜。八鬼山峠の籠り堂にて。傳内イカサマ。思ひ合する合ひ紋に。きよ縁を翫みし玉かづら。傳内その香包みは夫婦のしるし。きよ互ひに名乗り合つた上。傳内舅どのの御最期も。きよ敵の様子。語りしは。傳内すりや。正夢で。二人あつたよなア。ト兩人よろしくあつて。傳内然らば其方は。網干の家中。清水李之進どのの息女おきよよどでござりますか。きよアイ。左様でござります。あなたは小割傳内さま。おなつかしうござりますわいな。ト取りつき。泣く。始終。傳内。不思議なる心意氣にて。傳内夢の中に承はりし。舅御の非業の最後。母御もろとも。敵討に出てし其許と。この場の様子。ハテ。訝かしい。定めてこれには。様子がござらう。仔細は何とでござる。トきつと云ふ。おきよ。よろしくあつて。きよさればでござります。まぎ／＼見たる夢の中に。あなたの身の上の。憂き事しげあらましを。お話しせしと思ひしが。夜半の嵐に夢さめて。本意ない別れのその所へ。晝のうちからつけ歩く。乞食坊主に見つけられ。既に我が身を穢されんとせし所へ。

旅人一人來合せて。その場の難儀は遁がれしが。その旅人こそは敵の餘類。心は矢竹に早れども。甲斐なき女の身の悲しみ。遂にこの身は切り殺され。果敢なき最期を。ト云ひく。我が身に別條なきに心付き。大きに悔りして。きよほんに。わたしは死んだのに。矢ツ張り生きて居りますか。ト傳内も。こなしあつて。傳内イカサマ。身内に一つの疵なきは。ハテ。合點のゆかぬ。ト兩人。訝かしく思ひながら。おきよ。心附きたるこなしあつて。きよもしや。このお守の御利生にて。ト云ひく。懐中より。守り袋を出して見て。悔りして。きよヤア。この守り袋は。ズタズタに。ト傳内も。悔りして手に取上げ。傳内成る程。この守は。年來某が所持せしところ。夢の中に取替へありしも。佛の不思議。斯くズタ／＼に破れしも。悪人の双にかゝり。觀世音が御身替りに立たせ給ひしか。きよそんなら。守の御利生にて。傳内不思議の利生もこれ偏へに。きよ那智山觀世音の御かけ。傳内末世に及べど。誓ひを違はぬ佛のお慈悲。二人有り難うござります。ト上手の方を拜む。この前より。巖山。起き上がり。始終を聞いて。いろ腹立てる事あつて。鋤を取つて。巖山エ。いま／＼しい二人の奴等。戀の意趣ぢや。覺悟せい。ト叩きかゝるを。傳内。おきよを後に圍ひ。よろしく立廻りありて。ト巖山を見事に押へる。おきよもよろしくこの見得にて紋板通りへ。雪松原の布幕引く。ト在郷唄になり。向うより馬方紅藏。馬を引き出る。謎坊主春雪。旅姿にて。琵琶を背負ひ。馬に乗り出る。後より馬方二人。付き出て花道よきところにて。馬一ヤイ。紅藏。待ちやアがれ。馬二わりやマア。新米の癖に。よい仕事をさらすなア。馬一この盲目どのは。後の宿から。おれが付けて來たのぢや。馬二われに先越されては。この海道で面出しがならぬ。馬一サア。酒手の分け前せうかい。ト口々にやかましく云ふ。紅藏エ。エ。ペリ／＼と。ようはしやいだ。隨ぢやなア。おりやこの海道で顔は新しいけれど。馬士の紅藏ぢや。おれが馬に乗つた旦那の酒手をば。わいらに分けたというては。面が立たぬ。あつたら口に風引かさすと。とつとと海道を働らいてうせいやい。ト云ひく。本無事へ來る。矢張り二人。後より。馬一エ。それをわれに習はうかい。キリ／＼と酒手の

分け前せう。紅藏この紅藏が解う云ひ出したからには。どこまでもならぬわい。馬二さう吐かしや。願うくても取つて見せう。紅藏こりやをかしわい。そんなら一番せりふせうか。此方の客人は盲目どのぢや。怪我さしては。おれが濟まぬ。コレ。盲目どの。ト春雪。氣味悪さうに。春雪ハイ／＼。何てござります。紅藏イヤ。外の事でもないが。お前の今。聞かんす通りぢや。此奴らと。ちとせりふがあるによつて。こなさんは。馬に乗つて。先へ行て下んせ。ト春雪。悔りして。春雪エ。滅相な。この盲目を乗せて。馬ばかりやらうとは。そりや胸慾ぢや。紅藏ハテ。馬ばかりでも。親方の内まで行く程に。氣遣ひせずと行かんせ。親方の家が。海道一番の宿屋。笹屋と云ふのぢや。ト云ひ云ひ馬の尻を。鞭にて叩く。馬は一散に橋がかりへ入る。此うち。紅藏。身構へして。紅藏サア。腕づくの勝負せう。みな一時にうせあがれ。ト馬士。よろしくあつて。馬二ソリヤ。ト聲かけると。兩方より馬士。大勢走り出て。紅藏を取巻く。これより。大タテ。様々あつて。ト皆々を追ひ。橋がかりへ入る。ヤアトコセイの唄になり。布幕。切落す。

造り物。二重舞臺。上手。折り廻し障子屋體。橋がかり宿札。熊野講中札の書割り。二重舞臺の端に。笹屋と書いた大行燈。よき所に。手代長九郎。帳箱控へ居る。

長九コレ／＼女中達。大概に身しまひして。門へ出て。客を引かんかいなう。ト宿屋の下女三人。奥よりバラ／＼と出て。三人長九郎さんの忙しない。長九なんのおれが。忙しかる。門を見や。お客が大勢。通るわいの。ト皆々。門を見て。女一エ。長九郎さん。お客は通りはせぬわいなア。女二お前は近眼ぢやによつて。なんの門が見えやすぞいな。ト長九郎。腹立て。長九エ。なに吐かすぞい。ト始終同じ鳴り物にて。橋がかりより。仕出しの旅人大勢出る。下女皆々止めて。三人あなた。お泊りなせれませぬか。長九笹屋半兵衛は。爰てござります。三人宿一番の宿屋でござんす。旅人宿一番にして。女子達も美しい。皆々いつそ。爰へ泊らう／＼。長九サア。どなた様も。お御足を

お洗ひなされませ。ト此うち。下女皆。湯を取り。旅人の草鞋を解き。足を洗ふ。奥よりおてつ。世話女房の拵らへにて出て。てつどなた様も。お早うござりました。サア。奥の大座敷へ：ソレ。御案内しや。下女サア。此方へお出でなされませ。ト仕出し。皆々捨ぜりふにて。下女と皆々一緒に奥へ入る。トおてつ。そこらを見廻して。嫌らしきこなしにて。長九郎にしなだれかゝる。長九郎。嫌なと云ふ見得。此うち向うより紅藏。春雪を馬に乗せ。在郷唄にて出る。本舞臺へ来て。紅藏サア。お客を連れて戻つたぞ。トこれにて。おてつ。長九郎。よろしくある。紅藏は。二重舞臺へ馬を寄せ。紅藏サア。盲目どの。爰がおれが親方。笹屋と云ふ宿ぢや。サア。下りさんせ。春雪オ、合點でござる。お世話ながら。手を取つて下され。てつこれはお早うござりました。長九そして。あなたはお目が見えませぬか。ト此うち。春雪。二重舞臺へ下り。春雪イヤモウ。目の見えぬ程。不自由なものはないぞ。長九左様でござります。近眼でさへ。大抵不自由な事ぢやない。春雪コレ。馬士どの。杖を此方へ下んせ。紅藏オツト合點ぢや。サア。ト杖を渡す。奥より下女。三人ながら出て。皆々あなたのお背中。負うてゐるのは。何ぢやぞいなア。春雪オ、これか。こりや琵琶というて。三味線よりはまた上品で面白いものぢや。長九そんなら。お前は琵琶法師ぢやの。春雪アイ。さうでござんす。ト此うち。料理人喜助出て。喜助エ、この盲目どの。なんの法師ぢやあらうぞ。江戸の浅草に居た。謎坊主ぢやあらうがな。春雪エ、なんの其やうな者ぢやない。喜助隠さんすな。さうぢや。春雪イヤ。モウ。さう知つてなら是非がない。成る程。わしや浅草にゐた謎坊主。春雪と云ふ者ぢや。女三そんなら。疾から評判のあつた。謎かけの坊さん。ようマア。お出でなされたなア。春雪イヤ。あまりようも来ませぬ。一頃は。江戸中に。謎が流行したが。ちとこの邊も。流行らさうと思つて来ました。長九謎坊主なら今晚は。謎をかけて楽しんでまうか。春雪イヤ。モウ。草臥れてゐる。御免ぢや。てつそんなら爰で。何なりと。春雪オツト。おれから先へかけて見よう。春雪これは迷宮。ト此うち。皆々捨ぜりふにて。ちよつと思案のこ

し。春雪これは謎子の折檻。皆々その心は。春雪當りが。えらい。ト皆々笑ふ。てつ矢張り今度の芝居とかけては。ト春雪。ちよつと思案して。春雪眼はしい在所祭りと解く。皆々心は。春雪作がよい。紅藏こりや。えらいワ。そんなら。おれが馬を休ませ。臺所へ行たとかけては。春雪ハテサテ。長い謎ぢやこりや。解けぬ。あげぢや。あげぢや。紅藏ムウ。これが解けぬか。：泉の金持ち。春雪その心は。めしぢや。皆々ハア。トこの切れにて。紅藏は馬引いて下手へ入る。下女は。春雪の手を引き。喜助も一緒に奥へ入る。トおてつ。長九郎は残り。よろしくあつて。てつエ、ツツと。モウ。此方から思ふやうにもない。辛氣な事であるわいな。トおてつ。帳箱を平舞臺の上手へ持ち行き。繪を畫く事ある。長九郎も。色事師のこなしにて。いろ／＼捨ぜりふあつて。おてつ。側へ寄り。長九お前。そりや。何を書くのぢやぞいなう。てつハテ。これには様子のある事ぢやが。ほんに。辛氣な事ぢやわいなア。長九イヤモウ。内では女子どもの手前もあるゆゑ。旦那が留守でも。自由に話しもならぬ。ト云ひ。おてつの様子見て。長九オ、幸ひぢや。お前がさうしてゐてぢや所を。おれが前方。璃寛が大坂でした。傾城會稽山といふ外題にて。上田慶次郎の役。寺子屋の思ひ入れて。お前にいろはを書かして。其うちに話しをさす。この趣向はどうであらう。てつそりやよいが。併し。わしは無筆ぢやによつて。字を書いては分らぬ。わたしが心底は。マア。これぢやわいの。ト繪の畫いたを見せる。長九郎。眼鏡にて見て。長九なんぢや。マア。をかしげな魚と見えるもの。下に人形の首を書いたこの心は、ちよつと思案して。長九とんと解らぬ。こりやなんぢや。どういふ心ぢやぞいの。てつエ、鈍な人ぢや。こりや。鯛ぢやわいな。長九ムウ。鯛にした所が。下へ人形の首書いたは。どうぢや。てつハテ。こちの人と云ふ人ぢや。長九成る程。ト長九郎も繪を畫いて。おてつに見せる。おてつ見て。てつこりや。何ぢやぞいの。羽搔のやうな物があるによつて。マア。鳥ぢやあらうが。それを二つ。書いた心は。長九そり

や。烏ぢや。てつイカサマ。眞黒ぢやによつて。烏てあらう。その烏を二羽書いたは。長九ハテ。かゝと云ふ事ぢや。てつそんなら。わしをかゝぢやと思つて下さんすか。こちの人。長九かゝ。てつオ。嬉し。ト寄りそふ。向うより半兵衛。口暮の形。引廻し旅姿にて出る。後より眼兵衛出て。眼兵オ、イ。半兵衛どのぢやないか。ト花道のよき所にて。半兵オ、誰れぢやと思つたら眼兵衛。この間は逢はぬが。達者でよいワ。眼兵サア。おれも。貴様に逢はねばならぬ用があつて。この間から度々行けど。どちへか行かれたとの事ぢや。半兵サア。おれも岸和田まで用があつて。大分に隙が入つた。貴様が急用は。なんぢや知らぬが。爰は途中。マア。おれが内へごんせ。眼兵オ、さうせう。ト兩人。本舞臺へ来て。内へ入る。長九郎近眼にて。長九これは。お客様。ようお出てなされました。トおてつ。眼兵衛吹き出し。眼兵エ、長九郎。なに云ふぞい。半兵おれが戻つたのぢや。長九さう云ふ聲は。ト半兵衛と顔見合して。長九ほんに。矢ツ張り此方の旦那ぢや。皆々ハ、。ト此うち。半兵衛。引廻しを脱ぎ。こなしあつて。半兵時に。おれが留守の間に。内の事は勿論。何も變つた事はなかつたか。眼兵爰の事は知らぬが。一昨日の夜。八鬼山峠に。十六七位の順禮の娘が殺されてゐた。なんと。いちらしい事ぢやないか。トこれにて半兵衛。心に當る模様。よろしくある。が。そりやマア。餘所の事ぢや。おれが急に話したいと云ふは。先達てより貴様に渡して置いた。網干家の重寶。傳授の一卷。半兵コリヤ。ト押へ。半兵聲が高いわえ。諸國からの旅人の入込んでゐる此方の家誰れが聞いてるやうも知れぬ。マア。静かに云はんせ。眼兵成る程。トうなづく。此うち。向うより。横田軍平。旅裝束。侍ひの形にて出て。本舞臺へ来て。軍平ちよつと物が尋ねたい。笹屋半兵衛といふは。いづくぢや。教へて下され。ト至つて大きな聲で云ふ。皆々悔りする。長九エ、大きな聲の人ぢや。ト云ひ。軍平に向ひ。長九ハイ。笹屋半兵衛は手前。あなた様は。どこからお出てなされました。軍平ナニ。笹屋半兵衛はこれとか。ヤレ。と。一帯と尋ねた。身共は。薩州郡平の者。敵軍大將よりの使ひでござる。ト大きな聲で云ふ。半兵サア

や。大將さまよりの御使ととな。マア。あれへ。ト軍平。ズツと平舞臺の上手へ出る。半兵衛よりくちあつて。半兵遠方からのお使ひ。御苦勞に存じます。軍平なんの。身共は役目でござるから。苦勞とも思ひませぬ。して。其許が。主人半兵衛どのでござるかな。半兵左様でござります。軍平然らば。主人大彌さまのお使ひ。即ち御口上の趣きは斯うてござる。先達つてより申し置いたる清水左之進が女房娘。某が所持せる。亂獅子に牡丹唐草の割り笄を證據にして。敵討に出立いたせしゆゑ。その地へ參らば。見附け次第。ぶち殺して下さるゝやう。猶々頼み入る。ト矢張り大きな聲して云ふ。半兵衛は。云ふなといふ仕方して。押へる事。いろ／＼あるを。見向きもせず大きな聲して。軍平また網干家の重寶。傳授の一卷。國次の刀。二品とも熊鷹の眼兵衛と云ふ者を尋ねて取揃へ。此方へ持參あらば。褒美と引替へに。仕らう。ト大きな聲して云ふ。眼兵衛。云ふなといふ仕方するをきかず。軍平先年。其方に。計らひくれよと申しつけし。先殿の實子土岐之助の事も承はりて。立歸れとある。主人よりのお飛脚。ト大きな聲して云ふ。半兵衛。堪りかねて。半兵エ、申し。お飛脚様。大事な事を。お前のやうな大きな聲で。仰しやりましたは。露顯の元。随分と小聲で仰しやりました。軍平イヤ。身共の聲は生れつきにて。これより小さい聲は。とんと出ませぬ。半兵そんなら。ザツと一筆お書きなされて下さりませ。コレ。長九郎。硯箱を。長九ハイ。ト掛け硯を取りに行かうとする。軍平止めて。軍平コリヤ。硯には及ばぬ。身共は無筆でござるから。物書く事は出来ませぬ。半兵こりや困つた事ぢや。ト迷惑さうに頭掻く。眼兵大彌さまも。大彌さまぢや。わざ／＼遠方へ使ひをおこつさつしやるに。小聲で物の云はれぬ上。無筆の人を密事の使ひとは何事ぢや。軍平イヤ。拙者でなくては。委細が解らぬゆゑの事ぢや。眼兵そんならいつそ。奥の藪へても。連れ立つて行て。聞かうかい。半兵それがよい。眼兵衛も。長九郎も一緒に。長九心得ました。半九大儀ながらお飛脚様。奥へござつて何かの密事。軍平詳しう演舌いたさうわい。ト矢張り大きな聲して云ふ。長九サア。お出てなさりませ。ト唄になり。長九郎。眼兵衛。おてつ。軍平を

連れて奥へ入る。後に半兵衛。残り。半兵衛大弼さまの密事。順禮の娘の事も。よし／＼。ト領づき。煙草盆引寄せ。思案のこなしよろしくある。ト向うより。お須磨の方。虚無僧姿にて尺八吹き出る。ト後より捕り手二人。付き出て。いつもの通り花道のよき所にて。捕手ヤア。ト聲かけ。十手振り上げる。お須磨の方。ちよつと見返り。見得の心意氣あつて。捕り手二人。花道の戸屋へ引返す。お須磨の方。よろしくあつて。静かに尺八を吹き／＼。本舞臺へ来て。鶴の巢籠りを門口にて吹く。半兵衛。虚無僧ちやさうな。ト立つて。盆に米入れ。持ち出て。半兵衛報謝進ぜう。トお須磨の方。こなしあつて。須磨報謝。望みにござらぬ。半兵衛。報謝が望みにないとは。須磨吹きくらしたる旅の梵論字。一夜の宿がお頼み申したい。半兵衛。それは此方の商賣。マア／＼。入らつしやれ。須磨左様なれば。許さつしやれ。トお須磨の方。天蓋を取り。内へ入る。半兵衛見て。半兵衛さてこそ。初めより女ちやと思ふた。宿賃は。旅籠か木賃でござりますが。須磨今宵の價は千金。半兵衛。不思議さうにする。須磨何を隠しませう。人を殺めて立退く者でござる。半兵衛。して又。こなたの本名は。須磨阿波の金十郎といふ盗賊の妻でござる。半兵衛ヘナア。トちよつとこなしあつて。半兵衛。何にもせよ。泊めるが宿屋の商賣。マア。奥へござつてゆるりと休息。トお須磨の方も。こなしあつて。須磨今宵は世話にあづかりませう。ト唄になり。兩人よろしくあつてお須磨の方。奥へ入る。あと合ひ方。半兵衛。奥を窺ひ。こなしあつて。半兵衛の虚無僧は。慥か八鬼山峠で逢うた女。ハテ。合點のゆかぬ。ト手を組み。思案のこなし。此うち向うより。傳内。六十六部。おきよ。順禮にて。連れ立ち出て。静かに歩み。花道のよき所にて。傳内。何にも急ぐ事はない。随分。静かに歩いたがよいぞや。とおきよ。アイと會釋する。傳内。本舞臺の方を見て。傳内。この邊の宿屋は。笹屋といふが好いと聞いた。大方あの邊であらう。トおきよ。アイと會釋して。二人とも本舞臺へ来る。傳内。門口にて。傳内。笹屋と云ふは愛さうな。ちよつとお頼み申さう。ト半兵衛。表を見て。半兵衛。お泊りならば。入らつしやれ。傳内。然らば。御免下され。ト傳内。おきよ

宛はり奥へ入り。二重舞臺へ驚を下るす。半兵衛見れば。お敵。修行のお人さうな。大方。木賃でござる。傳内。宿賃は。そこへよろしうなされ。ちよ。お頼みと申すは。仔細あつて。これなる女申とは。間を隔て、休まればならぬゆゑ。どうぞ。二間にして下され。半兵衛。イヤモウ。間敷は澤山にあれば。どうなりと。勝手次第。ト此うち。半兵衛。おきよの顔を見て。半兵衛。こなさんは。ト悔り。おきよも。半兵衛を見て。大きに悔りして。きよ一昨日の夜。八鬼山にて。ト云はうとするを。傳内。押へて。傳内。奥にござりませ。ト合ひ方になり。傳内。こなし。おきよ。半兵衛。互ひに心意氣よろしく。兩人奥へ入る。半兵衛。後を見て。心得ぬこなし。半兵衛。矢ツ張り。その時の順禮ちやが。よもや生きてゐやう筈もなし。幽霊にしては足もある。エ、。どうやら氣味の悪い。トいろ／＼あつて。半兵衛。今日ほど氣味の悪い。合點のゆかぬ日はない。ト怖がるこなしあつて。また氣を替へ。半兵衛。なんにもせよソレ。ト奥へツイと入る。ト春雪。凜々しき侍ひの形にて窺ひ出て。懐中より呼子の笛を出し。吹く。バラ／＼と仕出しの旅人。皆々。捕り手の形にて出る。春雪。心得がたき。この家の亭主。コリヤ。ト皆に囁く。春雪。必ず。ぬかるな。皆々。心得ました。春雪。行け。皆々。ハア。ト春雪。奥を窺ふ見得。よろしく。廻り道具。

造り物。見付け二間の間。二重屋臺。左右の落ち間建仁寺垣の書割り。植込みなどを見せて。東西は一間半の屋體。但し。西の方は高二重に。三段の踏み段あり。いづれも鼠壁。丸木柱等にて。随分。綺麗にして。床の間の掛け軸もあり。花活けなどのあしらひ。よろしく。舞臺の端に。井戸側置きあり。すべて。笹屋奥座敷の模様。一面に障子閉めあり。静かなる唄に。竹の音もあしらひ。道具とめて。唄一くさりある。ト見付け屋體の障子。静かに開く。ト傳内。六部にて笈を床の前に置きある。傳内。誠に。思ひ廻せば。さまざまに。移り變るは浮世の習ひとは云ひながら。弟の悪心より。若殿御親子。おふさどの。

我が母まで無慘の最期。せめては。誠の土岐之助さまを尋ね出し。網干の家をお繼がせ申すが。寸志の忠。とあつて
 お顔も知らねば。何を證據に尋ねんやうもなく。殊に差當る舅全之進どのの敵。これとても。手がかりの割り筈を。
 八鬼山峠の劍難に。失ひしと。おきよどのの物語り。併し。我れが忠孝。全き一心だに通じなば。土岐之助さま
 の在所も。舅の敵も。よもや知れぬと云ふ事はあるまい。トこなしあつて。上手の屋體に向ひ。傳内おきよどの。休
 んてござるか。この頃の心づかひ。今宵は。ゆる／＼氣を静め。草臥れを休めたがようござる。ト上手の屋體の障子
 靜かに開き。おきよ。願禮の形にて。少し二重舞臺の端へ出て。きよあなた様にも。まだお休みてはござりませぬか。
 夫婦の名はありながら。此やうに間を隔てたる天の川。せめて一夜は。傳内さま。ト辛氣さうに云ふ。傳内。よろし
 くあつて。傳内不思議に巡り逢うたれば。左程に思はるゝも尤もなれども。互ひに大望のある身。殊に觀世音の御利
 生にて劍難を遁がれし上からは。猶も信心怠たらず。佛に仕へ首尾よく望みを叶へし上。その時こそは夫婦の杯
 守のお庇は。忘れは致しませぬ。どうぞ。御利益にて。早う。敵を討取るやう。傳内間は隔てゝも。今宵も那智山
 觀世音。遙拜ながら。通夜いたさん。ト傳内。笈の内より。佛具を出し。駒下駄を穿きて。井戸にかゝり。振り釣瓶
 にて水を汲み。佛具を洗ひ清める。おきよもよろしくある。始終の間。合ひ方。しめやかにして。竹の音入り。よ
 き所にて。西手の屋體障子。密かに開く。お須磨の方。着流しにて。尺八吹きゐて。須磨ほんに。わたしとした事が。
 お隣りにお人のあるとも知らず。拙なき糸竹の調べ。お恥かしうござります。ト傳内。こなしあつて。傳内これはこ
 れは御挨拶。あなたは。梵論字のお修行者と見受けまます。此方とても。廻國の者。修行の道は變れども。佛に仕へ
 る心は。同じ一樹の宿り。須磨成る程。一河の流れも他生の縁とやら。夜寒を過す秋の末。傳内殊に長夜の事なれば。
 いま一曲。御所望が申したい。須磨不束ながら。御所望とあれば。それへ參つて。竹の一手。トお須磨の方よろしく
 あつて。靜かに平舞臺の眞中まで出て。傳内の顔見て。悔りして。須磨ヤア。あなたは。殿様ではござりませぬか。

ト傳内。不思議さうに。傳内見る影もなき修行者を。殿様と稱せり。は。公家のゆかぬ。トおきよ。あなた様は我
 を窺ふ心意氣ある。お須磨の方。矢張り傳内の顔を眺め入り。須磨イエ／＼。どのやうに仰しやつても。あなたは我
 が夫。傳内エ、ト悔りする。須磨本國にてお別し申し。新しく修行の旅に赴むき。先達て箱根山にて。御落命と承
 はり。その悲しさは如何ばかり。何卒。夫の敵を討取らんと。諸國を巡る其うちも。心を碎き。手がかりもあれかし
 と。思うて居りましたに。ようマア。無事でござつて下さりましたなア。殿様。ト側へ寄らうとする。此うち。おき
 よも。平舞臺へ下りて。お須磨の方を支へて。きよエ、滅相な。女中さん。このお人は。わたしが云ひ號けの大事
 な殿御。滅多に側へ寄つて下されますな。須磨それでも。違はぬ我が夫。ト云ひ／＼。顔見合はし。きよヤア。あな
 たは。須磨おきよではないか。きよ奥様。須磨でもマア。思ひがけない。出合ひと云ひ。きよわたし殿御を。殿様と
 仰しやるお心はえ。トお須磨の方。腹の立つこなしあつて。須磨エ、聞えませぬ。殿様。先達ては我が父。大弼さ
 ま。隠し置かれしお家の祕書を奪ひ返さんため。あなたは。酒と色とに。お身持ち放埒と偽はり。あのおきよどのを。
 室の津の傾城明石と姿をやつさせ。晝夜分かたぬ御酒宴。明石を御寵愛と見せたるは。大弼どのを計る手段と思ひ。
 勿體ない父上を欺むき。餘材抄を取り得しはお家の大事と夫の爲を思ふばかり。それに。あなたは聞えませぬ。妾に
 隠し。おきよと語りひ。我が身は修行の旅に出しぬき。まだその上に箱根山にて。狩人の鐵砲に中り。最期と見せし
 も偽はりにて。おきよと一緒に睦まじう。添うてござるお心か。さうしたお心とも露知らず。おのれ敵を討たんと。
 心を碎き。憂き艱難。思へば／＼恨めしい。聞えぬはおきよ。其方は。親々の云ひ號けある身ではないか。父様に
 勝りし大悪人とは。この二人恨みの程を思ひ知らさう。ト泣く／＼恨めしげに。キツと云ふ。傳内。おきよ迷惑なる
 こなしあつて。傳内先程よりの詞の端々。此方に思ひ當ることもあり。さては。其許は。網干右兵衛之助どのに連れ
 添はれしお人よな。きよあなたは。お須磨の方さまと申し。殿様の奥様でござりますわいな。須磨エ、まだ。マザ

マザしいその偽わり。ト傳内。キツとこなしあつて。傳内斯くなる上は。何をか包まん。我れくが身の上。始終の様子。一通り申し聞かさん。お須磨の方とやら。心を静めて聞いて下され。ト合ひ方になり。キツと云ふ。お須磨の方よろしくある。傳内。某。斯く修行者となつて。諸國をめぐり。全く佛道歸依の心にあらず。我が父は。淺羽久之進と云ひし武士なりしが。射術の師範にあつかる。弓削の某が娘。勝野と云へるに密通せしは。互ひに若氣の誤まり。この事。師匠弓削民の耳に入り。怒り強く。側に有り合ふ重藤の弓を以て。兩人を折檻に及びしところ。さしにも強き重藤も。三つにボツキと折れたり。親の筐と師匠の賜物。勘當の身の肌身に添へて。當國那智山の麓。清水村に。ちとの由縁ありしを。これを頼りて。夫婦浮世をわたるうち。身ごもりて平産せしは。双子の男子。兄を松太郎。弟を曾根太郎と名けしかど。人の誹りもうたてて。密かに父が自筆の臍の緒に。重藤の弓の折れを添へて。捨て置きしが。幸ひなるかな。その頃。播州網干の先殿。一子なきによつて。これを歎き給ひ。當國熊野權現へ立願の爲。參詣あつて。その歸るさこ。曾根太郎の捨てありしを。御覽あつて。密かに思召すやうは。これこそ權現より我れに授け給ふ一子ならんとて。やうく取上げ見たまへば。臍の緒に生れし月日を記し。重藤の弓の折れを添へたるならば。賤しき者の胤とは見えじと。直さま網干へ歸國の上。奥方と謀し合はし。實の子と披露ありしとは。後年に及んで聞く。その曾根太郎こそは。御身の夫。我が爲には。肉身の血を分けし双子の弟。我れこそ兄の松太郎。父は曾根太郎の安否を窺ひ。宿に歸り。母へ斯くと御物語り。その後。父久之進。かゝる片田舎に身を潜め。悴まで埋れ木にせんよりは。鎌倉へ立越え。武家へ仕官せんと。親子三人。清水村を立退き。東海道にさしかゝる。或る夜の泊りにて。俄の大地震。所の騒動。旅人の敗亡大方ならず。行く先知らぬ闇路に迷ひ。夜明けて見れば。父の行く所は。相州箱根の山奥に足をとめ。夏に毎月の田舎を廻るなり。我れも人となり。世人の世を渡るなり。

る日。江の島。財天へ参詣せしところ。思ひもよらぬ猿轡に出會ひ。樵手は犬勢。此方は一人。殊に若母を討たば。難儀に及ぶその所へ。網干家の御舎弟。土岐之助さま。折よく御参詣あつて。この危難を見給ひて。猿轡者を追ひ散らし給はりしゆゑ。不思議に母子が命を助かり。何卒この大恩を報じ奉らんものと。それより鎌倉へ立越え。網干のお屋敷に暫らく御奉公いたせしが。その頃。土岐之助さま。未だ部屋住みの御身にて。奥女中おふさどのといふと割なき仲となり給ひ。いつしか情の胤を宿し。家中の聞きを思し召し。某を密かに招き給ひ。何卒おふさどのを伴ひ。屋敷を立退き。安産させてくれよとお頼み。江の島に於て大恩ある。若殿の御内意。畏まり奉ると。母諸とも屋敷を忍び出て。又も以前住み馴れし。箱根の山奥へ伴ひて。程なくおふささまには御平産。出生ありし若君を。世を憚かりて我が子と呼び。常松さまと名け参らせ。表ばかりは。おふささまを。我が女房とせしところ。去年の冬の事なりしが。雪降り積る夜山の働らき。箱根山の往還にて。切り株くべて。寒氣を凌ぎある所へ。中間二人通りかかり。いづくの殿の鎌倉入りと。様子を聞けば。播州網干家の参勤。これ幸ひと。土岐之助さまの御事。餘所ながらうら問へば。兄右兵衛之助どの無道によつて。切腹ありしとの事。一度は驚ろき。一度は又。下郎の噂。合點ゆかずと。兎やかく案じ煩らひ。歸る道にて網干の家來。浪平に出逢ひ。土岐之助さまは御切腹の様子。筐の扇に御遺言。流石は主人の事ゆゑ。浪平も右兵衛之助どの、不行跡を。明らさまには云はねども。若殿の御最期も。下郎が噂に符合なす。時も時とおふさどのが。常松さまの死骸を抱き立歸り。網干の殿の行列を横切りせし科。小兒とて容赦ならぬと無惨の最期も。網干の殿の所爲と聞き。我が子ならば。雉子と鷹。是非なき不運と諦めても濟むべきなれども。大恩ある主人より。預かり置いたる若君。とあつて敵は主人の御舎兄。討つに討たれず。討たねば草葉の蔭の御主人へ。なんと云ひ譯あるべきと。千々に思ひを碎くうち。思ひがけなき母人が。ありし昔の物語り。網干の殿は肉身の双子の兄弟なりと聞き。血筋なれば猶恥多しと。母が義心に勵まされ。元より無道の右兵衛之助。討つて捨てなば家

の爲と。年頃手馴れし鐵砲引ッ下げ。通ひ覺えし崖づつたひ。先へ廻つて待つとも知らず。行列美々しく來りしは。天運通がれぬ絶體絶命。とは云へ現在。双子の兄弟。母の心中思ひやり。口に稱名目にたまる。涙を拂うて覬ひを定め。火蓋を切つたがこの世の別れ。仕濟ましたりと立歸つて見れば。母の自害。おふさどのは深手の最期。それより修行の旅に出て。實の土岐之助さまの御在所を。尋ね求める其うちに。一昨夜。八鬼山峠にて。これなるおきよが劍難も。佛の利益に助かるのみか。親々が云ひ號けありし。某にまで巡りあひ。初めて聞いたる舅の最期。これを見彼れを見るにつけ。たゞ慕はしきは。我が實父。生死も覺束なく。身につまされて。お須磨の方の心のうち。推量いたして居ります。ト泣く。お須磨の方も。愁ひのこなしあつて。須磨そんなら。あなたが我が夫の御兄弟とな。おのれ巡り合ひ。討たう〜と思ひしに。討つて討たれぬそれのみか。御兄弟の父御前に。助けられたる我が命。義理と義理とを重ねし身の上。こりやマア。なんとせうぞいなア。ト大泣き。傳内ナニ。兄弟の父に。命を助けられしとは。須磨サア。實の父上は我が夫。右兵衛之助さまを慕ひたまひ。綱干の門番とまでなり給ひ。親子の名乗りは重藤の。三つに折れたる弓が證據。トお須磨の方。包みより重藤の弓の折れ二つを出す。傳内。取つて見て。傳内成る程此方にも覺えの品。ト同じく弓の折れを出し。繼ぎ合はし見て。傳内すりや。これこそ。父が年頃所持ありしを弟に添へて捨てさせ給ひし。重藤の弓の折れであつたか。きよそんなら。あの松兵衛さまが。我が爲には。舅御さまであつたかいなア。ト泣く。バタ〜にて。捕り手大勢。奥より。半兵衛を取巻き出る。半兵こりやアうぬら。なにひろぐのぢや。トばん〜と捕り手を投げ。キツとなる。此うち。臆病口より春雪出て。春雪サア。汝が悪事は。その身に覺えある事。通がれはあるまい。半兵この半兵衛に悪事とは。春雪唐橋大弼に頼まれて。密事の段々。半兵大弼とやら。飯櫃とやらいふ和郎に。近づきてないわい。ト此うち。お須磨の方。キツとなつて。須磨サア。知らぬとは云はれぬまい。憎かなる悪業は。コレに。ト傳内。お須磨の方。見えて。半兵サア。ト捕りする。須磨見

傳内に。半兵衛の討り。須磨。半兵衛。待てと呼びかけたは。須磨如何にも自ら。半兵衛にさうぢやと思つてゐた。須磨この品こそ。父大弼さまの所持の筈。トこの時。傳内。おきよ。キツとなつて。きよナニ。大弼さまの所持とな。傳内すりや。舅の敵。きよ父上の仇。傳内自然と知れしも佛の加護。トお須磨の方。悔りして。須磨思はず顯はず不孝の罪。その云ひ譯は。まづかう。ト自害する。皆々悔り。お須磨の方。よろしくあつて。須磨我だ父大弼さま。先殿の實子土岐之助さまと。自身の胤。妾が弟と。年頃同じ出生ゆゑ。人知れず取替へ置き。綱干の家名を繼がせんと。年來の企みも空恐ろしく。弟には切腹なし。世に便りなき父が身の上。悪人なれども大恩ある。親の悪事。敵の様子。我が身から訴人しては。子たる者の道立たず。例へこの身をズタ〜にしてなりとも。父様を。どうぞ助けて下さりませ。慈悲ぢや。情ぢや。コレ。傳内さま。おきよどの。ト拜む。兩人も。心意氣よろしくあるべし。半兵衛。この時。平舞臺へ飛び下り。平伏して。半兵すりや。あなたが大弼さまの御息女とな。さは知らずして。無禮の段々。眞平御免下さりませ。親御の惡に引替へて。孝心深きお詞。承つて私しも。年來の悪心を懺へし。綱干のお家へ一つの功を立てます間。何卒。大弼さまのお命を助けて下さりませ。皆々ナニ。一つの功を立てようとは。トばた〜にて橋がかりより。紅藏。眼兵衛。軍平とタテしながら出て。紅藏大弼さまの悪事。何もかも聞いた。サア。二品の寶の在所。白狀ひろげ。兩人エ。知らぬわい。ト立廻りになる。此うち。春雪も支へて。ちよつと立廻りある。ト紅藏は眼兵衛。春雪は軍平をポン〜と切る。下前の井戸より水氣立つ。烈しき合ひ方になる。皆々キツとなつて。傳内ハテ。怪しや。血潮の穢れに。水氣逆巻き。きよあたりを拂ふ。この有様。春。紅何にもせよ。このあたりに。傳内尋ねる寶が隠しあるか。ト半兵衛。よろしくあつて。半兵如何にも。綱干の重寶。傳授の一卷を。お渡し申ませう。ト大石を刎ねのけ。袱紗包みの一卷を。傳内に渡す。ト合ひ方。水氣やむ。傳内すりや。これが。きよお家の重寶とな。須磨そんなら。それ

を功に父上の。傳内命を助けてくれいと云ふのか。半兵成程。私しは。阿波の金十郎と云ふ盜賊の張本。既に先年。首を刎ねらるべき科に極まりしを。大弼さまに助けられ。剩さへお金まで。それを敷金として。この笹屋へ入り。これ皆。大弼さまのお庇ゆゑ。先年頼まれし密事。先殿の胤を殺してくれよと渡されしかど。蟲同然の子悴。殺すも不便と。助け置いたその若君。只今。お渡し申さう程に。大弼さまを助けて下さりませ。きよナニ。若殿には。御堅固でござるとな。傳内して。御在所は。半兵外でもない。即ちこれに。ト紅藏の手を取り。上座に直して。半兵あれが内へ奉公に來た紅藏。幼な顔に覺えあり。誠の土岐之助さまとは。この浪平どのでごんす。須磨そんなら。そなたが先殿のお胤。傳内誠の若殿であつたか。きよさうとは知らず。今までの無禮。傳内眞平御免。皆々下さりませ。ト紅藏。實は浪平。よろしくあつて。浪平半兵衛どのの情なくば。今まで存命なさざるを。某改めて綱干の家名相續すれば。大弼どのの助命は我が胸に。須磨エ。嬉しうござりまする。ト皆々を拜む。半兵いま一品の國次の刀も。追ッ付けお手に入ませう。傳内惡に強きは善にも強く。半兵衛どののお庇にて。寶揃は。めでたう御歸國。浪平ア。それまでは。馬士の紅藏。きよわたしは矢張り順禮姿。傳内廻國の修行者。須磨我が身一人は死出の旅路へ。いづれも。おさらば。皆々南無阿彌陀佛。トお須磨の方。パツタリこける。皆々愁ひの模様。いろ／＼あつて。よろしく

幕

大

詰

網干館の場
船番所の場
木崎の端の場
人丸社の場

以上にて立つてある。觀望。上手に關屋。衆人の形にて。大弼へ行かうとしてあるを。浪平。お面の形にて。下手に奴與五助に。里娘。小暮の形にて。引き付けられ居る。乳人繼橋。立ちかゝり居る。上手松の木に傾城満月。好みの世話風にて縛られる。深山の瀧六。敵役の奴にて。割り竹にて。責めてある見得。眞中に。龍野丈助。町人の形にて。刀箱の刀を目利きしてある。橋がかりに紛ひの金六。肩入れの着付けにて控へてある。この見得。バタ／＼にて。早き序の舞にて幕明け。

ト瀨平。瀧六。與五助の三人。

三人ヤア。女め。動きやアがるな。關屋ぢやと云うて。聊示しやれば。繼橋許さぬぞや。瀧與何を小瀬な。ト瀨平は關屋。與五助は立廻つて。繼橋を引据ゑる。大弼コリヤ／＼。兩人とも荒立つな。ヤイ。うぬらよつく聞き居らう。右兵衛之助は道中の横死。その上に跡目に立つべき土岐之助の行くへ知れざれば。この家國は退轉にも及ぶべきところ。某が斯く。れい／＼とあればこそ。事なく家國治まりある。さすれば。この大弼は當國の主。國の守り神をも憚からず。尾籠の振舞ひ。すさつて居らう。ヤイ。そこな傾城め。死太い奴。斯程に責め問ふに。浪平の行くへ。なぜ申さぬ。満月サア。存じてさへますれば。申しますれども。二人でお國は立ちながら。若殿様の詮議の爲。別れ別れになりしま。今に巡り逢ひませぬわいな。大弼まだ／＼偽はる太い女め。ソレ。ぶつて／＼。ぶち据ゑい。瀧六サア有やうに。吐かし居らう／＼。ト打ち据ゑる。大弼それにゐる。不義働らきし管領の女郎ども。うぬ等が浪平の行くへ。知らぬといふ筈はない。サア眞直ぐに申し居らう。繼橋我れ／＼も姫のお供して。諸國を尋ね廻れども。それと云ふ手がかりもなく。ほのかに聞きしは。浪平どの。當國へ入込みしとの事。それゆゑ。忍び來り。擒となつて。この責め苦。大弼すりや。うぬ等も知らぬぢやよな。繼橋姫君の焦れ給ふ。浪平どのに逢は。何しに。ウロ／＼この國へ。さまよひ來やうぞいなア。大弼ムウ。イカサマ尤も。ヤイ。關屋。うぬは見苦しい姿になり下

がり。身が前へ参りしな。敵の行くへでも。相知れたといふやうな事か。關屋サア。今以て。敵の行くへも知れず。その上。娘に別れ。詮方なく。いま國の守となつてござる大弼さまへ。奉公を願はん爲。あられもない姿を願す。参りましたのでござります。大弼すりや。敵の行くへも知れず。娘に別れしゆゑ。身に奉公望むとな。ムウ。出來す。出來す。ナニ。刀屋彦兵衛とやら。いよくその刀。國次に紛れないか。丈助ハイ。お國て人に知られた。信濃屋彦兵衛が目利きに。國次と見極めましたら。違ひござりませぬ。繼橋ナニ。國次の刀とな。ト立たうとする。與五すさつて居らう。ときめる。金六なんと。この金六が申すに違ひはござりませぬ。去年お國て岩平に頼まれ。人丸の烏帽子を。諸大夫になつて騙つた時。褒美の代りに預かつたその刀。どうぞお金と替へて下さりませ。大弼ムウ。すりや其方が。岩平に聞きし。紛ひの金六とな。如何にも。褒美の金くれう。金六エ、有り難うござります。浦平國次の刀。目利きして。お求めなさるゝとは。殿様には。お道具好きと見えますな。大弼ムウ。汝は新參なれば。様子知らぬは尤も。この刀こそ。あれなる里姫が引手物。紛失の上。不義の大罪。さるによつて。武將の怒り強く。例へこの刀。詮議仕出すといへども。一つの大功なくては。姫の首打つて。差出せよとの上意。繼橋ナニ。一つの功が立たねば。里姫自らが首打つてとの上意とや。ト瀬平。こなし。大弼イヤ。そればかりにあらず。不義の相手たる浪平めも。鎌倉へ引立てては。網干の家の大事。それゆゑ。何者が敵討ちなどと騒ぎ廻つても。滅多に勝負いたす事も叶はぬ。關屋そんなら浪平の在所。知れるまでは當家の家來は。敵討は叶はぬとな。大弼おんでもない事。繼橋一つの功が立たざれば。姫の御身の上と云ひ。關屋夫の敵も討たれぬとな。繼橋關屋さま。關屋繼橋さま。ト兩人顔見合せ。兩人ホイ。ト當惑のこなし。大弼サア。それを思つて。某が召捕らしたる傾城満月。館を連れ立ち。退いたる浪平。行くへ知らぬで済まさうや。サア。キリ／＼と申し居らう。浦平一言云ふも。千言云ふも同じ事。存じませぬと云ふより外は。ござりませぬ。浦平また。此は。吐かし居らう。ト打ち寄る。浦平サア。手ぬるい。そんな事

て。吐かすやうな女郎ではない。ちと。おれが代つて白狀させて見せう。大弼ムウ。浦平に似合ぬ愛い奴。賣めて賣めて白狀させい。浦平オツト呑みこみました。最前から。手がモチ／＼としてあつた所ぢや。サア。女郎め。うぬ。どうあつても吐かさぬか。これでもかく。トいろ／＼打つて。浦平でも。死たい奴な。この上は。水喰はして。白狀させませう。大弼出來した。その科人は。汝に預ける。キツと糺明して白狀させい。浦平畏まりました。新參の手並。お目にかかせませう。ぢやが。初手から受取る。この非人めは。大弼關屋は。瀧六と役目代り。預け遣はず。與五助は兩人の女。取逃がさぬやう。兩人とも。心得てよからう。浦。與五まつてござります。金六して。私しへの褒美は。大弼追つて沙汰いたすであらう。刀屋彦兵衛。汝は。まだ用事もあれば。休息いたしてよからう。丈助心得ました。大弼女どもを引立てい。浦平サア。女郎ども。ト瀬平。瀧六。與五助の三人。三人立ち居らう。浦平ほんに。思ひ廻せば果敢ないは。繼橋浮世の習ひと云ひながら。關屋變り果てたる館の有さま。浦平お二人様。兩人浦平どの。ト浦平。繼橋。關屋三人。三人神も佛もない事かいなア。大弼こま言吐かさず。引立てい。ト瀬平。瀧六。與五助の三人。三人うせ居らう。ト唄になり。瀬平。浦平の纏付き引立て。瀧六。關屋に附添ひ。與五助。里姫。繼橋に附添ひ。奥へ入る。丈助。金六。橋がかりへ入る。後に大弼。刀箱に刀を納めて。大弼先づ。あゝして置いて。この上は。ムウ。トこなしある。ト序の舞になる。奥より赤松四郎。總白髮の親仁の拵らへ。大小にて出て。四郎大弼どの。爰にゐめさるか。大弼四郎どの。して。武將調伏の用意は。相整ひしかな。四郎某が兄満祐が。無念を暗らさん爲。この年月。姿をやつし。諸國を廻るところ。思ひがけなく。兄満祐に荷擔の大弼どの。斯く心の合ふ上は。この網干を根城として。大望成就は易きにあり。某。先年兄利の寶藏へ忍び入り。奪ひ取つたる二つ引籠の簾。これに義教が姓名を書き。巳の年月。揃ひし女の血汐に穢せば。調伏の驗あること目前。今に於て手に入れ難きは。巳の年月揃ひし女。大弼それゆゑ。當國木崎の端の赤石に怪異あつて。生贄を捧げん爲と云ひ立て。この濱館の浦手に番所を

しつらへ。吟味を遂げ。國中へその觸れ度々に及べど。今に於て巳の年月のもの。連れ参らず。種々に心を盡せしところ。思ひ出せば某。先年討ち捨てたる清水奎之進と云ふ者の娘。慥かに聞きし巳の年月。四郎して。その者は。ト此うち。上手柴垣より。關屋ちよつと。窺ひ居る。下手より。丈助。ちよつと聞いて。兩方とも入る。大弼某が討つたるとも知らず。敵を討たんと國遠して。行くへ知れねば。是非もなし。四郎何分。手延びにならぬこの調伏。今日より某が。番所に相詰め。入り船の者に吟味を遂げん。大弼それは太儀。併し。其おきよといふ奴。所々方々へ討つて手を掛け置いたれば。連れ來らんも計り難し。四郎然らば某は。これより番所にて吟味。大弼御苦勞千萬。四郎大弼どの。大弼四郎どの。兩人後刻。ト唄になり。四郎こなしあつて。奥へ入ると。引違へて。瀧六。與五助出て。瀧金御主人さす。大弼して女どもは。瀧六女どもは。残らず一間に打ちこみ。新參の瀬平めに領け置いたれば氣遣ひなし。與五最前の刀屋こそ。御推量の通り。慥かに奎之進が家來丈助。大弼それゆゑに。似せ物を以て。試みる所と察せしゆゑ。異議に及ばず。受取り置く。して。誠の國次の刀は。瀧六我れ〜が受取り置くも大事と思ひ。彼奴に申しつけ。人丸の神前。燈籠の下に埋め置かしてござります。大弼ムウ。それでよし〜。あの刀さへ。手に入らねば。何事も彼奴らが思ふまゝならず。其うちには。何かの手番ひ。併し。心にかゝるは。浪平めが行くへと云ひ。幼少の砌り。預け遣はせし金十郎も。一軸を所持のまゝ。熊野を立退き。在所知れず。その上かね〜。其方共にも申し通り。先達て。切腹いたせし某が梓。土岐之助。鎌倉に於て側女に手をかけしを。家來傳内と云ふもの、計らひにて。女を連れて立退きし後。男子出生と聞く。せめてその嫁。孫の在所を尋ね。老の樂しみと思ひしに。これとても在所知れず。瀧六すりや。若君は。小割傳内と申す者が守り育て。與五一軸は阿波の金十郎が所持とな。大弼何を云うても。兩人が行くへ知れず。瀧六いづくを指して尋ねんにも。與五それと慥かな手がかりもなければ。大弼雲を當なる。この世裏。ハテ。是非もなし。ト三人。顔見合せ。こなしある。花道と通ひの戸置より。傳内待つた大弼さ

ま。お弼かり軒せし若殿の忘れ見。金十郎かりの一軸。下郎の渡平。傳内頼山の孫人。小割傳内。金十郎野に生みし阿波の金十郎。大弼ナニ。傳内。金十郎とな。兩人それへ行て。お渡し申ませうわい。ト諷らへの合ひ方になり。花道より傳内。半纏。旅の形にて。鐵砲を腰に提げ出る。通ひ道より金十郎。半纏。旅の形にて兩人。よき所へ出る。大弼。いろ〜こなしあつて。大弼すりや。傳内は孫を同道にて。金十郎は浪平を召連れしとな。兩人如何にも。大弼まづ〜これへ。兩人許して下さりませ。ト右の合ひ方にて。兩人。平舞臺へ來て。よき所へ坐る。大弼。始終。嬉しきこなしにて。大弼ムウ。誠に金十郎。すりや其方は。小割傳内とな。今も今とて噂せしに。思ひがけなきこの對面。先づ金十郎は差指いて。傳内とやら。その孫は同道いたせしか。傳内同道しました。大弼すりや。いづくへ。傳内サ、爰に居ります。ソレ。逢はつしやれ。ト腰に附けた鐵砲を出す。大弼。悔りして。大弼こりや。鐵砲。これを孫とは。傳内こなたに問はしやれ。大弼なんと。傳内こなたの胸に問うたがよい。ト空うそぶき。煙草のむ。大弼。合點のゆかぬこなしにて。大弼ムウ。さては此奴は。狂人だな。コリヤ〜。金十郎。其方は。あの者知つてあるか。金十郎知つて居ります。大弼して。この様子は。金十こなたに問はしやれ。大弼ヤ。金十こなたの胸に。問うたら解る。大弼なんの事ぢや。こりや。兩人とも。狂人ぢやな。傳内イヤ。狂人ぢやない。正氣の傳内。孫を連れて來たのぢやわいなう。大弼その孫にも逢はさず。投げ出したその鐵砲。さては。傳内といふは偽はりだな。與五コレ〜お旦那。いつぞや參勤の節。豆州に於て出合ひし狩人。彼奴。傳内に違ひござりませぬ。傳内ムウ。さう云ふは。楯にあたらした奴。うぬにもキツと。云ふ事があるわい。大弼ムウ。さう云へば。傳内は傳内であらうが。合點のゆかぬは。この鐵砲。傳内孫の譯が聞きたいか。大弼如何にも。傳内金十郎。云うて聞かさうか。金十あのやうに云はるゝもの。云うて聞かしてやらしやつたがようござらうかい。傳内この譯を云ふからは。キツと馳走せにやならぬぞ。大弼響應は望み次第。して。その仔細は。傳内コレ。こなたの孫は。人手にかゝつて死んだわいな

なし。關屋。ソツと後より出かけて。大弼を懐劍にて。突かうとする。大弼ちよつと目を附ける。關屋。ちやつと鞘に納めて。關屋大弼さま。大弼關屋。うぬは新參の瀬平めに預けありしに。どうしてこれへ。關屋ハイ。あなたにお願ひがござりまして。大弼して。その願ひは。關屋サア。願ひは。トまた懐劍に手を掛ける。大弼。尻目に見る。關屋。こなしあつて。關屋夫に離れ。便りない身。あなたのお側に。御奉公が致したさ。トちつと寄り添ふ。大弼。こなしあつて。大弼アノ身が側に。關屋アイ。一つ枕の間の淋しさ。御推量なされて下さりませいな。ト取りつく。丈助。後より出て。大弼を切らうとする。大弼ちよつと見る。丈助。ちやつと刀を隠し。こなし。大弼そちや最前の刀屋。今のは。丈助エ、大弼この大弼を。なんとする。丈助サア。ありや。ソレ。オ、お取持ち致さうと存じまして。大弼すりや。アノ其方が。丈助見ましたところか。似合ひ相應な事。それでちよつとお取持ちを。ト刀を抜いて切つてかゝる。大弼立廻り。關屋も懐劍にて。兩方より切つてかゝる。早き序の舞になる。關屋夫の敵。丈助主人の仇。トよろしく立廻つて。大弼。兩人が双物をキツと踏まへ。大弼イヤ。小精な奴の。トこの見得よろしく。早笛にて返し。

造り物。見付け浅黄幕。眞中に。三間の高二重石垣。眞中に石段。この上に。少し後へ寄せて屋體。見付け唐紙。東西。鐵砲の書割り。欄間に橋の幕張り。すべて川口番所の體。舞臺前花道より。浪幕上がる。この二重の上。赤松四郎。上下にて坐りある。下手に役人。兩人控へある。時の太鼓にて道具とまる。

四郎コリヤ。侍ひども。申し付けし通り。籠船の女ども。キツと詮議いたしよからう。役人畏まつてござります。ト渡頭になり。籠船がかりより田村甚藏。船頭の形にておきよを船に乗せ出て。甚藏ハア。申し上げます。先達て仰せつけられました。甚藏が甚藏が甚藏。船頭つて参りました。四郎サア。甚藏の甚藏が甚藏。召掛つて参りしとな。出来した

出来した。して。空の邊の旗に相違ないか。甚藏が甚藏。家中にありし時より。よく存じて居ります。甚藏ハア。船が端へ。舟を漕ぎ寄せ。赤石の上に打上げ歸れ。甚藏畏まつてござります。ト舟を漕ぎ出さうとする。キヤア、申し。マア。お待ちなされて下さりませ。この舟に乗つて。わたしは。どこへ参りますのでござります。甚藏ハテ。知れた事。この木崎が端にて。龍神へ生費に上がるのぢや。キヤエ、甚藏それゆゑ騙かつて。連れ参つたのぢやい。キヤア、コレ。マア。待つて下さりませ。わたしは。大事の逢はねばならぬ人があつて。参じたるのを。御城内へ連れて行てやらうと云うて。無理に舟に乗せ。生費に上げるとは。そりやあんまり胴慾でござります。わたしの身は。大切なる大事を抱へし者。どうぞ。その用事をしましますまで。お待ちなされて下さりませ。お待ち様。どうぞお願ひ申します。四郎ムウ。女心に歎くは道理ながら。とても叶はぬ。汝が年は巳の年。巳の月揃ひしを。因果と思ひ覺悟いたせ。我れとても。不便には思へども。この度。當所木崎が端にて。數多の大船破損に及び。それゆゑ博士に占はせたる所。龍神の咎めあり。これをなだめんには。巳の年月揃ひし女を生費に上げれば。早速静まるとの事。それゆゑの計らひ。汝の命一つ捨つれば。この後。何萬人の助けともならん。この理を聞き分け。この役目。相勤めてよからう。キヤ成る程。御尤ものお詞でござりますけれど。さら。わたしは。左様な年度ではござりませぬ。そりや定めて。お聞き間違ひなりや。参つても。役に立ちませぬ事。どうぞお情にて。お助けなされて下さりませ。四郎ヤア。詞甘く申せば附け上がり。うぬが年度は。とくと相糺しある。甚藏。早く。甚藏ハア。ト漕ぎ出さうとする。キヤエ、どうあつても。わたしや生費に上がる事は。否でござりますわいな。ト泣く。甚藏。困つたこなし。奥より關屋。走り出て。關屋娘。ト行かうとするを。四郎とめ。四郎すさつて居らう。キヤようマア。無事で居て下さつたナア。四郎ヤア。大事の生費。時刻が過ぎる。早く。キヤ申し。母様。わたしや生費に上がらにやなりませぬわいなア。關屋ヤア。議理あるお前は。どうもやられぬ。生費とありや。この關屋が。キヤエ

イエ。お前はわたしに成り代り。大事の事を。どうぞ本望遂げて下さりませ。關屋イエ。それはお前に頼む。生贄には。相應なわたしが役。四郎ヤア。年度も合はぬに。小積な邪魔立て。ヤア。誰れかある。此奴を引立てい。瀬平ハア、。ト瀬平。出て。ヤア。うぬは。おれが預かりし女郎め。ちやつと。逃げうとは太い奴。サア。うせう。關屋イエ。娘と一緒に。瀬平なにを。四郎早く。ト甚藏。舟を漕ぎ出す。きよそんなら。母様。關屋おきよ。ト行かうとする。瀬平うせ居らう。き關ハア、ト泣く。一セイになる。甚藏。舟さしるる。おきよ。川へはまらうとするを。止めながら花道へ入る。瀬平は。關屋を引立て入る。侍も附いて入る。後に四郎こなしあつて。四郎ムウ。これで何かの手番ひ。よし。ト奥バタ。こなしあつて。ちよつと小隠れする。ト奥より浪平。後より満月。前の形にて附いて出る。里姫も出る。満月コレ。浪平どの。待つて下さんせいなう。浪平其方は満月。ト繩を解き。浪平合點のゆかぬ。この體は。満月サア。様子云ふ間も心が急ぐ。一時も早う。茲を立退いて下さんせいなア。浪平其方が體といひ。爰を立退けとは。満月様子と云ふ元は。みんなあのお姫様めゆゑ。年もゆかぬに厚かましい。浪平どのに難儀をかけ。またその上に附け廻つて。憎らしい。あの姫面を捨て。爰を早う。サア。ござんせ。浪平イヤ。某は。満月ハテマア。ござんせいなア。ト無理に引立てる所へ數馬出て。數馬待つた。若殿。その女を召連れられますまい。満月ナニ。浪平どのを。若殿様とは。數馬これこそ。誠網干の血脈たる土岐之助さま。満月ヤア。そんならお前の事を。お前が尋ねて歩いて居やしやんしたか。お前が若殿様なら。わたしは奥様。こんな嬉しい事はないわいなア。數馬ヤア。奥とは何事。お側へも寄る事は叶はぬ下賤の女。すさりをらう。満月浪平どのが若殿なら。わたしは側へも寄る事はならぬとは。數馬素情知れざる守。氏系圖なき臍の緒。さるによつて下殿の女。大國の若殿の側近く。差寄せること罷りならぬ。ト四郎聞いて。こなしある。満月そんなら。その守て。ハア、ト泣く。四郎イヤ。下殿でない。その女の氏系性は。知れてある。數馬知れてあるとは。四郎その御家

こそ、某が娘。體かな證據は。その守と引合はせて見よ。ト守り袋を出す。満月。取上げて見て。満月はんに。こりや。わしが守と同じ事。そんならお前が。四郎日頃。尋ねた娘であつたか。満月ア。父さんでござりませしたかいな。數馬さてこそ。大弼が家來と偽はりしは。赤松が殘黨。四郎なにが。なんと。數馬赤松より外に。所持ある事なき三光裂れ。汝が素性明白なり。四郎すりや。某が素性を探らん爲であつたよな。數馬イデ。この事を御上使へ注進せん。イザ。若殿。姫君。ト兩人を無理に舟へ乗せる。満月わたしも一緒に。ト行かうとする。數馬。後より舟に乗り。舟より満月を權にて當てる。満月。ウンと反る。四郎。ヤアと寄る。この間に舟。花道へ行き。四郎一大事を知りし上は。ト側なる種ヶ島に火をつけ構へる。數馬かゝる事もあらんかと。鐵砲は悉く。玉を抜きあるを知らざるか。四郎ヤア。ト見て。四郎エ、いまくしい。ト打ちつける。數馬ハ、。ト笑ひながら舟さし。向うへ入る。ト満月心付き。満月ヤア。そんなら浪平どののは。ト川へ飛び込まうとするを。四郎とめて。四郎コリヤ。娘。云ひ聞かす事がある。満月イエ。のめ。姫と添はさうか。例へこの身は。底の藻屑となるとも。跡を慕うて。ト無理に振りきり。川へ飛び込む。水煙り立つ。一セイになり。満月。向うへ泳いで入る。四郎。呆れしこなし。打眺め。四郎エ、是非もない。ト合ひ方になる。奥より大弼出て。大弼四郎どの。して。彼の女は。四郎本之進が娘を連れ参り。疾に舟にて。彼の所へ。大弼それは重疊。併し。油断のならぬ今宵の仕儀。四郎ナニ。油断のならざるとは。大弼右兵衛が兄。傳内と云ふ奴。一癖ある面魂ひ。事の様子を氣取つた詞。彼奴が入込みあるからは。滅多に油断する隙なし。ト此うち。臆病口より。橋がかりへ。苦舟。流れ來て。東西にとまる。四郎すりや。これより身共は調伏の祈り。大弼某は。國次の刀を手に入れる手配り。四郎事の一擧は今宵の三更。咒ひ唄の終りが合ひ圖の狼火。大弼先づ上使より討取つて。四郎直ぐに都へ攻め上らん。大弼萬事の手番ひ。四郎幸生よし。大弼出船の用意。家來ハア、ト舟漕いで出る。四郎。乗り移り。大弼然らば直ぐに。四郎追ッ付け吉左右。

大弼必らずとも。四郎油断は致さぬ。大弼四郎どの。四郎おさらば。ト浪頭にて。四郎向うへ。舟さして入る。大弼。見送り。こなしあつて。大弼ムウ。これでよし。この上はソレ。ト一セイにて。奥へ入る。ト合ひ方になる。ト東西の船。苦を上げる。上手。傳内。簀笠にて。下手。金十郎。同じ形。兩人。キツと向うを見て。互ひに顔見合はす。傳内。顔にて。行けとする。金十郎。ハツと舟を廻し。向ふへ漕いで入る。波頭になり。傳内。舟漕ぎよせ。龍燈をさ上げ。あたりを窺ふ。ト奥より捕り手一人。窺ひ出で。ツカくと下りて。捕手曲者。トかゝるを見事に川へ打込み。龍燈にて。キツとあたりを窺ふ見得。一セイにて返し。

造り物。見付け奥深に。浪幕。真中に岩の洞口。前二間の二重舞臺。岩の書割り。この二重の上に。おきよ。白絹の形にて髪さばき居るを。四郎。脱ぎかけ白髪。大童にて。おきよを引きつけてゐる見得。風の音。浪頭にて道具とまる。

きよそんなら。どうでも殺すかいなう。四郎オ、生養と云うたは偽はり。斯く人なき所へ連れ来り。汝が生血を取つて。この簀に塗りつけ。武將の調伏。こま言云はずと。くたばつてしまへ。きよさう聞いたら。なんの死なう。滅多に死んでよいものか。四郎なにを。ト刀抜かうとする。おきよ。逃げうとすること。いろく。ひやいな立廻り。一セイにて。花道より満月。泳ぎ出で。岩へ取りつき上がり。この體を見て。駈け上がり。この中へ入り。支へる。四郎ヤア。おのれは娘。邪魔ひろくな。ト引きのけうとする。満月。柳になり。いろく。あつて。立廻りの後。満月をひかせ切る。ト簀に仕掛けにて血汐かゝる。トどろくにて。上より銀の雨下ろす。雨車。四郎ヤア。いま切つたは。うぬであつたか。満月コレ。父様。辰の年のわたしを殺し。あの御簀に血汐のかゝりし上は。お前の大望はなまるまいがな。四郎ヤア。小敷な支へ立て。そこ退き居らう。ト引きのけ。及び腰におきよが髪纏んで。引きつける。

この中へ。満月分け入る。始末ドロー。雨車。満月コレ。お前は。あの雨が。目にかゝらぬかいなう。コレ。お前の祈りは。もう利かぬわいなア。四郎ヤア。ト四郎。初めて雨に心付き。さては。うぬ。親の大望の妨げひろくな。満月この役目。仕負はせたら。謀叛人の血筋でも。未來を添うてやらうと。殿様の云ひ付け。四郎エ、残念や。すりや。計られたるか。この上はモウ。ト満月を切り倒し。おきよを切らうとする。満月。よろほひ留めるを。切り殺し。おきよも危ふき所へ。花道より金十郎。舟にて漕ぎつけ。この體を見て。直ぐに飛び上がり。おきよを圍ひ。キツと見得。きよヤア。金十郎どの。金十すりや。怪我はなかつたか。エ、忝ない。四郎ヤア。邪魔せずと。そこ退け。金十なにを。ト立廻りになり。おきよ。あちらこちらへ逃げ廻る。ア、危ないく。どうぞこの舟で。早うく。きよそれでも。舟に乗つては怖いわいなア。金十エ、怖いどころか。サア。四郎。持つてゐる龍の簀を渡せ。四郎なにを。ト立廻りのうちに。金十郎。いろく。ひやいがる所へ瀬平。裸にて泳ぎ来て。この體を見て駈け上がり。瀬平コレ。爰は打捨て。女中を連れて。この場を早う。金十イヤ。龍の簀は。おれが手に入れる。その人を連れて。この場を早うく。瀬平そんなら。ござりませ。トおきよを舟に乗せようとする。きよイエ。お前は。最前。母様を。瀬平オ、あの敵役は皆を勢はらん爲。誠は。姫の家来主計が中間。有田瀬平と云ふ者。氣遣ひなしに。サア。早うく。きよそんなら。金十郎どの。金十瀬平。頼んだ。瀬平合點ぢや。ト一セイにて。花道へ。おきよを乗せ。漕いで入る。此うち。金十郎。簀を引き合ひ。四郎を切る。切られながら。取りつく。金十郎。簀を引つたる。金十龍の御簀。これで一つの功。忝ない。四郎それを。トよろしく立廻りにて。返し。

浅黄幕になり。舞臺。花道の浪下りる。ドンチャンにて。捕り手大勢。瀬六。脱ぎかけ大童にて立廻り。いろくろあつて。皆々を追ひ込むところへ。丈助。凜々しき形にて。兩人。鎗の立廻りあつて。よろしく追ひ込む。ト

返し。舞臺前。花道。一面の廻廊セリ上がる。但し金燈籠。火をともし。所々に瑠璃燈つり。大概上がる時分。浅黄幕切つて落す。造り物。見付け二重舞臺。神前の體。東西。廻廊中堂。所々に橋の紋付きの提灯立てあり。大箒數多焚き。右の二重の上に。大弼。脱ぎかけて。刀を構へ。立つてゐる。兩方より。關屋。おきよ。脱ぎかけ白装束。玉襷。鉢巻にて詰めかけてゐる。侍ひ大勢。棒突き。大勢並びゐる。大太鼓入り。早き神樂にて。道具とまる。

大弼ヤア。この大弼を。敵などとは小癩な奴の。關屋如何やうに陳じても。遁がれぬ證據は。こなたの口より最前の白狀。きよ斯くなる上は。遁がれはあるまい。サア。尋常に。二人勝負。大弼ヤア。例へ某。敵にもせよ。國次の刀の在所も知れねば。きよ敵討は叶はぬとな。大弼ハ、ハテ。不便の有様。紛失の國次の刀。滅多に手に入らうか。覺悟して。くたばつてしまへ。ト切らうとする。兩人。キツと留め。兩人滅多に返り討には。なりませんまい。大弼すりや。刀を出すか。二人サア。大弼勝負するか。二人サア。大弼サア。なんと。ト宮より傳内。傳内いづれも待つた。國次の刀。これにあり。トばた／＼にて。傳内。麻上下にて。御書を持ち。後より瀨平。刀を持ち。金六。大小にて附添ひ出る。大弼ヤア。うぬは紛ひの金六。足輕の瀨平。こりやどうぢや。瀨平足輕となつて入込んだは。弓削主計が家來。有田瀨平。金六この金六も。疾に國次の刀は。傳内さまにお渡し申して置いたわやい。大弼それに又。この神前にあると云うたは。傳内それこそ汝をこの所へ誘き寄せ。斯く勝負いたさせん爲。最早。遁がれぬ大弼。尋常に勝負いたせ。ト云ひ／＼本舞臺に來る。上手より。綱橋。衣裳襦袢。浪平。長上下。里姫も出る。瀨平イザ。國次の刀。お受取り下されませう。浪平出來した。體かに受取つた。懸流石は。父上の家來。天晴れ天晴。傳内弟。妹が今際の頼みも。もだし難しと云へども。遁がれがたきは。謀叛人の荷擔人。それゆる管領家よりのこの御書。大弼ナニ。管領よりの御書とは。うき一つの功の立つ上は。姫君との御言あつて。當家の治ま

り。傳内その上。敵討も御免とある。松倉内記さまの。お取次の御免の御書。大弼ヤア。謀叛とは何が謀叛。その上。一つの功とは。何が一つの功。それ見よう。傳内ヤア。金十郎。參れ。金十ハア。ト白旗を持つて出る。後より丈助。四郎の首と。瀧六が首を持ち出て。金十一一つの功は。武將調伏をもどき。手に入れたこの白旗。丈助汝が荷擔人の赤松四郎も。まツこの通り。大弼ヤア。すりや四郎も。最早亡びしとな。チエ、口惜しや。傳内斯くなる上は。最早遁がれぬ唐橋大弼。潔よく。敵討の勝負々々。大弼ムウ。是非がない。敵討の勝負しくれう。關屋清水左之進が妻。關屋。きよ同じく。娘きよ。丈助家來。丈助。三人サア。尋常に。勝負々々。大弼うぬら一々。返り討ちや覺悟せい。三人なにを。ト詔らへの神樂にて。いろ／＼立廻りあつて。ト。大弼を切り倒し。三人打寄り。關屋夫の敵。きよ父の仇。丈助主人の敵。三人覺えたか。ト止め刺す。傳内。皆々を煽ぎ立て。傳内オ、手柄手柄。浪平敵討成就の上は。おきよ傳内。祝言あつて。清水の家再興。きよエ、有り難うござります。傳内これよりは。お國の治まり。先づこの由を。御上使へ注進いたさん。めてたい。先づこの場は。お立ち。ト打出し。

幕

敵討浦朝霧終

御ひいき勸進帳

御ひいき勸進帳

御ひいき勸進帳

編中人名

一 岩手 姫	一 稻毛の入道重成	一 越前國住人齋藤次祐家	一 駿河次郎清重
一 下河邊行平	一 かすやの藤太	一 金澤太郎照門	一 武藏坊辨慶
一 村雨 姫	一 是明親王	一 直井左衛門秀國	一 伊勢の三郎女房お市
一 川越太郎	一 鶏のせいれい	一 富樫の左衛門家直	一 腰元まがき
一 下り松の右中辨	一 <small>長兵衛女房およし 實はしきたへ</small>	一 原八兵衛廣綱	一 同 さへた
一 正親町 左少辨	一 秀衛娘忍の前	一 常陸坊海存	一 同 いくよ
一 信濃小路左中辨	一 鎌田兵衛一子	一 ひづめの太郎	一 同 錦木
一 坂東太郎照早	一 加賀次郎年國	一 備前平四郎成景	一 同 梅路
一 熊井太郎忠基	一 雲助あそぶの段八	一 出羽軍藤太年高	一 同 袖し
一 松風 姫	一 長兵衛娘小とみ	一 江田源三廣基	一 若者 喜助
一 鷲の尾三郎吉久	一 九郎判官義經	一 大津の次郎民利	一 <small>三國のけいせい實屋若松 實は美濃國けいろう山崎精君 井上次郎重永</small>
一 西の宮右大辨	一 <small>かしまの事ふれへい言葉 の彌兵衛實は御馬やの喜三郎</small>	一 増尾十郎兼房	一 <small>井上次郎重永 實は備前守行家</small>
一 藤の森の左大辨	一 <small>古金買の長兵衛 實は備前守行家</small>	一 赤井八郎景次	一 <small>伊勢助實は 伊勢三郎義盛</small>

狂言作者

櫻

田

治

助

一	やりて	おたつ	一	伊達次郎泰衡	一	元吉四郎 高衡	一	新	藏
一	伊勢の三郎義盛女房	一	錦戸太郎國衡	一	同	女房おふゆ	一	正	藏
一	金剛童子靈像	一	家主佐七。實は本多	一	和泉三郎忠衡	一	三	五	郎
一	行平	一	次郎近常	一	神輪の平次景宗。	一	常	五	郎
一	馬方門出よし松。實は富樫	一	下部島助。實は半澤	一	實は昌山庄司次郎重忠	一	一	其	の
一	左衛門家直一子直石丸	一	六郎成清	一	太	一	其	の	他
一	山城國岩倉山不動明	一	綱	助	一	喜	三	太	一
一	王。富樫の左衛門	一	助	助	一	喜	三	太	一
一	藤原秀衡	一	總	助	一	鴛	藏		

第一番目 三建目 暫くの間

本舞臺三間の間。正面翠簾屋體。東の柱紅梅。西の柱白梅。是れに人の登るやうにしてあり尤も大きなるうろあり。舞臺先に池の體。人の出入する事あり。幕の内より稻毛の入道廣袖衣裳。ちよつへい頭巾。大口土佐坊の見えにて馬に乗り。明松をかゝけて居る。鶯の尾三郎上下衣裳にて股立をとり。その馬の尾筒をとりて控へ居る。若い衆大勢軍兵の形りにて明松をふりて控へ居る。昌俊のうたひ。時の聲どん／＼にて幕明く。

稻毛は何んとも心得ぬ。今稻毛の入道重成が是明親王の勅命を請け。川越太郎重頼が姫岩手姫を引はらふとくんだす馬の尾筒へとつゝいたやつを見りやア。鶯の尾三郎吉久だ。何ゆゑあつて入道が馬の尾筒へとつゝいた。わるく邪魔をひろいだら。蹄にかけて蹴殺すが。とつと／＼そこを除くまいか。鶯尾そりやならない。忝なくも岩手姫様の御事は。主君義經公の北の御方。仔細あつて今日重頼殿同道にてお館へ御入の由。是よき幸ひの時節。何卒御兩人に御意得奉り。某諸共當今後鳥羽院の弟宮是明親王の御前にて。我君判官義經公御身の誤りなき由を申聞んと來て見れば。稻毛の入道重成殿に出合ふたが。今にかはらねわるだくみ。サア其れは此世の御事にして馬よりおりて三拜しろ。進て

じたばちくねると。武藏坊にはあらねども。坊主頭。此世の御事をとりせらる。はやく此世を立さる。まゝいかに。稻毛はれへ／＼ちいさい形りをして大きなねごとをおちまけたな。よくきけ此度九郎判官義經には。奢る平家を亡したる武威に。兄たる頼朝を失ふとなす由。早くも梶原是を聞附け頼朝公へ言上なす。是天下の一大事とさいつころ土佐坊昌俊討手を蒙り。堀川の館へ押寄し砌より。義經主従は行方知れず。さすれば天下の日かげもの。其の日陰ものゝぶんざいで。此の入道に双向はんなどは。身の程知らぬすてつちめ。早くそこをなくなれ／＼。鶯尾いやどこまでもやる事はならないぞ。入道やれめんだうなやるなえ。軍兵やらぬは。ト是れより早笛になり稻毛鶯の尾馬引のやう成る見えあつて。よい程に馬より引きおろし。是より若い衆鶯の尾にかゝると立ち廻りあるべし。この内に鶯尾とつこい。入道こいつはたまらぬにげるがいゝわい。ト云ひながら向ふへ一さんにかけて這入る鶯の尾皆々を追ひ廻しと、奥へ追ひ込むと。はや笛をうちあくる。どんつゝに成り。向ふよりむらさめ姫振り袖御守殿のなりにて文箱を持て出る其の供奇麗な奴の形りにてついて出て。本舞臺へくると。奥より鶯の尾とつて返へし。むらさめ姫と行きあたるむらさめ姫びつくりして。むらさめおゝこは。奴何ものなればおらが大事のお姫様に行き當つた推参なやつ。村雨これいなア何を其のやうにとかく／＼しういやるぞいの。若しどなた様か存じ升ぬが只今の無禮のだん眞平お免し成されて下さり升い。ト云ひながら顔を見て。村雨やおまへは義久様。鶯尾さう仰せられるは村雨どのか。村雨おまへは何ゆゑお越し成され升たぞへ。鶯尾某し是れへ参りしは下河邊の庄司行平殿に對面なし。君の御和睦を願はん爲め此の御殿へ伺候致してござる。して其元には何用あつて此所へは参られしぞ。村雨さいなア自らはへ参りましたは。行平様にお目に掛りたいばかりに。是迄参りましてムリ升る。どうぞおまへと御一所にお逢せ成されて下さるさいナア。鶯尾すりや其元にも行平様に。むらさめ逢ねばならぬ事あつて。態々参りましたわいなア。鶯尾いかにも某し同道にて御奥殿にて行平様に。村雨お逢せ成されて下さるすか。鶯尾人目にかゝらぬ其内に某しと一所にサア。村雨そ

んなら三郎義久様おまへと一所に。鶯尾さあムり升う。ト鶯の尾村雨を連れて奥へ這入る。とかぐらになり以前の軍兵出る。若い衆偕々形りに似合ぬ手ひどいわつばしめ。夫に弱い入道様何所へ逃げさつしやつたかさがさずはなるまい。さあ〜來やれ〜。ト云ひながら向ふへ這入る本かぐらに成る。鶯藏忍びの形りにて義經の八龍の甲を持ち池の中より出る。梅の梢より定八忍びにて一通をくわへしづ〜と出て。互に顔を見合せて。鶯藏梢の權藤太。定八池淵兵内。鶯藏して首尾は。定八ままと主君錦戸太郎様の仰を請け。此の館へ忍び入り。何かの様子を伺ふ處に。是明親王の御謀反に相違ないわい。鶯藏いかにも某も此義經の着せし入龍の甲を所持なして水底に忍び。委細の様子残らず聞いた。なんと此甲を所持なして水の中に居れば。平地に居るも同前。なんと不思議な甲ではないか。定八なる程きたいな甲も有るものだナア。時に此一通は錦戸太郎様より。是明親王様へ御味方に參らんとの一。一先是を富樫の左衛門殿へ送りとゞけ。直に奥州へ。鶯藏出來した〜去りながら。最早夜も明けぬれば人目にかゝつては一大事。まづそれ迄は。定八己れは矢張りあの梅が枝。鶯藏己れは矢張り此水底。兩人それよ。ト兩人元の所へ忍ぶと。三味線入の樂になり。向ふよりみすや藤太弓矢を持つて来る。跡より岩手姫打ちかけ衣裳にて。三方に願書に乗せ持つて出て。花道の中にて兩人鶯をきつと見て。かすや偕も我れ今日は明親王を諫め奉らんと。小鳥狩りの催しをなし。諸鳥を獻ぜんと思ひしに。時ならざる鶯の轉り。誠に鶯は日月星を轉る。是れまさに三種の神寶に倣へて。時ならざる轉りは。是明親王の天子に立たせ給はんとの吉瑞なるか。何んにもせよ。心よき鳥の轉りぢやナア。岩手鶯は經讀鳥春王殿を轉れば。東宮に立たせ給はん思ひもよらず。剃髮染衣の御姿を教への爲めのあの鶯。はて面白き轉りよナア。かすや何んにもせよ善惡二の鶯は。今某しが只一矢に。トづか〜と舞臺へ来る。岩手もづか〜と來てかすやを隔て。岩手かすやの藤太有末様。まあ〜お待ちなされ升い。かすやはて心得ぬ岩手姫。時節ならざる音を發する梅の梢の鶯を。射て落さんと立ち密るを。何ゆゑ止めめされたな。岩手さいなお止め申さいては。時節ならぬと仰しやれども。時は一隔來復の。春待ち顔のあの鶯。なんの怪しい事かムり升う。まあ〜お待ちなされ升い。ト隔てる。かすやいゝや其所のいた。ト少し立ち廻りの内。向ふより。岩手羽織衣裳にて軍兵を連れ。やれ參れまいれと云ひながらかけて出て。岩手を見付けて。岩手やあよい所へ岩手姫。是れより直ぐに引き立て此の入道が手柄にする。さあ己れと一所に來な。ト岩手姫が手を取つて引き立てに掛るかすや突きつけ。かすや推參な岩手の入道。今朝是明親王の勅命に依て。川越太郎岩手姫此の兩人を召し來れと某しに仰せ付られ。さるによつて同道なしたる岩手姫。無體に手を取り何とおしやる。岩手いゝ何とも仕らぬ。拙者がお手を取りましたは。矢張り君への忠臣でムる。先へ廻るはお鬚の塵わる根性は仕らぬ。あんまり腹をお立やるな。岩手是れ若しそりやまあ何を仰しやり升るぞいな。自らが事は御存じもムり升う。九郎判官義經と申し升る大事の夫のある身の上。是ればつかりはならぬわいなア。かすやいやさうは云はさぬ〜。譬ひ鎌倉殿であべいが。論言を背けば遠勅の罪人。其上又義經はさいつ頃より行方知れず。さすれば寡婦の岩手姫。誰に遠慮もない事だ。いやでも旦那に備へる左様がてんしておいやれさ。岩手いえいえなんぼうでも是ればつかりはいやぢや〜。いやぢやわいなア。岩手是れはどうしたものだ。さりとてはわるい心得だ能々物を積つて見たがいゝ。是明親王は一天の君其の妃に立つ岩手姫。舅川越太郎は殊により關白職。夫れになんぞや腰抜け武士の義經に貞女だて。なんぼ戀しいゆかしいと思つても大方今頃は喰ものに困つて。何所でのたれ死に〜くたばつたであんべい。なんと藤太殿左様ぢやあムらぬか。ト此の岩手くやしきこなし色々あるべし。かすや左様々々入らざる事に御心中立て。なんの鮑の片思ひ。それより我々が云ふ事を。兩人聞いておくれ。岩手譬ひ此の身はどのやうになるとも。此の事計りは妾やいやぢや。そのやうな辱しめを受うより。いつそ殺して下さんせ。自らは死にたい。いつそ妾は死にたいわいのう。かすや手ぬるく云へば付け上りのするどちめらうだ。此の上は我が君の御前へそびき出してどくがいゝ。入道合點か。岩手合點だ。ト岩手姫が後へ廻り。岩手さあ岩手姫我れ

んなら三郎義久様おまへと一所に。鶯尾さあムり升う。ト鶯の尾村雨を連れて奥へ這入る。とかぐらになり以前の軍兵出る。若い衆偕々形りに似合ぬ手ひどいわつばしめ。夫に弱い入道様何所へ逃げさつしやつたかさがさずはなるまい。さあ〜來やれ〜。ト云ひながら向ふへ這入る本かぐらに成る。鶯藏忍びの形りにて義經の八龍の甲を持ち池の中より出る。梅の梢より定八忍びにて一通をくわへしづ〜と出て。互に顔を見合せて。鶯藏梢の權藤太。定八池淵兵内。鶯藏して首尾は。定八ままと主君錦戸太郎様の仰を請け。此の館へ忍び入り。何かの様子を伺ふ處に。是明親王の御謀反に相違ないわい。鶯藏いかにも某も此義經の着せし入龍の甲を所持なして水底に忍び。委細の様子残らず聞いた。なんと此甲を所持なして水の中に居れば。平地に居るも同前。なんと不思議な甲ではないか。定八なる程きたいな甲も有るものだナア。時に此一通は錦戸太郎様より。是明親王様へ御味方に參らんとの一。一先是を富樫の左衛門殿へ送りとゞけ。直に奥州へ。鶯藏出來した〜去りながら。最早夜も明けぬれば人目にかゝつては一大事。まづそれ迄は。定八己れは矢張りあの梅が枝。鶯藏己れは矢張り此水底。兩人それよ。ト兩人元の所へ忍ぶと。三味線入の樂になり。向ふよりみすや藤太弓矢を持つて来る。跡より岩手姫打ちかけ衣裳にて。三方に願書に乗せ持つて出て。花道の中にて兩人鶯をきつと見て。かすや偕も我れ今日は明親王を諫め奉らんと。小鳥狩りの催しをなし。諸鳥を獻ぜんと思ひしに。時ならざる鶯の轉り。誠に鶯は日月星を轉る。是れまさに三種の神寶に倣へて。時ならざる轉りは。是明親王の天子に立たせ給はんとの吉瑞なるか。何んにもせよ。心よき鳥の轉りぢやナア。岩手鶯は經讀鳥春王殿を轉れば。東宮に立たせ給はん思ひもよらず。剃髮染衣の御姿を教への爲めのあの鶯。はて面白き轉りよナア。かすや何んにもせよ善惡二の鶯は。今某しが只一矢に。トづか〜と舞臺へ来る。岩手もづか〜と來てかすやを隔て。岩手かすやの藤太有末様。まあ〜お待ちなされ升い。かすやはて心得ぬ岩手姫。時節ならざる音を發する梅の梢の鶯を。射て落さんと立ち密るを。何ゆゑ止めめされたな。岩手さいなお止め申さいては。時節ならぬと仰しやれども。時は一隔來復の。春待ち顔のあの鶯。なんの怪しい事かムり升う。まあ〜お待ちなされ升い。ト隔てる。かすやいゝや其所のいた。ト少し立ち廻りの内。向ふより。岩手羽織衣裳にて軍兵を連れ。やれ參れまいれと云ひながらかけて出て。岩手を見付けて。岩手やあよい所へ岩手姫。是れより直ぐに引き立て此の入道が手柄にする。さあ己れと一所に來な。ト岩手姫が手を取つて引き立てに掛るかすや突きつけ。かすや推參な岩手の入道。今朝是明親王の勅命に依て。川越太郎岩手姫此の兩人を召し來れと某しに仰せ付られ。さるによつて同道なしたる岩手姫。無體に手を取り何とおしやる。岩手いゝ何とも仕らぬ。拙者がお手を取りましたは。矢張り君への忠臣でムる。先へ廻るはお鬚の塵わる根性は仕らぬ。あんまり腹をお立やるな。岩手是れ若しそりやまあ何を仰しやり升るぞいな。自らが事は御存じもムり升う。九郎判官義經と申し升る大事の夫のある身の上。是ればつかりはならぬわいなア。かすやいやさうは云はさぬ〜。譬ひ鎌倉殿であべいが。論言を背けば遠勅の罪人。其上又義經はさいつ頃より行方知れず。さすれば寡婦の岩手姫。誰に遠慮もない事だ。いやでも旦那に備へる左様がてんしておいやれさ。岩手いえいえなんぼうでも是ればつかりはいやぢや〜。いやぢやわいなア。岩手是れはどうしたものだ。さりとてはわるい心得だ能々物を積つて見たがいゝ。是明親王は一天の君其の妃に立つ岩手姫。舅川越太郎は殊により關白職。夫れになんぞや腰抜け武士の義經に貞女だて。なんぼ戀しいゆかしいと思つても大方今頃は喰ものに困つて。何所でのたれ死に〜くたばつたであんべい。なんと藤太殿左様ぢやあムらぬか。ト此の岩手くやしきこなし色々あるべし。かすや左様々々入らざる事に御心中立て。なんの鮑の片思ひ。それより我々が云ふ事を。兩人聞いておくれ。岩手譬ひ此の身はどのやうになるとも。此の事計りは妾やいやぢや。そのやうな辱しめを受うより。いつそ殺して下さんせ。自らは死にたい。いつそ妾は死にたいわいのう。かすや手ぬるく云へば付け上りのするどちめらうだ。此の上は我が君の御前へそびき出してどくがいゝ。入道合點か。岩手合點だ。ト岩手姫が後へ廻り。岩手さあ岩手姫我れ

我れと一所に。皆々うしやアがれえ。ト引き立てやうとするひやうしに。とんと梅の中より眞赤な手を出して。稲毛が頭をつかむ。皆々やあ。稲毛待て。今明親王の御前へ。岩手姫をそびき出さんとする所へ。此の入道が禿頭を田夫野人につかんだが。そもまづうぬは。皆々何奴だえ。坂東太郎待やアがれえ。ト是れより太鼓流し赤面上下衣裳にて股立ちとり。梅のうろの中より。出て皆々を追ひ廻し花道より取つて返へし。岩手を圍ひしやんと見えになる。皆々どつこい。かすややれ待て。今岩手姫を引立てんとする所へ。白梅の中から眞赤な奴が顯れたが。そもまづうぬは。皆々何奴だえ。坂東それ一陽來復の時來つて。東山梅からつん出るのも古きを以つて新らしく。紅葉染なす龍田川。眞赤な面のからくれなる。色も姿も吉野川。そのちとせ川音なし川。可愛川の御方をむたいに袖を布引川。わる根性をよし川に。流しておれに桑川なら。此の場も水に隅田川。たゞしやるなと佐川なら。かたつばしから初瀬川。いたい目見せつ湊川。身も裾川の風かはらず。清き河原の其のうちに。とつと爰をしら川と。あくたいまじりの氣短かは。何れも様も御存じの。長谷川町のわんぱく者とは。敬つて申す。皆々どつこい。岩手よい所へ坂東太郎照早様よう来て下さりしたア。坂東お、おれが来るからはもう氣遣ひな事はなんにもない。五六を分けたと思つて落ち付いて居なく。稲毛なんだ此奴はしやれるやつぢやアないか坂東太郎なら實事師。依て妃に立つべしと思つて。そこでお前へそびくのだ。邪魔だとして坂東太郎大きな目に逢なよ。坂東此のすだれちよめ。是れよう聞けよ。君を諫めるは臣下の役。夫れにうぬら箇様に非義非道を勧めるは。世の中で云ふげぢく侍。岩手姫を妃にしてよけりやア己がする。われらが知つた事ぢやアない。すつこんでけつけれ。夫に又此坊主が同じ様に。いかさまの頭取株いゝ加減にわるさをしろ。あんまりひつこくだゝを云ふとぢきとめに逢せるぞ。稲毛此奴は餘まり人を安くするやつだ。其いけつ口を。ト坂東太郎照早に掛らうとするを。かすや是と入道お待やれ。高が赤子同然の智恵なし野郎だ。縮る所て縮て見せう入道おきやれ。稲毛までものんまり。坂東なにを。かすや坂東太郎。坂東兩人。稲毛。かすや後ト

逢ふべし。トかぐらになり。かすや稲毛若い衆皆々奥へ這入る。岩手坂東。坂東やれ。稲川の館の廊より。色色との艱難苦勞。かし推量致してゐる。岩手はんにまあ西も東も敵の中。心ならざる其中に。夫の行邊を案するは。女子心のはかなさと。御推量成されて下さり升い。ト此きつかけに。今様始りと呼ぶ。坂東最早今様始りとあれば。此所に長居は如何。某しと一所に奥殿へ。岩手そんならお前と御一所に。坂東岩手姫どのござれ。ト又今様始りと呼ぶ。是より所作の鳴り物に成る。此鳴り物を敲りて。坂東岩手奥へ這入る。直に。正面の翠簾を巻き上げさせて。結構なる山臺の上に紅葉を飾り付け。後の方に段幕を張り。紅葉狩りの見え。是に下河邊庄司行平羽織衣裳にて。申けいを持左りの肩に長けんをかけ。眠つて居る見え。富樫左衛門妹松風姫。打ち掛け衣裳にてはんにやの面と鐵でうを持上の方に立つて居る。是を押し出して詠への所作色々あるべし。

むつの花紅葉狩

詠がかり八月待程のうたゝねに。夢打ち覺す夕時雨。かんへ四方の梢もいろく錦色どる谷川に。風のかけたるしからみは流れもあへぬ紅葉ばを。渡らば錦中たへん。かんへよしや思へば是ととも。前世の契り淺からぬ深き情のいろ見え。かゝる折しも道野邊の草葉の露のかごとをも。かけてぞ頼む行末を。契るもはかな打ち付に。人の心もしら雲の立ち煩らへる景色哉。べこうきんしうの山よそおもひをなす。是なる紅葉の下枝に落葉かき寄せ薪となし。酒くゆらす其景色。忍ぶ心の面白くいざや汲むべし。と。合唐の朱買臣は錦の袂を會稽に懸へす。彼の七賢が樂みも。合酒にせい。合銚子もてこい。盃もてこい。借おさかなは何々ぞ。頃しも秋の山草花立花の匂ひを含む。酒のかん。おさへて。今まで爰に。行女々。とり。手管の姿を顯はし。或は格氣のほむらをこがし。又は虚空にしなだれか。り。感陽宮の煙りもいそよ七尺の屏風の上に猶餘りて。そのたけ一丈の血文つのもをれかし面も向けぬ恥しや。惟茂少しも騒ずして。南無や意氣地の大菩薩と。心に念じ煙管を持て待ち掛け給へば。合口舌になさんと飛んで掛るを飛

び違ひ。煙管の眞中もちそへ給へば。其手を引しめなんなくおてきに從ひ給ふ。紅葉の威勢面白や。合あたたら紅葉の散るはくちり来るはく。合かさにとんくつまれば。合とんくつまれば猶いとしく腰をしめたや抱かれて寝たや。おてんとてんと紅葉ばを敷くや暮にねんくく。ねとムる。ねとムるへ。合うつなや。合所は山路の蘭の酒何かは苦しかるべきと。合人々興に入り給ふ花やかなりし風情かな。ト歌される。松風ほんにまアあられもない今様を幸ひに。爰まで来たれども。お顔を見れば今更に云ひたい事もえ云はず。ほんにしんきな事では有るわいなア。申し行平様たつた一言女夫ぢやと仰つて下さんせいナア。ト此内後ろへむらさめ姫出て是を見て眞中へは入る。村雨ちつとお邪魔に成やんしやう。ト云ふ松風びつくり。松風おこはこりやお前は村雨さん。何しに爰へきやしやんしたえ。村雨私ぢやとて爰へ来ぬものかえナ。もし行平様いつぞや都へお登り成されしより。ふつと見染し其お姿忘るゝ隙はないわいな。どうぞ色よい御返事を。松風ええつんともう何ぢやいな。お前に返事させましてよいものかえナア。自に御返事を。トとり附く。村雨いえ、妾しへ御返事を。ト兩方よりとり附くを行平振り切つて。行平いかに女子なれば迎聞き分けのなき此有様。某逆も岩木にあらぬ身なれども。兼て噂にも聞き給ふらん。此度九郎御曹子御謀反の由。頼朝公の御耳に達し。先達土佐坊昌俊堀川の御所へ押し寄せしより。御行方知れ給はず御いたわしく存ずる故。何卒御あり家を尋ね奉り御兄弟の御中を日月の如くなし奉らんと。ちよに心を碎く下河邊庄司行平。夫になんぞや不義放埒に身を委ね。鎌倉殿の御所へ對し何んと申し譯の有るべきぞや。悪うは思はぬ松風殿村雨殿。逢ぬ昔とあきらめて思ひ切つて下されや。松風なる程今おつしやたお言葉無理とはさらく思はね共。今爰で今女夫に成らうと云ふではなし。未來で添ふと仰ても嬉しくなうてなんとせう。お前の口から女夫ぢやと一口云ふて下さんせ。夫れ聞かぬ内はなんぼでも爰放しやせぬ。はなさぬわいなあ。村雨さうでござんす。どのやうに云はしやんしても。此返事のない内は動かす事ぢやないわいなア。行平夫れ程迄の心ざし返事せいでなけれ共。仰れを見ても

憎くからぬ。源三位にはあらねども引くぞ頼らう花高。何れへ返事を。ト思案する。松風そりや御思案には及ばぬ事。私が千束のふみ玉章。よもやお忘れは有るまいかな。村雨そりや妾し池も同じ事。通ひ事の文の數々此御返事は自らに。松風何んぢやいやらしい。年はも行いで仇しつこい。なんぼ其様に云はしやんしても。ほれたは妾が先んぢやわいなア。村雨いえくそりやお前皆んな虚言ぢや。妾が先んにほれたわいなア。松風未だかいなア黙らしやんせ。村雨お前黙らんせ。松風こなさん黙らんせ。村雨そなた黙らんせ。松風我が身黙りや。兩人え、ほんに阿房らしい。行平偕てこそ怪氣嫉妬は女の常。さうなうて叶はぬ事。はてどうしたら能からうナア。トあたりを見て。行平それ。ト是より相方になり。行平兩方の梅の枝を切つて来る。松風村雨が前に置き。松風村雨は。行平其二枝は行平が返事。松風村雨此梅が枝を御返事とは。行平さア此方へ誠の返事せば方此らが怨みん此場のしぎ。夫ゆゑ手折此梅が枝。時に取つての花軍勝色見せし其方へ。如何にも返事をしやうわいのう。松風村雨そんなら妾等二人して。行平花の軍の勝負。松風こりやほんに面白いわいな。此松風と村雨さん。夫を争ふ花軍。村雨私が殿御といふものか。松風私が殿御といふ者か。村雨私やちつとも用捨はせぬぞへ。行平立ち上つて勝負々々。松風いざ。村雨いざ。ト是より三味線入り太鼓賑やかなる相方に成り。松風村雨花軍の建。行平行事の様なる事色々あつて。取組色々有るべし。とど松風村雨にさんくたゝかれ悔しきこなしにて。とど癪を發し氣絶する。村雨大きに嬉しきこなし色々あるべし。行平おどろき介抱する。村雨腹を立て振り放す事有るべし。いろくにしても氣が附ぬゆゑ。とど行平池の端へ来て。水を汲もうとして池をきつと見て。思ひ入れして見えになる。本神樂。行平さあ怪しき音聲は。内にかけある陰中の陽を含む池中の面。水満々として氣上に漲るは。はて心得ぬ事ぢやナア。ト此内定八梅の枝より出て見て居る行平是を見付けて。行平爰にも寫るあの梅が枝え。ト小柄を手裡劍に打つ此とたんに梅の枝より定八飛びおり。一散に向ふへ行かうとする是を引き戻し。美事に投げ。起き上る所を一刀に是を切り。定八が落せし一通を取つ

て懐中する所へ鷺尾出て。行平が刀ののりを拭きしやんと納める。行平鷺の尾三郎今の様子。鷺尾篤と拜見致して
 ムリ升る。行平夫ぢやアいけてはおかれぬわい。ト切りかゝる立廻り有りてしやんととどめて。鷺尾必ず早まり給ふ
 な行平様。假令いか様な義がムればとて只今のしぎ。何しに人に物語らん。先々お控へ下され升う。行平確と左様な
 鷺尾刀にかけまして。行平忝けない。トをさめる。鷺尾只今の御褒詞に拙者めが願ひ。何卒義經の。御在家知れたる
 上は。御和睦の御願を。行平そりや某しが命に替へて。鷺尾え、有難い。行平こりや村雨娘松風姫に心をつきや。
 村雨あ。ト水を汲んで松風に飲せ氣を付る。松風氣が付き。村雨を突きつけつとして。松風え、怨めしい村雨姫情
 ない行平様。こりやまあどうしやうぞいなア。ト最前の一通を打ち付けてやる。松風見て。松風此上書は富樫の左衛門殿
 へ錦戸太郎。これは。村雨おぢや。ト唄になり行平村雨を連れて奥へ這入る松風鷺尾残りて。松風南無阿彌陀佛。ト鷺
 尾が刀にて死のうとする。鷺尾とめて。鷺尾こりや氣が違ふたのか松風どの。今行平の言葉の端一の功を立てたな
 ら。思ふ方より風や吹くらんとなのぞの一首。其の一通見ずに與へ行きしは此場の寸志。彼是もつて大事の命。此場
 で死ぬる事ではない。必ず共に早まりめさるな。松風そんなら此一通内やゆかしき。兄さんの心の底を聞きまして。
 鷺尾善悪二ツの其の中にて。松風若し兄さんのお心が善に極るその時は。鷺尾思ふ方より風ぞ吹く。松風あのお歌を。
 鷺尾まつてお居やれ。松風あ。ト唄になり松風奥へ這入る。鷺尾思案して池の中より鷺藏出る。鷺尾是れを見て小が
 くれする。鷺藏漸々として四面を見て。鷺藏最前のどさくさは髓に權藤太奴が化の皮が顯れたわい。己もかうしちや
 ア居られない。ちつとも早くにげるがい。さうだ。ト鷺尾是を引き戻し甲を引たくる。鷺藏花道の方へ行かふとす
 るを引き戻し。池へはふり込む。鷺尾こそ主君義經公御藏有りし入龍の甲。今思はず手に入る事大願成就。忝
 けない。ト頂く所へ後より新藏乙藏三五郎常入此四人對の詠らへの形にて鎧を持つて出て兩方より取り巻き四人
 別れ。四人人殺し殺動くな。ト聲をかける。鷺尾こりや何をひるぐのだ。今後て見て置たら。人を殺した其のよ
 に。三五郎うぬがものしたその甲早く此方へ。鷺藏殺せえ。鷺藏命知らずのうんざいめら入りたる事に形置せず
 と。其所おつびらいて通せばよし。わるく騒ぐとかたつ端あの世此世の暇乞。首と胴との別れだが。其所おつびらい
 て通すまいか。四人どつこい。ト是より大太鼓入りの建に成り花々敷建色々有つて。とどよい程に二人は池へほふり
 込み二人は當身をして。甲を持つて一散に向ふへ這入る。二人起き上り跡を追って這入る鳴り物打ち上げる直にくわん
 げんに成り。奥よりかすや行平を引きづり出る是を松風村雨介抱しながら付て出る。かすや行平を引き据えて。
 かすや爰な行平の大腰抜けめ。汝此度上京なしたるは義經を詮議の爲めぢやアないか。夫になんぞや松風村雨の戀路に
 迷ひ。うつゝをぬかす大べら棒め。武士の風上にもおかれぬやつ。己れがやうな腰抜け侍は。かすやの藤太が斯う
 斯うするは。トさんくんに打擲する。松風とめて。松風是れ申し藤太様。そりやまあどうのかうのと云たのは。私等
 二人が業。主さんに科はない程に。かまへて聊爾さしやんすな。かすや何をこのとちめらうめ。うぬ獨りでも有る事
 か。おぼこ娘の村雨まで疵物にしやアがつたな。假令女の方から仕掛ても。役義を大切と思へば中々不義放埒が成る
 ものか。根が助兵衛から發つた事だ。え、まじくとしたしやツ面だわい。ト行平が顔を蹴る。行平くやしきこなし
 色々有つて。行平是明親王の御殿と云ひ。身の誤のある故に。無念をじつと耐へて居りやア行平程の武士を土足に
 かけて蹴たぞよ。かすや蹴たがどうした。腰抜け武士だから蹴たは。夫が悔しいか。悔しくばなぜ義經の詮議はせ
 ぬ。なぜ色事に日を送る。但し鎌倉殿の云ひ付けて遙々と都へ上り。松風や村雨と色をしるとの云ひ付か。よもや左
 様ぢや有るまいぞや。ト此内行平色々くやしきこなしあつて。行平え、己れをな。トそりを打ち松風村雨兩方よりと
 める。松風めつたな事をなされ升るナ。かすや我りやそりを打つて己を切る氣か。是え、爰を何處と思ふ。是明親王
 の御殿だぞ。その鯉口が一寸でも放れると此場に於て逆ばり付。さあぬけくしよせん面倒な。親王の御前へうしや
 アがれ。ト引き立かゝるを向ふにて。川越待つた。かすや待てとは。川越川越太郎重頼がお止め申した。まあくお待

て懐中する所へ鷺尾出て。行平が刀ののりを拭きしやんと納める。行平鷺の尾三郎今の様子。鷺尾篤と拜見致して
 ムリ升る。行平夫ぢやアいけてはおかれぬわい。ト切りかゝる立廻り有りてしやんととどめて。鷺尾必ず早まり給ふ
 な行平様。假令いか様な義がムればとて只今のしぎ。何しに人に物語らん。先々お控へ下され升う。行平確と左様な
 鷺尾刀にかけまして。行平忝けない。トをさめる。鷺尾只今の御褒詞に拙者めが願ひ。何卒義經の。御在家知れたる
 上は。御和睦の御願を。行平そりや某しが命に替へて。鷺尾え、有難い。行平こりや村雨娘松風姫に心をつきや。
 村雨あ。ト水を汲んで松風に飲せ氣を付る。松風氣が付き。村雨を突きつけつとして。松風え、怨めしい村雨姫情
 ない行平様。こりやまあどうしやうぞいなア。ト最前の一通を打ち付けてやる。松風見て。松風此上書は富樫の左衛門殿
 へ錦戸太郎。これは。村雨おぢや。ト唄になり行平村雨を連れて奥へ這入る松風鷺尾残りて。松風南無阿彌陀佛。ト鷺
 尾が刀にて死のうとする。鷺尾とめて。鷺尾こりや氣が違ふたのか松風どの。今行平の言葉の端一の功を立てたな
 ら。思ふ方より風や吹くらんとなのぞの一首。其の一通見ずに與へ行きしは此場の寸志。彼是もつて大事の命。此場
 で死ぬる事ではない。必ず共に早まりめさるな。松風そんなら此一通内やゆかしき。兄さんの心の底を聞きまして。
 鷺尾善悪二ツの其の中にて。松風若し兄さんのお心が善に極るその時は。鷺尾思ふ方より風ぞ吹く。松風あのお歌を。
 鷺尾まつてお居やれ。松風あ。ト唄になり松風奥へ這入る。鷺尾思案して池の中より鷺藏出る。鷺尾是れを見て小が
 くれする。鷺藏漸々として四面を見て。鷺藏最前のどさくさは髓に權藤太奴が化の皮が顯れたわい。己もかうしちや
 ア居られない。ちつとも早くにげるがい。さうだ。ト鷺尾是を引き戻し甲を引たくる。鷺藏花道の方へ行かふとす
 るを引き戻し。池へはふり込む。鷺尾こそ主君義經公御藏有りし入龍の甲。今思はず手に入る事大願成就。忝
 けない。ト頂く所へ後より新藏乙藏三五郎常入此四人對の詠らへの形にて鎧を持つて出て兩方より取り巻き四人
 別れ。四人人殺し殺動くな。ト聲をかける。鷺尾こりや何をひるぐのだ。今後て見て置たら。人を殺した其のよ
 に。三五郎うぬがものしたその甲早く此方へ。鷺藏殺せえ。鷺藏命知らずのうんざいめら入りたる事に形置せず
 と。其所おつびらいて通せばよし。わるく騒ぐとかたつ端あの世此世の暇乞。首と胴との別れだが。其所おつびらい
 て通すまいか。四人どつこい。ト是より大太鼓入りの建に成り花々敷建色々有つて。とどよい程に二人は池へほふり
 込み二人は當身をして。甲を持つて一散に向ふへ這入る。二人起き上り跡を追って這入る鳴り物打ち上げる直にくわん
 げんに成り。奥よりかすや行平を引きづり出る是を松風村雨介抱しながら付て出る。かすや行平を引き据えて。
 かすや爰な行平の大腰抜けめ。汝此度上京なしたるは義經を詮議の爲めぢやアないか。夫になんぞや松風村雨の戀路に
 迷ひ。うつゝをぬかす大べら棒め。武士の風上にもおかれぬやつ。己れがやうな腰抜け侍は。かすやの藤太が斯う
 斯うするは。トさんくんに打擲する。松風とめて。松風是れ申し藤太様。そりやまあどうのかうのと云たのは。私等
 二人が業。主さんに科はない程に。かまへて聊爾さしやんすな。かすや何をこのとちめらうめ。うぬ獨りでも有る事
 か。おぼこ娘の村雨まで疵物にしやアがつたな。假令女の方から仕掛ても。役義を大切と思へば中々不義放埒が成る
 ものか。根が助兵衛から發つた事だ。え、まじくとしたしやツ面だわい。ト行平が顔を蹴る。行平くやしきこなし
 色々有つて。行平是明親王の御殿と云ひ。身の誤のある故に。無念をじつと耐へて居りやア行平程の武士を土足に
 かけて蹴たぞよ。かすや蹴たがどうした。腰抜け武士だから蹴たは。夫が悔しいか。悔しくばなぜ義經の詮議はせ
 ぬ。なぜ色事に日を送る。但し鎌倉殿の云ひ付けて遙々と都へ上り。松風や村雨と色をしるとの云ひ付か。よもや左
 様ぢや有るまいぞや。ト此内行平色々くやしきこなしあつて。行平え、己れをな。トそりを打ち松風村雨兩方よりと
 める。松風めつたな事をなされ升るナ。かすや我りやそりを打つて己を切る氣か。是え、爰を何處と思ふ。是明親王
 の御殿だぞ。その鯉口が一寸でも放れると此場に於て逆ばり付。さあぬけくしよせん面倒な。親王の御前へうしや
 アがれ。ト引き立かゝるを向ふにて。川越待つた。かすや待てとは。川越川越太郎重頼がお止め申した。まあくお待

下されい。ト太鼓唄に成り。川越太郎上下にて出て来る。かすやを突のけ。行平をかこつてしやんと見えになる。かすや川越太郎重頼殿。只今某不義の科ある行平を引き立んと仕るをなせ。邪魔をおしやるのだな。川越いや全く御邪魔は仕らぬ。さりながらよく思召てもごらうじろ。いまだ弱輩な下河邊の行平。彼等は蓄める松風村雨左様な事もムらいでは。其上又今日此御殿に置まして。今様興行の由。その役にさゝれましたる行平松風。今様の其一手に味な氣みぶりも有りさうなもの。すりや其の様に御詮議には及びでもないものかと。重頼めは存じ升る。かすやすりやなんと仰せらるゝ。不義徒ら致しても大事なとおいやるか。川越左様ではムらぬが。よもや誠に。かすやでも不義ものに相違ムらぬ。川越然らば何んぞ慥かな證據に成るべき。文なとムるかな。かすやいやそんなものはなければども。何んてあらうと不義ものさ。川越左様仰られては御詮議が聞いかと存じ升るこりや此儘に差し置れいさ。かすやなんだかあきれて。ものが云はれぬわいどうりてこそ。其元の御息女岩手姫。是明親王の御心に従がわいて。義經とちちくり合。あげくの端にあうつけられ。此の程は寡婦くらし。親が馬鹿なら子もたわけ。いやはや氣の毒千萬な。川越なにを。ト屹度なると。向ふにて右大辨參内と呼ぶ是よりさがりばに成り(西の宮右大辨永高)入藏公家の形りにて笏を持ち沓を履て出る。若衆仕丁にて付て日傘をさし掛け出る。同じく左大辨參内と呼び(藤の森左大辨光高)此藏出る。同じく右中辨參内と呼んで(下り松の右中辨宗春)澤藏出る。同じく左中辨參内と呼んで(信濃の小路左中辨仲平)仲五郎出る。同じく左少將參内と呼んで(正親町左少辨義國)國四郎出る。何れも公家の形りにて仕丁日傘をさし出掛け花道へ並ぶ。打ち揃ひ本舞臺へ来て皆々居並ぶ。川越太郎下河邊行平かすやの藤太松風村雨姫皆々下の方へ下り控へる。かすやは何れも様にはお揃ひ遊ばされ。只今の參内何とも合點參り升ぬ。西宮不番は尤も。今日是明親王の勅命には。我々を密かに召れ。何か御内勅有るとの事。去るに依つて斯く申す西の宮右大辨永高。正親町まつた正親町の左少辨義國。下下り松の右中辨宗春。信濃小路信濃の小路左中辨仲平。藤太松風の森の左大辨光高

高斯く我々參内の上からは。氣で申し付け置きたる岩手姫が事。かすやいや其業は御参りあられ升る。早や先達て此所へ召し寄せましてムリ升る。何稻毛の入道岩手姫を同道しておきやれ。稻毛心得てムる。トくわんげんになり。岩手姫を連れて出る。岩手姫川越太郎を見て。岩手重頼様只今參内遊ばされましたか。川越岩手姫。其方は早や先達て參内のよし。定めて親王の勅命を逐一承つたであらう。岩手いえ。今に置きました何んの御沙汰もムリ升ねども。最前から藤太様入道様。夫れは。色々な無理非道な事ばかり。いつそくやしうて。ならぬわいなア。かすやは是れえ。なんの無理非道を云ふものだ。己らが女房にするのぢやアなし。親王の妃に備へやうと云ふものを。無理だと云ふはそちの無理。正親町夫とも又御心に隨はずは。違勅の罪に落つべえぞ。信濃親もうかめば子もつかむ。結構な身の上をいやがるのは。大べらぼう。下松行方も知れない義經に義理立をしやうより。後に成り上る分別。藤太松風と思ふ義經はのたれ死にくたばつたか。西宮お先も知れぬ色事より。今日の前の旨い物喰たがよかんべえ。稻毛但し勅命を背く氣か。重頼ともに返事をしろ。かすや此返答は。どうだえ。ト此きつかけにみすの内より。是明かしましい静まれえ。トさがりはに成りみすを巻き上げる。是明親王金冠白衣にて笏をもち沓を履て。左りの手に寶劍を持ち。二重臺の上に床几に掛つて居る。後に坂東太郎日傘をさし掛けて居る。是にて押し出す下りはを打ち上げる。坂東是明親王の御入りなるぞ静まれ。皆々はア。是明先づ此度一天下の望みある所に。先達て須摩の亂れに安徳天王入水の折から。義經翁かに奪ひ取つたる此寶劍。堀川夜討の争亂に又候まろが手に入つたる事。大望成就のきずみの印し。さるが中にもまろが心に任せぬは。戀は曲者と岩手姫思ひに餘る心より。今日此所へ呼び寄せて。今宵をすぐに新枕川越太郎。川越はア。是明是れへまゐつて水入らずにまろと妹脊の仲人しろ。ト真中へ出る。川越はア綸言には候へども。凡そ天地の其間に無理非道の第一は是れ不義なり。その御鏡にもならせ給はん御身にて。貞女を破らせ給ふ事。世の人口も如何。此儀は何とぞ思召させ下され升うならば。有り難うぞんじ奉り升る。是明黙れ。重頼

はいやだ。かまやいやだとぬかせば親王の御前見苦しい。誰れか有る。熊井太郎を引立めされい。皆々はア。西の官までくたれかれと云ふより。力自慢の公家の腕立て。某が取つてうつちるべい。ト花道へかゝり。やいワツばらめ今年ちやア引立も氣をかへて。ゆうにやさしき冠装束。見かけとは違ふぞよ。さア痛い目に逢ぬうち。きりきりこゝを立ち去るまいか。熊井見れば立派な装束だ。地合も見ればもくらんだな。西の官なにを。熊井もくらんの母は餓鬼道の苦しき。可愛やこいつもがき道のくるしみかい。してお前のお名はなんと云ふえ。西の官西の宮の右大辨永高と云ふお公家様だ。熊井なんだ牛の小使なま長い。西の官おきやアがれ其口をおれが引ツさくぞ。熊井夫こそほんにとほうもない引ツ込みやアがれ。西の官永高様お入り。ト八藏本舞臺へ来る。信濃の小路左中辨出て。信濃えゝらちのあかない。どれ／＼四ツ谷の先生が出てやらう。ト花道へゆき。信濃是れやいおれが出たぞ。こはく思はゞ早くきりきりさがれやい。熊井こいつは何んだおらア元來お江戸生れ。此芝居に久敷居たものだ。うぬがやうなやつをつひぞ見た事がない。何んと云ふ公家だ。信濃信濃の小路左中辨仲平と云ふ歌をよく詠むお公家様だ。熊井なんだ信濃のものゝ中氣病みだ。信濃なにを。熊井信濃なら信濃のやうに。新宿で冬奉公でも稼やアがれ。信濃その替り春になつたら。熊井ふみ殺してやるべい。信濃うぬを。熊井なんと。信濃構ひもせぬものを。トあとじさりに舞臺へ来る。藤の森えゝらちのあかない。どれ／＼こんな時にやア新参古参の用捨はない。おれが出てかたづけべい。下り松是れ是れ又さきへてるか。今年から中能くするやうに二人一所に出べいやないか。正親町待やれ／＼。一人ばつて行かうよりよい連れのあるうちおれも行くべし。藤の森そんなら三人一所に行つて。ものゝ美事にあつたしを。やらかしてくれべい。下り松手がら一つ褒美はてん／＼三人つん／＼つれ立ち一ニウ三イていくべい。藤の森お定りの通りがそれがよい。ト花道へかゝり。三人ひいふうみいわつばしめ立てえ。熊井こりや三人お揃ひなされてお出だの。三人ちつと舞臺が。大きいぞ。熊井名が聞きたい。下り松聞きたくば高らかに名乗て聞せんよつ／＼聞け。

某、こそはふる舞臺の下り松の右中辨宗春。藤の森某しは藤の森の左大辨光高。正親町某しこそは正親町の左少辨義國。熊井なんだ正親町に下り松藤の森からもあらうか。三人なんと。熊井むだなあごたゞき町より。下り松は命にかかると藤の森かな。三人おきやがれ。藤の森かく我々が出たつて。赤恥かいてあらりやうか。力任せにこなみぢん。下り松首と胴との生き別れ。正親町観念ひろげ熊井太郎返答は。三人どうだえ。熊井味噌をぶち上げると。睨み殺すぞ。三人なんと。熊井引込みやがれ。藤の森是れだに依つてみつてもあんまりとほられぬ。下り松あたまで引立をふんで出ればよかつた。正親町それでもしりにまた親玉が居る。下り松丈夫な芝居済んだわえ。正親町さはさりながら。熊井なんと。三人晩程参り升う。ト三人ともに舞臺へ来る。稻毛せきにせいて。稻毛どいつもこいつも役にたゝぬ。どれどうておれが出ずば成るまい。さア熊井太郎たつた今首をたゞき落すぞ観念ひろげ。と云ふは皆なうそ。三升さんおまへはまあどう成されやしたえ。此間ばいめいさんて度々お噂さ。例年の通り御ひき連中。幕もよう染り升たお目出とうムり升る。私も此暫くの引立は。おまへのおぢい様の時分から。おとつ様の時。そしておまへ度々出たがつひぞ荒事をかたき役の方から引立たた事がムり升ぬ。よつて今年は氣をかへて。なんと是から留場の口迄もおまへにたつてもらひ申せば。私も女房子の前へ外聞がようムり升する。どうぞお慈悲にお立成されて下さり升せ。やれ／＼おとつ様によく似申しなかつた。熊井誰だと思つたら。貴様はなりはだな。熊井さやう／＼。熊井わしも旦那方のおかげで。どうやらかうやらこつちへ呼んでもらつたによつて。云はゞ目出度い此顔見せ。祝儀心に貴様をたつて。稻毛此所をあつちの方へ。熊井のいてやつたらよからうが。こんりんざいのくまい。稻毛なんと。熊井いやだ。稻毛こいつ中／＼ふとい奴ぢやアないか。甘酒をなめさせて置けば喰ひそばへて色々な事をぬかしやアがる。誰だと思ふ稻毛入道手もなぐうぬを。熊井引き立るか。稻毛くどい。熊井そりやどこで。稻毛こゝで。熊井いつ。稻毛いま。熊井だか。稻毛おれが。熊井誰を。稻毛われを。熊井あはゝゝ。出たのびやくらいおへそでお膳が茶をわかつ。稻毛所を。熊井腕をも

ぐそ。稻毛いよ市川の大當り。熊井あんまりそりや古い。稻毛是れも御祝儀内よ。ト舞臺へ来る。皆々熊井太郎きりきりさがれどうだやえ。熊井どうて爰から物を云ちやア二階から目薬。どれそこへ行つて親王様にも亦おぢいにも近付に成るべい。かたつばしから帯と帯とをくし合せ。手に手をとつて用心しろ。皆々いやア。熊井旦那寺へ人をやれ。皆々いやア。熊井早桶の用心しろ。皆々いやア。熊井一番そこへ大波をぶたせべいか。どれ。皆々ありや〜ありや。ト大太鼓入りのとびよに成り熊井舞臺へ来る。若い衆敵役残らず立廻り有つて皆々をかこひ是明親王坂東太郎が中へしんと見えに成る。皆々どつこひ。坂東いかなれば熊井太郎下せん匹夫の身を以つて親王に近づき。上を恐れぬ無禮の振舞。氣が違つたか酔狂ひか坂東太郎が相手になるぞ。熊井相手に成るとは面白い。どいつなり共相手にきらひはあら金若衆。親王様には内々で御無心申さにアならないものがある。妨げひろぐとはり殺すぞ。かすやまで親王様へ對し奉り。内々で御無心とは合點の行ぬわつはじめ。かすやの藤太が相手にならうか。熊井うぬらにとんぢやくするのぢやアない。さあ是明親王様深く隠して所持成されし三種の神器の其一つ。十柄の御劍あつたため有る事がかねて聞き。主君義經此度鎌倉よりお疑ひを蒙られたる三種の寶調はざる故。忠臣の我々尋ね求めて禁庭へ差し上げ。義經に野心なきとの申し譯を立てにやアならぬ速かに。其實劍を忠基へ渡すまいか返答はど〜どうだ。是明や存外成る熊井太郎卑職凡下の身を以つて。まろへ對し敵たう有様。剩さへ寶劍を持ちしなんぞとはなんのたわ事。殊に岩手姫をかくまい立后の妨げなす。汝眼下に命を失はんかはいや〜。熊井命は輕んずる事英雄のさきんずる所。さあ寶劍をお渡し成されい。是明寶劍は知らぬはヤイ。熊井何がなんと。是明岩手姫を渡せ。熊井寶劍を渡せ。兩人どつこい。ト大勢かゝるをつき除けかきのけ。是明親王を二重臺より引きおろして懐中の寶劍を取り出して是明をつき倒す。皆々どつこい。熊井是れこそは疑ふ所もなきとつかの御劍。熊井太郎が手に入りしこそ。いまだ義經公の御武運長久の印し。えゝ有りがたやナア。是明それを。トかゝるかすや藤太をつきのけ。熊井あゝつがも。岩手今に始ぬ熊

井太郎が忠臣。父上様御覺び成され升い。川越かゝる忠義の武士を家臣に持つたる堀川どの。いかなれば讒言の舌にかゝらせ給ふやらん。夫に付けても残念なる事ぢやナア。熊井其お悔はざる事ながら。一まづ都をくらまされ。折を見合せ御開運あらん。いざ〜お立あられ升う。下河邊熊井太郎が働きて。危急を遁し此行平。松風折を待てとの此松風。村雨此村雨も紫の。熊井雲井をともし。お立あられ然るべうぞんじ奉り升る。かすや坂東太郎照早。かゝる大事を餘所に見て。知らない顔は。皆々こりやどうだ。坂東どうだかうだと云ふ事があるものか。三種の神器を尋ね出し。禁庭へ納めんとある忠臣の熊井太郎へ刃向へば。よこしま非道りきんでは見たもの。心やすくしてもらはにやアちつとこつちの理窟がわるい。寶劍をやるべいとなづきやつた此照早。首尾よくいつた目出たい顔合せ。親分一つしめべいか。熊井旦那方も助け參らせ寶劍を守護なせば此上の本望はない。祝つて一つしめべいか。兩人よいよい〜。熊井さあ立ち歸る熊井太郎ちつくりとも云ひ分がまるか。是明親王おつしやりぶんは仲さんどうだ。是明無念にははやれども。忠臣の心を感じ命助ける早くかへれ。熊井然らば御暇仕る。稻毛それやるなえ。皆々どつこい。トかゝるを見事に首を切つて落し。刀をかつき屹度思ひ入れ。熊井岩手姫のお立ち。上るりいでや紅葉の色見えて名に紫の江戸の花ゆゝしかりける。ト岩手姫川越太郎寶劍を持ち。下河邊行平松風村雨姫跡より。熊井太郎大太刀をかつき。花道の中まで行きふりかへつて。皆々さらば。ト是よりはや下りばにて各々花道へ這入る。よろしくまく引く。

第一番目 四建目 淨瑠璃の段

本舞臺三間の間。しん〜たる森に玉垣石燈籠夥多。一體越前國氣比の明神境内の體。西の方に乗り物。東の方に四手駕籠。兩方離れてあり。神樂にて幕明く。

ト花道より加賀次郎年國上下にて出で来る。跡より侍の形りにて若い衆鶏を抱へて来る。鎗持ち草履取り狭箱持ち付き添ひ出る。東の方より金澤太郎照門ぶつき羽織にて取手の形り。若い衆五人付き出る。雙方本舞臺にて行き合ふ。

金澤そこもと様は富樫の左衛門家直様の御家來。加賀の次郎年國殿ではムリ升ぬか。加賀さやう仰せらるゝは齋藤次祐家様の御家來。金澤太郎照門どの。是れはくかはつた所で御意を得申したな。金澤さればてゝる手前義は堀川の御所において。備前守行家まつた伊豫守義經兩人心を一致にして。頼朝公を追討の宣旨を蒙り及ばぬ逆意を企て。つひに都を出奔して行方知れば世上の騒動。よつて義經なりとも行家なり共からめ取て出せよとある。鎌倉殿よりの上意に由つて。手の者を引きくし只今にても斯くの如く。して其許には何方へお越成さるゝナ。加賀拙者儀は主人富樫の左衛門當社氣比明神へ心願の旨ムつて。納めます所の此鶏。則ち富樫左衛門がえとの七つ目代參として拙者が參詣。其許様にも大切成る御用。御苦勞千萬にぞんじ升る。金澤役目でムればさのみ太義ともぞんぜぬ。只今承れば鶏は富樫の左衛門様のえとの七つ目ゆる。御立願の爲め御奉納成さるとな。加賀左様でゝる。武運長久のため。一つには仰せ付けられた加賀の國安宅の關。そのもと様御主人齋藤次祐家様とは御相役にて。我々主人も固めの大役。随分とあやまちなき様に我々迄もしんを取り參詣仕り升る。金澤夫は手前とても其通り今にも義經姿を替へ往來仕るまじきものでもない。其許様にもずるぶんお心を付けられ。拙者もついでがましけれども氣比明神へ參詣いたさう。御案内を頼み存ずる。加賀然らばかうお出成さい。ト宮かぐらに成り。加賀次郎金澤太郎鶏をよき所へ放し這入る。△若い衆やれく今日の様に草臥たことはない。煙草にしやうく。○若い衆いかに手前があるかぬと云ふておいらをつかひ殺すと云ふ者ではないは。義經をばつかけふ連も夜晝なしにかけ廻つて。或は二十里三十里毎日々々あるく事だに由て。息もせいの續くものではない。ト下にゐる。○やれく草臥た。△その草臥た所へ。うさをはら

すは。是れ我々が貯へさいを一つぼ。水鉢の柄杓にておつぶせた所がちよぼ一。なんとはる氣はこんせぬか。○こいつ中々思ひ付きがよいわい。さあ且那のお歸りまで。此所でやつつけべいぢやアないか。△よかるべいくちよぼ一なら七里歸つてもはれと云醫へがあれば。おつばじめろく。さあ且那のお歸り迄何のかと云はふより四割の廻りで。もらひ筒が四割半。寺なしの大道ばくち。さあふせる所が我等が壺。ト手水鉢の柄杓にてさいをふせる。○それびんよ。それ三よ。それ四よ。それびん。四戻り。トおつかぶせると。てんくんに煙草入りより。錢を出してはりかける。だんくつぼを廻して。とゞ残らず錢をはり込んでしよう。△成程此さいはよくはねるさいだ。あゝ是れもちつとはりたいが錢がなくなつた。何んぞ手ごろなものをやらうか。時代のものだナア。○おれも此家につたはる一腰を。賣つてしまつて。もう四五百つゞかして見る氣だ。△氣所ではない。どのやうな事をしても五六百かちたいものだ。○勝たうにも負ようにも錢をこしらへてえものだ。どうぞかういふ所へ工面のよいあきん人が。皆々ほしいものだナア。ト切りまくにて。古金買古金買はうく。皆々いやア。○錢の一文もない所へ古金買とはよいつぼだ。よい物が来るぢやアないか。皆々さうともく。ト云ふ内てんつゝにて古金買七つ道具の長兵衛實は行家花道より古金買の形りやつし。上へ袖なし羽織上帯提げ煙草入門札下げ。淺黄股引紺の足袋草鞋をはき。兩がけ古金買の荷物をおかづぎ。長兵衛娘小とみやつしの娘の形りに。まへご札を下げ。古金買に手を引かれ出て来る。花道の中程にて。古金買古金かはうく。小とみ申し父上さん私はいかう草臥たわいなア。古金買尤ぢやく。草臥もせいで。懃心まんくたる此の長兵衛。命かぎり足かぎり歩くことぢやもの。そなたは草臥いてなんとせう。あの境内の水茶屋で大ころばし喰せる程に。早ようおぢやく。小とみあい。ト舞臺へ来る。△よい所へ古金買が。うらねばならぬ物がある。其子連れて古金殿。まあく爰へきたり。皆々さあ早いがい。古金買はいくどれく其所へ参り升う。○是れく早速貴様に賣りたいものがある。此脇差はいくらにならうナ。古金買どれくても見事な拵

へ。さめがなうて柄糸が眞田。せつばはゞきが只の赤がね。身が生くらで鞆が後家ざや。其かはり鐔が國廣ふんて見た所が鐔計の直。百十六文にやり升うかい。○夫れはあんまりむごいと云ふもの。なんぼ此様なざまでも百十六文と云ふ腰の物があるものか。どうぞ二百文に買って下さい。古金買どうして是が二百に買れるもので有り升る。○そりやアあんまりむごいといふものだ。古金買そんならもう四文買つて上よう。○そんなら負けてやれ。ト手をうつ。そのあとへ。△いでよ。△さあ此布子一ぱいに買っていくら物があらうの。古金買どれ。ト布子をいろく／＼にひろげ見て綿をつまんで。古金買この布子は三百で持つていき升う。△あゝ是れく／＼こいつが／＼引賣同前なことをいやアがるな。これヤイいかに此布子が晝過ぎだと言てよごれた計り。外になんともないぞえ。武士の衣類大道中で三百文とは。どうだそこへ出て相手になれ。ゆるさぬく／＼。古金買あゝ申しはやまらしやり升るな。おまへの方が賣らぬ氣なら。買ぬ計り布子はそちらのもの。銭はこちらのもの。何も商賣づくでムリ升。お腹が立つなら。堪忍成され。△夫ても三百にはあんまり安い直の付け様。古金買はて又云はつしやり升か。此布子計りて二百文百だけは虱を直に入れて三百文に付け升た。△えゝいま／＼しいつその事に三百文に賣つてやれ。古金買三百にかつてもおまへ腹は立たぬか。△男は當つて碎けるだ。負けてやらうく／＼。ト古金買七つ道具の長兵衛へ布子を渡して。羽織の上へ帯をしめる。古金買そんなら夫れ三百よおまへにも百廿文よ。ト銭を渡して。布子脇差をかごの中へ入れる。○さあ／＼是から又ばくちが出来ると云ふものだ。さあ始めろく／＼。△夫れがよからうく／＼。したがまちやれよ。おし付けお歸に間もあるまい。なんとこの森の陰へ行くべいぢやアないか。○それがよいく／＼。さあ／＼きやれく／＼。古金買おまへ方はもう何も賣る物はないかえ。△此頃屋敷へきやれ。古金買はいく／＼。皆々さあこい／＼。トみなく／＼下座へは入る。宮神樂になる。古金買長兵衛四方を見廻し。古金買いかに世の中の成り行きちやと云つて。だれあらう備前守行家ともあらうものが。辨慶橋ひたちや七つ道具の長兵衛と云ふ古金買。思へば／＼えゝ口惜しい世の中ぢやナ

ア。小とみ申し父上さん其様な事おつしやつて。人が聞いても大事ないかえ。古金買大事なれど解しに附け。不便に附け。思ひ出される我身の上。おし付け甥の頼朝を亡し。義經と此行家京と鎌倉とへ別れて。子孫の榮えを樂しみ。その時には其方にもよいものさせて。夫れく／＼に女も大勢つかはせう。今は昔の物語り樂しんで居や。小とみいえい私やどのやうなよい身のうへにならずとも。私やおまへの側に居たいわいのう。古金買そりや父迎も同じ事。天にも地にもたつた一人のそなた。どうして離してをかうぞいのう。ト云ふうち花道にて人音する。古金買長兵衛一寸かげを隠す。花道より鎌田兵衛の一子順禮の形りにて玉鶏の印を袂紗に包み抱へてはしり出て来る。跡より雲助あそこの段八雲助の形りにて出て来る。兵衛の一子を引き寄せて。雲助さあわつばしめ。うぬがぼつばへ入れてけつかる。義朝軍勢催促の玉鶏の印おれが方へ渡しやアがれ。一子どうやうな事があつても。大切な玉鶏の印。渡す事はならぬわいのう。雲助あそこの段八へ渡せ。一子ならぬわいのう。雲助渡しやアがれ。ト兵衛の一子を引き寄せて。玉鶏の印をとらうとする。一子あれえく／＼。トにげる雲助おつかける後より。古金買長兵衛出て雲助を取つて投げ寄せる所をあてる雲助うんと倒れる。兵衛の一子古金買の長兵衛にかゝるを引き寄せてしめ殺す。小とみぶるぶる震へて居る。古金買こわい事はないく／＼。小とみそれでもこはいわいのう。古金買是こそ義朝のかた身一品軍勢催促の玉鶏の印。えゝ忝けない。ト頂き懐中して雲助の段八おき上つて。雲助やあこなたは行家どの。古金買やかましい仕事は山分けこつちへ來い。ト行かうとする。岩戸かぐらになり。西の方の乗物より齋藤次祐家種が島を持ち。古金買の長兵衛手ばしかく小とみを帶へく／＼し附け。雲助長兵衛を引つ張りたてに取つてしりしり廻る。雲助長兵衛きみのわるきこなし。行かうとする古金買を見て。齋藤次身うごきすると親子とも命がないぞ。古金買さあそれは。齋藤次七つ道具の長兵衛と云ふ町人。尋常ならぬ人物と兼々聞いて待ちまうけたる越前の國の住人齋藤次祐家。所領にかへてたのみたき仔細あり。うち／＼せずとこれへく／＼。古金買合點參らぬ祐家様。拙者

をお頼み成され度しとて所領かへんと仰せらるゝ。してまた其御用はな。齋藤次加賀の國にすゑられたる安宅の新關相改めとして。富樫の左衛門聰明英智を鼻にかけ。某をないがしろにする其無念須臾の間も止む時なし。何卒かれが落度をこしらへ腹切せんと思へども手術なければ是非に及ばず。今日迄延引せり。頼むといふはこゝの事。何卒彼れが妹松風姫にさいつ頃。是明親王の御殿に於て下河邊行平と不義をひろいて。御殿をけがせし咎におふせ。富樫の左衛門諸共に流罪せんと似せ勅使。此事しおふせるその人物。その方ならで外になし。手術といふは。ト乗物の中より風呂敷を一取り出し古金買へ渡し。齋藤次是を留意に其咎を。古金買烏帽子冠大紋装束。トひらき見て。古金買すりや似せ勅使と成つて。齋藤次頼れたと云ふ誓言聞かう。古金買さあ其誓言は。齋藤次なんと。トつめよる古金買長兵衛いりきにとまりさいぜんの鶏を捕らへ。古金買この鶏こそ日本の鳥類。願主を見れば富樫の左衛門。是こそ屈竟の會盟の印。此血をしぼつてかための神水。ト鶏を殺し血をのんで齋藤次へ渡す。齋藤次呑んで雲助段入へなげて渡す。雲助段入きみわるさうにのんで古金買長兵衛へ渡す。古金買長兵衛取つてその鳥をみたらしのうちへ投げ込む。どろ／＼になりあつらへの合方になり。池の中より里好鶏のせいにてせり上げる。四方籠の内よりおよし是れを見る。雲助齋藤次ともに氣を失なひ茫然と立ちすくみ下にいる。その内鶏そろ／＼花道の方へ行くを古金買抜て切り附ける。鶏ごうつうにて古金買を苦しめ。花道の中にて消える。古金買方々と切り拂ひ舞臺へ来る。齋藤次雲助心づいて三人顔を見合せてさゝやきあひ。齋藤次を先に立て雲助花道へ這入る。古金買風呂敷包を抱へ小とみが手を引いて四手籠をあける。内よりおよし世話女房の形りにて出る。すぐに古金買がむなぐらをとつて。およしえゝこなさんほこなさんは先刻にから。此内にてみんな様子を聞いて居たわいなア。またしても／＼わるい事にはつかり身を入れて。末は其身はどうならうと思はしやんすぞちの人の。古金買えゝやかましい異見だて。悪事と知つて組みするもみんな身の爲め我子のため。さて聞き分けてこの小とみを。幸な所だ。あづけた程に大事にせい。ト行かうとする。

よしえゝ／＼なんぼうでもやらぬ／＼。古金買えゝめんなのきくされ。よしまつた／＼。ト古金買行かうとする。およしむりやりに留ると。むりに振り放し風呂敷包を抱へて一散に向ふへは入る。およし小とみを連れて身ごしらへして。跡より行かうとする後ろへ。加賀次郎とし國出て小とみを抱へおよしをつきかけ花道へ一散には入る。およし驚き加賀次郎が跡を追ふて花道へは入る。道具廻る。

本舞臺三間の間。一面に山組の景色にて。左右の柱紅葉の立木。かゞみ板より。豊志太夫連中の見えよくならばせ。正面より下げ御す。近年になき道具の物ずきにて。前びきより直に淨瑠璃に成る。

上るり 關の地蔵。おやよりましぢや。ゆるさぬ妻。ゆるさぬ妻を持つ。おやもゆるさぬ妻糸をかせにかけたる。なぞの橋までとけ兼ねて。わく方も。なけの情や仇ぼれも。色の世界の小紫。お江戸かたぎは女子にもあづまからけの何くれとかいやり捨てし。佛は昔の道をしたたい行く月も紅葉にいろ増して花にうつらん戀の首尾。

ト上るり切れると鳴りもの入りの合方になり。義經眞中に廣袖衣裳羽織の形りにて煙管を持ち小さ刀をさし。紫の頭巾をつむりに置き。張り脰をして馬に乗つて居る。此馬もくらん張りにて奇麗にして。此東の方に忍ぶの前女馬士。廣ふり袖の形り。ぬきかけほゝかぶりをして。手綱を鞭にして立つて居る。直井まつかにぬつて奴の形りにて岩臺に腰をかけ。紅葉の枝にぬり樽をつけてかづいで。左りの手に大津火繩を持つて居る。此見えにて三人をせりあげる。上るり 御いたわしや義經公。讒者の爲に御連枝の御中たちし旅衣昨日は勅せんの一に選まれ給へ共今日は野田の月一つ宿かる露のかごとにも夕べ／＼の夜をかぞへ日を送るまの我ながら寝よけに見ゆる女馬士梅のひとへは室にもねるが色に逢ふ夜のむろがないやつ姿も戀草の戀の重荷におも瘡て手綱を鞭に様まるしどけ形

り振り目に立つ娘目に立つともの大丈夫や直井の左衛門跡につき酒に咎なき初紅葉顔の日和りと御ひいきを力に假りの錦取氣てんきかせてねい〜〜おつとまかせの煙草の火さし上げまゐらせてそろ〜とひそりそめたるせなとせな振つた女郎衆がにかるならば御先鳥毛は十文宿いつも我等は八文字。

ト淨るりの内いろ〜面白きふりあつて。義經直井の左衛門中々その方はあぢをやるわいのどうも云へぬ〜。直井是は〜拙者義も此度初めて簡様なあり難いお供を仰せ附られましたるに依て。なんでも氣がおくれば成り升まいと存じまして。あつがんにしてりんなりて八九杯やつつけましてムリ升るに依て。ほろ〜酔の酒機嫌。面白いやら嬉しいやら。うか〜是迄参りましたてムリ升る。ねいムリ升る。義經さうであらう〜。時に某もかうぢやわいの。馬の上はいかう寒うて裾から風がは入つてならぬ程に。是から下りてちつとの内もあるいてはどうであらうぞ。直井それは一段とようムリ升う。さあ〜拙者がおだき申し升う。ト傍へよる直井を。煙管でのけて。義經是れやほめその方に抱かれて下りる位なら飛んで下りても濟事ぢやわいの。我等其方にはだかれまい〜。直井借々それではおあぶのうムリ升す。どれ〜拙者。義經またかいの夫れあれを知らぬか。屹度してけつかうなああの馬士。だいて乗せるもだいて下すも。道中の馬は馬方次第。きてんきかせ〜。直井げに〜是はあやまつたり。君の仰せを蒙ればどれ〜臆てつくべいか。ト忍ぶの前の傍へより。背中をたく〜。忍ぶお〜しんき。直井しんきなはずだ初舞臺來年一ぱい百助奴。可愛がつてくんない。忍ぶそりやこつちから云ふ事じやわいなア。お頼み申さにやならぬぞへ。直井そりや又なんて。忍ぶはて纏の紋は。馬方によくも大谷叶ふたり。直井こいつはおつれを岩井氏。爰て扇のてふつがい離れぬやうに頼みんす。義經直井の左衛門さむうてどうもならぬ。早うおろしてくれぬかい。直井畏り升た。時におむすおれは此様に見えても。馬に乗る事がきつうぶ器用。十四五年前に古河の松原で落ちたものだ。夫れから此方馬の傍へ寄るのもきらひだ。近頃おせもじ様ながら。おらが旦那を一寸馬から下してくれまいか。忍ぶどうしてま

あとのたちを。女子の業に下し申す事なるものぢやぞいなア。直井いやあのやうに見えてもおらが旦那はかるとだしては〜かるきのうしほ煮か。とうすみ賣りの一人もの。一寸とあたつて見給へ〜。忍ぶぢやと云つてあなたのお傍へ。こちとらがやうない賤しきものが。直井そこが旅のならひちつとも大事な程に。さあお傍へ寄つて早う早ふ。忍ぶそんならお免し成され升い。直井免さいでは〜。義經早う下してもらひたい。忍ぶそんならどれ〜妾がおろし申して上げ升う。ト義經をだく。直に忍ぶの前に抱き附て馬よりおりる。直に忍の前ふり放さうとする。直井是れを見て。直井見るものぢやない通らしやい〜。忍ぶもじ〜何を成され升るぞいな。わるい事を成され升な。爰おはなし成され升せ。義經こゝがどうして放されるものか。田甫のかはりぢやちつとの間かうしておいてたも。忍ぶつんともうお免し成されて下され升い。義經様。ト義經直井と顔見合忍ぶの前を引廻して。義經合點の行ぬ某しが名をよつく知つて居る。そなたは唯の馬士ではないわいの。直井真直に身の上を。トつめよる。義經聞に及ばぬ伊達女子所ならひの馬追姿。名所古跡が尋たい。忍ぶさあそれは。直井なんと。

上るりへえき路に慣れし賤の業覚えし事もありふれしその名所に身を寄せて松の色あるかいの濱あれあらち山風誘ふ心のたけとむねの火と思ひくらべて身を秋篠の里も噂も世のそしりをも罪もむくいも未來の責もだんない〜何中々にいとほじと思ひ亂れし黒髪代たかいつはたの山かづらあかぬ別れの淺水の橋にしの山玉江にうつる佛の戀しうて〜遙々したい氣比の浦誠の岩根に打つ波の共に砕けてちり〜鳥の鳴てあかしていたわいなたれも袂はかは鳥のうきには濡る〜習ひぞやね覺の千鳥うき寢鳥鳴て別れし都の空思ひ出すも情けなや。べそもそも甲冑を枕となし弓箭の業を本意ぞと軍務にいとまあらざりし此身も今はうたかたの哀れはかなき陸奥へ二度結ぶ鷹のふみ誰が玉章の返り事思はせぶりか戀のわな掛けてとくさの其原や。べそのはらてある此奴戀に姿はつかわれものよ寒の師走も日の六月も様にこがれて夜も日も通ふ所ならひかお國のさほり姉が妹の杓をする姉が妹のヤレ杓を

上るりへ是れそのないわいなのでてぶりは此色男はゆかぬぞやじたいやつがれれんほれ、つのわけ知り泪々に三
みだこざるきやれ紋日物日をつくくりつきよとておん女郎さん様の泪がけ又は彌生のひな棚過ぎて一季半季の花
曇り我等が如きの裏店住居山の神がおこり出しさうさ鉢のめつた投げ去つて、去状の三件半の其上に落る泪は
いばらの花かまどの神のおたよりをすゞしめ給へとしやべりける。

義經それ、世の中に女子程恐ろしいものはないわいの。堅から見ても上から見ても。人をだまさう、と明暮思ふ
て居る所へ。ついうか、とかうらうとあぶない事。どりや我等はいにまじよか。

上るりへこれなんの事ぢやいな憎らしい女子心はとり分けて戀にはせまる胸の暗つれなき人を戀こがれ亂れ染にし
陸奥の文の文字ずりく、とあんど煩ひ身をかこちそもまあどのよな神さんに仇なえにしを結ばれて思ひ切ら
れぬ小田巻のいとし殿御と見る人は三千世界を尋ねても外にま一人あるかいなほれたが因果これいなほれられ給
ふが因果ぞや因果どうしの中々にさまで厭はぬあふせ川わたしが心も思ひやり可愛と思ふて給はれと顔をも得上
げずすがり寄る君もいまは片糸の解けてかゝりし戀衣ほころび安きと見て取つて、傍から跡を月よみ日よみさて
雨の宮風の宮とうかみ縁に引かれてはかんこん眞實取り持つて二つ枕を手枕に一寸鹿島の事ふれか漸々吉野の夕
間暮月雪花の詠めかえ。

上るり三下りへ雪が戀する物ならば逢ぬ夜ごとの積るもつらい逢ふて解けぬもまたしんき逢ふ夜つもりて打ち解
けて染る中にも雪をば詠るならば嬉しからうぢや有るまいかそれ、夫れもうれしかる。花が戀する物なら
ばうつろふ色に替るもつらい仇に契るも又しんき八重に思つて一重に咲てあかぬ盛りを詠めるならば嬉しか
らうぢや有るまいか夫れ、それもうれしかる。月が戀する物ならば曇る心が折々つらい晴れて思ふも又し
んき逢ふ夜曇りて心が晴れて晴らぬ影を詠るならば嬉しからうぢや有るまいか夫れ、それもうれしかる。

の若盛り。

トをどり切ると方々にて人音する。直井忍ぶの前義經をうしろにかこひ。急度思ひ入れある。喜三太俄に驚きをか
しみ色々有るべし。義經しやあこしやくなる鎌倉武士。義經是れにある事を。早や知つたるにや。あの人音。昌俊如
きの寄せ手の面々某引き受け追ひかへさん。直井こは御短慮なるぞや。太刀物具もあらざるに。せかせ給ふは何事ぞ
や。先々お控へあれ升う。忍ぶそれ、まあ、お待成され升い。直井あれ、敵を近々へ寄せたれば。今こそ御身
の御大事。先々お忍び成され升い。ト義經忍ぶの前直井一寸かげをする。喜三太一人残り色々身ごしらへするをかし
み有るべし。其所へ宮かぐらにて金澤太郎以前の形りにて組子を大勢連れて来て。直に喜三太をおつとりまき。
皆々動くな。金澤さあ汝こそ義經の家來お馬やの喜三太とよつく見ぬいて取り巻た。遁れぬ所だ腕廻せえよ。喜三太や
あおぢやつたかな、お馬の喜三太と見ぬかれたからはどうで隠すにかくされぬ。有りやうに名乗つて聞かせうよ
つく聞け。事もおろかや、つがれは。義經公の身内において。五天王の隨一と呼ばれたる。法性寺入道前の關白大
政大臣お馬やの喜三太とはおれが事だ。皆々やあ。喜三太さあどいつ成りとも相手になれ。こちらの腕にばつぱく人
力。こちらの腕にばつぱく人力。都合あはせて千六百人力。一度に出して寄手の面々。一々並べて其首を胴の中へた
だき込むぞ。それぢやアめしが喰れまいぞ。金澤おきやアがれ争ひ面倒な夫喜三太に繩をかける。皆々やらぬは。
喜三太とつこい。ト是より笛三味線入り合方にてをかしみのたて有つて。大勢を相手に色々あつて。とゞ若い衆を花
道へ追ひ込む。喜三太花道へは入る金澤太郎こがくれする所へ奥より。義經忍ぶの前直井の左衛門出て。あたりを窺
ひ。直井今こそ君の御大事。一先此所を御立除きあつて然るべく存じ奉り升る。義經とても斯くなる義經が絶運寄せ
手を引き受けいさぎよく腹かき切つて最期を遂げん。直井の左衛門用意々々。直井御切腹とは云ひがひなし。誓しの
内の御艱難御凌ぎあるものならば。頼朝公にも御連枝の御間遂に目出度御和睦。只今となり御短慮はいよく野心に